佐久市埋蔵文化財調査報告書　第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU　NA　HIRA

榛名平遺跡

第Ⅱ分冊
弥生・古墳編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001．3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU　NA　HIRA

榛名平遺跡

第Ⅱ分冊
弥生・古墳編

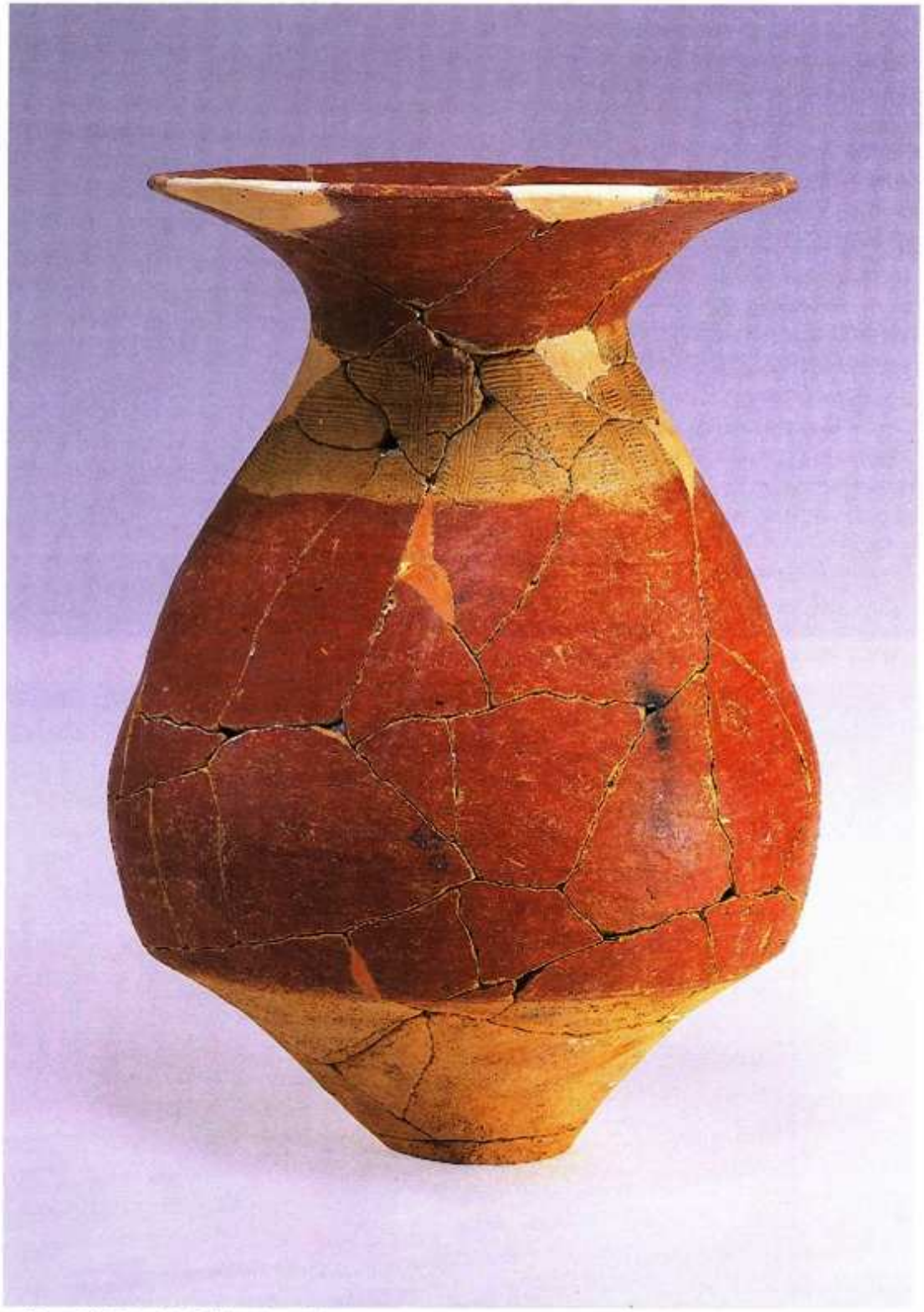
長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001．3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

榛名平遺跡全景　写真左側の道路が国道142号線

1号方形周溝墓出土土器　写真左手前は台付甕脚部、在地の土器に比べ胎土が白っぽく見える



NH15号住居址出土「赤彩された壺」

凡　例

1、第Ⅱ分冊は弥生～古墳時代の遺構･遺物を取り上げた。なお､坪の内古墳は本分冊に掲載した。

2、遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。

3、挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
　竪穴住居址・掘立柱建物址1/80　カマド・炉1/40　土坑1/60　古墳・周溝墓1/80.1/100
　土器・石器1/4

4、遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

5、土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。

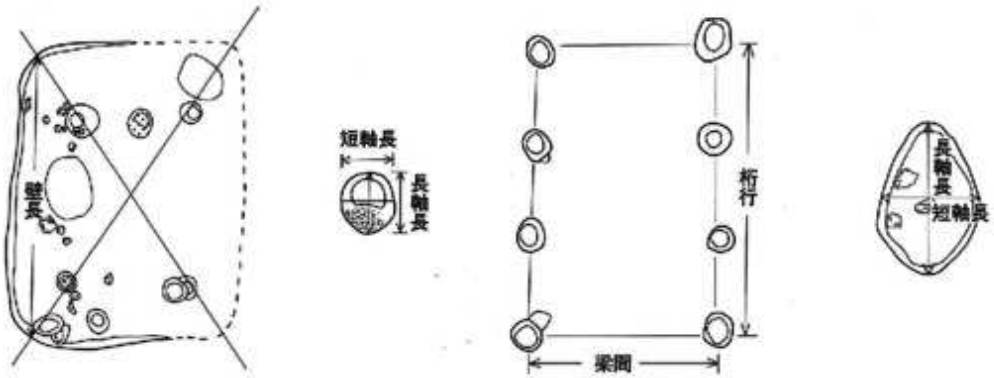
6、遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。

7、調査区グリットは公共座標に従い、間隔は４×４ｍに設定した。

8、住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、カマド部分は測定値より除外してあるが、
　炉は面積に含め計測してある。

9、遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。

10、各遺構の計測は下の凡例に従った。



11、挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

地山断面　　炉・カマド範囲　　貼床

焼土範囲　　須恵器断面　　石製品断面

黒色処理　　赤色塗彩

目　次

巻頭カラー図版

凡　例

第Ⅰ章　榛名平遺跡における弥生時代の概要

第1節　概　要 ……1

第Ⅱ章　弥生時代の遺構と遺物

第1節　竪穴住居址 ……3

第2節　掘立柱建物址……48

第3節　土　坑……49

第4節　方形周溝墓……57

第5節　埋没谷と遺構外出土遺物……62

第Ⅲ章　榛名平遺跡における古墳時代の概要

第1節　概　要……71

第Ⅳ章　古墳時代の遺構と遺物

第1節　竪穴住居址……73

第2節　掘立柱建物址とピット群……89

第3節　溝状遺構……96

第4節　古墳址

(1)坪の内古墳……97

(2)榛名平1号墳 ……101

第5節　遺構外出土遺物 ……108

第Ⅴ章　考　察

第1節　1号方形周溝墓出土の土器について ……111

写真図版

図　版　目　次

第1図　Ⅰ区弥生時代遺構全体図 ……1

第2図　Ⅲ・Ⅳ区弥生時代遺構全体図 ……2

第3図　ⅠH3号住居址実測図 ……4

第4図　ⅠH3号住居址遺物出土状況図 ……5

第5図　ⅠH3号住居址出土遺物実測図① ……6

第6図　ⅠH3号住居址出土遺物実測図② ……7

第7図　ⅠH5号住居址実測図 ……8

第8図　ⅠH5号住居址出土遺物実測図 ……9

第9図　ⅠH7号住居址実測図……10

第10図　ⅠH7号住居址出土遺物実測図……11

第11図　ⅠH8号住居址実測図……12

第12図　ⅠH8号住居址出土遺物実測図……13

第13図　ⅠH13号住居址及び遺物出土状況図……14

第14図　ⅠH13号住居址出土遺物実測図①……15

第15図　ⅠH13号住居址出土遺物実測図②……16

第16図　ⅠH15号住居址及び出土遺物実測図……16

第17図　ⅠH39号住居址実測図……18

第18図　ⅠH39号住居址出土遺物実測図……19

第19図　ⅢH1号住居址実測図……20

第20図　ⅢH1号住居址出土遺物実測図……21

第21図　ⅢH2号住居址実測図……21

第22図　ⅢH2号住居址出土遺物実測図……22

第23図　ⅢH3号住居址及び出土遺物実測図……22

第24図　ⅢH18号住居址実測図……24

第25図　ⅢH25号住居址及び出土遺物実測図……25

第26図　ⅢH29号住居址及び出土遺物実測図……26

第27図　ⅢH42・43号住居址及び出土遺物実測図 ……27

第28図　ⅢH45号住居址実測図……28

第29図　ⅢH45号住居址出土遺物実測図……29

第30図　ⅢH46号住居址及び出土遺物実測図……30

第31図　ⅢH47号住居址出土遺物実測図①……31

第32図　ⅢH47号住居址実測図……32

第33図　ⅢH47号住居址出土遺物実測図②……33

第34図　ⅢH48号住居址実測図……35

第35図　ⅢH48号住居址出土遺物実測図……36

第36図　ⅢH49号住居址及び出土遺物実測図……37

第37図　ⅢH50号住居址実測図……39

第38図　ⅢH51号住居址実測図……39

第39図　ⅣH6号住居址及び出土遺物実測図……40

第40図　ⅣH7号住居址及び出土遺物実測図……41

第41図　ⅣH8号住居址出土遺物実測図……42

第42図　ⅣH8号住居址実測図……43

第43図　ⅣH10・13号住居址実測図 ……45

第44図　ⅣH14号住居址実測図……45

図 版 目 次

第45図　Ⅳ H15号住居址実測図……46
第46図　Ⅳ H15号住居址出土遺物実測図……46
第47図　Ⅳ F 1 号掘立柱建物址実測図……48
第48図　Ⅰ D 9・10号、Ⅲ D 4・5・8・30号土坑実測図……50
第49図　Ⅲ D34・52・74号、Ⅳ D 2・4 号土坑実測図……51
第50図　Ⅳ D17・19・24・28号土坑実測図……53
第51図　土坑・ピット出土遺物実測図……54
第52図　1 号方形周溝墓実測図……58
第53図　1 号方形周溝墓遺物出土位置図……59
第54図　1 号方形周溝墓出土遺物実測図①……60
第55図　1 号方形周溝墓出土遺物実測図②……61
第56図　Ⅳ区埋没谷遺物出土位置及び全体図……62
第57図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図①……63
第58図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図②……64
第59図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図③……65
第60図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図④……66
第61図　遺構外出土遺物実測図……70
第62図　古墳時代遺構全体図……72
第63図　Ⅰ H11号住居址実測図……73
第64図　Ⅰ H17号住居址実測図……74
第65図　Ⅰ H17号住居址出土遺物実測図……75
第66図　Ⅰ H18号住居址出土遺物実測図……75
第67図　Ⅰ H18号住居址実測図……76
第68図　Ⅰ H19号住居址実測図……77
第69図　Ⅰ H19号住居址出土遺物実測図……78
第70図　Ⅰ H22号住居址実測図……79
第71図　Ⅰ H23号住居址実測図……80
第72図　Ⅰ H26号住居址及び出土遺物実測図……81
第73図　Ⅰ H28号住居址実測図……83
第74図　Ⅰ H28号住居址出土遺物実測図……83
第75図　Ⅰ H29号住居址実測図……84
第76図　Ⅰ H29号住居址出土遺物実測図……85
第77図　Ⅰ H35号住居址実測図……86
第78図　Ⅰ H35号住居址出土遺物実測図……87
第79図　臼玉実測図……88
第80図　Ⅰ F 1 号掘立柱建物址実測図……89
第81図　Ⅰ F 2 号掘立柱建物址実測図……90
第82図　Ⅰ F 5 号掘立柱建物址実測図……90
第83図　ピット群 1 実測図……92
第84図　ピット群 2 実測図……93
第85図　ピット群 3 実測図……94
第86図　ピット群 4 実測図……95
第87図　Ⅰ M 7 号溝状遺構実測図……96
第88図　坪の内古墳検出状況図……97
第89図　坪の内古墳実測図……98
第90図　坪の内古墳石室実測図……99
第91図　坪の内古墳出土遺物実測図……100
第92図　椿名平 1 号墳検出状況図……101
第93図　椿名平 1 号墳実測図……102
第94図　椿名平 1 号墳石室実測図……103
第95図　椿名平 1 号墳石室掘り方実測図……104
第96図　椿名平 1 号墳遺物出土位置図……105
第97図　椿名平 1 号墳出土遺物実測図①……106
第98図　椿名平 1 号墳出土遺物実測図②……107
第99図　遺構外出土遺物実測図①……109
第100図　遺構外出土遺物実測図②……110
第101図　ピット出土遺物実測図……110
第102図　住居址土器群……112
第103図　埋没谷土器群……113
第104図　Ⅳ H 8 号住居址出土土器……114

付 表 目 次

第 1 表　Ⅱ H 3 号住居址出土遺物観察表①……5
第 2 表　Ⅱ H 3 号住居址出土遺物観察表②……7
第 3 表　Ⅱ H 5 号住居址出土遺物観察表……9
第 4 表　Ⅱ H 7 号住居址出土遺物観察表……11
第 5 表　Ⅱ H 8 号住居址出土遺物観察表①……13
第 6 表　Ⅱ H 8 号住居址出土遺物観察表②……14
第 7 表　Ⅱ H13号住居址出土遺物観察表①……15
第 8 表　Ⅱ H13号住居址出土遺物観察表②……16
第 9 表　Ⅱ H15号住居址出土遺物観察表……17
第10表　Ⅱ H39号住居址出土遺物観察表①……18
第11表　Ⅱ H39号住居址出土遺物観察表②……19
第12表　Ⅲ H 1 号住居址出土遺物観察表……20
第13表　Ⅲ H 2 号住居址出土遺物観察表……22
第14表　Ⅲ H 3 号住居址出土遺物観察表……23
第15表　Ⅲ H25号住居址出土遺物観察表……25
第16表　Ⅲ H29号住居址出土遺物観察表……26
第17表　Ⅲ H45号住居址出土遺物観察表……29
第18表　Ⅲ H46号住居址出土遺物観察表……30
第19表　Ⅲ H47号住居址出土遺物観察表……34
第20表　Ⅲ H49号住居址出土遺物観察表……37
第21表　Ⅳ H 6 号住居址出土遺物観察表……40
第22表　Ⅳ H 7 号住居址出土遺物観察表……41
第23表　Ⅳ H 8 号住居址出土遺物観察表……44
第24表　Ⅳ H15号住居址出土遺物観察表……47
第25表　土坑・ピット出土遺物観察表……55
第26表　1 号方形周溝墓出土遺物観察表①……60
第27表　1 号方形周溝墓出土遺物観察表②……61
第28表　Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表①……67
第29表　Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表②……68
第30表　Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表③……69
第31表　遺構外出土遺物観察表……70
第32表　Ⅰ H17号住居址出土遺物観察表……75
第33表　Ⅰ H18号住居址出土遺物観察表……76
第34表　Ⅰ H19号住居址出土遺物観察表……79
第35表　Ⅰ H26号住居址出土遺物観察表……82
第36表　Ⅰ H28号住居址出土遺物観察表……84
第37表　Ⅰ H29号住居址出土遺物観察表……85
第38表　Ⅰ H35号住居址出土遺物観察表……88
第39表　坪の内古墳出土遺物観察表……99
第40表　椿名平 1 号墳出土遺物観察表①……106
第41表　椿名平 1 号墳出土遺物観察表②……107
第42表　遺構外出土遺物観察表……108
第43表　ピット出土遺物観察表……110

写 真 図 版

図版 1　①Ⅰ H 3 号住居址全景
　　②Ⅰ H 3 号住居址遺物出土状況
図版 2　①Ⅰ H 3 号住居址炉全景
　　②Ⅰ H 3 号住居址遺物出土状況
図版 3　①Ⅰ H 5 号住居址全景
　　②Ⅰ H 5 号住居址№ 2 炉全景
図版 4　①Ⅰ H 7 号住居址全景
　　②Ⅰ H 8 号住居址全景

写 真 図 版

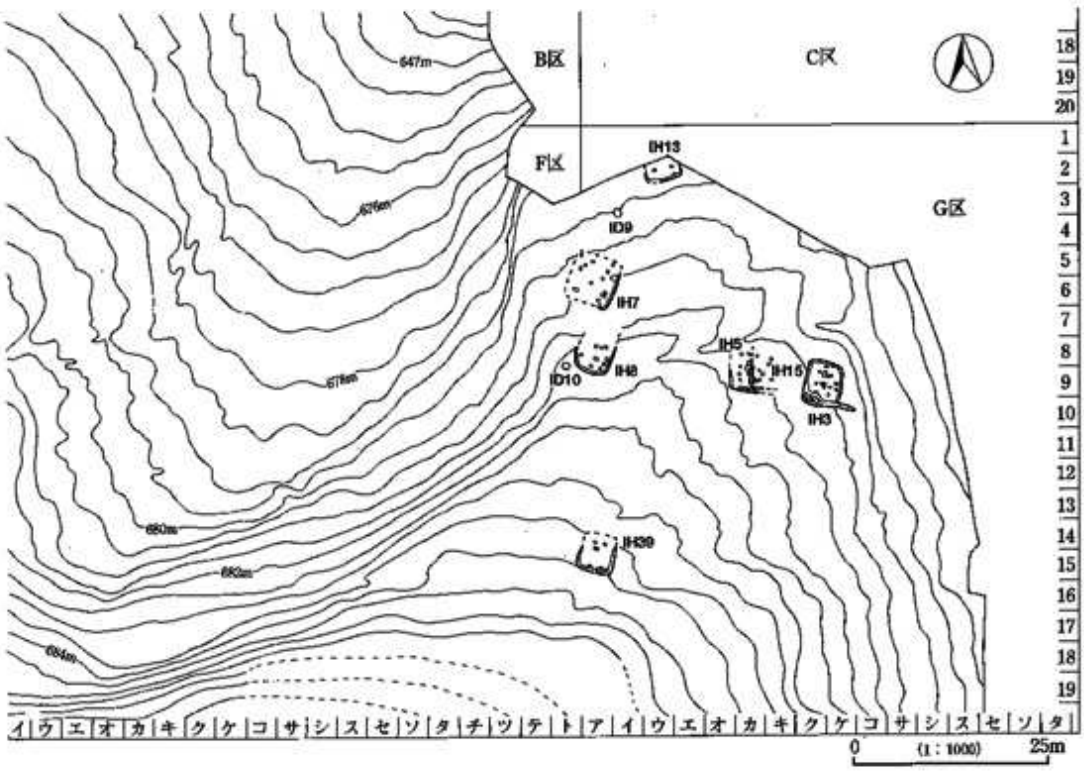
図版5　①ⅠH8号住居址掘り方全景
②ⅠH8号住居址遺物出土状況
図版6　①ⅠH13号住居址全景
②ⅠH13号住居址遺物出土状況
③ⅠH13号住居址遺物出土状況
図版7　①ⅠH15号住居址全景
②ⅠH39号住居址全景
図版8　①ⅢH1号住居址全景
②ⅢH1号住居址P3内遺物出土状況
図版9　①ⅢH2号住居址全景
②ⅢH3号住居址全景
図版10　①ⅢH25号住居址全景
②ⅢH25号住居址遺物出土状況
③ⅢH25号住居址遺物出土状況
図版11　①ⅢH29号住居址全景
②ⅢH42号住居址全景
図版12　①ⅢH43号住居址全景
②ⅢH45号住居址全景
図版13　①ⅢH46号住居址全景
②ⅢH45号住居址遺物出土状況
図版14　①ⅢH47号住居址全景
②ⅢH47号住居址掘り方全景
図版15　①ⅢH47号住居址遺物出土状況
②ⅢH47号住居址遺物出土状況
図版16　①ⅢH48号住居址全景
②ⅢH48号住居址遺物出土状況
図版17　①ⅢH49号住居址全景
②ⅢH49号住居址炭化物出土状況
図版18　①ⅢH50号住居址全景
②ⅢH51号住居址全景
図版19　①ⅣH6号住居址全景
②ⅣH7号住居址全景
図版20　①ⅣH8号住居址全景
②ⅣH8号住居址№1炉全景
図版21　①ⅣH8号住居址遺物出土状況
②ⅣH8号住居址遺物出土状況
図版22　①ⅣH10号住居址全景
②ⅣH13号住居址全景
図版23　①ⅣH14号住居址全景
②調査区より窖沢集落をのぞむ
図版24　①ⅣH15号住居址全景
②ⅣH15号住居址遺物出土状況
図版25　①ⅣF1号掘立柱建物址全景
②調査区最南端より北側をのぞむ
図版26　①ⅠD9号土坑　⑤ⅢD8号土坑
②ⅠD10号土坑　⑥ⅢD30号土坑
③ⅢD4号土坑　⑦ⅢD34号土坑
④ⅢD4号土坑遺物出土状況　⑧ⅣD2号土坑
図版27　①ⅣD17号土坑　⑤ⅣD24号土坑
②ⅣD17号土坑セクション　⑥ⅣD28号土坑
③ⅣD19号土坑　⑦調査区北側発掘風景
④ⅣD19号土坑セクション
図版28　①②1号方形周溝墓全景
図版29　①1号方形周溝墓調査風景
②1号方形周溝墓溝内南側セクション
図版30　①1号方形周溝墓溝内北側セクション
②1号方形周溝墓溝内南側遺物出土状況
図版31　①②1号方形周溝墓溝内南側遺物出土状況
図版32　①調査区南側埋没谷完掘状況
②調査区南側埋没谷遺物出土状況
図版33　①調査区南側埋没谷遺物出土状況
②調査区南側埋没谷調査風景
図版34　①調査区南側埋没谷遺物出土状況
②調査区南側埋没谷遺物出土状況
図版35　①ⅠH11号住居址全景
②ⅠH11号住居址貯蔵穴検出状況
図版36　①ⅠH17号住居址全景
②ⅠH18号住居址全景
図版37　①ⅠH19号住居址全景
②ⅠH19号住居址カマド全景
図版38　①ⅠH22号住居址全景
②ⅠH23号住居址全景
図版39　①ⅠH26号住居址全景
②ⅠH26号住居址カマド掘り方全景
図版40　①ⅠH28号住居址全景
②ⅠH29号住居址全景
図版41　①ⅠH35号住居址全景
②ⅠH35号住居址北東コーナーピット全景
図版42　①ⅠH35号住居址北壁カマド全景
②ⅠH35号住居址東壁カマド全景
図版43　①ⅠF1号掘立柱建物址全景
②ⅠF2号掘立柱建物址全景
図版44　①ⅠF5号掘立柱建物址全景
②Ⅰ区古墳集落址全景
図版45　①坪の内古墳調査前風景
②坪の内古墳石室上礫除去風景
図版46　①坪の内古墳石室及び周溝検出状況
②坪の内古墳奥壁検出状況
図版47　①坪の内古墳全景
図版48　①坪の内古墳石室礫床検出状況
②調査区を東側より望む
図版49　①椿名平1号墳調査前風景
②椿名平1号墳礫検出状況
図版50　①椿名平1号墳石室検出状況
②椿名平1号墳石室礫検出状況
図版51　①椿名平1号墳石室全景
②椿名平1号墳石室横道部検出状況
図版52　①椿名平1号墳石室左側壁全景
②椿名平1号墳石室玄室部検出状況
図版53　①椿名平1号墳遺物出土状況．須恵器
②椿名平1号墳遺物出土状況．刀子
③④椿名平1号墳遺物出土状況．鉄鏃
⑤⑥椿名平1号墳人骨出土状況
⑦椿名平1号墳遺物出土状況．土師器甕
⑧椿名平1号墳奥壁掘り方検出状況
図版54　ⅠH3号住居址出土遺物
図版55　ⅠH5・7・8・13号住居址出土遺物
図版56　ⅠH39号住居址出土遺物
図版57　ⅢH1・2・3・25・42・43・45号住居址出土遺物
図版58　ⅢH46・47号住居址出土遺物
図版59　ⅢH48・49．ⅣH6・7・8号住居址出土遺物
図版60　ⅣH15号住居址．ⅠD9．ⅢD4・6．ⅣD19．ⅠP116
1号方形周溝墓出土遺物
図版61　1号方形周溝墓出土遺物
図版62　1号方形周溝墓・埋没谷出土遺物
図版63～66　埋没谷出土遺物②～⑤
図版67　グリット出土遺物
図版68・69　出土遺物（石製品）①②
図版70　出土遺物（石製品・鉄製品）
図版71　ⅠH17・18・19・26・28・29号住居址出土遺物
図版72　ⅠH35号住居址・遺構外出土遺物
図版73　遺構外出土遺物②
図版74　遺構外出土遺物・坪の内古墳出土遺物
図版75　出土遺物（土製品・石製品）
図版76　椿名平1号墳出土遺物
図版77　①椿名平1号墳出土遺物（鉄製品）
②出土遺物（白玉）
図版78　椿名平1号墳出土鉄製品レントゲン写真

第Ⅰ章　榛名平遺跡における弥生時代の概要

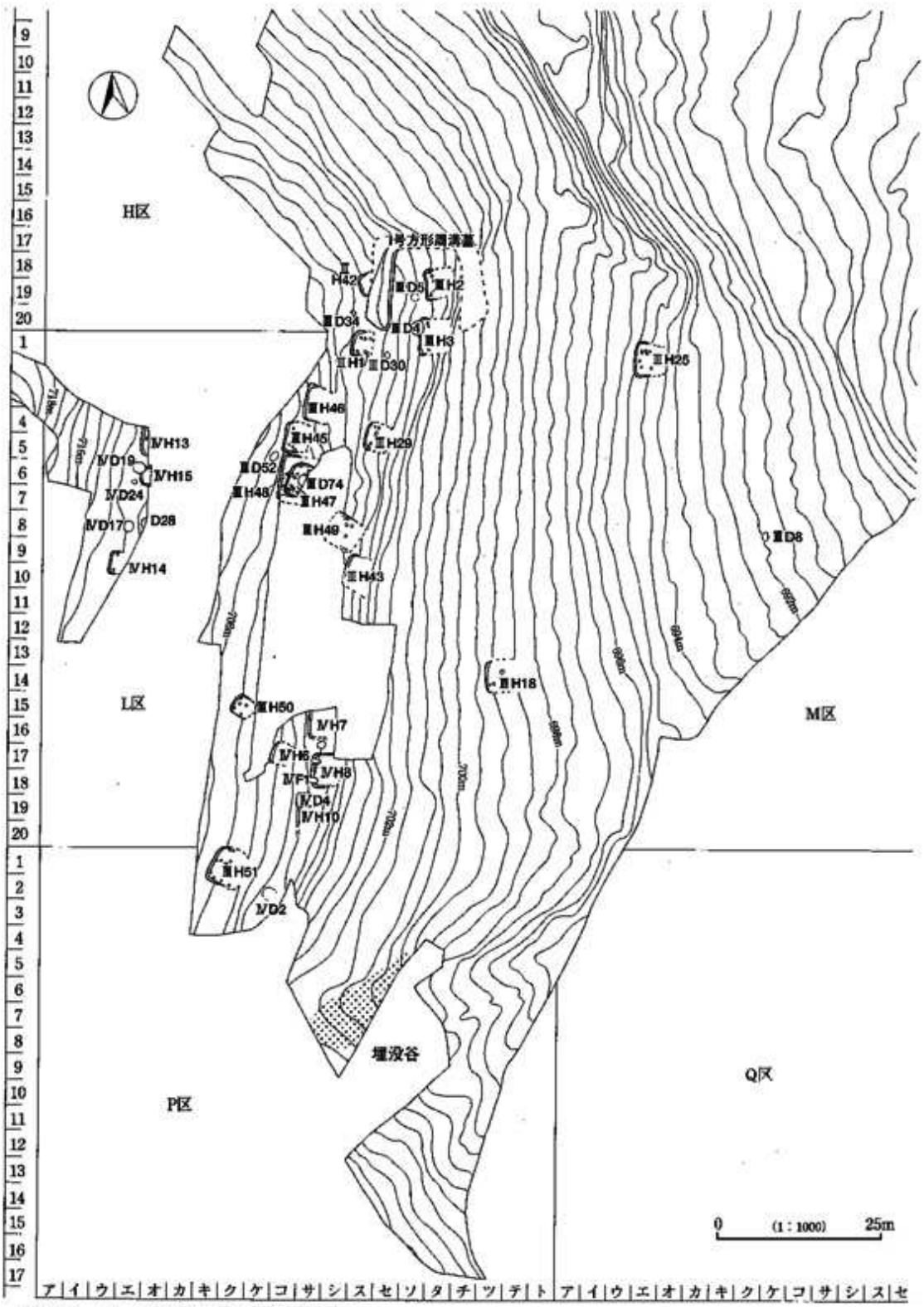
第1節　概　要

榛名平遺跡における弥生時代の遺構は、竪穴住居址29軒・掘立柱建物址１棟・土坑15基・方形周溝墓１基・埋没谷１カ所が検出された。遺構の分布は主に調査区中央の台地先端であるＧ区と、調査区最上段の台地であるＨ・Ｌ区であった。

本遺跡の弥生時代遺構は２時期が考えられ、弥生後期後半と弥生末～古墳初頭の時期が当てられる。注目される遺構としては１号方形周溝墓があり溝中より多くの土器が出土した。これら土器の中には在地箱清水系譜の甕と外来の影響により成立した器種があり、当地域の弥生末～古墳初頭の様相をよく示している。この遺構と本遺跡の西山麓上に立地する瀧の峯１・２号墳とがどのような時間的関係になるのか興味が持たれる。また、本遺跡の所在する「沓沢の谷」は近年の調査により弥生末～古墳初頭の集落が点々と散在する事が判明しており、「古東山道」ルートを考えるにあたって非常に示唆的な事象となっている。以上が榛名平遺跡における弥生時代の遺構・遺物の概要であり、以下各遺構・遺物について竪穴住居址より述べる。



第１図　Ⅰ区弥生時代遺構全体図



第2図　Ⅲ・Ⅳ区弥生時代遺構全体図

第Ⅱ章　弥生時代の遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

(1) ＩＨ３号住居址（第３～６図，写真図版一、二）

本住居址は、調査区東よりの台地の先端部であるG－クー８・９・10、G－ケー８・９・10Grに位置する。残存状態は良好である。

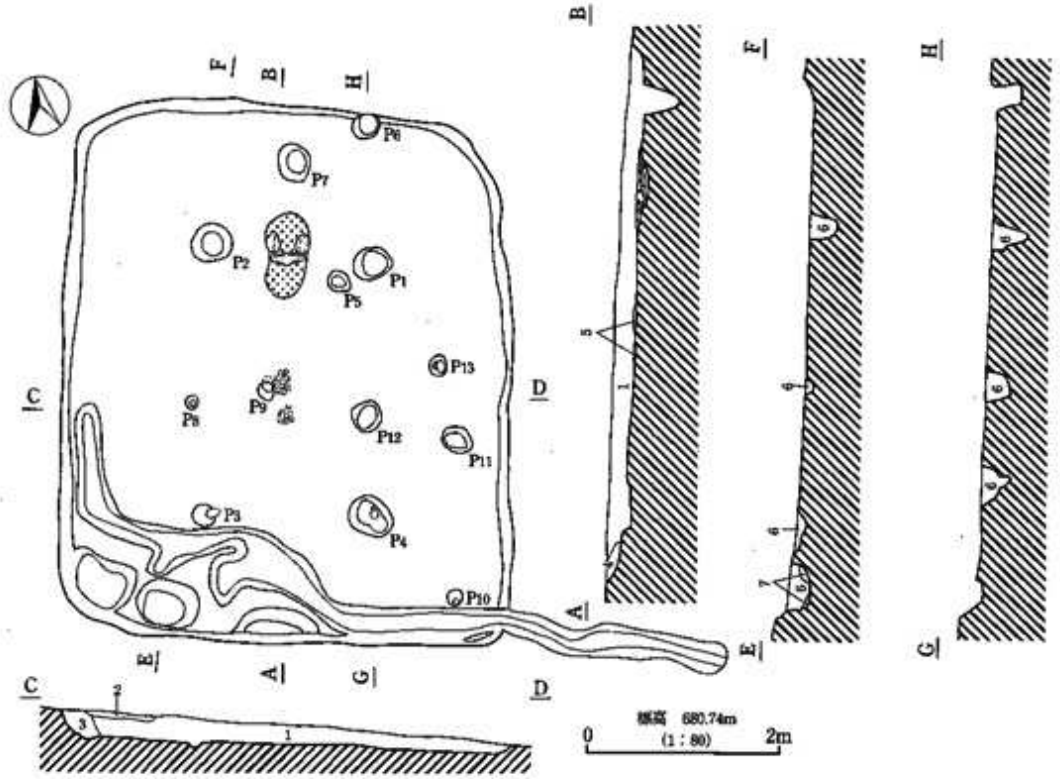
形態はほぼ長方形を呈する。住居址北側主柱穴間に炉が造られている。規模は北壁3.97ｍ・南壁4.38ｍ・西壁4.93ｍ・東壁5.14ｍで、壁高さは南西コーナーよりで24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ－11°－Ｅを示す。住居址の床面積は検出部で19.2㎡を測る。覆土は３層に分れる。床は住居址炉周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は西壁の一部から南壁にかけてと溝末端は住居址外まで延びていた。溝幅は22～38cmで深さは4.5～14cmを測る。断面の形態はＵ字形である。柱穴は床面で13個が検出された。規模はＰ１が径40cm・深さ45cm、Ｐ２が径42cm・深さ51cm、Ｐ３が径24cm・深さ40cm、Ｐ４が径44cm・深さ32cm、Ｐ５が径24cm・深さ15cm、Ｐ６が径28cm・深さ32cm、Ｐ７が径40cm・深さ50cm、Ｐ８が径14cm・深さ７cm、Ｐ９が径20cm・深さ25cm、P10が径17cm・深さ14cm、P11が径33cm・深さ15cm、P12が径33cm・深さ24cm、P13が径21cm・深さ42cmを測る。ピットの検出位置より本址は６本柱の主柱穴でありＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ８・P12がそれにあたる。また、本址は住居址南西コーナーに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。土坑の規模は長軸67cm・短軸46cm・深さ21cmを測る。

炉址は北壁よりＰ１とＰ２の柱穴間に検出された。主軸方位はＮ－10°－Ｅを測る。形態は楕円形であり、焚き口部側よりコ字状に配された枕石が３点検出されている。規模は長軸86cm・短軸40cmで焼土の厚さは７cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

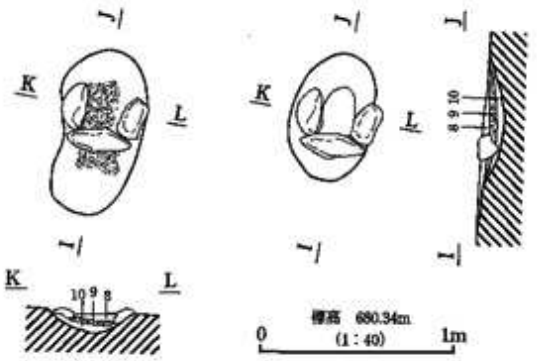
本址の遺物は炉址の周辺と南壁付近よりまとまって出土した。図示した遺物の出土位置は１が炉とＰ４周辺部よりの破片。２と３はＰ４周辺から、４と５は覆土中、６はP12脇、７もＰ４脇、８は西壁中央際である。出土土器の内、壺と高坏はいずれも赤彩が施されていたが、覆土が強粘土の為、彩色が損なわれている物が多かった。

石器についてはいずれも覆土中の出土であり、本址周辺部に縄文時代前期の集落址が検出されていることを考えると縄文時代の遺物として捉えるべきかもしれない。しかし、本遺跡においては弥生時代後期の打製石器の存在を確認する意味においても弥生時代の遺構より出土した石器については積極的にその時代の所産として捉え報告する事とした。以後の住居址についても同様である。本址からは８点の石器及び加工痕の残る石が出土している。

本址はこれらの遺物より弥生後期後半に位置づけられる。

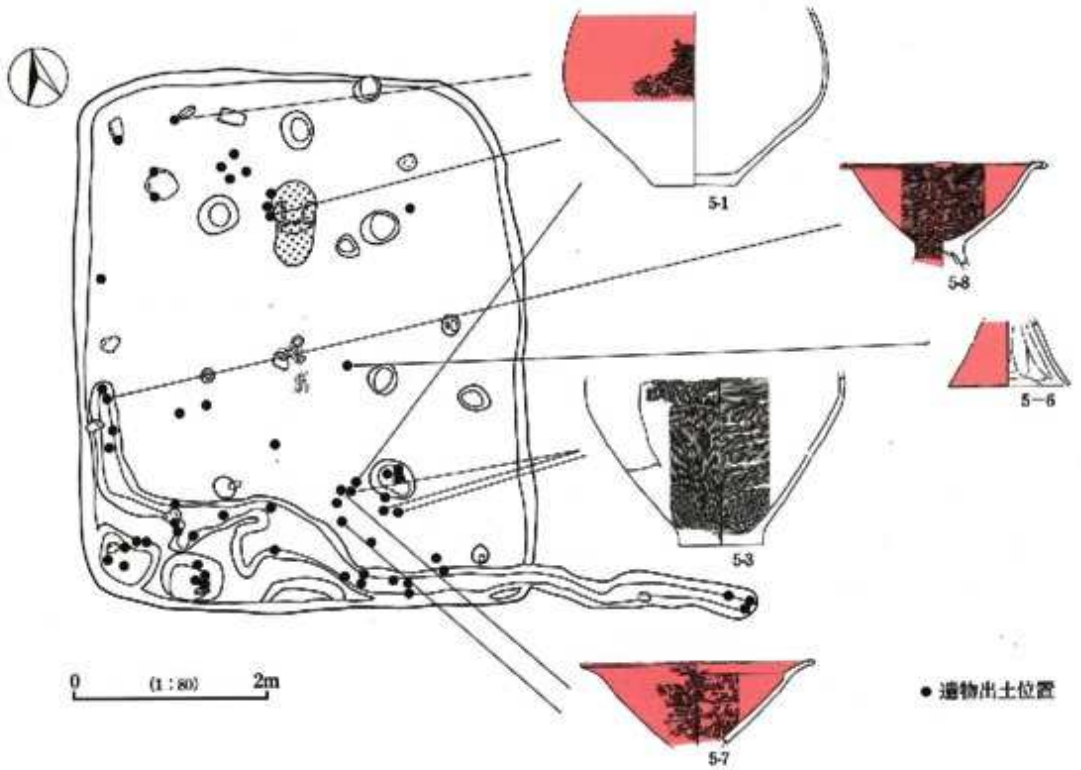


1層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり、白色の粒子を多量、炭化物を微量含む。
2層　褐灰色土（10YR4/1）　しまりあり、白色の粒子・炭化物を微量含む。1層より明るい。
3層　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱く、粘性あり、褐色土ブロックを含む。
4層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　しまりあり、褐色土（粘土ローム）ブロックを含む。
5層　赤色土（10R5/8）　焼土層。地山（褐色土）が焼けて、ブロック状を呈す。（炭化物・灰なし）
6層　黒褐色土（10YR3/2）　しまり、粘性あり、白色の小さなパミスを多量、炭化物を微量含む。
7層　褐色土（10YR4/6）　しまりややあり、地山に近く、黒色土ブロックを含む。



8層　黒褐色土（10YR2/2）
しまりやや弱い。焼土粒子・炭化物を微量含む。
9層　赤色土（10R5/8）
焼土ブロック、よく焼けている。（焼土層）
10層　赤黒色土（10R2/1）
焼土粒子を含む。上面よく焼けている。黒色のパミスを微量含む。

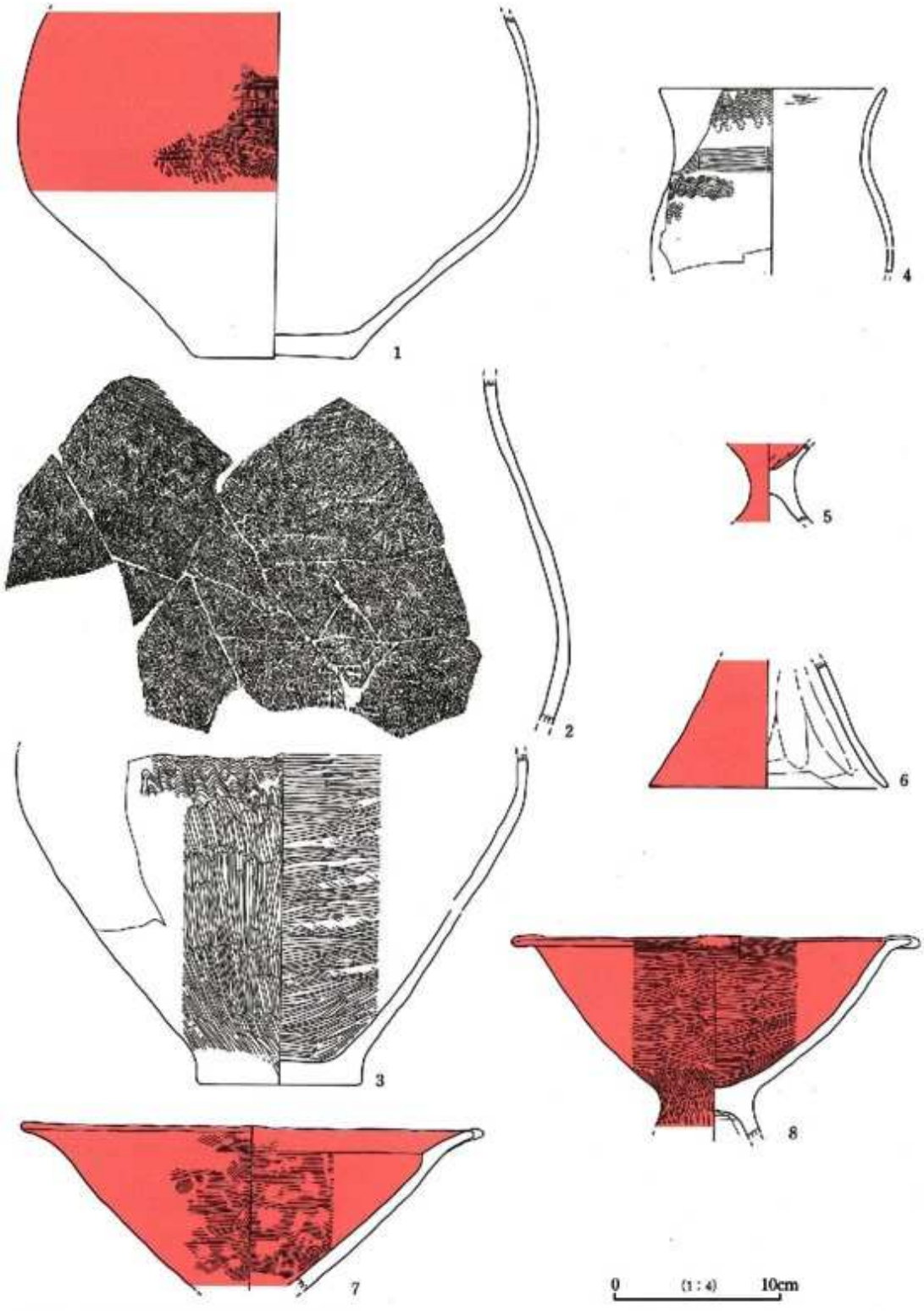
第3図　IH3号住居址実測図



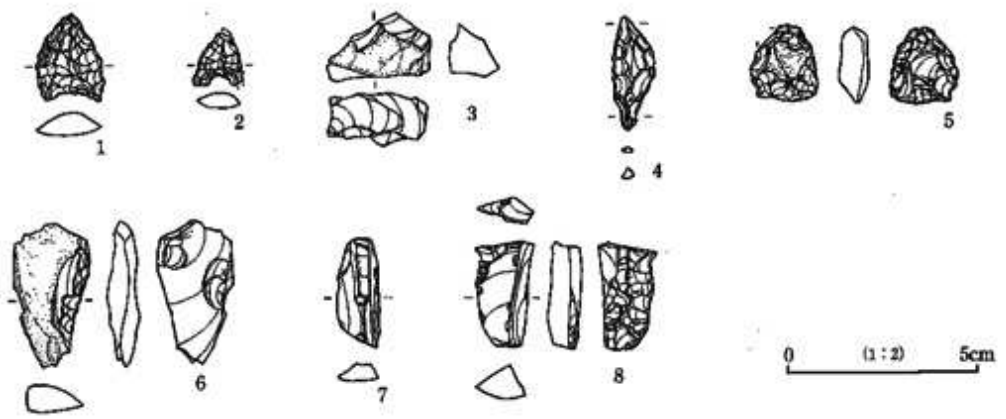
第4図　IH3号住居址遺物出土状況図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺	――	〈20.9〉	9.9	外面　ヘラミガキ後、胴部に赤彩 内面　ナデ	7.5YR 8/4　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
2	甕	――	〈21.0〉	――	外面　頸部に櫛描波状文を施した後、胴部に櫛描波状文を施す 内面　ハケメ後、横方向のヘラミガキ ※3と同一個体	7.5YR 8/4　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
3	甕	――	〈20.1〉	10.0	外面　ハケメ調整後、胴部中位に櫛描波状文(単位不明)を施文　その後胴部下半にはヘラミガキ 内面　ハケメ後ヘラミガキ	7.5YR 8/4　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と白色砂粒多量含む
4	甕	(13.8)	〈11.3〉	――	外面　調整不明・口縁部～胴部に櫛描波状文(10本一組?)を施文後、頸部に10本一組の櫛描簾状文(右回り)を施す 内面　ヘラミガキ	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を少量含む
5	高坏	――	〈4.7〉	――	外面　磨耗著しく調整不明　赤彩 内面　ヘラナデ　赤彩	7.5YR 7/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
6	高坏	――	〈7.8〉	14.5	外面　ナデ後、赤彩 内面　ナデ	7.5YR 6/6　橙(内面) 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒少量含む
7	高坏	(18.2)	〈9.9〉	――	外面　ハケメ後、赤彩 内面　ハケメ後、赤彩　口縁端部に三角形の突起を有する(4ヶ所)	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
8	高坏	(24.9)	〈12.4〉	――	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　坏部ヘラミガキ後、赤彩・脚部ヘラナデ　口縁端部に、ほぼ等間隔の三角形の突起を有する(4ヶ所?)	7.5YR 7/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む

第1表　IH3号住居址出土遺物観察表①



第5図　IH3号住居址出土遺物実測図①



第6図　IH3号住居址出土遺物実測図②

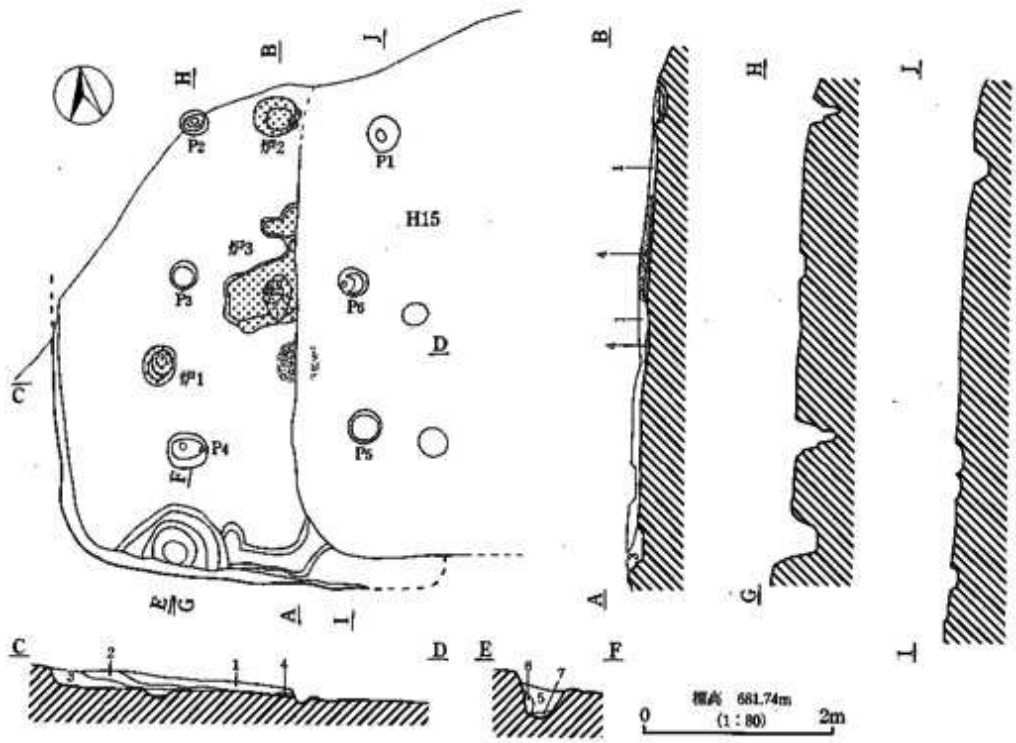
挿図番号	器種	法量(mm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	石鏃	23.0	17.5	6.0	2.1	凹基		両面	急角度	チャート	裏面を平坦に加工。裏面から表面へ急角度剥離を施す。
2	石鏃	14.0	13.0	4.0	0.5	凹基	楕円礫	両面	急角度	黒曜石	先端部とカエシ部欠損。
3	ピエス	17.0	27.0	13.0	4.6					黒曜石	両極剥片。
4	石錐	29.5	11.0	8.0	2.0	棒状		両面	急角度	頁岩	両端部を使用。摩耗あり。刃部わずかに欠損。
5	小形両面加工	20.0	17.5	8.0	2.1			両面	平坦	黒曜石	周縁部に二次加工を施す。下端部に角状に出る突起あり。
6	二次加工剥片	37.5	19.5	9.0	5.0		縦長	正	平坦	黒曜石	右側辺に加工。
7	使用痕剥片	29.0	11.5	5.5	1.4		縦長			黒曜石	両側辺にMF顕著。
8	二次加工剥片	27.0	11.5	9.5	3.6			正	平坦	黒曜石	素材は礫打面を残し、HDで剥離。末端部は欠損。

第2表　IH3号住居址出土遺物観察表②

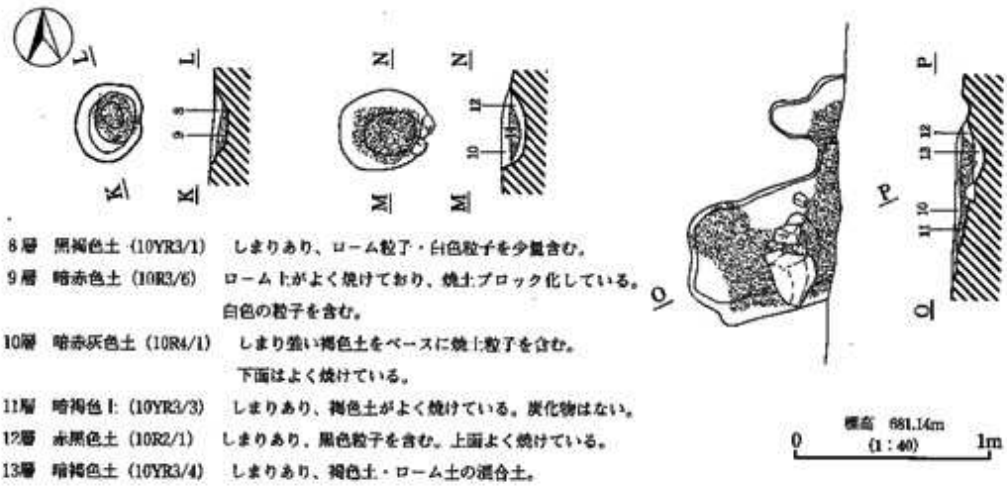
(2) IH5号住居址（第7・8図，写真図版三）

本住居址は、調査区東よりの台地先端であるG－オ－8・9、G－カ－8・9Grに位置する。残存状態は東側がIH15号住居址に北側がIM1号溝状遺構に削平されている。

形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。規模は南壁3.05m（残存値）3.74m（推定値）・西壁1.35m（残存値）で、壁高さは南西コーナーで24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位N－5°－Eを示す。住居址の床面積は検出部で9.3㎡を測る。覆土は3層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は南壁の一部に確認された。溝幅は20～45cm、深さは4.7～7cmを測る。柱穴は6カ所確認され、規模はP1が径36cm・深さ18cm、P2が径29cm・深さ31cm、P3が径29cm・深さ6cm、P4が径40cm・深さ40cm、P5が径34cm・深さ11cm、P6が径30cm・深さ13cmをそれぞれ測る。これらピットは検出位置より柱穴と考えられ、

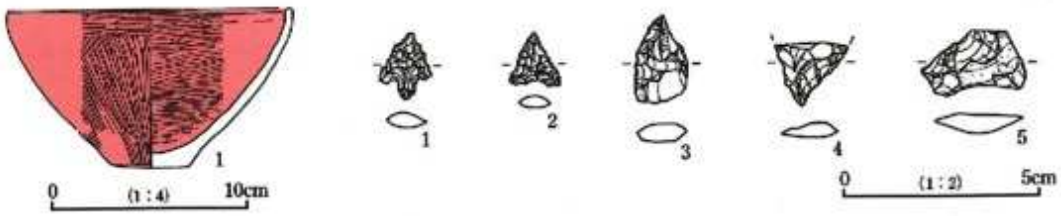


1層　黒褐色土（10YR3/1）　しまりやや強く、下層に焼土粒子を含む。黄色のローム粒子を多量含む。
2層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりややあり、黄色のローム粒子を少量含む。
3層　黒色土（10YR2/1）　しまりあり、やや明るい黒色土で炭化物を微量含む。
4層　灰黄褐色土（10YR6/2）　しまり、粘性あり、ローム土よく焼けており、焼土化している。
5層　黒褐色土（10YR3/1）　しまりあり、ローム粒子を含み、炭化物を微量含む。
6層　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱く、炭化物・ローム粒子をやや多く含む。
7層　褐色土（10YR4/4）　しまりあり、ローム粒子・黄金色の粒子を多量含む。



8層　黒褐色土（10YR3/1）　しまりあり、ローム粒子・白色粒子を少量含む。
9層　暗赤色土（10R3/6）　ローム土がよく焼けており、焼土ブロック化している。白色の粒子を含む。
10層　暗赤灰色土（10R4/1）　しまり強い褐色土をベースに焼土粒子を含む。下面はよく焼けている。
11層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり、褐色土がよく焼けている。炭化物はない。
12層　赤黒色土（10R2/1）　しまりあり、黒色粒子を含む。上面よく焼けている。
13層　暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり、褐色土・ローム土の混合土。

第7図　IH5号住居址実測図



第8図　IH5号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	鉢	(14.8)	8.1	4.0	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を微量含む

挿図番号	器種	法量(cm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石錐	17.0	8.5	3.5	0.5	有茎		両面	急角度	黒曜石	裏面を平坦に加工し、側辺を鋸歯縁に加工。
2	石錐	9.0	13.0	3.0	0.3	凹基		両面	急角度	黒曜石	裏面に素材面を残し、平坦にする。表面側へ急角度剥離を施す。
3	石錐	23.0	13.5	6.0	1.4	平基		両面	急角度	黒曜石	先端部欠損。基部が未加工なので未成品の可能性あり。
4	石錐	16.0	19.0	5.0	0.8			両面	平坦	黒曜石	基部欠損。
5	剥片	11.5	26.5	4.5	1.7					黒曜石(夾雑)	打面からHDで剥離。

第3表　IH5号住居址出土遺物観察表

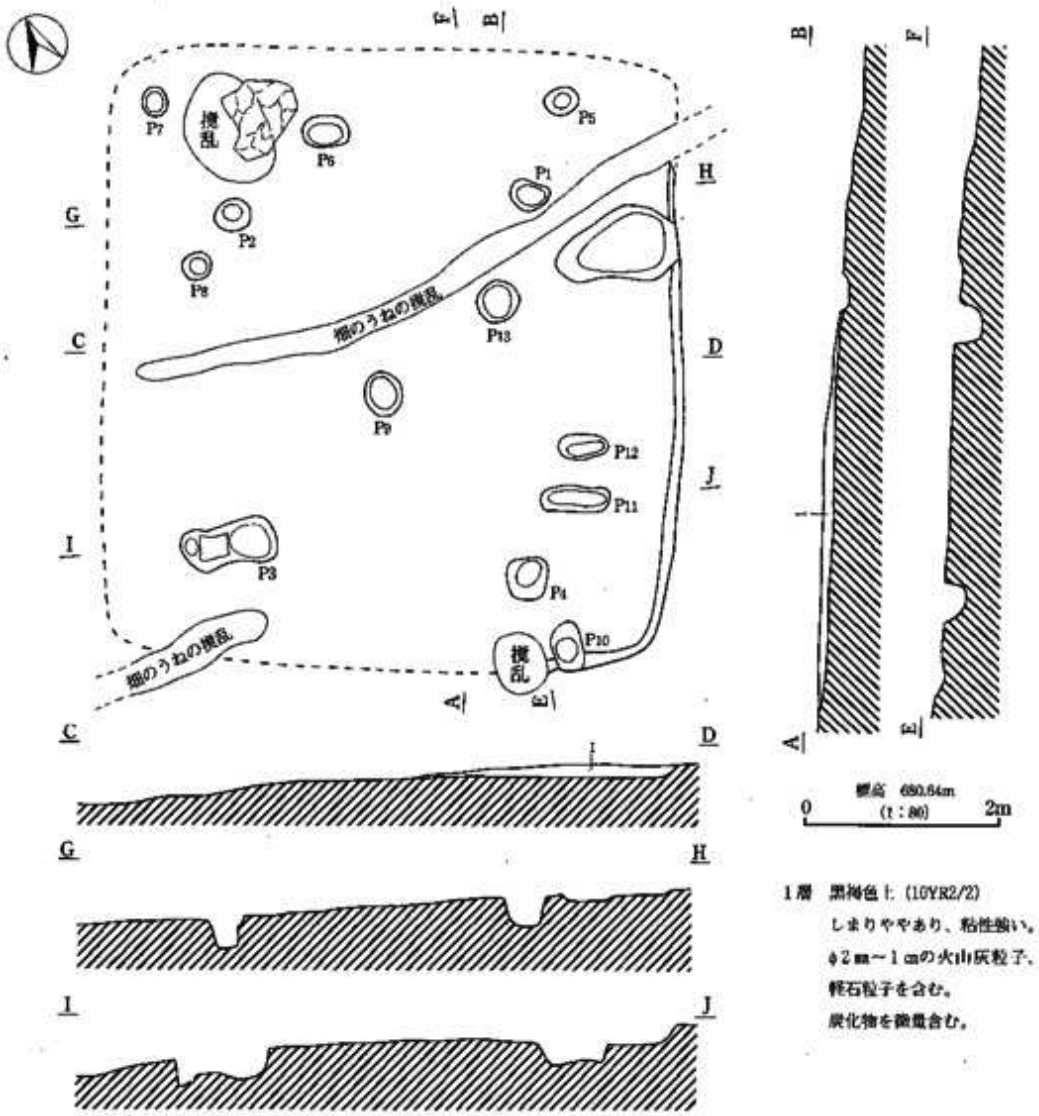
よって本址は6本柱の主柱穴を持つ。また、住居址南西コーナーよりには貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。土坑は床面に接する部分に土壇状の高まりが検出された。規模は長軸113cm・短軸70cm・深さは床面より31.5cmを測る。炉は3カ所確認された。炉1はP3とP4の間、炉2はP1とP2の間、炉3はP3とP6の間である。これらの炉はいずれも下層に焼土の硬質面を持ち、炉1と炉3はそれぞれ枕石的な礫を設置していた。規模は炉1が長軸42cm・短軸35cm・焼土の厚み4cm、炉2は長軸47cm・短軸40cm・焼土の厚み12cmを測る。これら3基の炉が同時使用によるものか、時間差があるのかは確証を得なかった。

出土遺物は覆土中より壺・甕片が少量出土している。図示した鉢は貯蔵穴内より出土した。1の調整は丁寧な磨きが、胴部は縦方向に口縁部は横方向に行われ、赤彩が施されている。石器類はいずれも覆土中の出土である。少量の出土遺物しか無く本址の帰属時期は不確実であるが、ほぼ弥生後期後半と考えられる。

(3) ＩＨ７号住居址（第９・10図、写真図版四①）

本住居址は、調査区東側よりの台地の先端部であるＦ－ト－５・６.Ｇ－ア－５・６.Ｇ－イ－５・６Ｇｒに位置する。残存状態は北側と南側が地形の傾斜のため壁が削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。炉は不明である。規模は北壁5.65ｍ(推定)・南壁0.95ｍ(残存)5.40ｍ(推定)・西壁5.8ｍ(推定)・東壁5.06ｍ(残存)5.90ｍ(推定)で、壁高さは東壁中央で18.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ－19°－Ｅを示す。住居址の床面積は推定で33.4㎡を測る。覆土は単層である。床は全体に軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは13カ

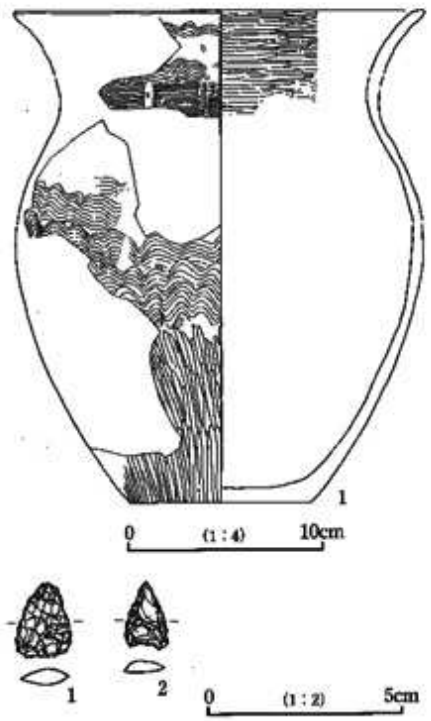


第９図　ＩＨ７号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	(21.1)	〈25.4〉	(9.3)	外面 口縁部～胴部上半に櫛描波状文(10本一組)を上から下へ施文後、頸部には櫛描簾状文(単位不明・3単止め・右回り)を施すその後胴部下半にヘラミガキ調整 内面 ヘラミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙 砂粒を少量含む

挿図番号	器種	法量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石鏃	19.0	14.0	4.0	0.9	平基		両面	平坦	黒曜石	石匙のミニチュアの可能性あり。摘み部欠損。
2	石鏃	17.5	11.0	4.0	0.6	凹基	楕円礫	正	急角度	チャート	裏面は素材面で表面側に急角度の剥離を施す。

第4表　IH7号住居址出土遺物観察表



第10図　IH7号住居址出土遺物実測図

所確認され、規模はP1が径40cm・深さ32cm、P2が径36cm・深さ34cm、P3が径100cm・深さ38cm、P4が径44cm・深さ25cm、P5が径34cm・深さ25cm、P6が径50cm・深さ30cm、P7が径30cm・深さ29cm、P8が径32cm・深さ29cm、P9が径44cm・深さ17cm、P10が径50cm・深さ22cm、P11が径70cm・深さ32cm、P12が径50cm・深さ30cm、P13が径44cm・深さ30cmを測る。これらピットは検出位置よりP1～P4が主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。また東壁北よりには土坑的な掘り込みが検出された。規模は長軸127cm・短軸75cm・深さ38cmを測る。

出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。図示した遺物の出土位置は1が東壁際中央部の床面から破砕した状態で出土した。石器類も東側覆土中より出土した。

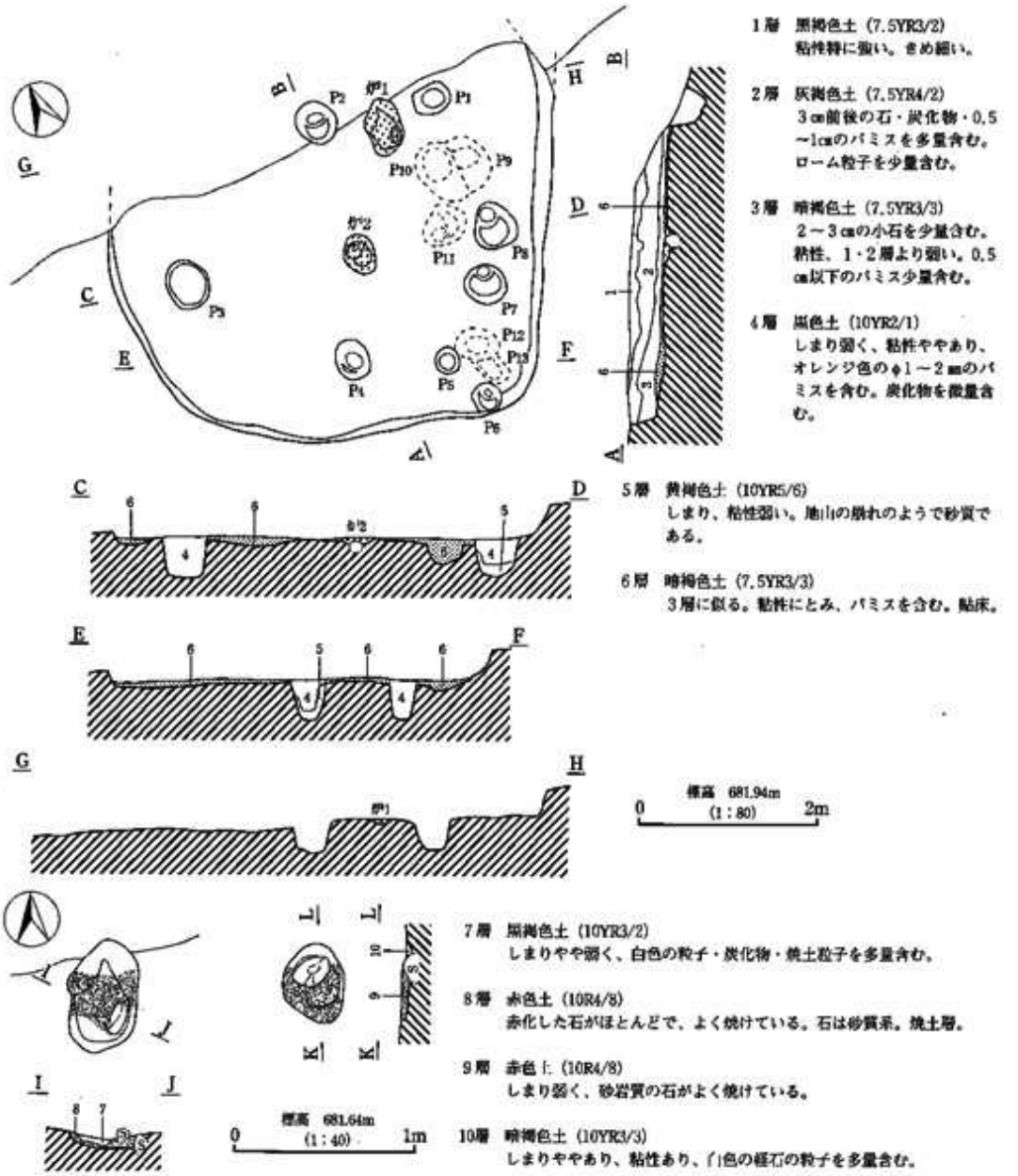
本址も出土遺物が少なく時期が不確実であるが、ほぼ弥生後期後半に位置づけられよう。

(4) IH8号住居址（第11・12図、写真図版四②.五）

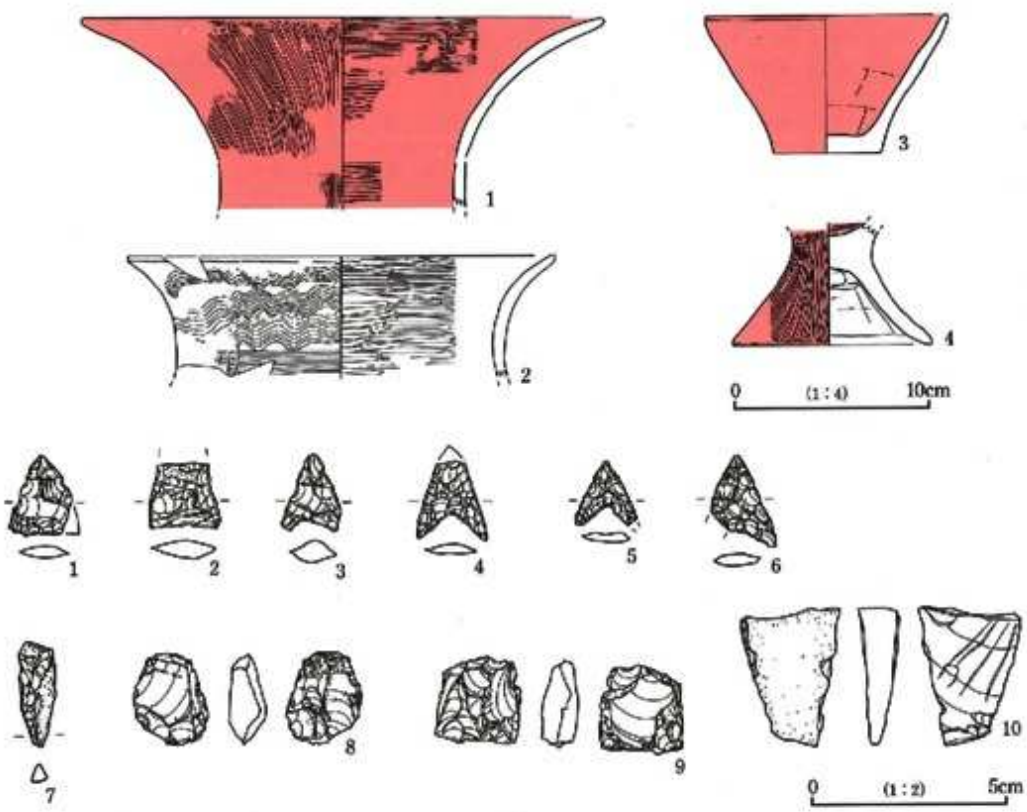
本住居址は、調査区東側台地の先端部であるF－ト－8.G－ア－8・9.G－イ－8Grに位置する。残存状態は北側半分が畑の耕作と地形によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は住居址中央と北よりの2カ所確認されている。住居址規模は南壁3.70m・西壁2.23m(残存)・東壁3.78m(残存)で、壁高さは東壁P8付近で36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－14°－Eを示す。住居址の床面積は残存部分

で14.0㎡を測る。覆土は3層に分れ炭化物を含んでいた。貼り床は全体に施されていたがやや軟弱であった。貼床の厚さは8㎝を測る。壁溝は確認されなかった。ピットは13カ所検出(内P9～P13は掘り方時)され、規模はP1が径40cm・深さ44cm、P2が径47cm・深さ41cm、P3が径54cm・深さ44cm、P4が径46cm・深さ46cm、P5が径30cm・深さ42cm、P6が径32cm・深さ36cm、P7が径46cm・深さ21cm、P8が径52cm・深さ48cm、P9が径60cm・深さ9cm、P10が径70cm・深さ19cm、P11が径40cm・深さ26cm、P12が径50cm・深さ12cm、P13が径46cm・深さ14cmを測る。掘り方はほぼ平坦で



第11図　IH8号住居址実測図



第12図　ＩＨ８号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺	(27.0)	〈19.9〉	――	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	7.5YR8/4　浅黄橙 径1－2㎜の赤色粒子を微量含む
2	甕	(22.0)	〈6.3〉	――	外面　口縁部に櫛描波状文（磨耗著しく単位不明）を施文後、頸部には櫛描簾状文（単位不明・3連止め・右回り）を施す 内面　ヘラミガキ	7.5YR7/4　にぶい橙 径1－2㎜の赤色粒子を微量含む
3	鉢	(12.5)	7.1	5.7	外面　赤彩　磨耗著しく調整不明 内面　ヘラナデ　二次焼成を受け赤彩が消えている	7.5YR3/1　黒褐 砂粒を多く含む
4	高坏	――	〈6.3〉	10.3	外面　坏部ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子を微量含む

第５表　ＩＨ８号住居址出土遺物観察表①

あったが東壁際にピットが多く確認された。

炉は２カ所検出された。いずれも枕石的な礫が検出され、焼土も硬質化していた。規模はそれぞれ炉１が長さ63cm・幅37cm・焼土の厚さ６cm、炉２が長さ45cm・幅34cm・焼土の厚さ４cmを測る。

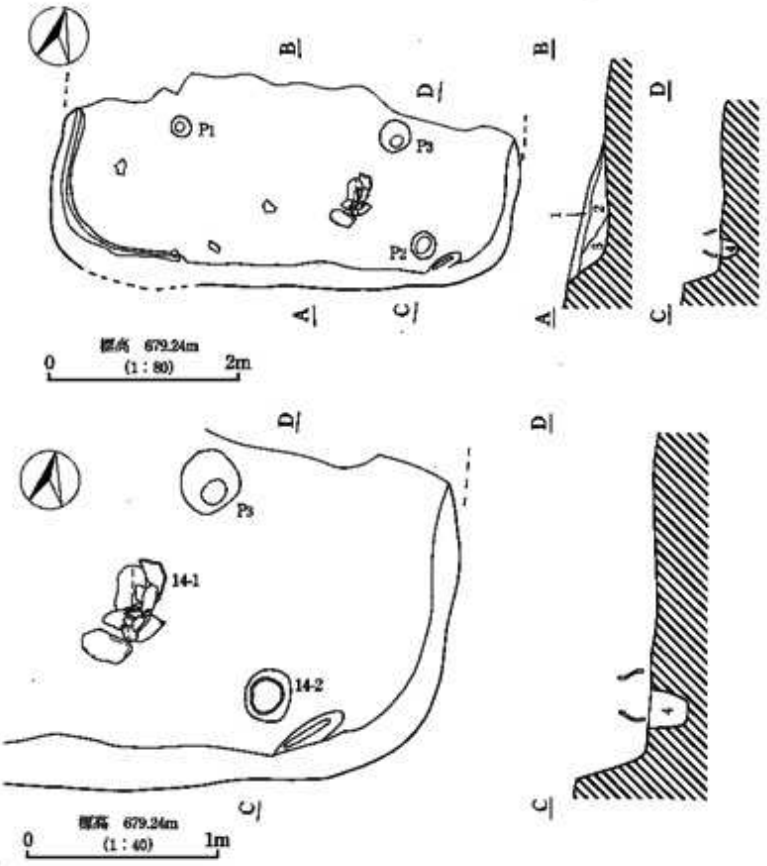
出土遺物は住居址覆土中の物が多かった。図示した遺物の出土位置はいずれもＰ４とＰ５の間に集中し、南壁側から崩落したような状態であった。石器類はいずれも覆土中からの出土である。

本址はこれらの遺物より弥生後期後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	石鏃	20.5	16.5	4.0	0.9	平基		両面	平坦	黒曜石	右部欠損。左側基部付近に対になる抉り加工があり、ミニチュアの石匙の可能性がある。
2	石鏃	17.5	17.5	5.0	1.4	平基		両面	平坦	黒曜石	先端部欠損。
3	石鏃	20.0	15.5	6.5	1.1	凹基		両面	急角度	黒曜石	非対称形。
4	石鏃	20.0	18.0	3.0	0.7	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部欠損。
5	石鏃	16.5	16.0	3.0	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石	左側カエシ部欠損。先端部を鋭く突起状に作出。
6	石鏃	24.0	17.0	3.5	0.9	凹基		両面	平坦	黒曜石	左側カエシ部欠損。裏面を平坦に加工。
7	石錐	27.5	10.0	8.0	1.7	棒状		両面	平坦	黒曜石	刃部わずかに欠損。刃部摩耗。
8	ピエス	24.0	18.5	9.5	3.5					黒曜石(夾雑)	
9	ピエス	22.5	21.0	9.5	4.4					黒曜石	
10	使用痕剥片	35.5	26.0	11.0	8.5					黒曜石(赤)	左側辺わずかにMFが見られる。

第6表　IH8号住居址出土遺物観察表②

(5) IH13号住居址（第13～15図、写真図版六）



1層　灰黄褐色土（10YR6/2）
しまりあり、φ1～2cmの小砂利を含む。φ1～2mmの白色パミスを多量含む。

2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
しまり弱く、粘性あり、φ1mm大の小砂利を含む。

3層　暗褐色土（10YR3/3）
しまり弱く、粘性あり、φ1～3mmの黄色のパミスをやや多く含む。

4層　暗褐色土（10YR3/3）
しまり弱く、粘性あり、黄色パミス含む。

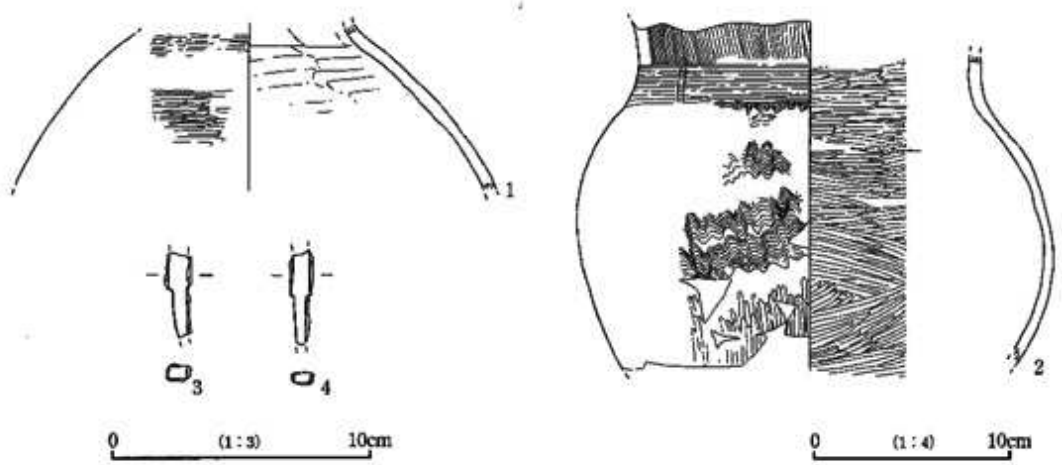
第13図　IH13号住居址及び遺物出土状況図

本住居址は、調査区東側台地の北東部先端であるG－ツ－2，G－エ－2Grに位置する。残存状態は北側が自然の地形により削平されおり、住居址の南半分のみの検出に止まった。

形態はほぼ方形を呈する。炉は不明であるが北側に存在したと考えられる。規模は南壁4.6m・西壁1.40m(残存)・東壁1.23m(残存)で、壁高さは南壁中央で46cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は南壁を基準に取るとN－11°－Wを示す。住居址の床面積は残存部で7.2㎡を測る。覆土は3層で、床はやや硬質であり、床は地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は16～36cm・深さ5cmを測る。ピットは3カ所で確認された。規模はP1が径22cm・深さ24cm、P2が径25cm・深さ20cm、P3が径32cm・深さ37cmを測る。P1とP3が主柱穴の一部と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

本址の出土遺物は覆土中から甕片が少量と、図示した1と2の壺・甕は床面から出土した。特に2の甕はP2上に被せるような状態で出土し、1の壺も破砕した土器の上に礫を故意に置いたような状態であった(写真図版参照)。3と4の鉄製品は鉄鏃と考えられ覆土中の出土である。石器類は1と2が覆土中、3～5が床土に混ざるように出土している。

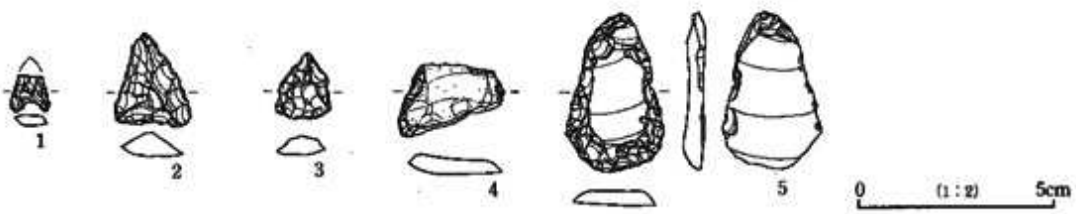
本址はこれら遺物より弥生後期末に位置づけられる。



第14図　IH13号住居址出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺		(8.6)		外面　ヘラナデ後、頸部に櫛描簾状文（擦耗著しく単位不明）を施す 内面　ヘラナデ	5YR6/6　橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
2	甕		(18.3)		外面　頸部～口縁部に櫛描波状文(擦耗著しく単位不明)を施文後、口縁部には櫛描文、頸部には、櫛描簾状文(12本一組・2連止め・右回り)を施す　胴部下半ヘラミガキ調整 内面　ヘラミガキ	5YR5/4　にぶい赤褐 径1～2mmの赤色粒子を微量含む

第7表　IH13号住居址出土遺物観察表①



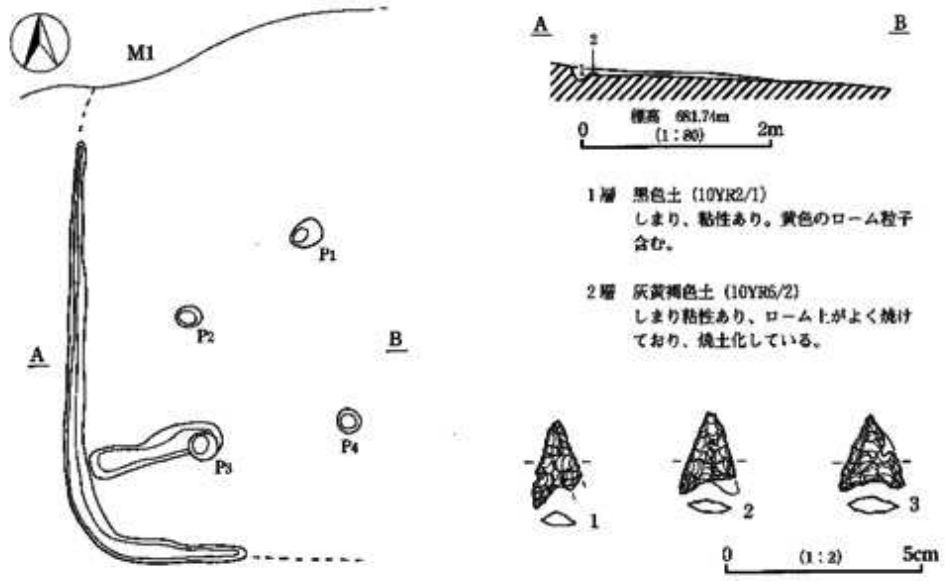
第15図　ＩH13号住居址出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量(mm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	石鏃	9.5	10.0	3.5	0.3	凹基		両面	急角度	黒曜石	先端部欠損。右側辺に裏面から急角度剥離で整形。左側辺は表面から裏面に急角度剥離で加工。
2	石鏃？	24.0	19.5	6.5	2.1	平基		両面	急角度	頁岩	非対称形である。ミニチュア石鏃の可能性あり。
3	小形両面加工	17.0	14.0	5.0	1.0			両面	急角度	黒曜石	裏面を平坦に加工。先端部は嘴み状に作出。
4	使用痕剥片	14.0	27.0	5.5	2.3					黒曜石	素材剥片左側にMFが顕著。スクレイピングによるものと思われる。
5	掻器	41.0	25.5	6.0	5.5		縦長	正	急角度	黒曜石	素材両側から末端辺にかけて急角度剥離を施す。

第８表　ＩH13号住居址出土遺物観察表②

(6)ＩH15号住居址（第16図、写真図版七①）

本住居址は、調査区東側の台地先端部であるG－カ－８・９.G－キ－８・９Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されており、北側はＩＭ１号溝状遺構によって切られている。



第16図　ＩH15号住居址及び出土遺物実測図

形態はほぼ方形を呈する。炉は不明であった。規模は南壁1.58m(残存)・西壁4.12m(残存)4.68m(推定)で、壁高さは西壁中央で3cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－2°－Eを示す。住居址の床面積は推定で12.2㎡を測る。覆土は単層で、床は地山を踏み固めたような土でやや軟質であった。壁溝は南西コーナーから西壁にかけて検出された。断面形はU字形で、幅は7～28cm・深さ9cmを測る。ピットは4カ所確認され、規模はP1が径35cm・深さ19cm、P2が径27cm・深さ12cm、P3が径30cm・深さ34cm、P4が径24cm・深さ15cmを測る。

出土遺物は覆土中のものがほとんどで甕・壺類の破片が少量であり、図示可能なものは無かった。石鏃3点は南側の覆土中の出土である。本址からの遺物は少なく時期の確定が困難であるがIH5号住居址より新しい事などから弥生後期末頃と考えられる。

挿図番号	器種	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	石鏃	22.0	13.0	4.0	0.6	凹基		両面	急角度	黒曜石	側辺を鋸歯縁にする。裏面は平らに整形。右側カエシ部欠損。
2	石鏃	20.0	14.5	3.5	0.6	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部、右側カエシ部欠損。
3	石鏃	19.0	17.5	4.5	0.7	凹基		両面	平坦	黒曜石	右側辺に欠損。

第9表　IH15号住居址出土遺物観察表

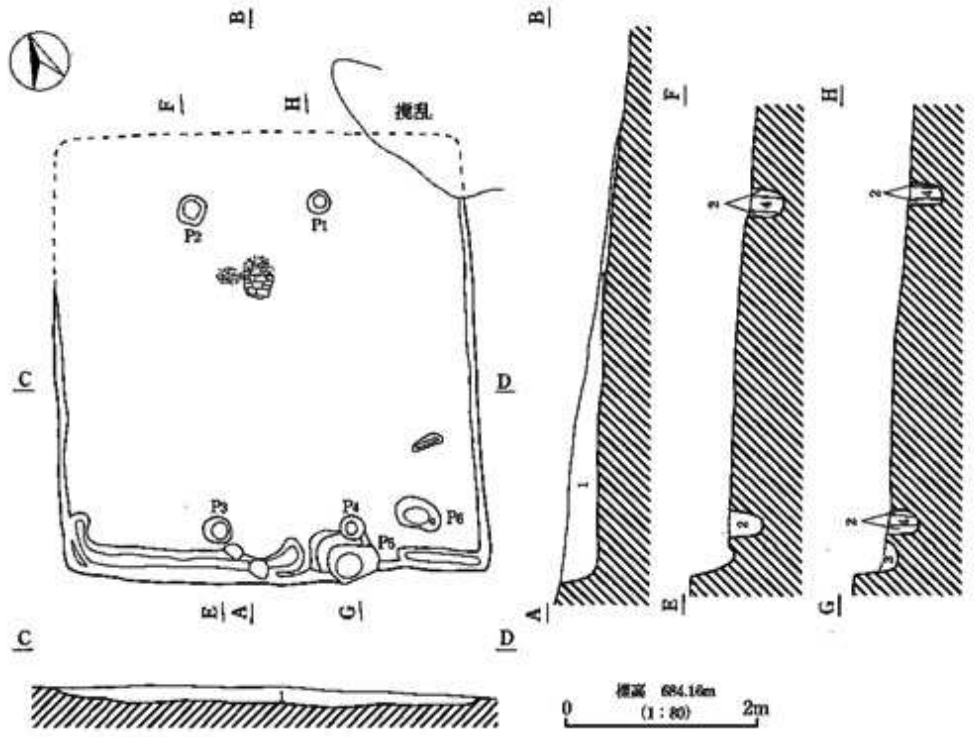
(7) IH39号住居址（第17・18図、写真図版七②）

本住居址は、調査区東側台地の先端部であるG－アー14・15、G－イ－14・15Grに位置する。残存状態は北側1/3が地形により削平されており、南側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。炉は住居址中央に焼土範囲が確認されたが、焼土は硬質化していなかった。規模は南壁4.36m・西壁2.93m(残存)4.32m(推定)・東壁3.84m(残存)4.40m(推定)で、壁高さは南壁中央で40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－15°－Eを示す。住居址の床面積は推定で17.9㎡、残存部で13.2㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であった。壁溝は南壁のみ確認された。壁溝規模は幅18～33cm・深さ6cm、断面形はU字形を呈する。ピットは6カ所が確認された。規模はP1が径23cm・深さ36cm、P2が径29cm・深さ42cm、P3が径26cm・深さ32cm、P4が径25cm・深さ36cm、P5が径51cm・深さ43cm、P6が径50cm・深さ19cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴と考えられ、柱痕も確認された。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

本址からの遺物は壺・甕類が出土した。図示した遺物の出土位置は3が東壁中央部よりの床直からと7の甕が住居址中央部の焼土範囲の上からである。その他の物は覆土中の出土である。石器類は磨きと敲打痕がある礫器が1点覆土中より出土している。

これらの遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。



1層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　炭化物少量。明黄褐色土(10YR6/6)粘土粒子、φ5㎜大、にぶい黄橙(10YR7/3)粒子を極少量含む。

2層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　明黄褐色土(10YR6/6)粒子を含む。

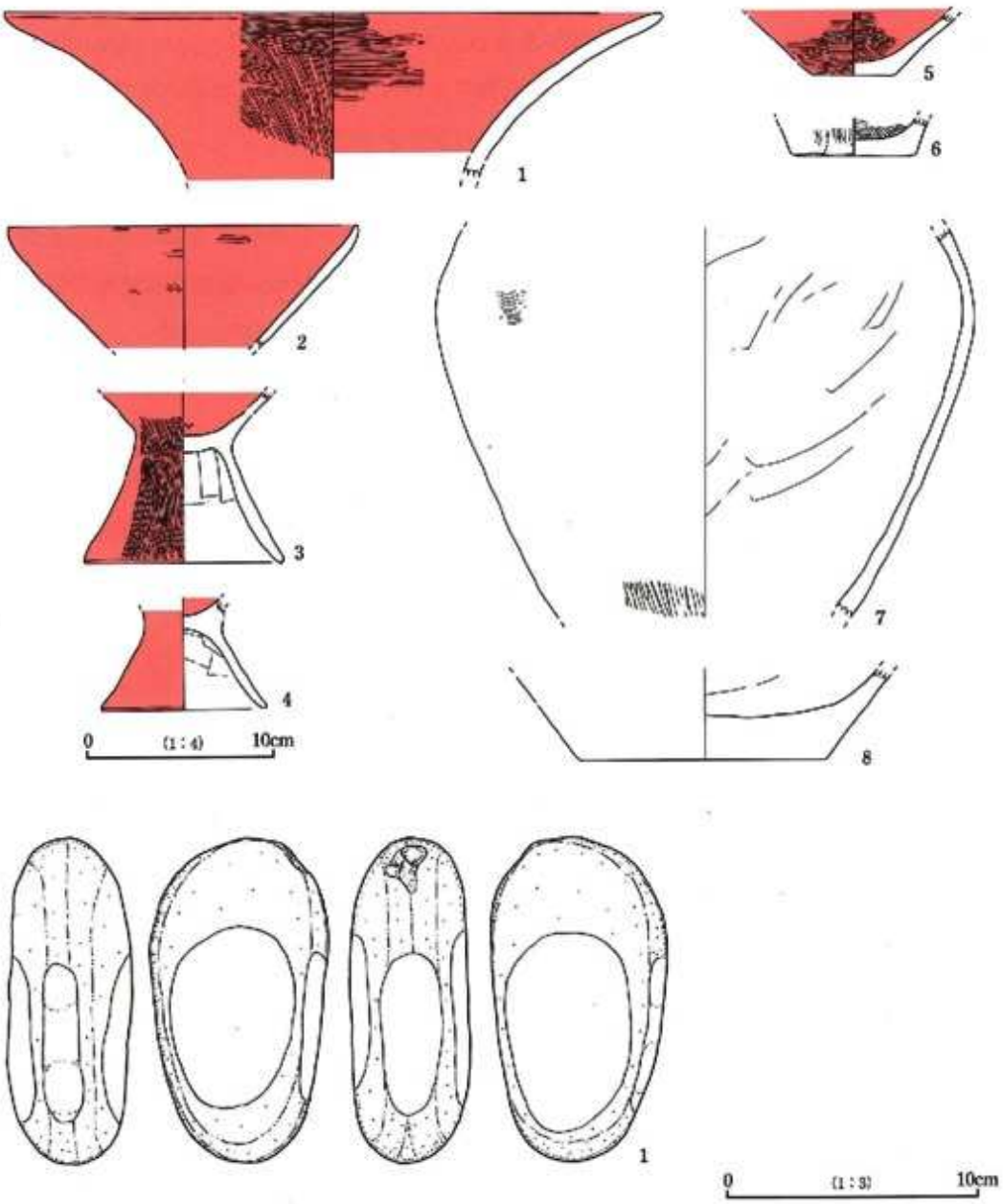
3層　灰黄褐色土（10YR4/2）　明黄褐色土（10YR6／6）粒子を含む。

4層　灰黄褐色土（10YR4/2）　柱痕。

第17図　ⅠH39号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺	35.6	〈8.8〉	——	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	7.5YR8/4　浅黄橙 径1－2㎜の赤色粒子を微量に含む
2	高坏	(18.8)	〈6.7〉	——	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩 ※3と同一個体の可能性	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
3	高坏	——	〈9.2〉	(10.8)	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　坏部ヘラミガキ後、赤彩・脚部ヨコナデ その後、脚部上部ヘラナデ	7.5YR7/6　橙 砂粒を多く含む
4	高坏	——	〈6.0〉	(9.0)	外面　ナデ後、赤彩　坏部は赤彩あり 内面　坏部ナデ後、脚部ヘラナデ	7.5YR7/4　にぶい橙 砂粒を含む
5	鉢	——	〈3.3〉	4.4	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩 ※底部に木葉痕あり	7.5YR7/6　橙 砂粒を含む
6	甕	——	〈2.1〉	6.7	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	2.5YR5/8　明赤褐 径1－2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
7	甕	——	〈20.9〉	——	外面　胴部ヘラミガキ・頸部に櫛描波状文を施す 内面　ヘラナデ	7.5YR7/4　にぶい橙 径1－2㎜の赤色粒子を少量含む
8	壺	——	〈4.8〉	13.3	外面　胴部摩耗著しく調整不明・底部ヘラミガキ 内面　ナデ	7.5YR7/4　にぶい橙 径1－2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む

第10表　ⅠH39号住居址出土遺物観察表①



第18図　ⅠH39号住居址出土遺物実測図

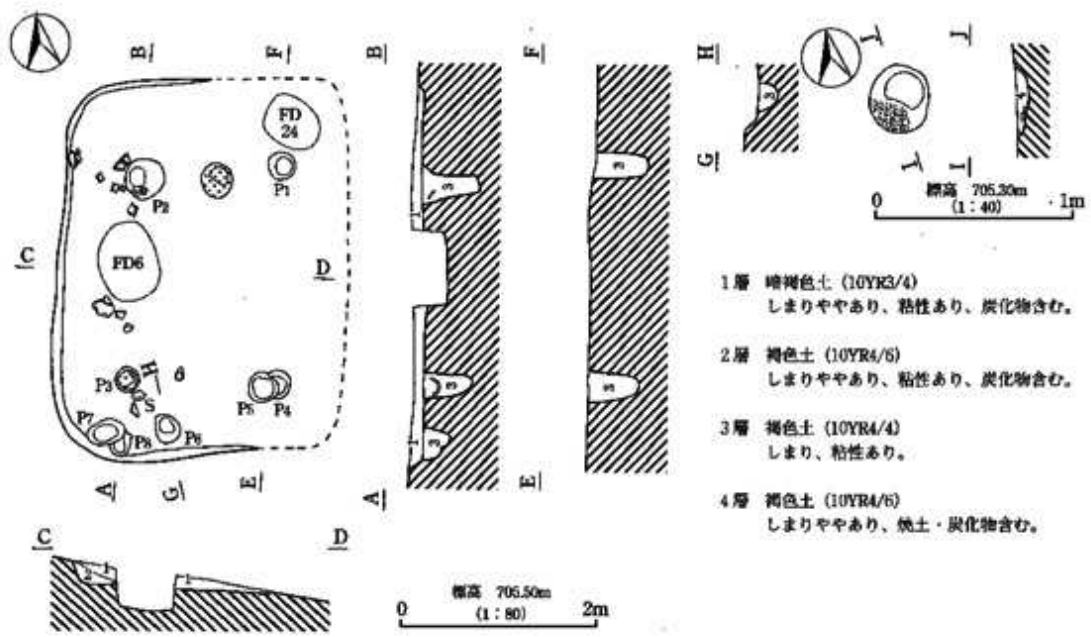
挿図番号	器種	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	磨石＋敲石	130.5	72.0	32.0	653.4		長楕円礫			安山岩	表裏にスリ面。裏面に敲打痕がある。

第11表　ⅠH39号住居址出土遺物観察表②

(8)ⅢH1号住居址（第19・20図、写真図版八）

本住居址は、調査区上段の台地中央部であるHースー20.Lーシー1.Lースー1Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。また、西壁際と北東コーナー部分には中世の土壙墓により削平を受けていた。

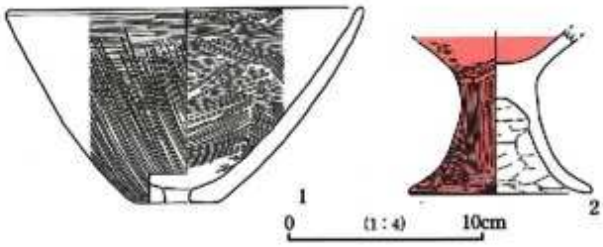
形態はほぼ方形を呈する。炉は住居址中央北よりに検出された。規模は北壁1.32m(残存)2.6m(推定)・南壁1.94m(残存)2.55m(推定)・西壁3.55mで、壁高さは西壁中央部で26.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN−20°−Eを示す。住居址の床面積は推定で10.7㎡、残存で7.1㎡を測る。覆土は2層で炭化物を含んでいた。床は住居址中央部が硬質であった。壁溝は確認されていない。ピットは8カ所が確認された。規模はP1が径27cm・深さ52cm、P2が径40cm・深さ59cm、P3が径27cm・深さ48cm、P4が径29cm・深さ20cm、P5が径32cm・深さ56cm、P6が径31cm・深さ23cm、P7が径38cm・深さ87cm、P8が径25cm・深さ25cmを測る。P1〜P4はその検出位置より主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。また、P6は検出場所より住居址の入り口



第19図　ⅢH1号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	18.4	10.0	4.2	外面　横位ヘラミガキ後、縦位ヘラミガキ 内面　ヘラナデ後、横位ヘラミガキ　焼成前の穿孔	7.5YR7/4　にぶい橙 径1〜2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
2	高坏	——	(8.4)	(9.4)	外面　坏部ヘラミガキ後、赤彩　脚部・脚柱部縦位のヘラミガキ後、赤彩裾部横位のヘラミガキ後、赤彩 内面　坏部ヘラミガキ後、赤彩　脚部ハケ状工具によるナデ	7.5YR7/6　橙 白色の砂粒を多く含む

第12表　ⅢH1号住居址出土遺物観察表



第20図　ⅢＨ１号住居址出土遺物実測図

施設に関連する穴と考えられる。

炉は北壁際、Ｐ１とＰ２間のほぼ中央部に検出された。炉掘り込み部分の規模は長軸35cm・幅32cm・焼土の厚み２cmを測る。焼土は硬質化しており使用頻度の高さを感じさせた。

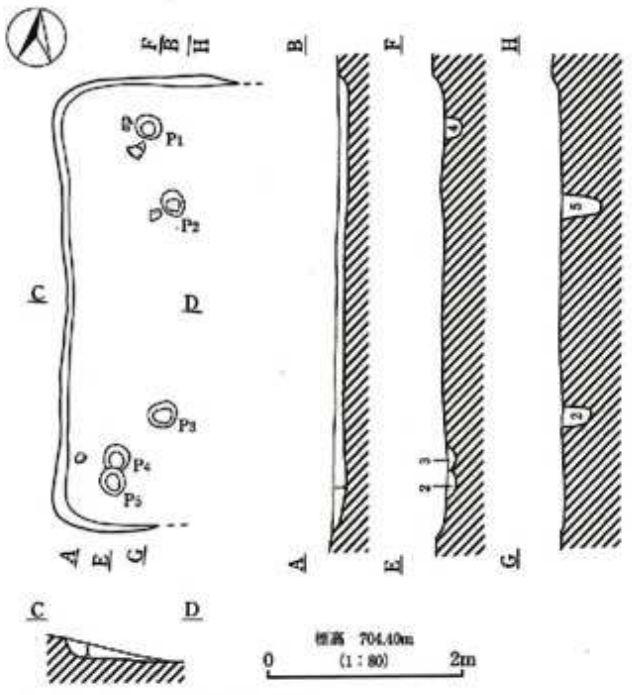
本址からの出土遺物は西壁際から多く出土したが壁際より流れ込んだ様な状態であった。図示した遺物の出土位置は１がＰ３の中に正位で置かれたような状態で出土した。２はＰ２内より出土した。１は甕で単孔である。孔は焼成前の穿孔である。2は小型の高坏で坏部を欠損する。脚外面と坏部内外面は赤彩が施されている。

これらの遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。

(9)ⅢＨ２号住居址（第21・22図、写真図版九①）

本住居址は、調査区上段台地の北よりであるＨ－ソ－18･19.Ｈ－タ－18･19Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されており、西側が「コ」の字状に残存していた。

形態はほぼ方形を呈する。炉は不明である。規模は北壁1.90ｍ(残存)･南壁1.06ｍ(残存)･西壁4.23ｍで、壁高さは北西コーナー付近で26cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。西壁を基にする



1層　暗褐色土（10YR3/4）
しまり、粘性あり、炭化物・遺物含む。

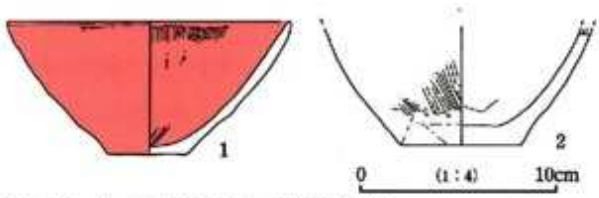
2層　褐色土（10YR4/6）
粘性ややあり、粒子細かい。

3層　褐色土（10YR4/4）
粘性ややあり、２層より強い。粒子細かい。

4層　褐色土（10YR3/4）
しまり、粘性ややあり、粒子細かい。

5層　褐色土（10YR3/4）
しまり、粘性ややあり、粒子細かい。
赤色粒子含む。

第21図　ⅢＨ２号住居址実測図



第22図　ⅢＨ２号住居址出土遺物実測図

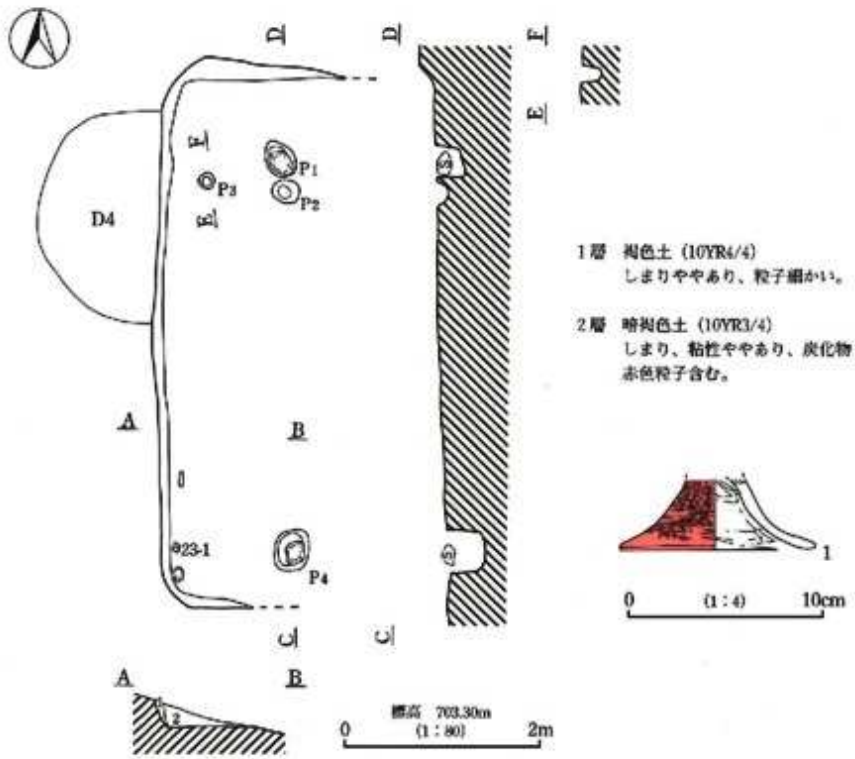
と主軸方位はＮ−8°−Ｗを示す。住居址の床面積は残存で5.2㎡を測る。覆土は1層で　炭化物を含む。床はやや硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは5カ所が確認された。規模はＰ1が径26cm・深さ18cm、P2が径25cm・深さ36cm、P3が径31cm・深さ28cm、P4が径28cm・深さ14cm、P5が径29cm・深さ15cmを測る。P2とP3が西側の主柱穴と考えられる。住居址掘り方はほぼ均一であった。

本址の出土遺物は西壁際より多く出土した。図示した遺物の出土位置はいずれもＰ1脇からの出土である。これらの遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	鉢	14.7	5.9	4.1	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	5YR6/6　橙 砂粒を含み、ざらざらしている。
2	甕	−−	〈6.1〉	6.2	外面　ナデ後、ヘラミガキ 内面　ヘラナデ	7.5YR7/8　橙 径1〜2㎜の砂粒を多く含む

第13表　ⅢＨ２号住居址出土遺物観察表

(10)ⅢＨ３号住居址（第23図、写真図版九②）



第23図　ⅢＨ３号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査区上段の台地中央部であるH－ソー20.Lーソー1Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。ⅢD4号土坑と重複するが本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁1.76m(残存)・南壁0.77m(残存)・西壁5.40mで、壁高さは北西コーナー部分で36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－1°－Wを示す。住居址の床面積は残存で5.9㎡を測る。覆土は2層で炭化物を含んでいた。床はやや軟質であった。壁溝は確認されていない。ピットは4カ所が確認された。規模はP1が径41cm・深さ34cm、P2が径30cm・深さ12cm、P3が径14cm・深さ24cm、P4が径40cm・深さ40cmを測る。P1とP4はその検出位置より主柱穴と考えられ、ピット中には根石のような礫が検出された。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

本址からの出土遺物は北西コーナー部分から僅かに土器片が出土したのみで、図示した高坏脚も北西コーナー部からの出土である。これらの遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。

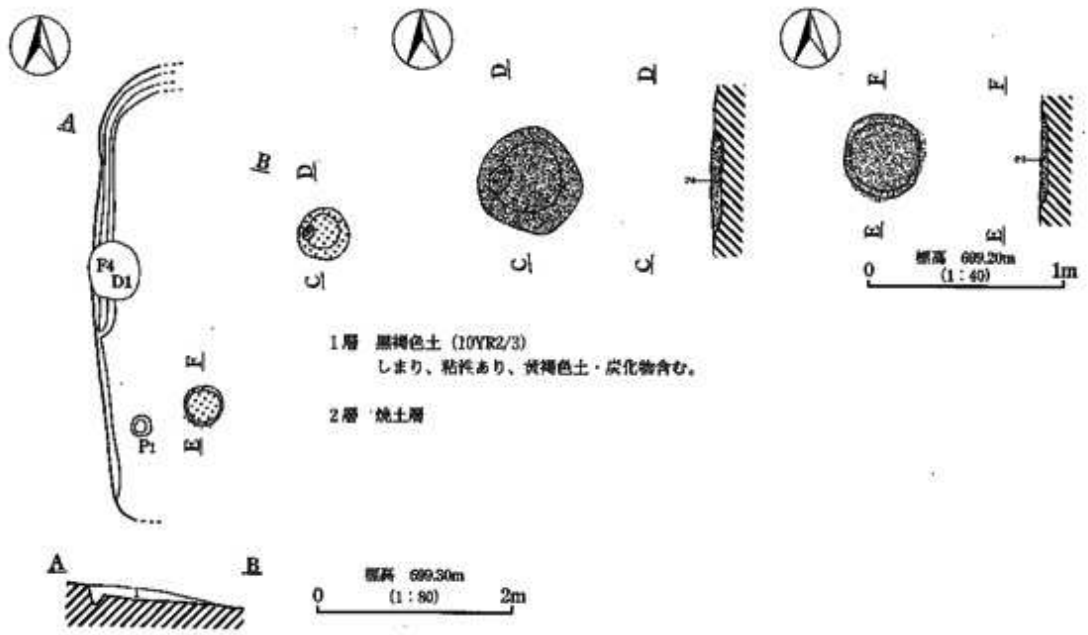
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	高坏	――	〈3.6〉	(10.2)	外面　横位のヘラミガキ後、赤彩 内面　ヘラナデ	7.5YR7/6　橙 白色の砂粒を多く含む

第14表　ⅢH3号住居址出土遺物観察表

(11)ⅢH18号住居址（第24図）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるLーツー13・14Grに位置する。残存状態は西壁のみが一部残存するのみで非常に不明瞭である。西壁中央にⅢF4号掘立柱建物址のP1が重複し、形態は不明である。規模は北壁0.52m(残存)・南壁0.12m(残存)・西壁4.36mで、壁高さは西壁中央で9.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基にするとNであり、住居址の床面積は残存で4.8㎡を測る。覆土は単層で、床はやや硬質である。壁溝は西壁の北よりに検出され、規模は幅14～25cm・深さ18.5cmを測る。ピットは1カ所のみ確認され、規模はP1が径22cm・深さ19cmを測る。炉は2カ所確認された。住居址のほぼ中央部と考えられる部分と南西コーナーよりである。規模は中央部のものが径54cm・焼土の厚さ5cm、北西コーナー部のものが径45cm・焼土の厚さ3cmを測る。形態はいずれも円形を呈する。

本址からの出土遺物は図示できる土器はなく、ほとんどが覆土からの出土でいずれも弥生壺・甕の小片であった。よって本址の帰属時期は不確実な部分も多いがおおよそ弥生後期後半に位置づけられると考えられる。



第24図　ⅢH18号住居址実測図

⑿ⅢH25号住居址（第25図、写真図版十）

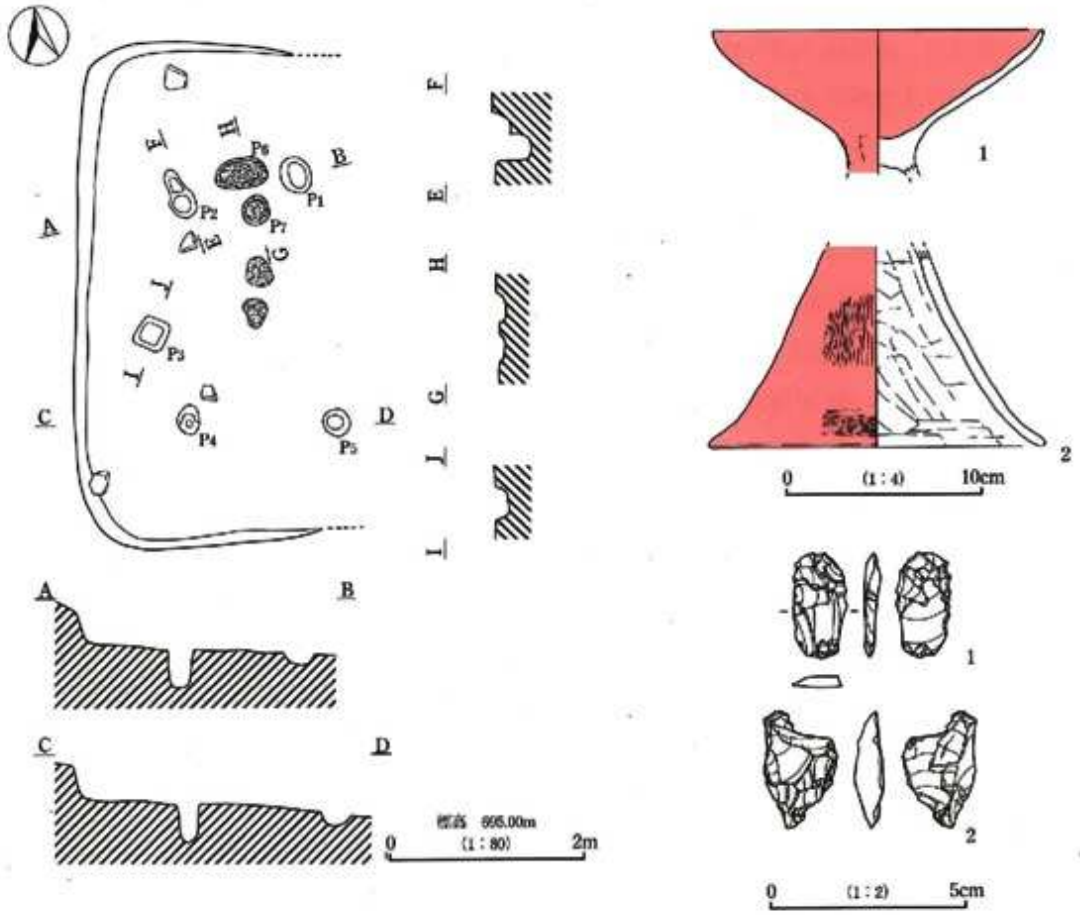
本住居址は、調査区上段の台地中央部であるM－ウ－1・2.M－エ－1・2Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は北壁よりピット間に検出された。規模は北壁2.10m(残存)・南壁2.14m(残存)・西壁4.90mで、壁高さは北西コーナー部分で41cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－7°－Eを示す。住居址の床面積は残存で11.6㎡を測る。床はやや軟質であった。壁溝は確認されていない。ピットは7カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ15cm、P2が径52cm・深さ40cm、P3が径33cm・深さ16cm、P4が径30cm・深さ41cm、P5が径28cm・深さ29cm、P6が径55cm・深さ8cm、P7が径30cm・深さ4cmを測る。P1・P2・P4・P5はその検出位置より主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

炉は掘り込みを持つ焼土範囲が2カ所と床面に焼土が広がるのみの場所が2カ所検出された。この内炉と考えられる場所はP1とP2間の2カ所と考えられる。P7とした炉は形態が円形、P6とした炉は楕円形であり、いずれも焼土が硬質化していた。

本址からの出土遺物は少量で、図示した遺物の出土位置は1が南壁際中央の床直から、2がP6内とその周辺より出土した。石器2点は覆土中からの出土である。

これらの遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。



第25図　ⅢH25号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
1	高坏	(17.0)	〈7.4〉	——	外面　口縁部ヨコナデ・脚柱部ナデ その他は磨耗著しく調整不明、赤彩 内面　ヘラミガキ後、赤彩	7.5YR6/3　にぶい橙 白色の砂粒を多く含む
2	高坏	——	〈10.2〉	(17.4)	外面　ヘラミガキ後、赤彩 内面　ナデ	7.5YR7/6　橙 砂粒を多く含む

挿図番号	器種	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	二次加工剥片	27.5	14.0	4.5	1.5		縦長	両面	平坦	黒曜石(赤)	周縁部に二次加工を施す。
2	剥片	30.0	19.5	8.0	3.3		縦長			チャート	

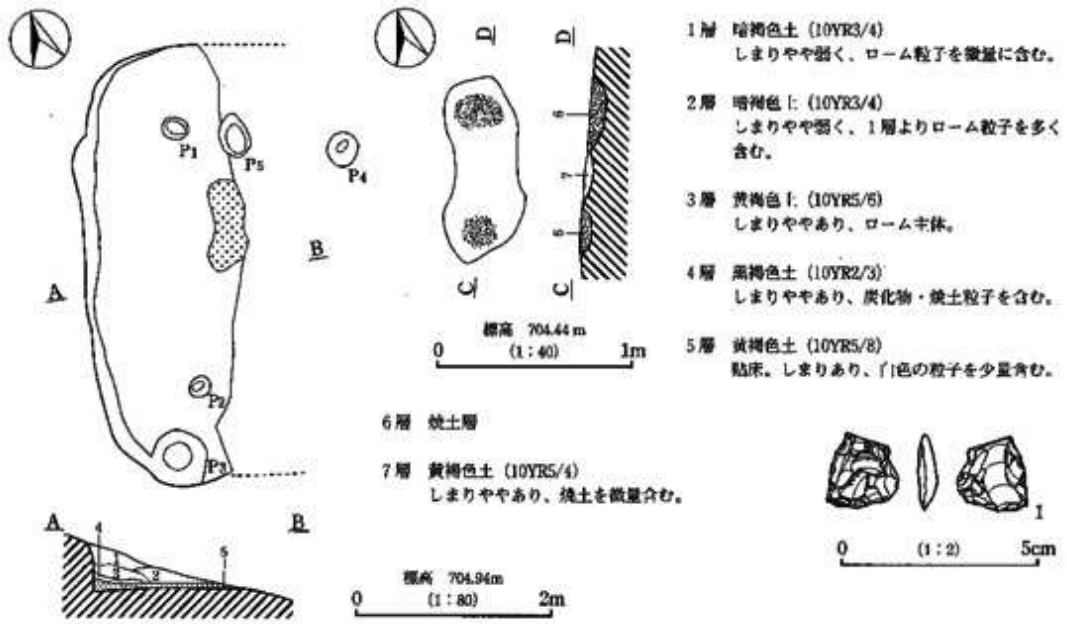
第15表　ⅢH25号住居址出土遺物観察表

(13)ⅢH29号住居址（第26図、写真図版十一①）

本住居址は、調査区上段台地の東側斜面であるL－ス－4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。炉は住居址中央部やや北よりに検出された。住居址規模は北壁0.94m（残存）・南壁1.20m（残存）・西壁3.92mで、壁高さは西壁中央で42cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－16°－Eを示す。住居址の床面積は残存で5.7㎡を測る。覆土は4層に分れる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に10cmの厚さで貼られていた。壁溝は確認されなかった。ピットは5カ所確認され、規模はP1が径28cm・深さ27cm、P2が径22cm・深さ32cm、P3が径56cm・深さ24cm、P4が径35cm・深さ38cm、P5が径44cm・深さ13cmを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。炉は住居址中央にあり、形態は歪な楕円形である。規模は長軸92cm・幅40cmで、焼土の厚みは5～8cmであった。

本址からの出土遺物はごく僅かで覆土中から弥生土器片が少量出土し、図示した石器1点も住居址北側の覆土中から出土した。これらの事から本址の帰属時期は不確実ではあるが、おおよそ弥生後期後半に位置づけられると考える。



第26図　ⅢH29号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
1	小形両面加工	19.0	18.5	5.0	1.5			両面	平坦	黒曜石	

第16表　ⅢH29号住居址出土遺物観察表

⑭ⅢH42号住居址（第27図、写真図版十一②）

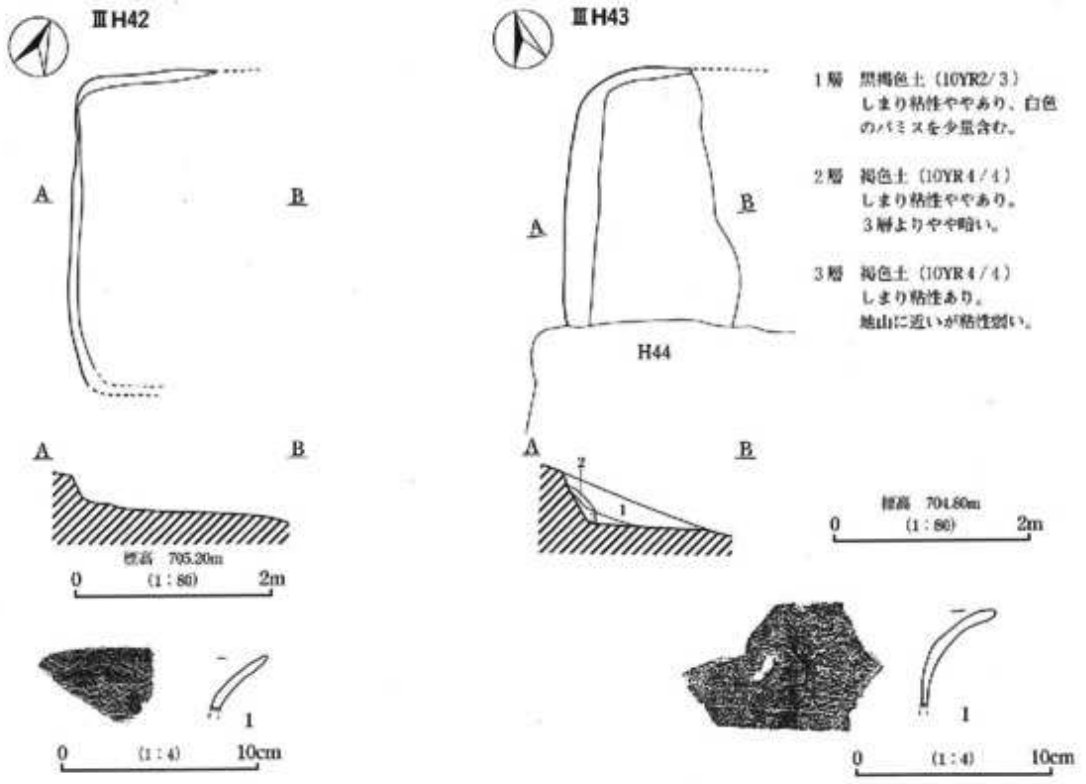
本住居址は、調査区上段の台地北側であるH－ス－18･19Grに位置する。残存状態は東側半分が地形と1号方形周溝墓により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁1.45m（残存）・西壁3.06mで、壁高さは西壁で25cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－28°－Wを示す。住居址の床面積は残存で3.0㎡を測る。床は全体的に硬質であるが、地山を踏み固めたような床であった。壁溝･ピットは確認されなかった。

出土遺物は図示した甕の1点のみで覆土中の出土である。1の甕は残存器高2.8cm、文様は頸部に櫛描簾状文を施した後口縁部に11本単位の櫛描波状文を施す。色調は7.5YR6/6の橙色で胎土は白色の砂粒を多く含む。これらのことから本址は住居址として捉えて良いものかどうか苦慮する部分もあるが、弥生後期の住居址として今回は報告する。

⑮ⅢH43号住居址（第27図、写真図版十二①）

本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－シ－9･10.L－ス－9･10Grに位置する。残存状況は東側が自然地形によってまた南側はⅢH44号住居址により削平されている。

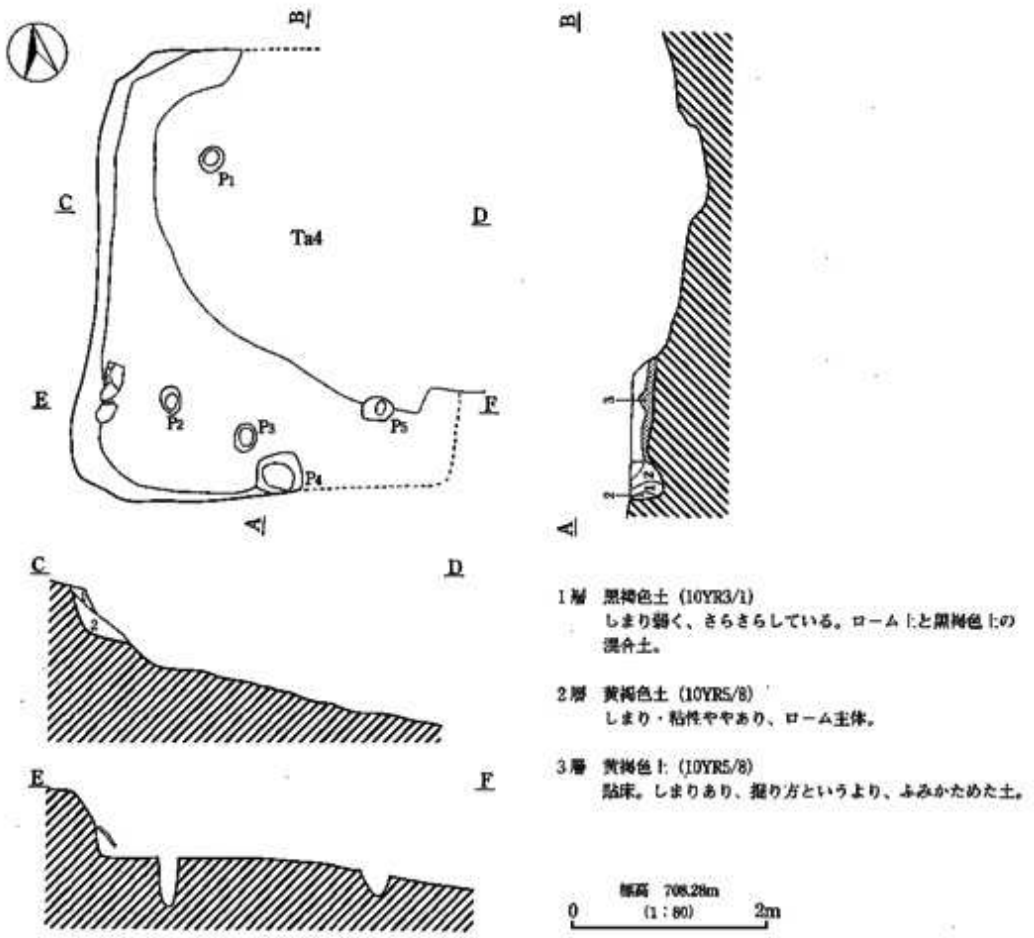


第27図　ⅢH42・43号住居址及び出土遺物実測図

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁0.96ｍ(残存)・西壁2.53ｍ(残存)で、壁高さは西壁側で52.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で3.1㎡を測る。覆土は３層に分かれる。床は全体的に硬質であった。壁溝・ピットは確認されなかった。住居址掘り方は均一であった。

本址の出土遺物は非常に少なく、土器片が少量出土したのみである。図示した甕は覆土中からの出土で残存器高4.9cm、文様は頸部に13本単位の櫛描簾状文を施した後、口縁部に櫛描波状文を施す。色調は7.5YR8/6浅黄橙色である。胎土は白色の砂粒を含む。これらのことから本址もⅢH42号住居址と同じく住居址として捉えて良いものかどうか苦慮する部分もあるが、弥生後期の住居址として今回は報告する。

⑯ⅢH45号住居址（第28・29図、写真図版十二②、十三②）



第28図　ⅢH45号住居址実測図

本住居址は、調査区上段台地の中央部であるL－コ－4・5Grに位置する。残存状態は北東側から東半分にかけてⅢTa4号竪穴状遺構によって削平され、西側部分のみしか残存しない。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁1.20m(推定)・南壁2.35m(残存)3.75m(推定)・西壁4.17mで、壁高さは南西コーナーよりで66cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－9°－Eを示す。住居址の床面積は残存で6.5㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼床は9cmの厚さで貼られていた。壁溝は検出されなかった。ピットは5カ所検出された。規模はP1が径27cm・深さ37cm、P2が径30cm・深さ51cm、P3が径30cm・深さ30cm、P4が径46cm・深さ36cmP5が径33cm・深さ28cmを測る。検出位置よりP1とP2・P5が主柱穴であり、P4は入り口施設のピットと考えられる。

出土遺物は西壁際より赤彩された壺片などが出土した。図示した遺物の出土位置は1が中世の竪穴状遺構からの覆土、2がP3脇、3がP4内より出土した。これらの出土遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられる。

第29図　ⅢH45号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	(17.7)	〈5.4〉	——	外面　口縁部に櫛描波状文(9本単位・左回り)を施した後、単位不明の櫛描簾状文(2連止め・左回り)を施文 内面　横位の丁寧なヘラミガキ	7.5YR8/6　浅黄橙 白色の砂粒を含む
2	甕	——	〈7.1〉	——	外面　口縁部と胴部に櫛描波状文を施した後、胴部に5本単位3段の櫛描簾状文を施す 内面　横位の丁寧なヘラミガキ ※1と同一個体の可能性	7.5YR8/6　浅黄橙 白色の砂粒を含む
3	鉢	(11.0)	〈2.9〉	——	外面　横位のヘラミガキ後、赤彩 内面　横位のヘラミガキ後、赤彩	2.5YR5/8明赤褐 径2－3㎜の白色の砂粒を含む

第17表　ⅢH45号住居址出土遺物観察表

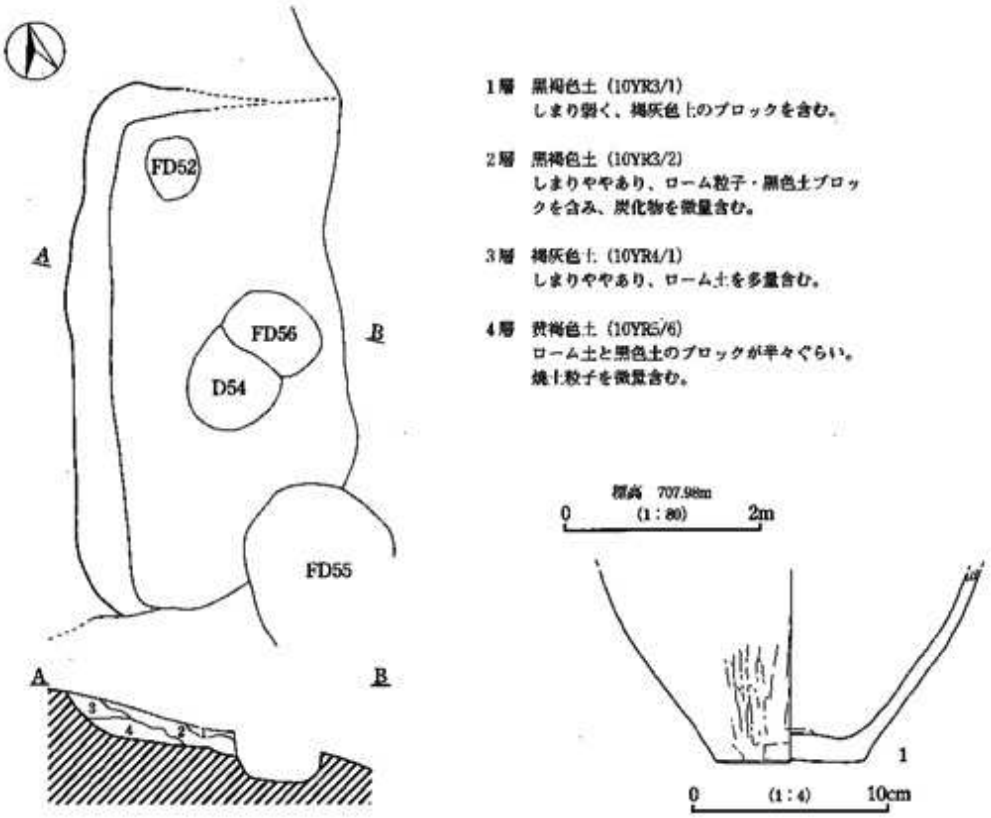
(17)ⅢH46号住居址（第30図、写真図版十三①）

本住居址は、調査区上段台地のほぼ中央であるL－サ－3・4Grに位置する。残存状態は東側半分が自然の地形によって削平され、住居址西側が「コ」の字状に残るのみである。また、住居址中央部にはⅢD54号土坑とⅢFD56号中世墳墓により攪乱を受けていた。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁1.04m(残存)・南壁0.35m(残存)・西壁5.35m(残存)で、壁高さは南西コーナーよりで55cmを測る。壁は緩やかに立ち上

がる。主軸方位はN－10°－Eを示す。住居址の床面積は残存で10.5㎡を測る。床は全体的に軟質である。壁溝・ピットは確認されなかった。

本址からの遺物は中央部よりまとまって土器破片が出土した。図示した甕底部は中央部の床面より破砕した状態で出土した。本址の帰属時期は遺物も少量の出土で不確実であるが弥生後期後半と考えたい。



第30図　ⅢH46号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	――	(9.8)	7.6	外面 縦位のヘラミガキ 内面 ナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む

第18表　ⅢH46号住居址出土遺物観察表

⑱ⅢH47号住居址（第31～33図、写真図版十四、十五）

本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－コ－6・7、L－サ－6・7 Grに位置する。残存状態は東側1/3が調査区外となる他は良好であった。

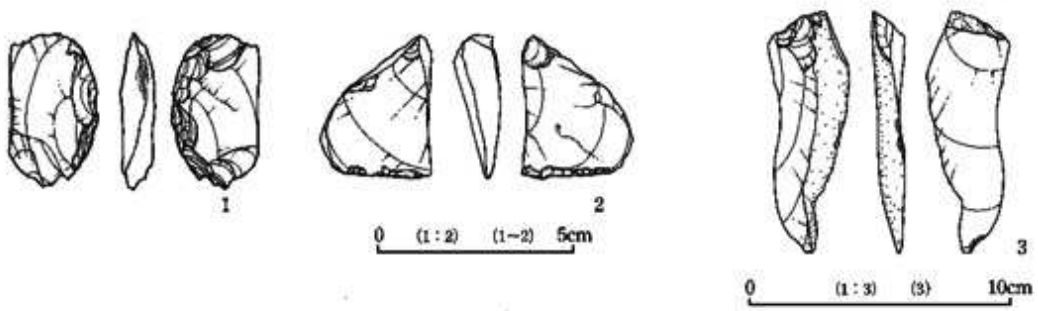
形態は隅丸方形を呈する。炉は住居址中央北よりに検出された。規模は北壁3.00ｍ(残存)・南壁1.50ｍ(残存)・西壁4.42ｍで、壁高さはＰ3脇で60㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－20°－Eを示す。住居址の床面積は検出部分で12.7㎡を測る。床は全体的に硬質であるが、特に炉周辺は非常に硬化していた。貼床の厚みは10㎝を測る。壁溝は確認されなかった。

ピットは床面で11カ所、掘り方時に２カ所の計13カ所が検出された。規模はＰ1が径31㎝・深さ10.5㎝、Ｐ2が径28㎝・深さ21㎝、Ｐ3が径59㎝・深さ39㎝、Ｐ4が径22㎝・深さ30㎝、Ｐ5が径28㎝・深さ26㎝、Ｐ6が径31㎝・深さ10㎝、Ｐ7が径30㎝・深さ５㎝、Ｐ8が径17㎝・深さ8.5㎝、Ｐ9が径26㎝・深さ49㎝、P10が径63㎝・深さ38㎝、P11が径30㎝・深さ36㎝、P12が径25㎝・深さ31㎝、Ｐ13が径98㎝・深さ39㎝を測る。Ｐ4とP10は検出位置より主柱穴と考えられる。

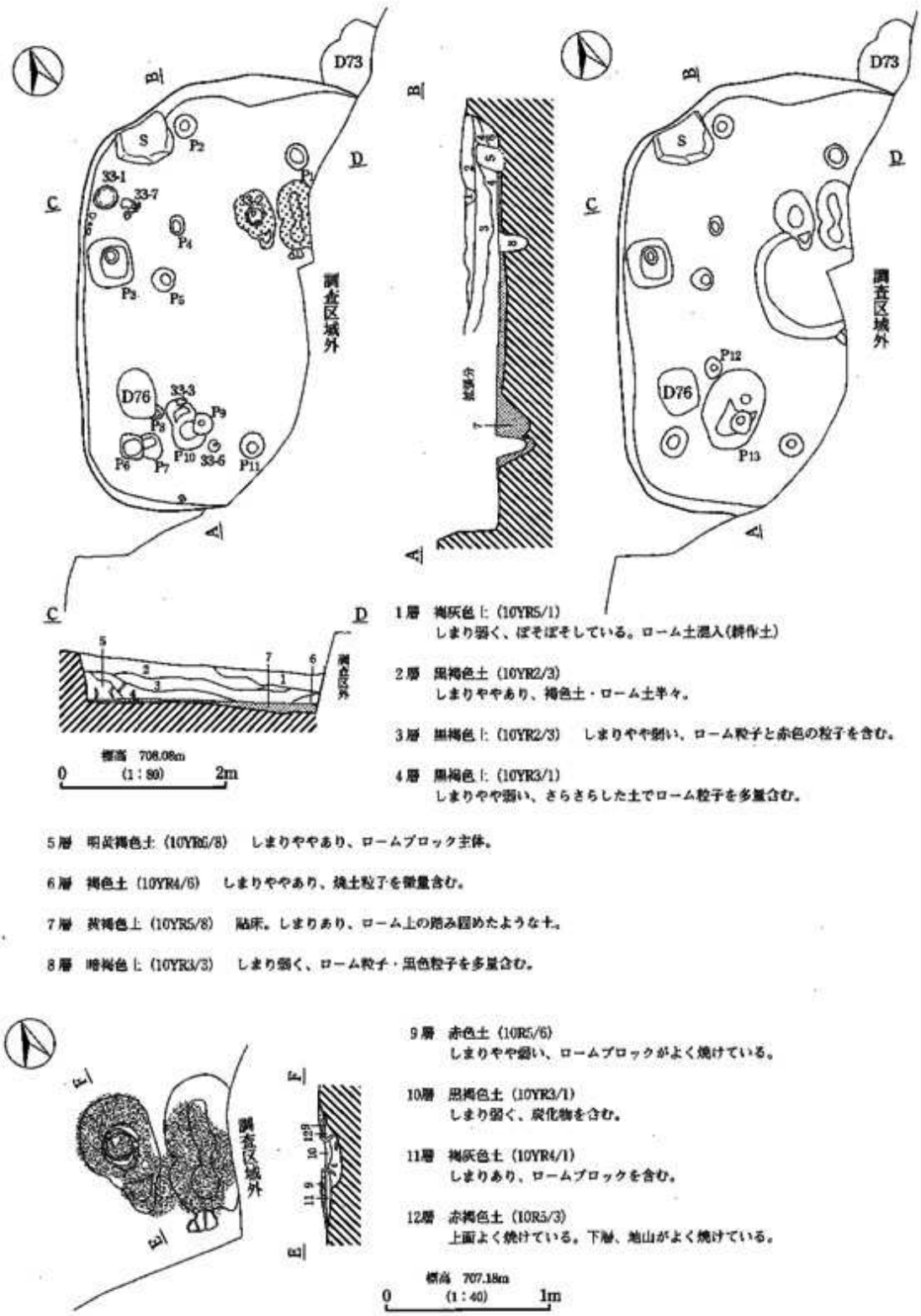
炉は住居址中央部北よりに検出された。楕円形の炉が２基並ぶような状態で確認され、西側の炉については火床部に甕口縁部を台として設置してあった。規模は西側の炉が長軸75㎝・幅45㎝・掘り方深さ6.5～12㎝で焼土の厚さは３㎝を測る。東側の炉は長軸85㎝・幅40㎝(検出)・掘り方深さ3.5～14㎝を測る。また本址からは住居址北西コーナー部に長さ70㎝・床面からの高さ30㎝の大型礫が検出された(写真図版参照)。この礫は観察の結果、地山に元々あった石のようであるが上面はほぼ平らで住居址内での使用が推測できた。

本址よりの出土遺物は炉体として使用されていた甕や、北西コーナー部の礫の片側に置かれた甕の上部などがあり、本遺跡の弥生時代の住居址の中では豊富な出土量であった。図示した遺物の出土位置は１が北西コーナー部の礫脇、２が西側炉の埋設甕、３がP10脇、４と５が覆土中、６がP11脇、７が１の脇である。石器及び使用剥片３点は覆土中の出土である。

これらの出土遺物より本址は弥生後期後半に位置づけられる。



第31図　ⅢH47号住居址出土遺物実測図①



1層 褐灰色土 (10YR5/1)
しまり弱く、ぼそぼそしている。ローム土混入(耕作土)

2層 黒褐色土 (10YR2/3)
しまりややあり、褐色土・ローム土半々。

3層 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱い、ローム粒子と赤色の粒子を含む。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまりやや弱い、さらさらした土でローム粒子を多量含む。

5層 明黄褐色土 (10YR6/8) しまりややあり、ロームブロック主体。

6層 褐色土 (10YR4/6) しまりややあり、焼土粒子を微量含む。

7層 黄褐色土 (10YR5/8) 貼床。しまりあり、ローム土の踏み固めたような土。

8層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱く、ローム粒子・黒色粒子を多量含む。

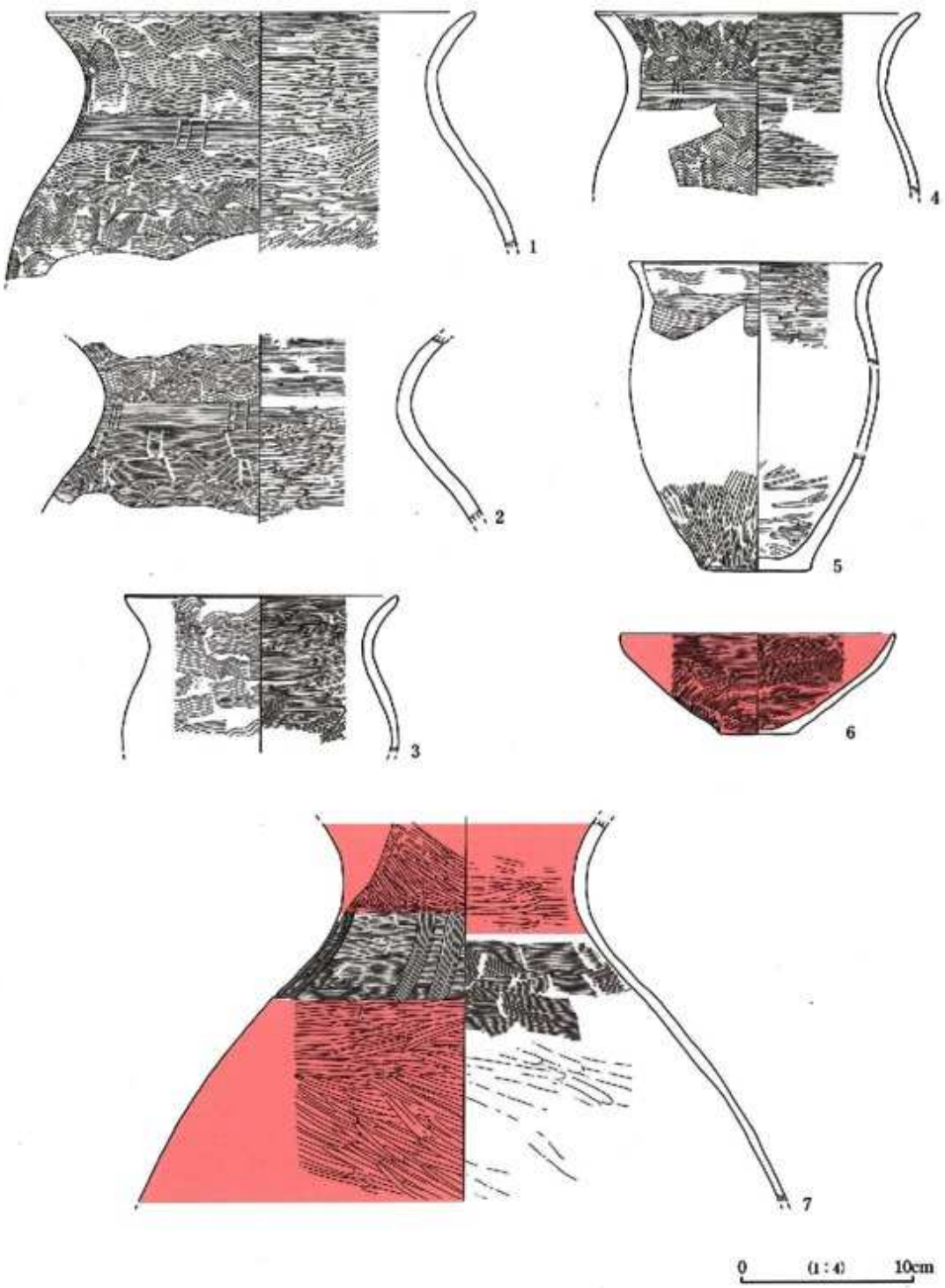
9層 赤色土 (10R5/6)
しまりやや弱い、ロームブロックがよく焼けている。

10層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまり弱く、炭化物を含む。

11層 褐灰色土 (10YR4/1)
しまりあり、ロームブロックを含む。

12層 赤褐色土 (10R5/3)
上面よく焼けている。下層、地山がよく焼けている。

第32図 ⅢH47号住居址実測図



第33図　ⅢH47号住居址出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	25.2	15.6	——	外面 口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部に11本一組の櫛描波状文、頸部に11本一組の等間隔の櫛描垂状文（3連止め・左回り）を6ヶ所施す 内面 ヘラミガキ	7.5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子微量と白色の砂粒を含む
2	甕	——	〈11.1〉	——	外面 口縁部に11本一組の櫛描波状文、頸部に11本一組の等間隔の櫛描垂状文（3連止め・左回り）を6ヶ所、胴部に11本一組の櫛描波状文を施す 内面 横位ヘラミガキ ※口縁部は二次焼成、剥れ口磨耗二次利用	7.5YR7/6 橙 白色の砂粒を多く含む
3	甕	(16.0)	〈9.2〉	——	外面 4～8本一組の櫛描波状文 内面 ヘラミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐 白色の砂粒を含む
4	甕	(19.0)	〈10.7〉	——	外面 口縁部ヨコナデ 口縁部と胴部に10本一組の櫛横波状文を施した後、頸部に6本一組の櫛横波状文（3連止め・左回り）を2帯施す 内面 横位ヘラミガキ	7.5YR7/6 橙 白色の砂粒を含む
5	甕	(14.8)	18.0	6.5	外面 口縁部ヨコナデ・胴部下半～底部ヘラケズリ後、ヘラミガキ 口縁部・胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描横走平行線文を施す（単位不明） 内面 横位ヘラミガキ	7.5YR4/1 褐灰 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
6	鉢	16.1	6.0	4.4	外面 横位のヘラミガキ後、赤彩 内面 横位のヘラミガキ後、赤彩	2.5YR6/6 橙 白色の砂粒を含む
7	壺	——	〈22.3〉	——	外面 ハケメの残るナデ後、ヘラミガキ その後、赤彩 頸部に8本一組の櫛描横走平行線文を7帯施した後、9本一組の櫛描垂下文を2帯一組としてほぼ等間隔に5ヶ所施す 内面 口縁部横位のヘラミガキ後、赤彩 胴部上位ハケメの残るナデ、中位ナデ	7.5YR7/6 橙(内面) 白色の砂粒を多く含む

挿図番号	器種	法量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	打製石斧？	39.0	23.0	9.0	7.4					ホルンフェルス	打製石斧の破片と思われる。一部摩耗がある。
2	二次加工剥片	37.0	29.0	12.0	9.8		横長	両面	平坦	ホルンフェルス	右側欠損。
3	使用痕剥片	92.3	31.5	13.5	25.7		縦長			砂岩？	末端部に抉りが入り、わずかに摩耗しているようである。

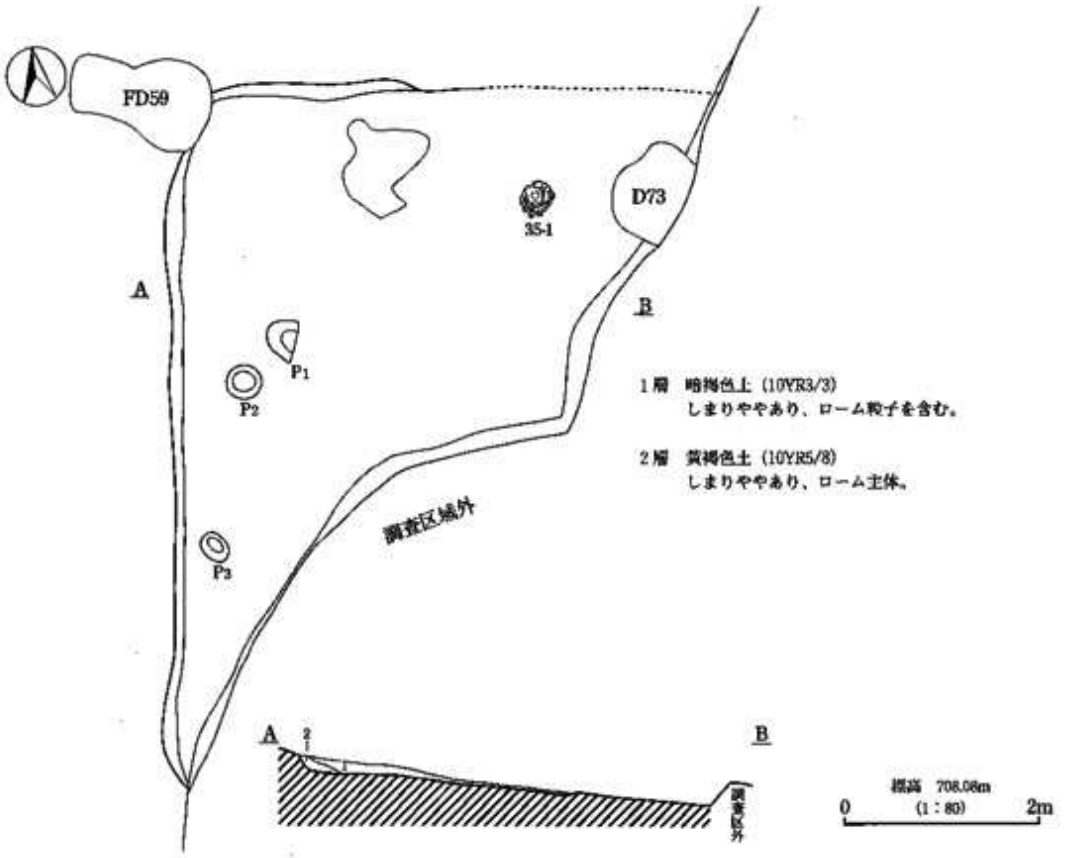
第19表 ⅢH47号住居址出土遺物観察表

⑲ⅢH48号住居址（第34・35図、写真図版十六）

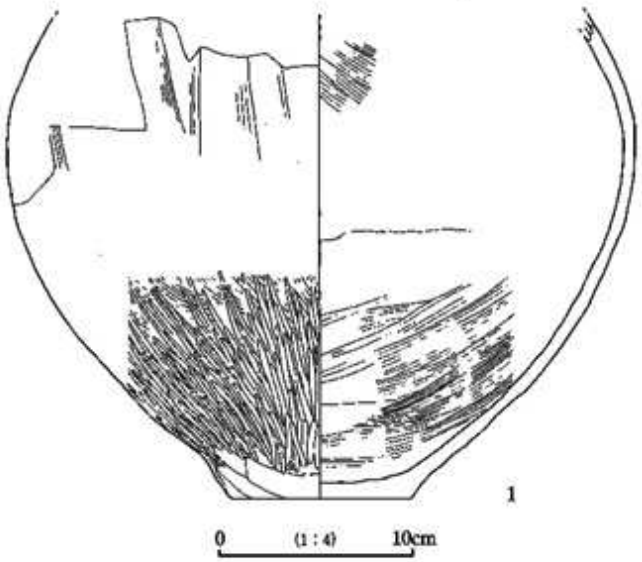
本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－コ－5・6・7、L－サ－5・6Grに位置する。残存状態は東側1/3が調査区外となり、また、ⅢH47号住居址と重複関係にあったが、掘り下げにおいて新旧関係を誤り古い住居址であるⅢH47号住居址を先に調査してしまった。

形態は方形を呈する。炉は不明である。規模は北壁2.86m（残存）・西壁7.12mで、壁高さは北西コーナーよりで21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準にするとN－11°－Eを示す。覆土は2層に分かれる。住居址の床面積は検出部分で19.0㎡を測る。床は北壁際の一部に硬質面が確認された。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で3カ所が検出された。規模はP1が径43cm・深さ14cm、P2が径36cm・深さ29cm、P3が径33cm・深さ15cmを測る。

本址の出土遺物は覆土より土器片が少量と図示した壺1点があるのみである。1は壺胴部下半部であり、北壁際より出土した出土状態は底部が床面に埋め込まれたような状態であり炉埋設土器的な様相を示していた。法量は残存の器高24.8cm・底径9.6cmを測り、成形・文様は外面がハケメの後ヘラミガキを施している。胴部上半に細かなハケメがあるが文様構成をなすのかは器面が荒れていて不明である。内面はハケメを施す。色調は7.5YR6/6橙色で胎土は砂粒を多く含む。



第34図　ⅢH48号住居址実測図



第35図　ⅢH48号住居址出土遺物実測図

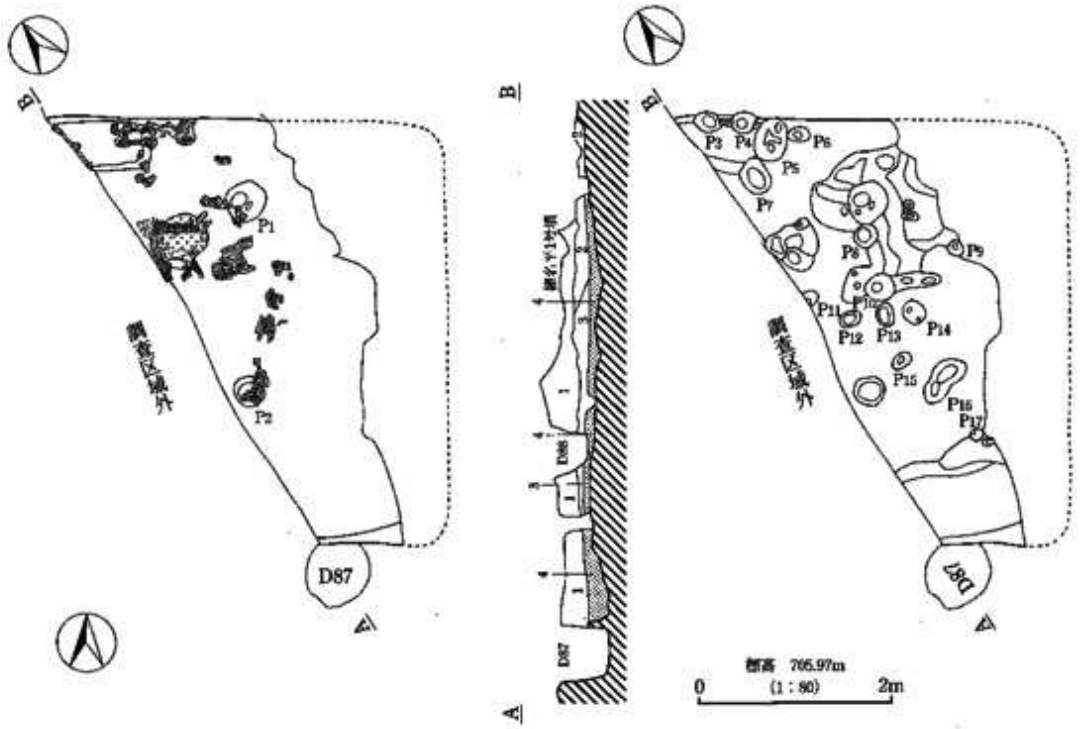
本址からの出土遺物は少なく帰属時期については不確実な部分もあるが概ね弥生後期末に位置づけられると考える。

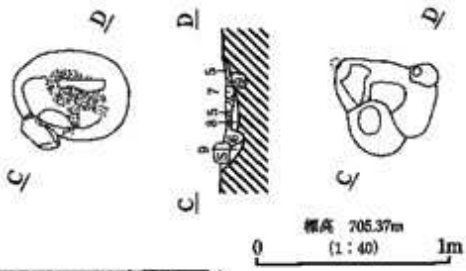
(20)ⅢH49号住居址（第36図、写真図版十七）

本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－シー7・8、L－スー7・8Grに位置する。残存状態は西側1/3が調査区外となり、東側が自然地形の傾斜によって、また上部が榛名平1号墳によって削平されていた。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は住居址中央北よりに検出された。規模は北壁2.32m（残存）・南壁0.86m（残存）で、壁高さは北西コーナーよりで7cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－34°－Eを示す。覆土は3層に分かれ、炭化物を多く含む。住居址の床面積は掘り方範囲で7.1㎡を測る。床は炉周辺が硬質化していた。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で2カ所、掘り方時に15カ所の計17カ所が検出された。規模はP1が径40cm・深さ12cm、P2が径30cm・深さ15cm、P3が径26cm・深さ8cm、P4が径24cm・深さ8cm、P5が径43cm・深さ14cm、P6が径23cm・深さ6cm、P7が径35cm・深さ13cm、P8が径24cm・深さ50cm、P9が径17cm・深さ15cm、P10が径30cm・深さ24cm、P11が径15cm・深さ4.5cm、P12が径20cm・深さ3.5cm、P13が径23cm、P14が径23cm・深さ5.5cm、P15が径22cm・深さ8.5cm、P16が径53cm・深さ10cm、P17が径12cm・深さ9cmを測る。検出位置よりP1とP2が主柱穴と考えられる。炉は長軸60cm・幅45cmで焼土の厚みは6cmを測る。炉南側には枕石と考えられる礫も検出された。

本址の出土遺物は覆土より土器片が少量と図示した小型甕1点があった。また、本址は床面に多量の炭化材が検出され焼失家屋の可能性がある。これらの事より本址は弥生後期末に位置づけられると考える。





1層 褐色土 (10YR4/6)
しまり粘性あり。やや細色の粒子を含む。

2層 暗褐色土 (10YR3/3)
しまりなし、ローム粒子多量、炭化物少量含む。

3層 暗褐色土 (10YR3/4)
しまりややあり、炭化材を多量、ローム粒子・褐色土ブロックを含む。

4層 褐色土 (10YR4/6) 貼床。しまりあり、ローム粒子多量、褐色土ブロックを含む。

5層 赤褐色土 (2.5YR4/8) 焼土。

6層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土ブロック・炭化物・ローム含む。

7層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土・炭化物少量含む。ローム粒子含む。

8層 にぶい赤褐色土 (5YR4/4) 焼土粒子含む。

9層 褐色土 (7.5YR4/3) 焼土・炭化物を含む。ローム主体。

第36図 ⅢH49号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	小型壺	12.9	13.2	(6.4)	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ ※歪み大きい	7.5YR7/3 にぶい橙 白色の砂粒を多く含む

第20表 ⅢH49号住居址出土遺物観察表

(21)ⅢH50号住居址（第37図、写真図版十八①）

本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－クー15･16、L－ケ－15･16Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されている。

形態は隅丸方形を呈すると考えられる。炉は住居址西よりに検出された。規模は北壁1.07m（残存）･南壁2.55m･西壁3.00mで、壁高さは北西コーナーよりで13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－38°－Eを示す。覆土は単層で少量の焼土･炭化物を含む。住居址の床面積は推定で9.2㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所が検出された。規模はP1が径21cm･深さ7cm、P2が径18cm･深さ20cm、P3が径23cm･深さ17cm、P4が径25cm･深さ8.5cmを測る。検出位置よりP4本の主柱穴と考えられる。

炉は住居址西よりから検出され、形態は楕円形を呈する。規模は長軸36cm・幅27cmで焼土の厚みは5cmを測る。焼土は非常に硬化していた。

本址の遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみであった。これらの事より本址は弥生後期後半～末に位置づけられると考える。

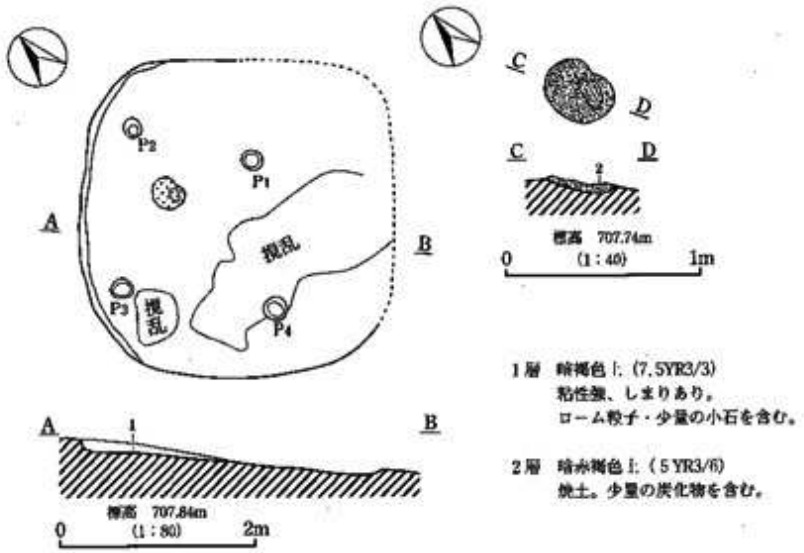
(22)ⅢH51号住居址（第38図、写真図版十八②）

本住居址は、調査区上段の台地南側であるL－クー20、P－キ－1・2、P－クー1・2Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されている部分と調査区外になる部分がある。

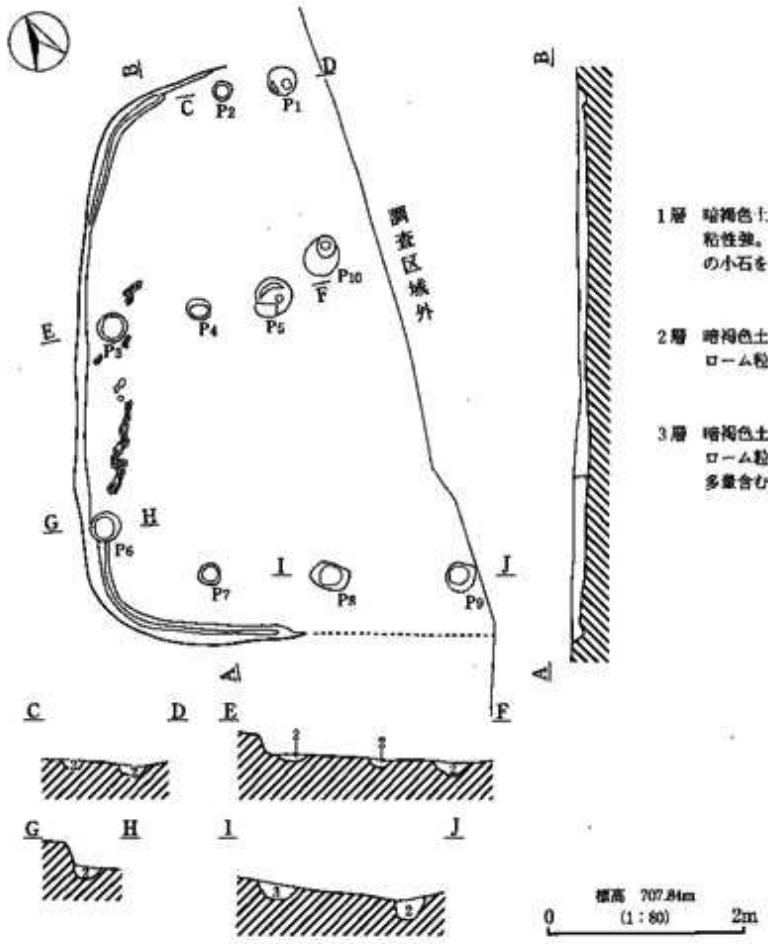
形態は隅丸方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁2.26m（残存）・南壁3.82m（残存）･西壁5.03mで、壁高さは南西コーナー付近で27cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－25°－Eを示す。覆土は単層で炭化物を多く含む。住居址の床面積は残存で17.9㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は北西コーナー部と南西コーナー部に確認された。規模は16～25cm・深さ8cmで断面形はU字形を呈する。ピットは10カ所が検出された。規模はP1が径28cm・深さ17cm、P2が径20cm・深さ10cm、P3が径30cm・深さ7cm、P4が径23cm・深さ19cm、P5が径36cm・深さ20cm、P6が径29cm・深さ18cm、P7が径22cm・深さ9.5cm、P8が径41cm・深さ19cm、P9が径30cm・深さ22cm、P10が径40cm・深さ22cmを測る。

本址の遺物は土器については覆土より弥生土器片が少量出土したのみであったが、炭化物が西壁際にまとまって出土した。検出状況は西壁に沿うように建築部材が倒れたような状況でありP6に立っていた柱が燃え倒壊したとも考えられる。ただ、本址を焼失住居と考えるには炭化材の検出量が非常に少なく確証を得られなかった。

これらの事より本址もⅢH50号住居址と同じく弥生後期後半～末に位置づけられると考える。



第37図　ⅢH50号住居址実測図



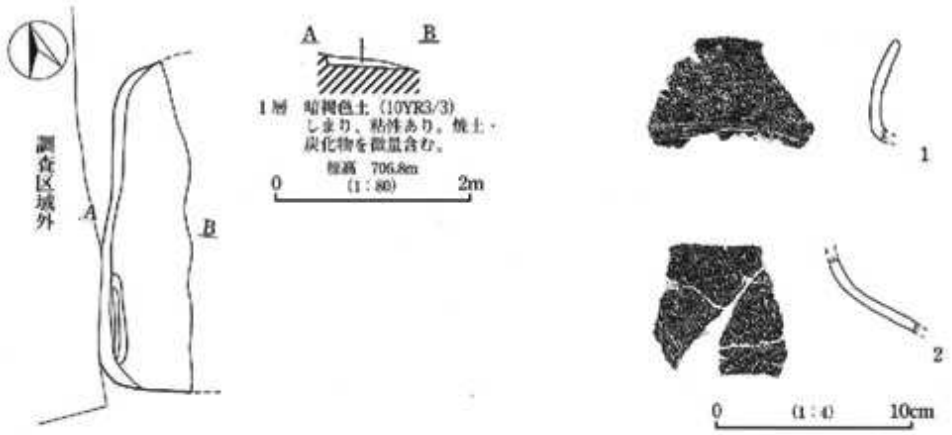
第38図　ⅢH51号住居址実測図

㉓ⅣH６号住居址（第39図、写真図版十九①）

本住居址は、調査区上段の台地中央であるL－ケ－17、L－コ－16･17Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁0.4ｍ(残存)･南壁0.77ｍ(残存)･西壁3.12ｍで、壁高さは南西コーナー付近で19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－15°－Eを示す。覆土は単層である。住居址の床面積は残存で2.1㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は南西コーナー付近に一部確認された。規模は10～16cm･深さ２cmで断面形はＵ字形を呈する。ピットは検出されなかった。

本址の遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみであり、図示した甕片も覆土中からの出土である。これらの事より本址も弥生後期後半～末に位置づけられると考える。



第39図　ⅣH６号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	－－	〈5.3〉	－－	外面　口縁部に櫛描波状文（単位不明）と頸部に櫛描横線文が施される 内面　調整不明	7.5YR7/6　橙 径３㎜の小石や砂粒を含む
2	甕	－－	〈4.5〉	－－	外面　ハケメの残るナデ 内面　ナデ	7.5YR5/1　褐灰 砂粒を含む

第21表　ⅣH６号住居址出土遺物観察表

㉔ⅣH７号住居址（第40図、写真図版十九②）

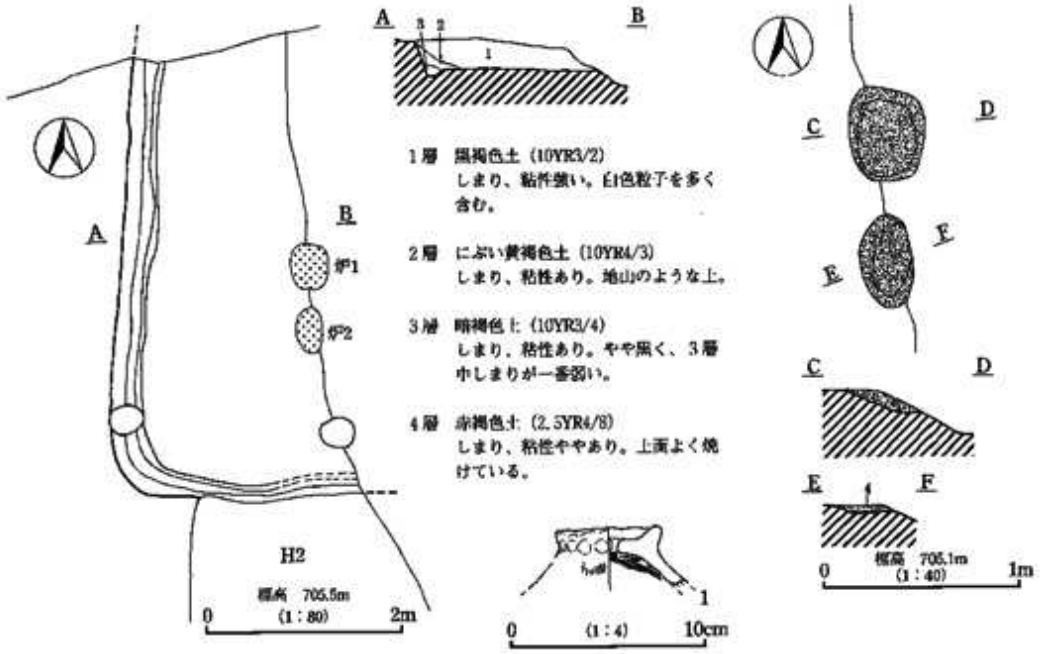
本住居址は、調査区上段の台地中央であるL－サ－15･16Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平され、北側は調査区外となる。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は住居址の中央部より検出された。規模は南壁2.4ｍ(残存)･西壁4.40ｍで、壁高さは西壁北よりで40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は

N－2°－Eを示す。覆土は3層に分れる。住居址の床面積は残存で7.3㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は検出された住居址壁すべてに敷設されており、規模は幅16～35cm・深さ6cmで断面形はU字形を呈する。ピットは検出されなかった。

炉は2カ所南北に並ぶような状態で確認された。規模は北側の炉が長軸47cm・幅38cm・焼土の厚みは7cmを測る。南側の炉は長軸48cm・幅27cm・焼土の厚みは3cmを測る。いずれの炉も焼土は硬化していた。

本址の遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみであり、図示した蓋片も覆土中からの出土である。これらの事より本址も弥生後期後半～末に位置づけられると考える。



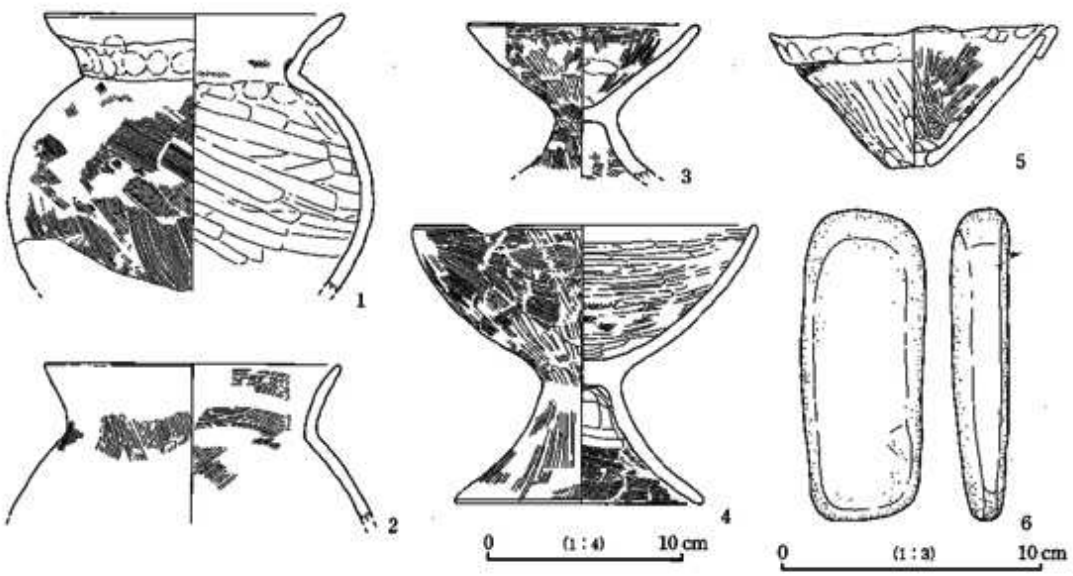
第40図　ⅣH7号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	蓋	5.4	3.0	――	外面　斜位のハケメ　つまみ部に指頭圧痕(成形)あり 内面　斜位及び横位のハケメ　※つまみ部は回状を呈しほぼ中央に焼成後に開けられたと思われる孔がある	7.5YR7/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を微量含む

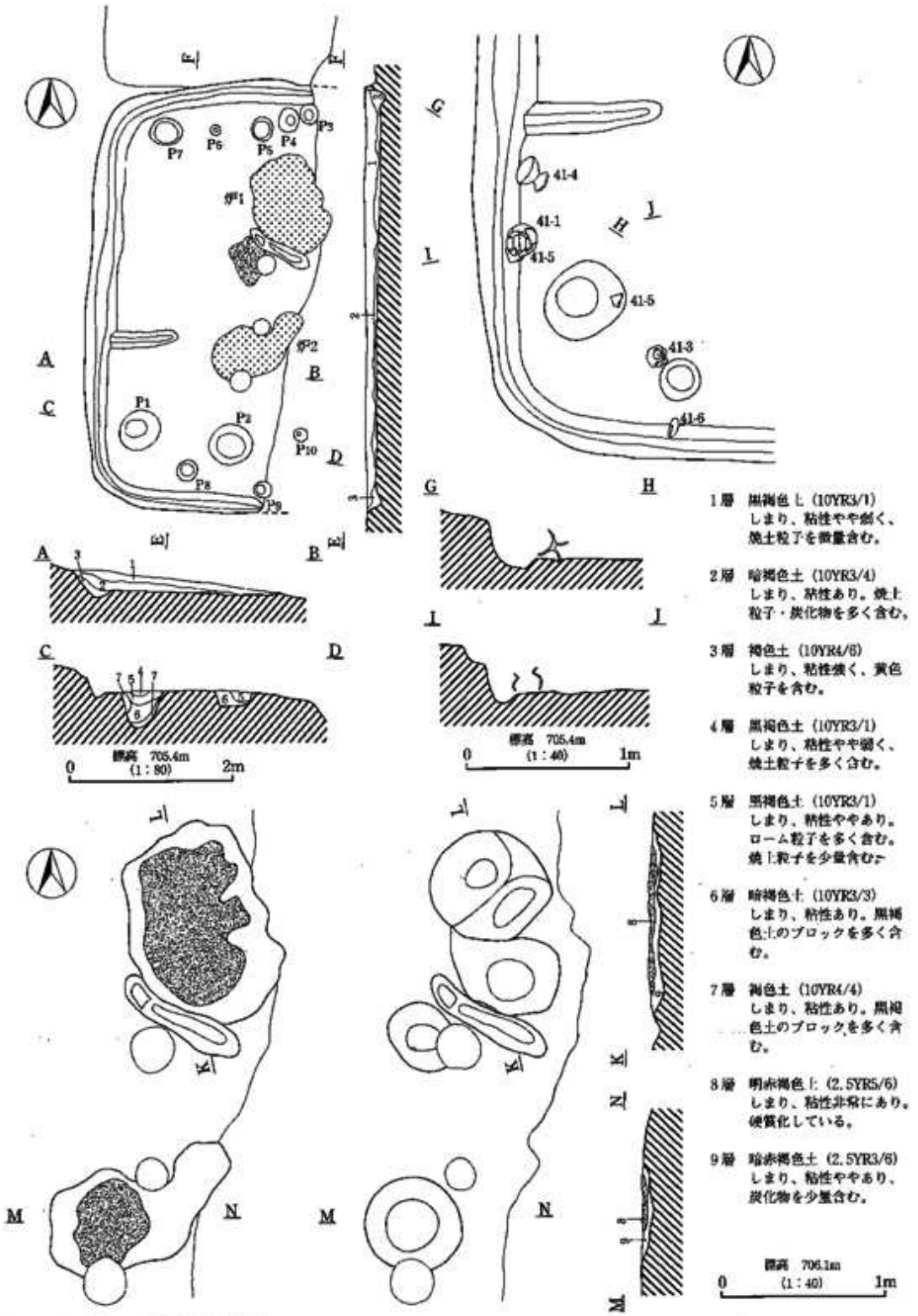
第22表　ⅣH7号住居址出土遺物観察表

(25)NH8号住居址（第41・42図、写真図版二十、二十一）

本住居址は、調査区上段の台地中央であるL－サ－17･18、L－シ－17･18Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されている。形態は方形を呈すると考えられる。炉は住居址の中央部より検出された。規模は北壁2.4m（残存）･南壁1.56m（残存）･西壁4.77mで、壁高さは北西コーナー少し南で34cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－1°－Eを示す。覆土は3層に分れる。住居址の床面積は残存で10.7㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は検出された住居址壁すべてに敷設されており、規模は幅17～37cm･深さ10cmで断面形はU字形を呈する。また西壁南よりには壁溝から分岐する間仕切りが一カ所検出された。規模は86cmを測る。ピットは10カ所検出された。規模はP1が径52cm･深さ45cm、P2が径54cm･深さ18cm、P3が径24cm･深さ24cm、P4が径30cm･深さ38cm、P5が径26cm･深さ10cm、P6が径14cm･深さ13cm、P7が径40cm･深さ6cm、P8が径26cm･深さ12cm、P9が径21cm･深さ10cm、P10が径16cm･深さ13cmを測る。炉は2カ所南北に並ぶような状態で確認された。規模は北側の炉が長軸116cm･幅71cm･焼土の厚みは5cmを測る。南側の炉は長軸62cm･幅59cm･焼土の厚みは3cmを測る。いずれの炉も焼土は非常に硬化していた。ただこれらがいずれも炉とすると住居址内の面積に対する比率が非常に大きくどちらかは常用の炉とは考えにくい。本址の遺物は覆土より土器片が少量出土したのと、図示した遺物がある。図示した遺物の出土位置は1が西壁南より、2が覆土、3がP8脇、4が西壁南より、5がP1内の破片と1の甕脇より出土した破片が接合し完形となった。6はすり石であり、石材は輝石安山岩である。これらの遺物より本址は弥生後期末～古墳時代初頭に位置づけられると考える。



第41図　NH8号住居址出土遺物実測図



第42図　ⅣH８号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	15.5	〈14.2〉	——	外面 口縁部ヨコナデ 成形時の指頭圧痕あり 胴部斜位のハケメ 内面 口縁部ハケメ後ヨコナデ 胴部ヘラナデ 胴部上位に指頭圧痕あり	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
2	甕	(15.6)	〈7.8〉	——	外面 口縁部ヨコナデ 胴部上位に縦位及び斜位のハケメ 内面 口縁部横位のハケメ 胴部上位に斜位のハケメ	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
3	高坏	11.9	〈8.0〉	——	外面 全体に縦位及び斜位のハケメ後、縦位及び斜位のヘラミガキその後、口縁部に横位のヘラミガキ 内面 口縁部横位のヘラミガキ後、みこみ部は縦位のヘラミガキ 脚部は斜位及び横位のハケメ	7.5YR8/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
4	高坏	17.8	14.2	12.8	外面 斜位及び縦位のハケメ後、縦位のヘラミガキ 内面 坏部ハケメ後、横位のヘラミガキ 脚部上半ヘラナデ脚部下半ハケメ	7.5YR8/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
5	甕	14.8	7.2	2.2	外面 口縁部折り返し 口縁（指押さえ）体部ハケメ後、ヘラミガキ 内面 口縁部指押さえ後、ナデ 体部ヘラミガキ底部ヘラナデ ※中央に径1.5㎝の穿孔	7.5YR6/6 橙 砂粒を多く含み、ざらざらしている

第23表 ⅣH8号住居址出土遺物観察表

(26)ⅣH10号住居址（第43図、写真図版二十二①）

本住居址は、調査区上段の台地中央であるL－サ－19･20、L－コ－20Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により、南側はⅣH9号住居址によって削平されている。

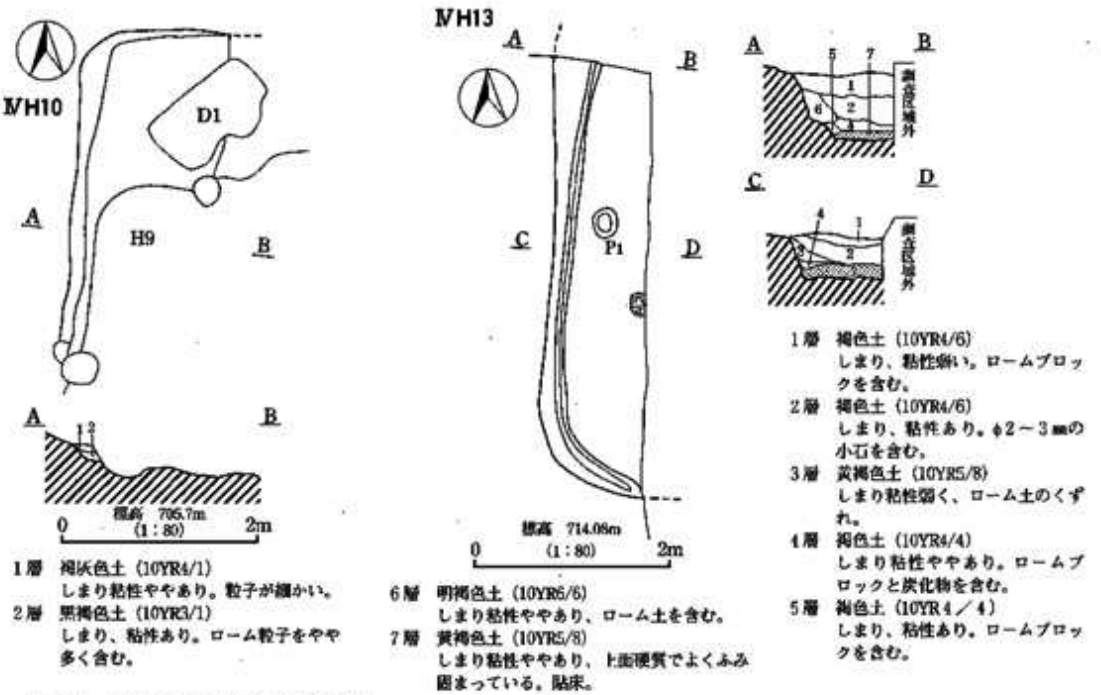
形態は方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁1.30m(残存)･西壁3.12m(残存)で、壁高さは西壁で19㎝を測る。壁は緩やかにに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－3°－Eを示す。覆土は2層に分れる。住居址の床面積は残存で1.7㎡を測る。床は地山を踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝及びピットは確認されなかった。

本址の遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみである。よって帰属時期等は不明であるが周辺の遺構の状況より弥生後期後半～末ぐらいに位置づけられると考える。

(27)ⅣH13号住居址（第43図、写真図版二十二②）

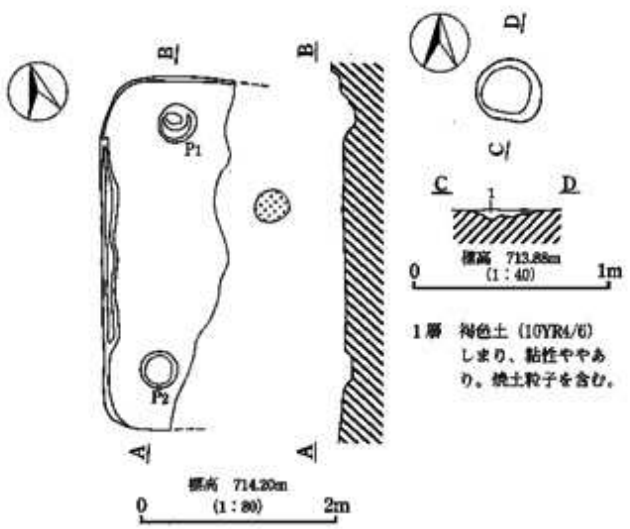
本住居址は、調査区上段の台地中央であるL－エ－4･5、L－オ－4･5Grに位置する。残存状態は北と東側が調査区外となり、住居址の南西コーナー部しか検出されていない。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は不明であるが住居址中央部に焼土範囲が検出された。規模は南壁0.95m(残存)･西壁4.20m(残存)で、壁高さは西壁で42㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとNを示す。覆土は4層に分れる。住居址の床面積は検出部で3.1㎡を測る。床は堅く踏み固めたような床で硬質化していた。貼床の厚みは14㎝を測る。壁溝は西壁から南壁にかけて検出され、規模は幅8～15㎝･深さ5㎝で断面形はU字形を呈する。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径29㎝･深さ10㎝を測る。遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみであるが、弥生後期後半～末に位置づけられると考える。



第43図　ⅣH10・13号住居址実測図

㉘ⅣH14号住居址（第44図、写真図版二十三①）

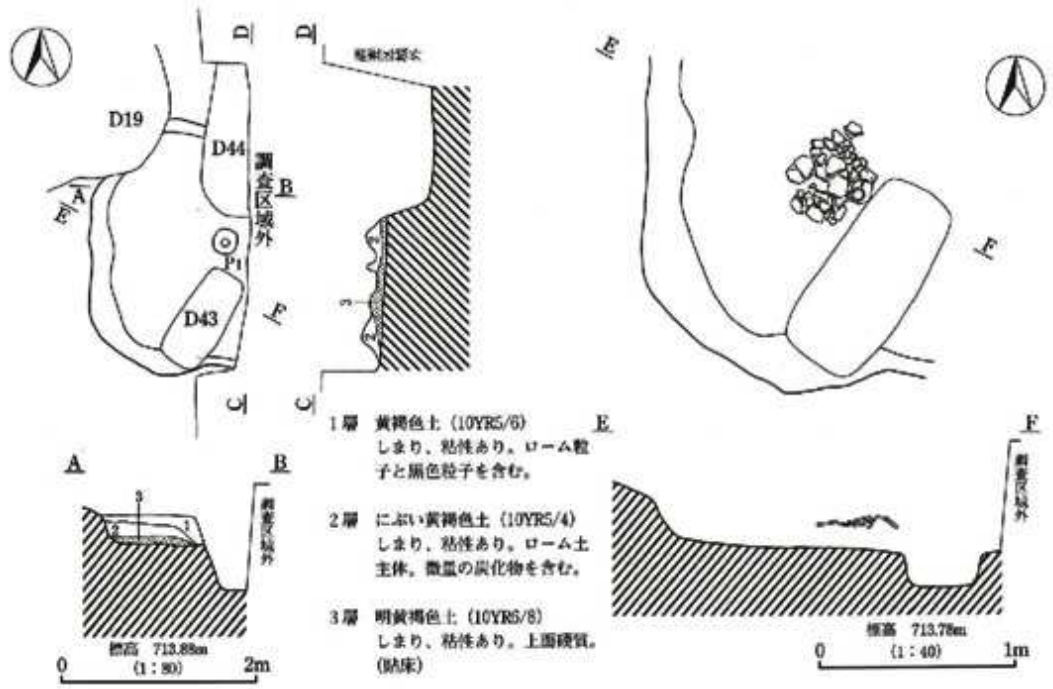


第44図　ⅣH14号住居址実測図

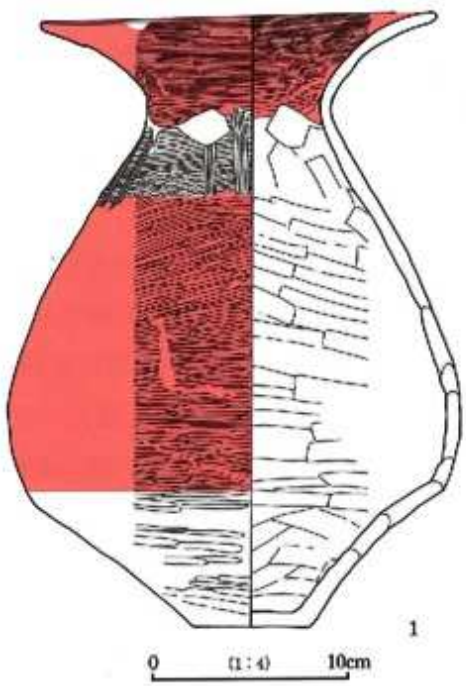
本住居址は、調査区最上段の台地中央であるL－ウ－9・10Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は住居址中央北よりに検出された。規模は北壁1.16m（残存）・南壁0.6m（残存）・西壁3.41mで、壁高さは北西コーナーで13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－12°－Wを示す。住居址の床面積は残存部で3.6㎡を測る。床は堅く踏み固めたような床で硬質化していた。壁溝は西壁中央部にかけて検出され、規模は幅8～16cm・深さ3cmで断面形はU字形を呈する。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ15cm、P2が径40cm・深さ10cmを測る。遺物は覆土より弥生土器片が少量出土したのみである。

㉙ⅣH15号住居址（第45・46図、写真図版二十四）



第45図　ⅣH15号住居址実測図



第46図　ⅣH15号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区最上段の台地中央であるL－エー6、L－オー6Grに位置する。残存状態は東側が調査区外となり、住居址の西半分の検出に止まった。

形態は方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁0.4m（残存）・南壁1.16m（残存）・西壁1.84m（残存）で、壁高さは西壁中央で29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとNを示す。覆土は2層に分れる。住居址の床面積は検出部で2.1㎡を測る。床は堅く踏み固めたような床で硬質化していた。貼床の厚みは14cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径26cm・深さ14cmを測る。ただ、本址は住居址としては小型であり、貼床の状況より住居址としたが本来は住居址形態を取らない遺構とも考えられる。

遺物は図示した弥生壺が出土したのみである。1は壺であり、南西コーナー付近の床面より口縁部を下にした状態で出土した。接合復元の後はほぼ完形となった。この遺物により本址は弥生後期末に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺	28.3	31.8	6.1	外面　横位のヘラミガキ後、口縁部～頸部及び胴部上位～胴部下位の範囲に赤彩を施す 頸部から胴部に10本一組の櫛描横走平行線文を施文後、胴部に10本一組の櫛描波状文を施文　後に5本一組の櫛描垂下文が2帯一組で5組施されている 内面　口縁部～頸部ヘラミガキ　胴部ヘラナデ ※内外面に赤彩顔料の付着した指頭痕あり	7.5YR7/6　橙 赤色粒子微量と径1～2㎜の砂粒を含む

第24表　Ⅳ H15号住居址出土遺物観察表

千曲川より遺跡を望む

後方山尾根の右端部分が雀の峯古墳群の所在地、当遺跡からは山裾が盾となり直視はできない。

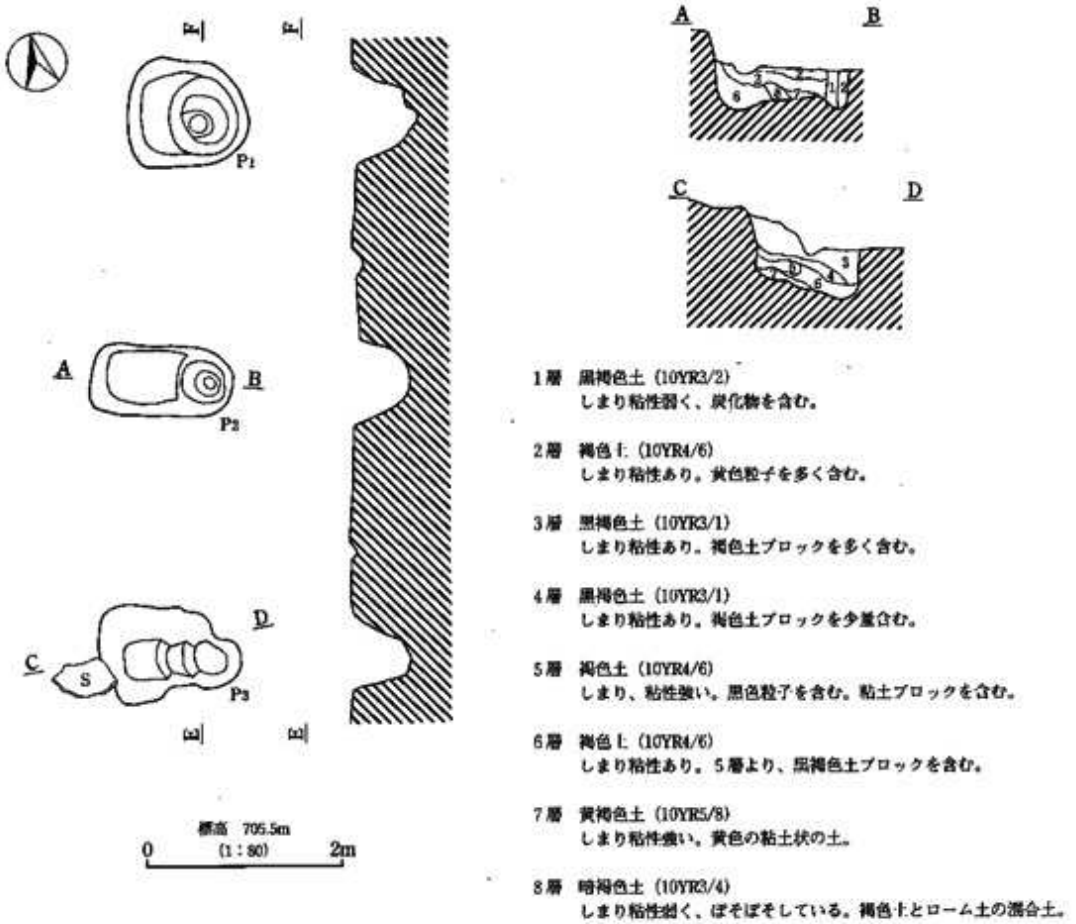
第２節　掘立柱建物址

(1)ⅣF１号掘立柱建物址（第47図、写真図版二十五①）

本址は、調査区上段の台地南よりであるL－サ－16･17･18Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形傾斜により検出できなかった。また本址の上部にはⅣH８号住居址が重複しており、H８号住居址の床面がピット上面に検出された為、掘立柱建物址の方が古く弥生時代と判断した。

形態は棚列的な状況の為詳細は不明であるが、南北方向が２間・東西方向が１間の側柱式建物址であったと考えられる。長軸方位はN－11°－Eを示す。規模は桁行5.25ｍ(P１～P３)で、桁行柱間は2.67～2.85ｍを測る。柱穴の形態は東西方向に長い楕円形である。ピットの規模はP１が径125cm･深さ61cm、P２が径144cm･深さ96cm、P３が径148cm･深さ102cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP２である。

本址よりの出土遺物はP３より弥生土器片少量が出土している。



第47図　ⅣF１号掘立柱建物址実測図

第3節　土　坑

本節では弥生時代に帰属すると考えられる土坑について記載する。時期の認定に付いては調査時の覆土等からの判断を優先し、その他の遺構に付いては出土遺物を加味して決定した。

(1) ＩＤ９号土坑（第48図、写真図版二十六①）

本址は、調査区台地先端部の南斜面であるG－イ－3Grに位置する。残存状態は南側を溝状遺構によって削平されている。形態は長方形で、長軸方位はN－5°－Wを示す。規模は長軸0.90m・短軸0.73m・深さ67cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示した鉢２点と弥生甕片10点ほどがあった。

(2) ＩD10号土坑（第48図、写真図版二十六②）

本址は、調査区北側の低地部分であるF－ト－7Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は円形で、長軸方位はN－36°－Wを示す。規模は長軸1.00m・短軸0.98m・深さ43cmを測る。

本址よりの出土遺物はなかった。

(3) ⅢＤ４号土坑（第48図、写真図版二十六③④）

本址は、調査区上段台地の北側であるH－ソ－20Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は円形で、長軸方位はN－1°－Wを示す。規模は長軸2.17m・短軸1.98m・深さ64cmを測る。

本址は覆土上面に拳大の礫が集積する部分があり、この礫中より図示した高坏１点が出土している。

(4) ⅢＤ５号土坑（第48図）

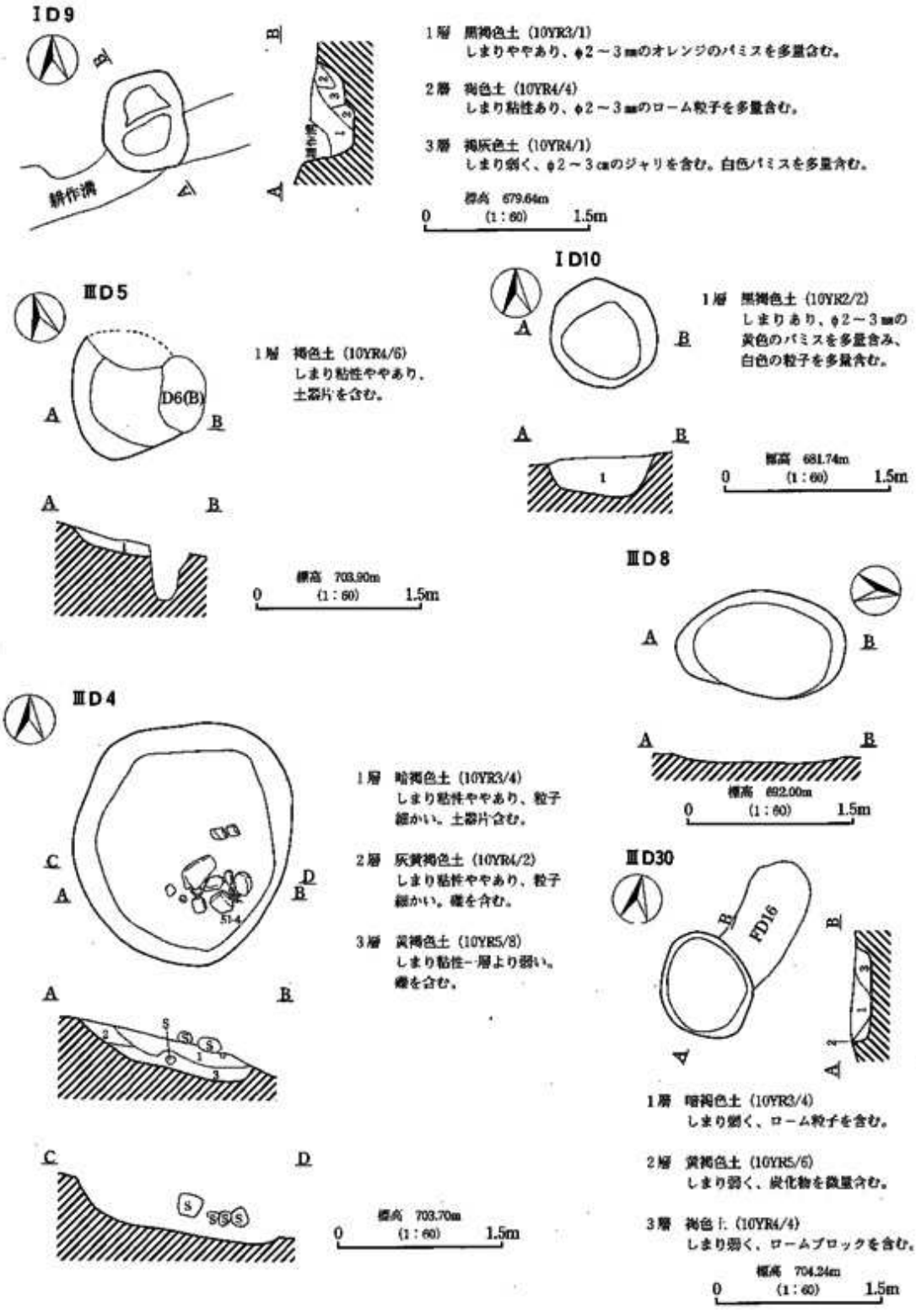
本址は、調査区上段台地の北側であるH－ソ－19Grに位置する。残存状態は東側をⅢＤ６号土坑により削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN－3°－Wを示す。規模は長軸1.15m・短軸0.83m・深さ27cmを測る。

本址よりの出土遺物は弥生土器片が２点あった。

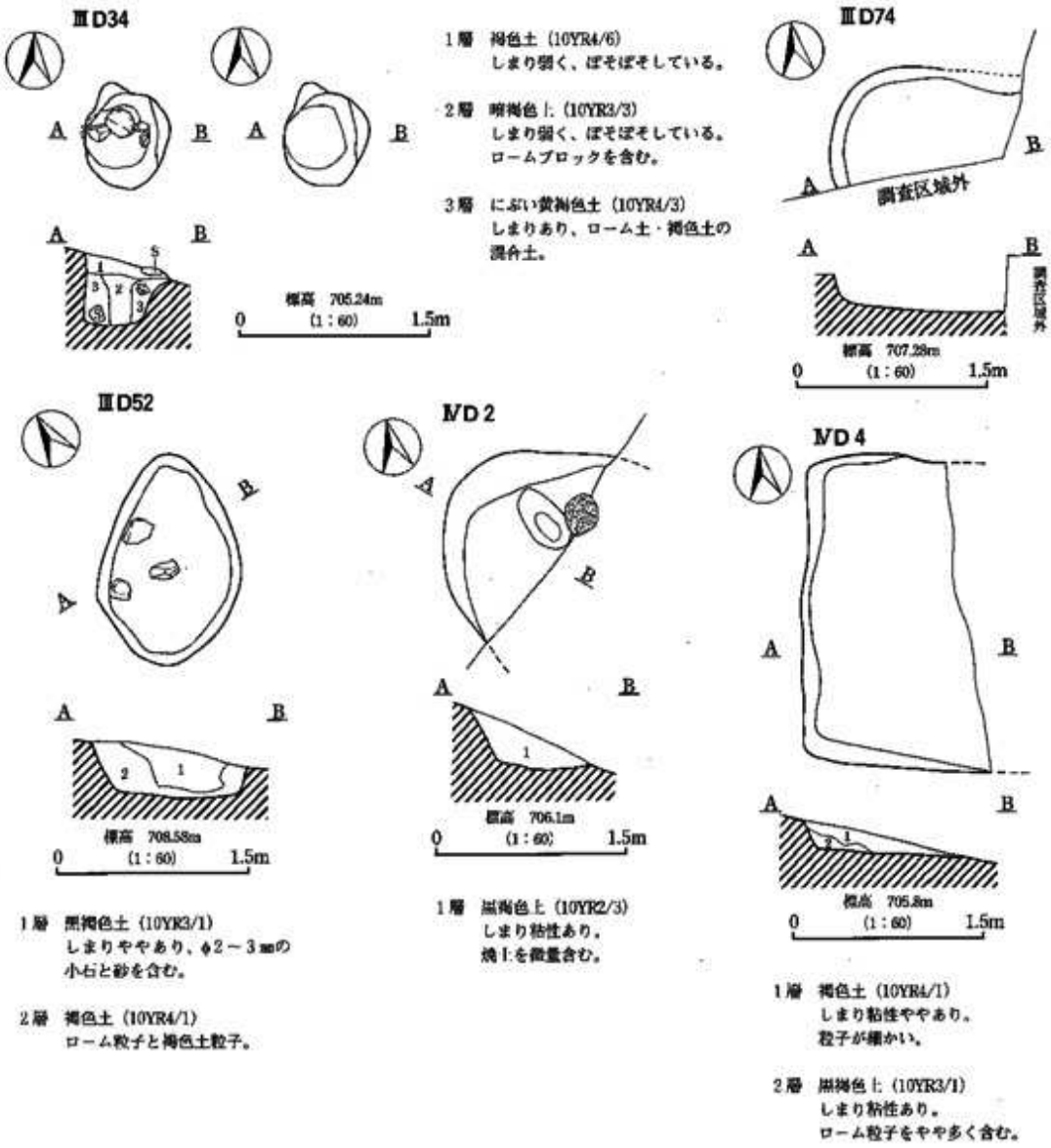
(5) ⅢＤ８号土坑（第48図、写真図版二十六⑤）

本址は、調査区上部台地の東斜面であるM－ク－8Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN－8°－Wを示す。規模は長軸1.53m・短軸0.96m・深さ13.5cmを測る。

本址よりの出土遺物は弥生甕片１点が出土したのみであった。



第48図　ⅠD9・10号、ⅢD4・5・8・30号土坑実測図



第49図　ⅢD34・52・74号、ⅣD2・4号土坑実測図

(6)ⅢD30号土坑（第48図、写真図版二十六⑥）

本址は、調査区上段台地の南側であるL－セ－3Grに位置する。残存状態は北側をⅢFD16号中世墳墓により削平されている他はほぼ良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN－32°－Wを示す。規模は長軸1.00m・短軸0.82m・深さ34.5cmを測る。

本址よりの出土遺物はなかった。

(7)ⅢD34号土坑（第49図、写真図版二十六⑦）

本址は、調査区上段台地の北側であるH－ス－20Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は円形で、長軸方位はN－17°－Wを示す。規模は長軸0.86m・短軸0.67m・深さ58cmを測る。また本址の覆土は柱痕的な様相を示す部分もあり、礫の混入も観察できた。

本址の出土遺物は覆土より弥生壺片2点が出土している。

(8)ⅢD52号土坑（第49図）

本址は、調査区上段台地の南よりであるL－コ－5Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN－34°－Eを示す。規模は長軸1.65m・短軸1.08m・深さ36cmを測る。また本土坑は拳大の礫3点が覆土中に検出された。

本址の出土遺物は弥生土器片14点が出土したが図示可能な物はなかった。

(9)ⅢD74号土坑（第49図）

本址は、調査区上段台地の南よりであるL－コ－6・L－サ－6Grに位置する。残存状態は東側と南側が調査区外であり、上部はⅢH47号住居址に削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はEを示す。規模は長軸1.46m・短軸0.84m・深さ32.5cmを測る。本址よりの出土遺物はない。

(10)ⅣD2号土坑（第49図、写真図版二十六⑧）

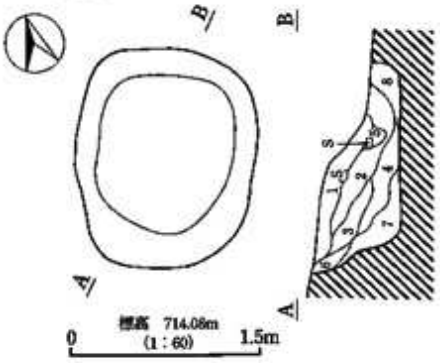
本址は、調査区最上段台地の南よりであるP－ケ－1Grに位置する。残存状態は東側が畑の耕作により削平されている。形態は楕円形と考えられ、長軸方位はN－46°－Eを示す。規模は長軸1.77m・短軸は残存部で1.00m・深さ46cmを測る。また土坑底面には硬質化した焼土とピットが1カ所確認された。ピットの規模は径53cm・深さ10cmを測る。本址よりの出土遺物はなかった。

(11)ⅣD4号土坑（第49図）

本址は、調査区最上段台地の南よりであるL－コ－19・L－サ－18・19Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形によって削平されている。形態は長方形で、長軸方位はN－6°－Wを示す。規模は長軸2.45m・短軸は残存部で1.24m・深さ34cmを測る。

本址よりの出土遺物は弥生甕片1点と壺片多数を出土したが図示可能なものは無かった。しかし、土器片の特徴から弥生後期末頃の所産と考えられる。また、本土坑は形態がⅣH6・10号住居址と似ており、顕著な床が確認できなかった為、土坑としたが住居址の可能性もあると考える。

ⅣD17



1層 暗褐色土（10YR3/4）
しまり粘性弱く、ローム粒子を含む。

2層 黒褐色土（10YR3/1）
しまり粘性ややあり、ロームブロックを多く含む。

3層 暗褐色土（10YR3/4）
しまり粘性ややあり。ローム粒子を含む。

4層 暗褐色土（10YR3/3）
しまり粘性あり。ローム粒子をやや多く含む。

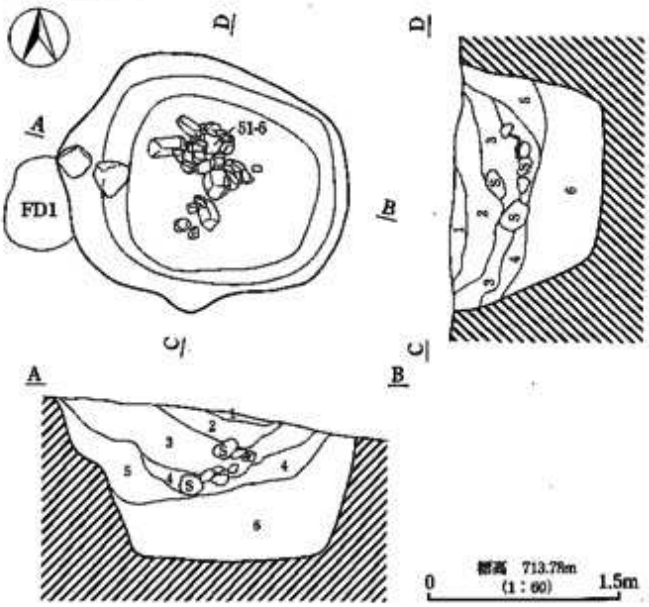
5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
しまり、粘性弱く、1層よりローム粒子を含む。

6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
5層に似る。

7層 褐色ﾄﾞ（10YR4/6）
しまり粘性ややあり。粘土化している。

8層 褐色土（10YR4/4）
しまり粘性強く、φ2～3㎜のローム粒子を含む。

ⅣD19



1層 褐灰色ﾄﾞ（10YR4/1）
しまり、粘性弱く、炭化物微量含む。

2層 暗褐色土（10YR3/3）
しまり粘性ややあり。φ2～3㎜のローム粒子と、黒色土ブロックを含む。

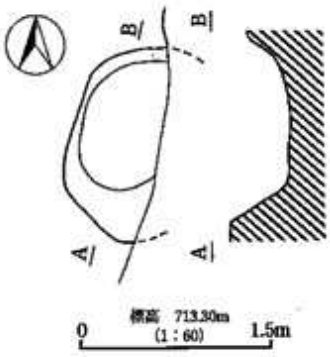
3層 褐色ﾄﾞ（10YR4/6）
しまり粘性弱く、さらさらしている。ローム粒子を含む。

4層 黄褐色土（10YR5/6）
しまり粘性弱く、さらさらしたローム土。

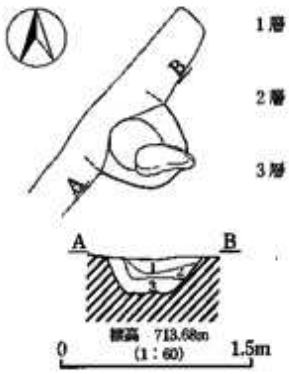
5層 明黄褐色土（10YR6/8）
しまり粘性弱く、ローム主体でさらさらしている。

6層 （10YR7/8）
しまり粘性弱く、φ2～3㎜のロームブロックと、黒色土ブロックを含む。

ⅣD28



ⅣD24



1層 暗褐色土（10YR3/4）
しまり粘性やや弱く、炭化物を微量含む。

2層 黄褐色土（10YR5/6）
しまり粘性ややあり。粘質化したローム土。

3層 明黄褐色土（10YR6/6）
しまり粘性やや弱く、ローム粒子・黒色粒子を含む。

第50図 ⅣD17・19・24・28号土坑実測図

⑿ⅣD17号土坑（第50図、写真図版二十七①②）

本址は、調査区最上段台地の東斜面であるL－エ－8Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は隅丸長方形で、長軸方位はN－22°－Wを示す。規模は長軸1.69m・短軸1.38m・深さ75cmを測る。本址よりの出土遺物は弥生土器片12点が出土しているが図示可能なものはなかった。

⒀ⅣD19号土坑（第50図、写真図版二十七③④）

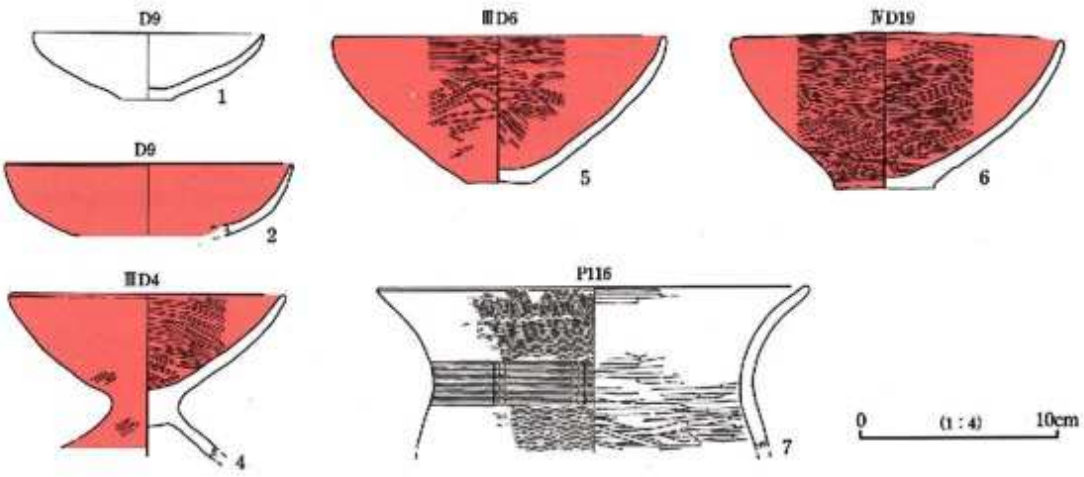
本址は、調査区最上段台地の東斜面であるL－エ－6Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は隅丸長方形で、長軸方位はN－79°－Wを示す。規模は長軸2.27m・短軸1.92m・深さ1.18mを測る。本址は覆土中央に拳大から人頭大の礫が集中して検出され、礫中より鉢が出土した。また本土坑の覆土は礫より上の土層に関しては自然堆積を示す状況であったが、第6層は埋め戻しのような堆積土であった。これらの事から本址は本来土坑内にある程度の空間が存在し、埋め戻しの後表面に礫を積んであった状況が推測され、本土坑の性格は土壙墓等を考えるべきなのかもしれない。ただ調査時の認識が甘く土坑内の土壌をふるいにかけなかった。

本址よりの出土遺物は図示した鉢1点の他は高坏片1点が出土している。

⒁ⅣD24号土坑（第50図、写真図版二十七⑤）

本址は、調査区最上段台地の東斜面であるL－エ－6Grに位置する。残存状態は北側が畑の耕作溝によって削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN－43°－Eを示す。規模は長軸0.7m・短軸が残存で0.6m・深さ31cmを測る。

本址の出土遺物は弥生土器片2点が出土したのみである。



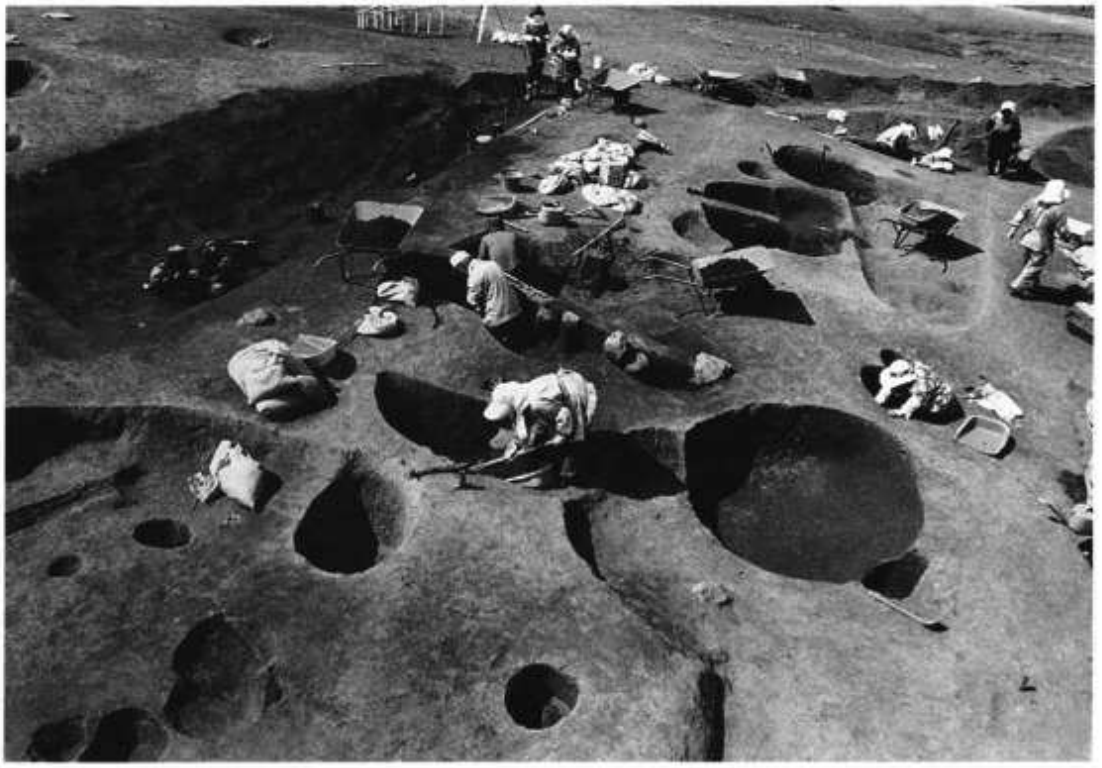
第51図　土坑・ピット出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
ID91	鉢	(11.8)	3.4	2.6	外面 調整不明 内面 調整不明 ※内外面磨耗著しい	2.5YR6/6 橙 径2～3㎜の砂粒を多く含む
ID92	鉢 or 高坏	(14.8)	〈3.7〉	——	外面 横位ヘラミガキ・赤彩 内面 横位ヘラミガキ・赤彩	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
欠番3						
IIID4 NO14	高坏	14.2	〈8.5〉	——	外面 斜位のヘラミガキ・赤彩 内面 坏部ヘラミガキ・赤彩 脚部ヘラナデ	10R4/6 赤 径1～2㎜の砂粒を多く含む
IIID6 NO15	鉢	(17.2)	7.5	3.4	外面 横位および斜位のヘラミガキ・赤彩 内面 横位および斜位のヘラミガキ・赤彩	10R4/6 赤 径1～2㎜の白色砂粒を多く含む
IVD19 NO26	鉢	17.1	8.0	5.1	外面 坏部丁寧な横位のヘラミガキ・赤彩 底部ヘラケズリ 内面 丁寧な横位のヘラミガキ・赤彩	10R4/6 赤 径1～2㎜の白色砂粒を微量含む
IVP1167	甕	(22.4)	〈8.4〉	——	外面 口縁部～胴部に櫛描波状文（単位不明）を施した後、胴部に16本一組の櫛描羽状文を施す（3連止め・右回り） 内面 口縁部ハケメ後、ヘラミガキ・胴部ヘラミガキ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を含む

第25表　土坑・ピット出土遺物観察表

(15)IVD28号土坑（第50図、写真図版二十七⑥）

本址は、調査区最上段台地の東斜面であるL－エー8Grに位置する。残存状態は東側が調査区外となる。形態は楕円形と考えられ、長軸方位はN－14°－Eを示す。規模は長軸1.53m・短軸が残存部で0.69m・深さ48cmを測る。本址よりの出土遺物は弥生壺片1点が出土したのみである。



1号方形周溝墓周辺調査風景

榛名平1号墳調査風景

第4節　方形周溝墓

(1)1号方形周溝墓［旧番号　ⅢOT2］(第52～55図、写真図版二十八～三十一)

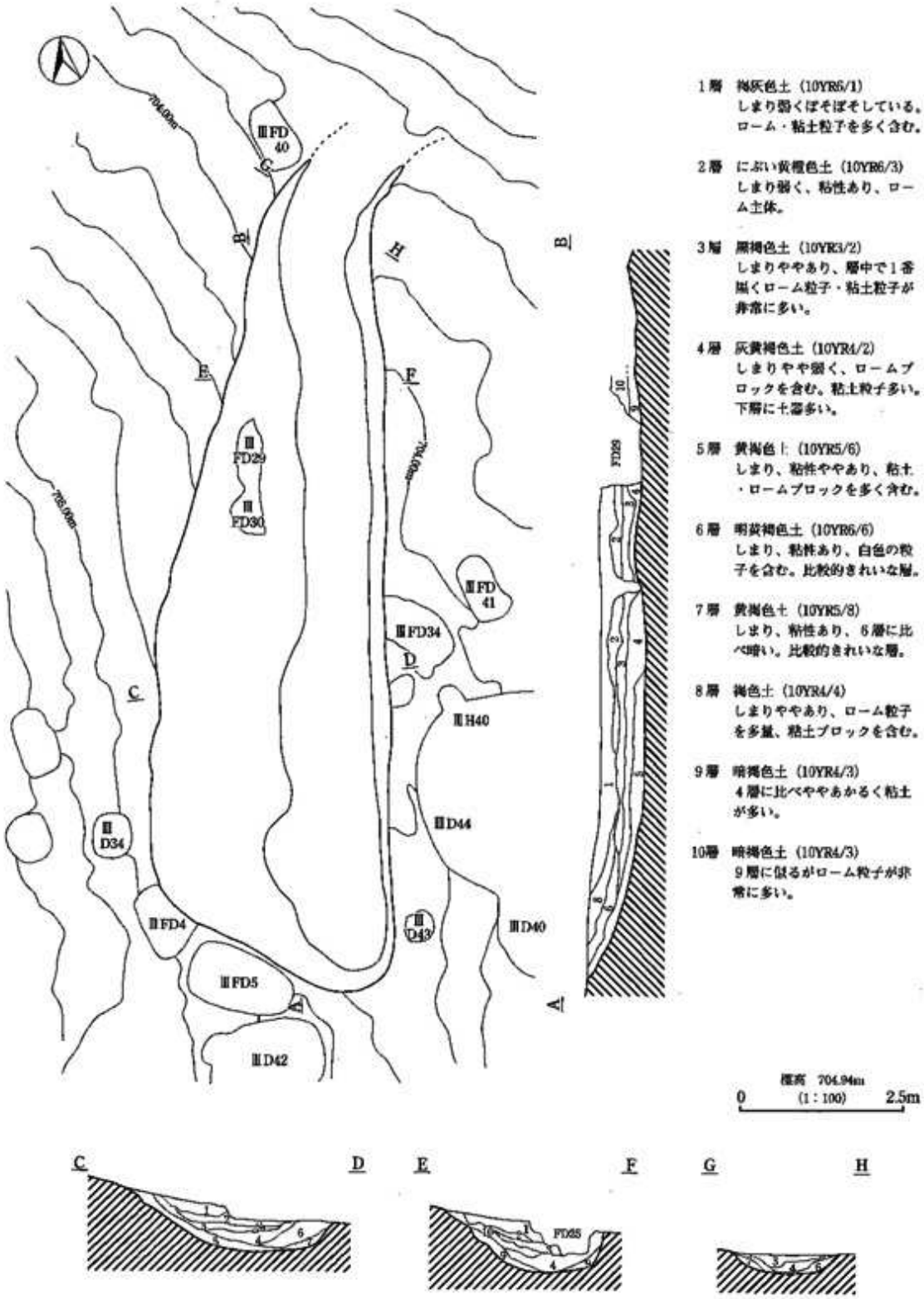
本址は、調査区上段の台地北よりであるH－ス－18･19･20･H－セ－17･18･19･20Grに位置する。残存状態は北側及び東側が自然の地形傾斜により検出できなかった。また本址の上部にはⅢH31号住居址(平安)、ⅢFD25号中世墳墓が重複しており一部本址覆土を削平していた。本址は北側で溝が直角に曲がる事、出土遺物が溝南側に偏り出土した事から方形周溝墓の溝の一辺と判断した。

形態は一辺を掘り残す「コ」の字状であったと考えられ、南辺が掘り残されていたと考えられる(第2図全体図参照)。また、唯一残存する西辺は南側端が北側よりも広がる様相を示している。ただ、斜面地と言う点を考慮すると一概には断定できない。溝の規模は検出された長さが13.2m、幅は1.46～3.67m、深さは23～110cmであるが、傾斜地の為数値にばらつきが出る。溝の断面形態はほぼU字形であり、山側と南側はなだらかに立ち上がり谷側はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で土坑・ピット等は検出されなかったが、やや硬質化していた。

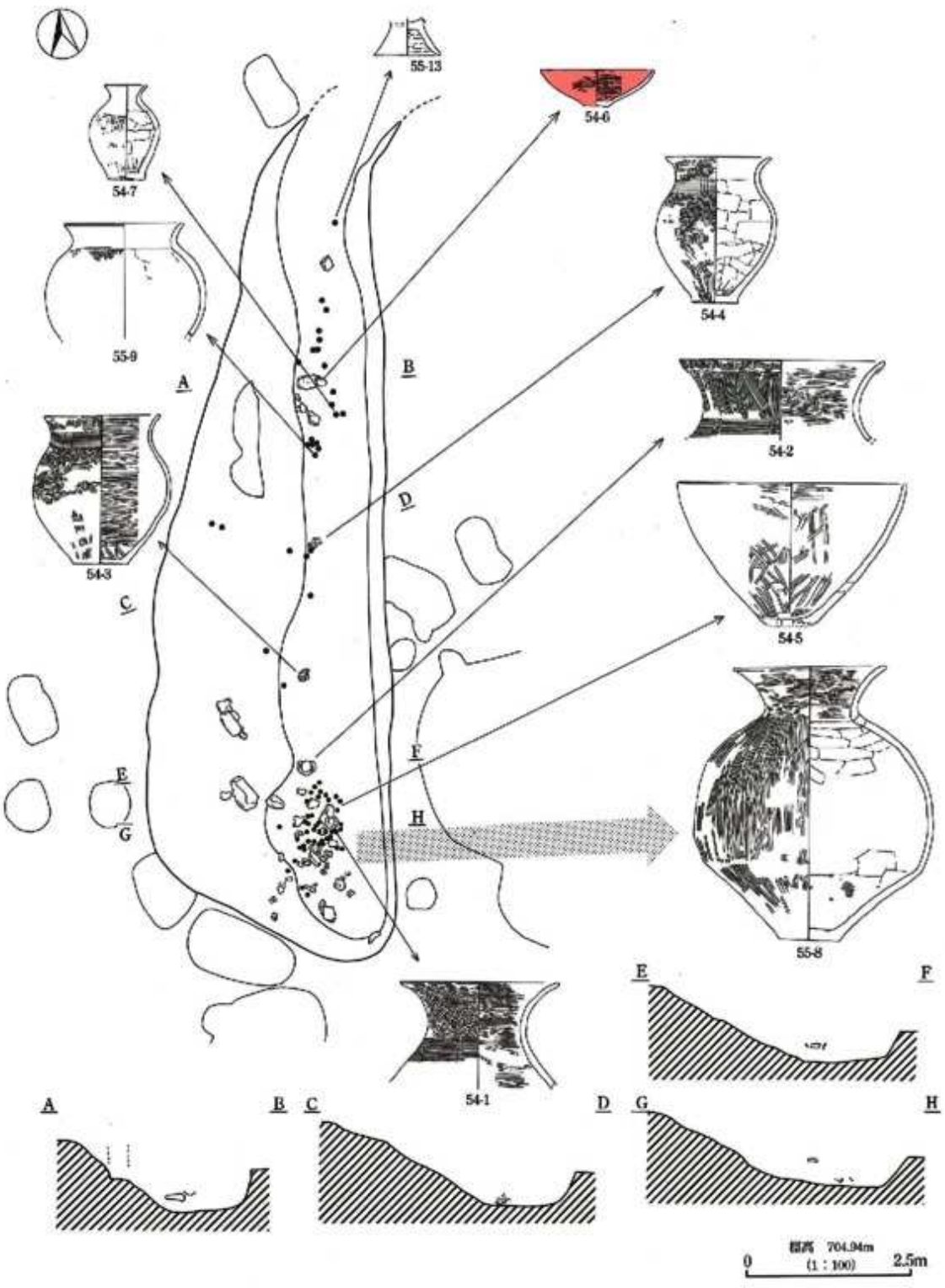
本址からの遺物は溝南端を中心に出土し、出土位置については溝底面に転がった状態の土器と底面よりやや浮いた状態で出土した土器群の2種類があった。図示した遺物の内、底面近くから出土した遺物は1・3・4・5であり、その他の物については底面より20cm以上浮いた状態で出土している。なお11と12は溝中央部の覆土中である。ただ、図示しなかった土器片も含め出土層位は第4層中に偏っていた。この4層は溝北側部分では底面まで達していることから、層位の上では3と4は浮いて出土した土器グループと同一であり、層位においても異なるのは1と5の2点のみとなる。また、南側端には土器と混じって人頭大ほどの礫が検出されており、これら礫の内には比熱した物も含まれていた。

図示した土器の出土状態は、まず1は口縁部側を下に伏せた状態で出土し尚かつ胴部破片は1点も見つからなかった。2は口縁部を上にした状態であったが中に扁平な川原石を入れた状態であり1と同様胴部破片は見つからなかった。3と4はその場に転げ落ちたような状態で破砕しており、接合後ほぼ完形となった。5は殆ど破砕した状態で出土し全体の1/2の破片があった。胴部には焼成後打ち欠いたような孔があった。尚、5は他の土器に比べ胎土が白い。8は溝南端から纏まって出土した。土器片はすべて破砕した状態で、南側から流れ込んだような状態であった。破片を接合後はほぼ完形となった。11は全体の1/4程が残存していた。すべて破片であり、表面が荒れているため詳細な観察ができなかったが、丁寧なミガキが施されている。12は台付甕の脚部であり、この破片のみであった。5と同じく胎土が白く在地の土とは異なるようである。

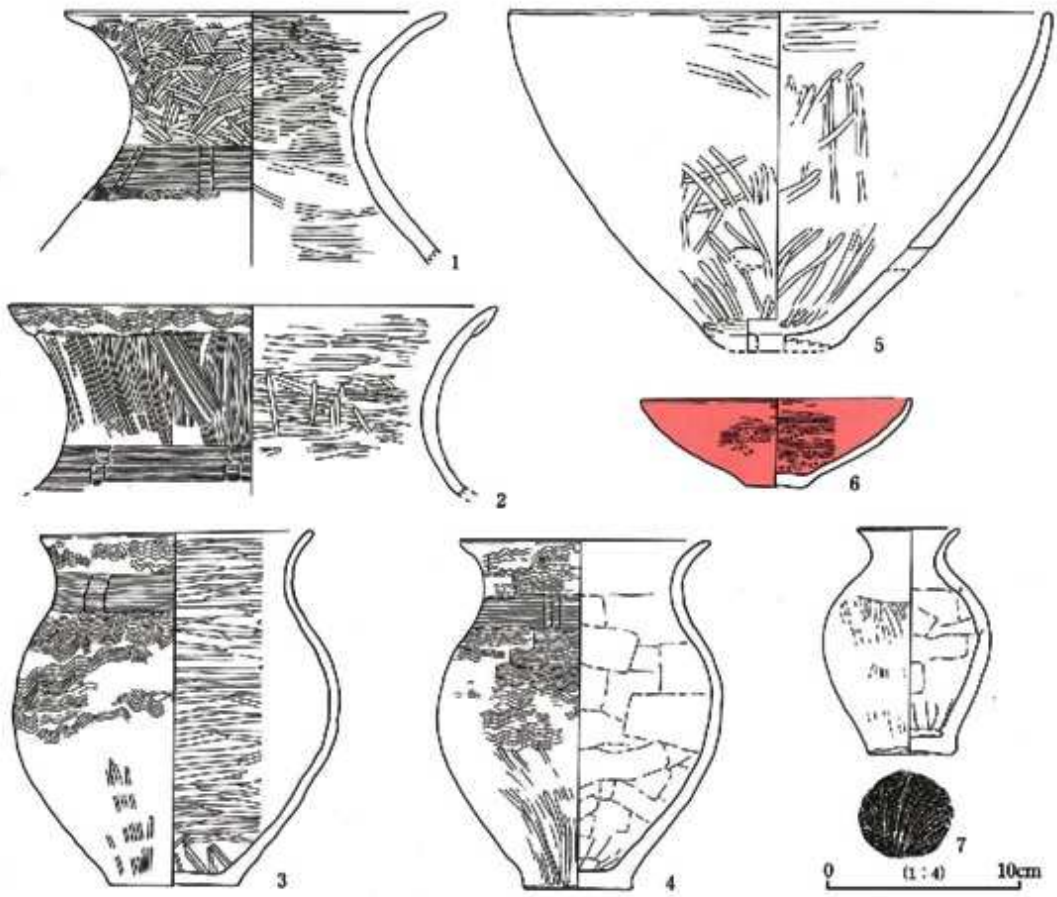
これらの遺物により本址は弥生後期末～古墳時代初頭に位置づけられると考える。



第52図　1号方形周溝墓実測図



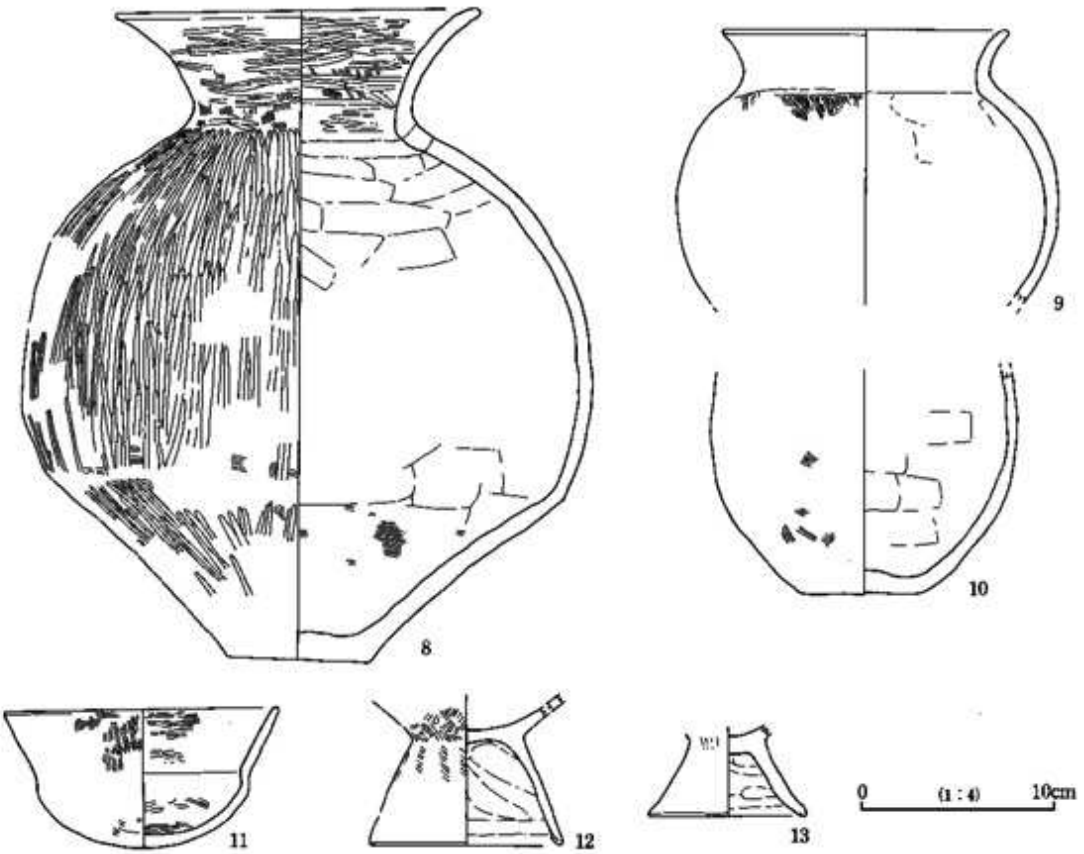
第53図　1号方形周溝墓遺物出土位置図



第54図　1号方形周溝墓出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
1	壺	19.6	〈12.9〉	——	外面　口縁部ハケメ後ミガキ　頸部櫛描波状文(16本1単位で2段8ケ所とめ)を施した後、櫛描波状文(単位不明) 内面　ハケメ後、ミガキ	5YR5/8　明赤褐 径0.5㎜の白色・赤色粒子を含み、径0.5㎜の黒色粒子を少量含む
2	甕?	(25.2)	〈9.7〉	——	外面　口唇部櫛描波状文　口縁部ハケメ　頸部櫛描波状文（4本で1単位） 内面　口縁部ハケメの上をミガキ　頸部ケズリの上をミガキ	7.5YR6/6　橙 径0.5㎜以下の白色・黒色粒子含む
3	小型壺	14.0	18.1	6.7	外面　口縁部波状文4本で1単位 頸部櫛状文11本で1単位 胴部上→波状文4本で1単位 胴部下→タテミガキ 内面　ヨコミガキ　底部付近斜めミガキ？（内外面　焼成良好）	5YR5/8　明赤褐 径0.5㎜の白色・黒色・茶色粒子を含む
4	壺	12.9	17.9	5.7	外面　口唇部ナデ　頸部櫛描波状文　口縁部胴部櫛描波状文　胴下半部ハケメの上をミガキ 内面　ヘラナデ　底部ヘラ押さえ　口縁部ヨコナデ	5YR5/8　明赤褐 径0.5㎜以下の白色・黒色・赤色粒子を含む
5	甕	(28.0)	〈17.5〉	——	外面　ケズリ後ミガキ　胴体部に焼成後と思われる穿孔1つ 内面　ミガキ　底部に焼成前と思われる穿孔1つ	7.5YR7/3　にぶい橙 径0.5㎜以下の白色・黒色・赤色粒子含む
6	鉢	13.9	4.5	3.0	外面　ミガキ　赤色塗彩 内面　ミガキ　赤色塗彩（内外面　焼成良好）	7.5YR7/6　橙 径1㎜以下の白色・黒色粒子、砂粒を多く含み、荒い
7	ミニチュア土器	(5.2)	11.6	4.5	外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ後ナデ　底部静止糸切り 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ　胴下半部ヘラ押さえ	7.5YR7/6　橙 径0.5㎜以下の白色・黒色粒子含む

第26表　1号方形周溝墓出土遺物観察表①

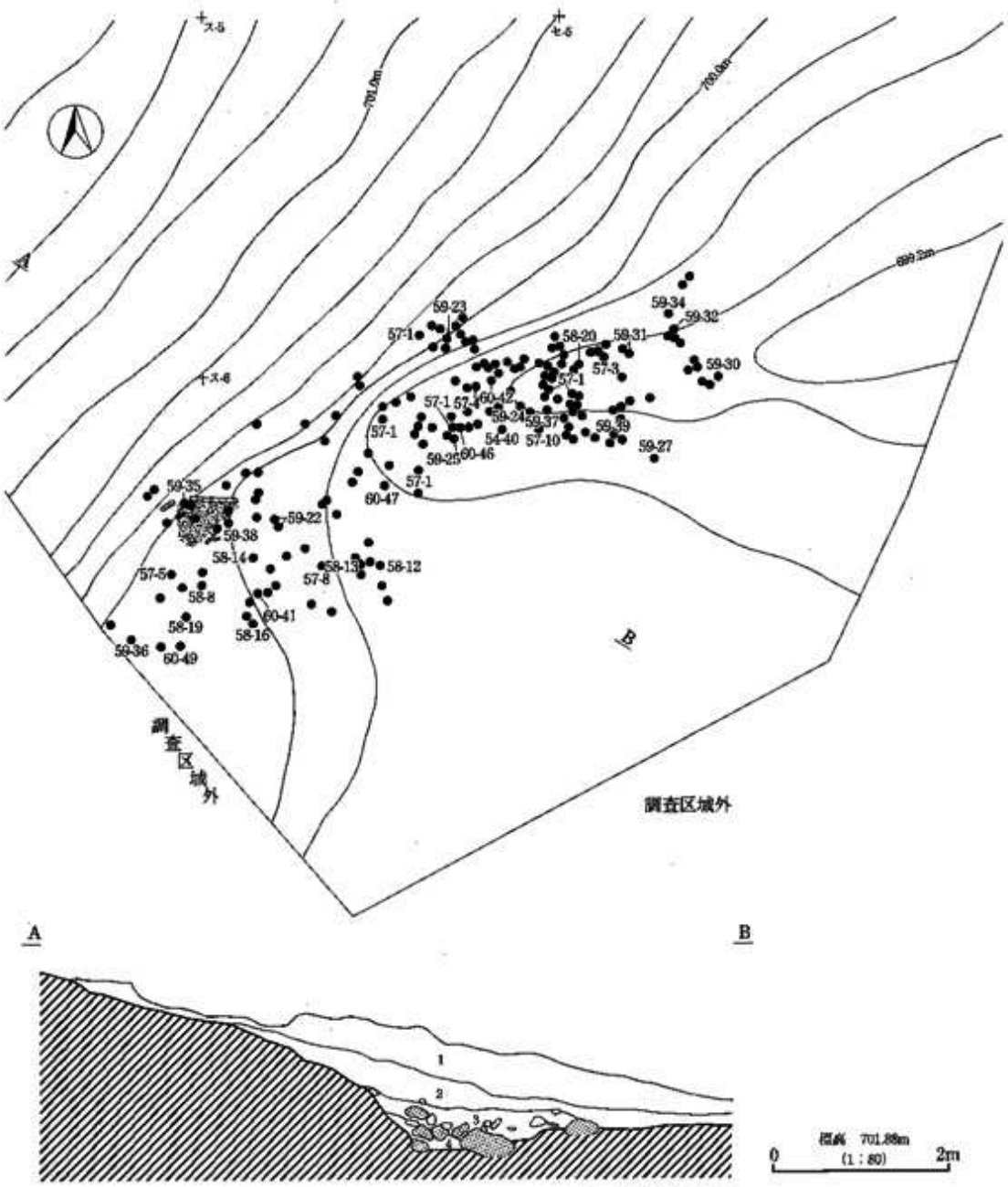


第55図　1号方形周溝墓出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
8	甕	18.7	33.5	7.2	外面　口縁部ハケメ後、ヨコミガキ　胴部ハケメ後、タテミガキ 内面　口縁部ハケメ後、ヨコミガキ　胴部上ヘラナデ　胴部下ハケメ	7.5YR7/4　にぶい橙 径0.5mmの白色・黒色・茶色粒子を含む
9	甕	14.7	(14.1)	――	外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ？　器面荒れている 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	7.5YR6/6　橙 径1mm以下の白色・黒色粒子と径2mm以下の赤色粒子・小石を含む
10	甕	――	(11.5)	6.8	外面　粗いハケメがわずかに残る 内面　ヘラナデ（内外面　焼成良好）	7.5YR6/6橙(内面) 径0.5mmの白色・黒色・茶色粒子含む
11	小型丸底壺	(14.1)	(7.1)	――	外面　ミガキ 内面　ミガキ（内外面　焼成良好）	7.5YR7/4　にぶい橙 径0.5mm以下の白色・黒色・赤色粒子と径2mm以下の茶色粒子を含む
12	S字台付甕	――	(7.8)	(9.9)	外面　ハケメ 内面　脚部指ナデ　胴部ナデ？	7.5YR8/4　浅黄橙 径1mm以下の赤色粒子を含む
13	小形台付甕	――	(4.5)	(8.2)	外面　ハケメ？ 内面　坏部ミガキ　脚部ナデ(内外面焼成良好)	7.5YR6/6　橙 径1mm以下の白色粒子と径5mm以下の黒色粒子を含む

第27表　1号方形周溝墓出土遺物観察表②

第５節　埋没谷と遺構外出土遺物



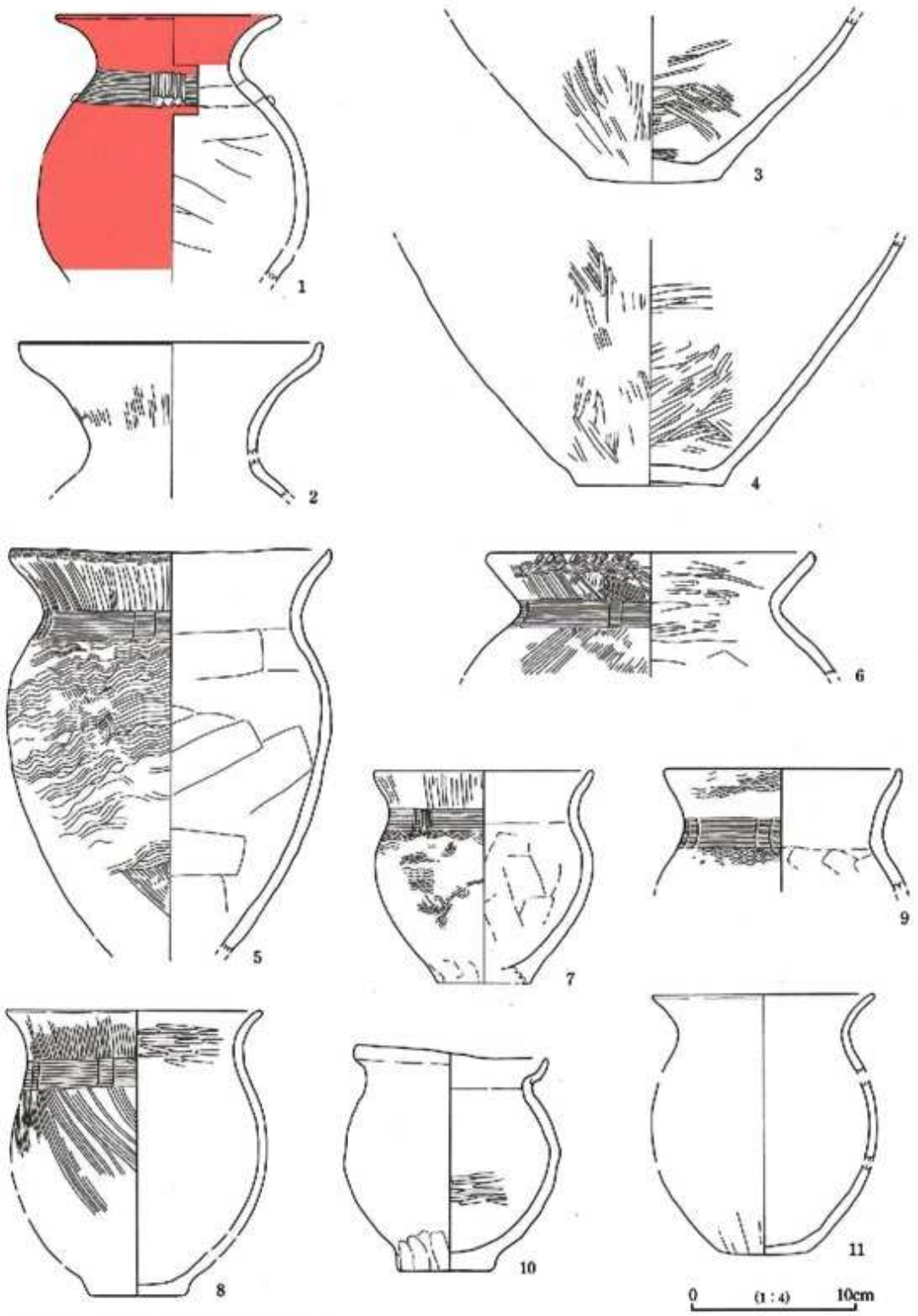
1層　褐灰色土（10YR4/1）
しまり、粘性あり。白色粒子、炭化物を微量含む。

2層　黒褐色土（10YR3/1）
しまり粘性あり、赤色粒子、白色粒子を含む。（須恵器を含む）

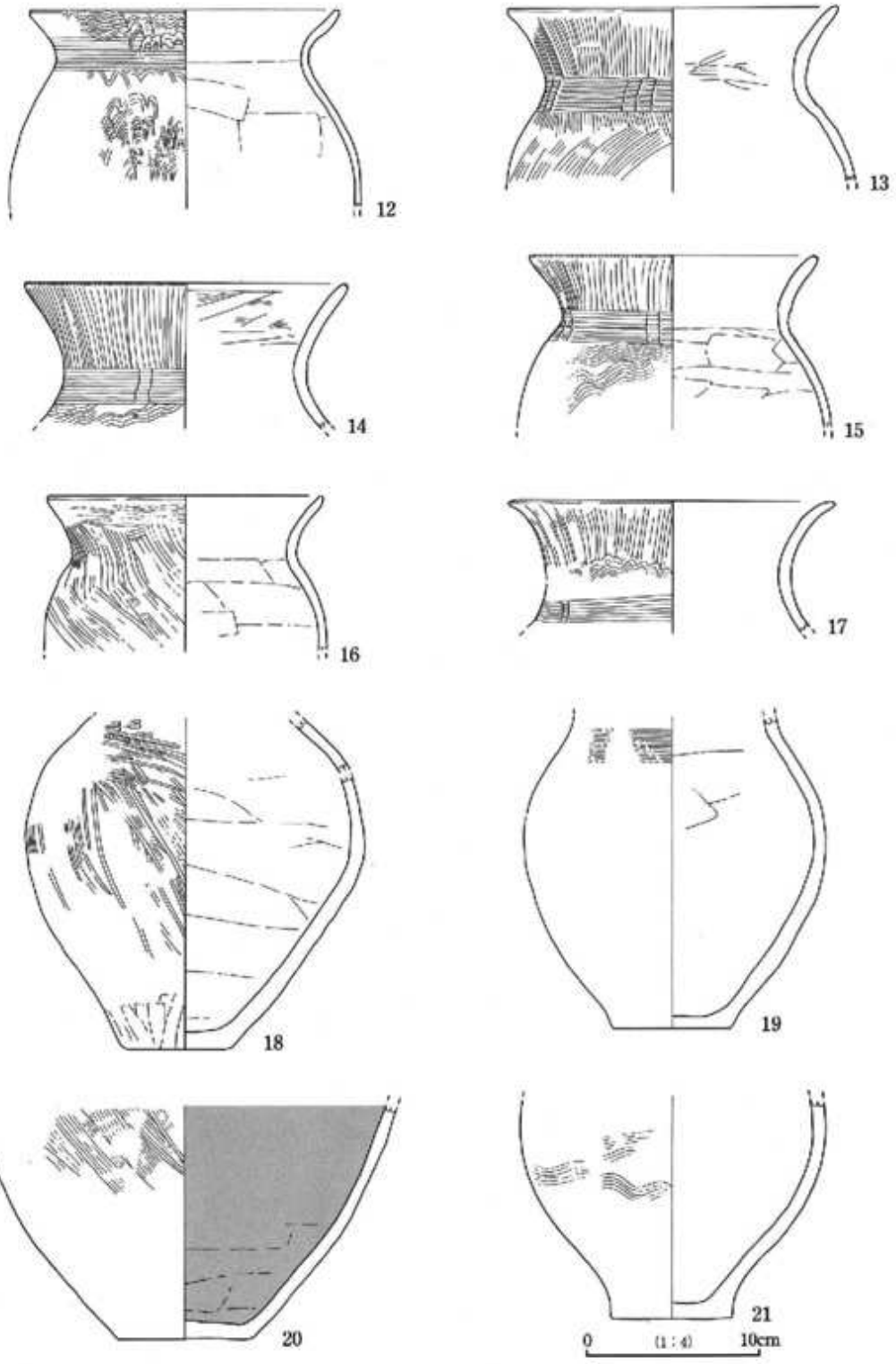
3層　黒色土（10YR2/1）
しまり粘性強く、炭化物を多量に含む。（弥生包含層）

4層　暗褐色土（10YR3/3）
しまり粘性強く、ローム粒子を多く含む。

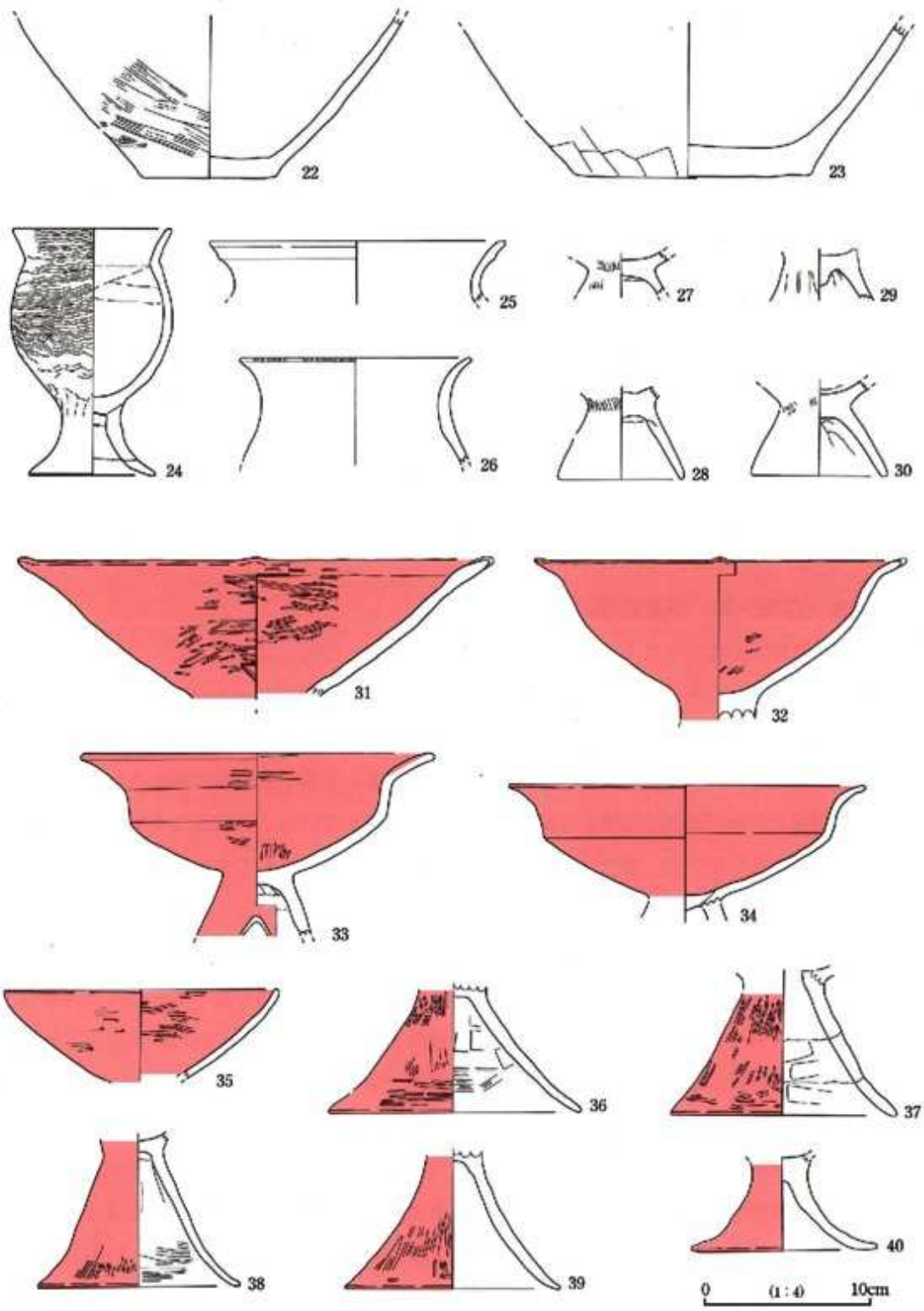
第56図　Ⅳ区埋没谷遺物出土位置及び全体図



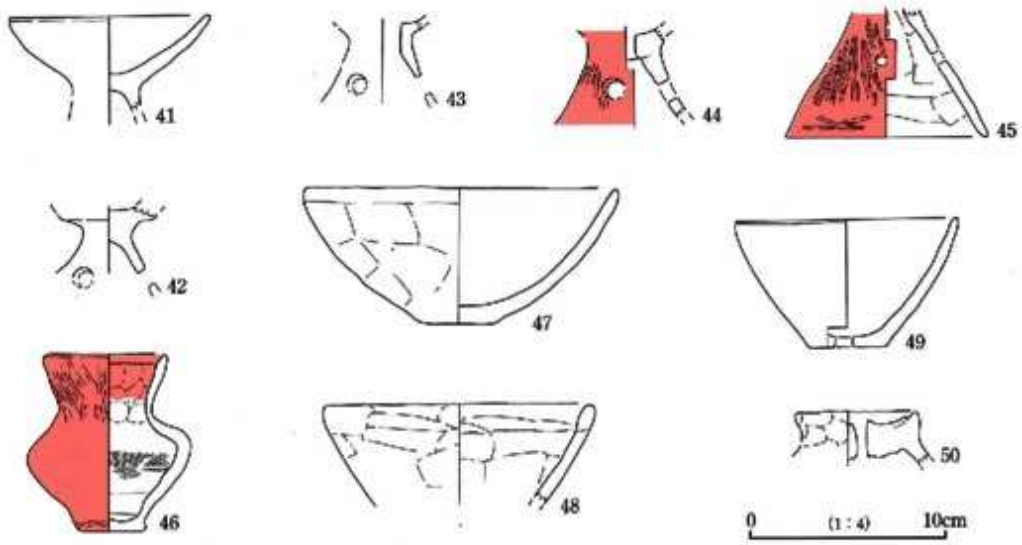
第57図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図①



第58図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図②



第59図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図③



第60図　Ⅳ区埋没谷出土遺物実測図④

(1)埋没谷（第56～60、写真図版三十二～三十四）

本址は、調査区上段の台地南よりで検出された弥生時代の埋没谷である。遺物が検出された範囲はP－シー7・8、P－シー6・7・8、P－ス－5・6・7・8、P－セー5・6・7、P－ソー5Grである。谷は巨視的にみると遺跡が存在する蓼科山麓の支脈から派生する谷で北東側に傾斜し延びている。遺物が出土した標高は699.2～700ｍ前後である。土器が集中的に検出された面積は93㎡ほどの範囲であり、遺物は山側から流れ込んだ状態を示していた。谷底面はやや凹凸があり、人頭大の礫が散乱していた。遺物は堆積土３層下面からまとまって出土する傾向にあった。また一部焼土と炭化材が確認された。

谷より出土した土器の内残存率の良い物を中心に50点図示した。なお、器種に偏りが出ないように配慮したが、出土土器の内甕が圧倒的に多く、次に高坏、壺の順であった。これら図示した遺物の内31・33・44・45・46の５点以外すべては二次焼成を受け器面が荒れていた。ただ、この５点についても出土位置は離れており一括廃棄された状況ではなかった。

これら遺物の性格はその殆どが接合作業を行っても完形とならないことや、出土した土器がほぼ同一時期の所産であることなどから谷上部に展開する当該期の集落址からの廃絶土器と考えられる。ただ、遺物の出土が限られた範囲であることや二次焼成を受けているものが殆どであること等から、何らかの理由による意図的な土器一括廃棄の可能性も指摘できるのかもしれない。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	壺	13.7	〈16.3〉	——	外面 頸部に14本一組の櫛描横走平行線文を施文後、ほぼ等間隔に4帯櫛描垂下文が施され、その垂下に3個づつ円形浮文が貼り付けされている 赤彩 内面 胴部指ナデ 口縁部から頸部には赤彩 ※内外面共に剥離著しい	2.5YR6/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
2	壺	18.4	〈9.4〉	——	外面 口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ 内面 ナデ ※内外面磨耗著しい 内外面赤彩?	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子と赤色粒子少量含む
3	壺	——	〈10.1〉	8.1	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多く含む
4	壺	——	〈14.9〉	8.9	外面 ハケメ後ヘラミガキ 器面荒れている 内面 ヘラミガキ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
5	壺	19.5	〈24.5〉	——	外面 口縁部は縦位のハケメ 胴部は斜位のハケメ後、口唇部は2～3本一組の櫛描波状文がだから右へ施され、胴部には7本?一組の櫛描波状文が上から下へ施され、その後頸部には10本一組の櫛描簾状文（2連止め・左回り）が施されている 内面 ヘラナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子を微量と砂粒を多く含む
6	壺	(20.0)	〈7.5〉	——	外面 口縁部から胴部上位に単位不明の櫛描斜走平行線文が横位羽状に施された後、頸部には9本一組の櫛描簾状文（2連止め・右回り）が施されている 口縁部上半部に4本一組の櫛描波状文が施され、その後口唇部にはヘラ描きの刺突文が施されている 内面 口縁部ヘラミガキ 胴部ヘラナデ	2.5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
7	小形壺	13.4	12.9	(5.5)	外面 口縁部は縦位のハケメ 胴部下位はヘラナデが施され、胴部上位から胴部中位に櫛描波状文（単位不明）が施された後、頸部に7本一組の櫛描横走平行線文が施され、その施文上に5本一組の垂下文が施されている 内面 口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
8	壺	15.5	17.3	(5.8)	外面 口縁部は縦位の胴部上位から、胴部中位は斜位のハケメが施された後、頸部は9本一組の櫛描簾状文（2連止め・左回り）が施されている 胴部下位調整不明 内面 口縁部ヘラミガキ 胴部ナデ	7.5YR7/4 橙 径1～2㎜の白色粒子をやや多く含む
9	壺	14.4	〈7.5〉	——	外面 口縁部から胴部上位に単位不明の櫛描波状文が施された後、頸部には12本一組の櫛描波状文（2連止め・左回り）が施されている 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
10	小形壺	11.9	13.2	5.5	外面 ヘラナデ 胴部に櫛描波状文らしき櫛描があるが不明瞭で把握できない 内面 胴部ミガキ	2.5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
11	小形壺	(13.4)	〈15.7〉	5.4	外面 胴部下位ヘラナデ 器面荒れている 内面 ナデ	2.5YR6/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
12	壺	17.8	〈11.5〉	——	外面 胴部に櫛描波状文（単位不明）を上から下へ施文後、頸部には10本一組の櫛描横走平行線文が施され、その後、口縁部に櫛描波状文（単位不明）が上から下へ施されている 内面 口縁部ヨコナデ 胴部上半ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多く含む
13	壺	19.0	〈9.5〉	——	外面 口縁部から胴部上位に5～6本一組の櫛描縦走線文と櫛描斜走線文を施した後、頸部には12本一組の櫛描簾状文（3連止め・左回り）が施されている 内面 ヘラミガキ	7.5YR6/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
14	壺	(18.7)	〈8.3〉	——	外面 口縁部に5本一組の櫛描縦走平行線文、胴部上位に単位不明の櫛描波状文が施された後、頸部に10本一組の櫛描簾状文（2連止め・左回り）が施され、口唇部に櫛状の刻目が施されている 内面 ハケメ調整後、ヘラナデ	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
15	壺	16.5	〈9.9〉	——	外面 口縁部に4本一組の櫛描縦走平行線文、頸部には4本一組の櫛描簾状文（2連止め・左回り）が2帯施され、その後、胴部上位に5本一組の櫛描波状文が施されている 口唇部にはヘラガキの刻目が施されている 内面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ 胴部上位ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む

第28表 Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表①

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
16	甕	15.9	〈9.0〉	——	外面 口縁部に左回りのハケメ 頸部から胴部上位には斜位のハケメが上から下へ施されている 内面 口縁部ヨコナデ 胴部上位ヘラナデ	5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
17	甕	18.7	〈7.6〉	——	外面 口縁部に縦位のハケメ後、頸部には櫛描波状文（磨耗のため単位不明）と6本一組の櫛描簾状文（2連止め・右回り）が施されている 内面 器面荒れている 調整不明	5YR6/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子少量と砂粒を多量含む
18	甕	——	〈19.1〉	5.9	外面 胴部下位はヘラナデ 胴部上位から胴部中位はハケメ後、櫛描斜走線文が下から上へ施され、その後、胴部上位にヘラガキと刺突文が施されている 内面 ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と白色粒子を多く含む
19	甕	——	〈17.9〉	6.9	外面 胴部上位に櫛描簾状文が施されているのがみられる 磨耗著しい 内面 ナデ ※外面に煤付着	5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
20	甕	——	〈13.4〉	7.8	外面 胴部中位はハケメ 胴部下位は器面荒れている調整不明 内面 ナデ 黒色化している	2.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を多量含む
21	甕	——	〈12.8〉	(6.9)	外面 磨耗著しい 底部外周はナデ 胴部中位には櫛描波状文が施されている 内面 ナデ	5YR6/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子を微量と白色粒子を少量含む
22	甕	——	〈9.8〉	8.2	外面 ハケメ 内面 ナデ？	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を微量と砂粒を多量含む
23	壺	——	〈9.4〉	14.4	外面 ヘラナデ 底部ナデ 内面 ナデ	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多く含む
24	台付甕	(9.6)	14.9	7.7	外面 口縁部から胴部下位まで4本一組の櫛描波状文が充填されている 脚部ヘラナデ 内面 ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多く含む
25	S字?台付甕	(18.0)	〈3.8〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ	5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
26	甕	(14.2)	〈6.5〉	——	外面 ナデ？口縁部にヘラガキによる刻目が施されている 内面 ナデ	2.5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の砂粒と白色粒子を多く含む
27	台付甕	——	〈2.6〉	——	外面 ハケメ 内面 坏部ナデ 脚部指ナデ	5YR5/2 灰褐 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
28	台付甕	——	〈5.6〉	(7.7)	外面 体部ヘラミガキ 脚部磨耗著しく調整不明 内面 ナデ	5YR5/2 灰褐 径2～3㎜の砂粒を多く含む
29	台付甕	——	〈3.1〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒と径2～3㎜の赤色粒子を微量含む
30	台付甕	——	〈5.8〉	8.2	外面 ハケメ 内面 体部ナデ 脚部指ナデ	5YR6/6 橙 径2～3㎜の白色粒子を多く含む
31	高坏	(28.9)	〈8.4〉	——	外面 斜位及び横位のヘラミガキ・赤彩 内面 斜位及び横位のヘラミガキ・赤彩 口縁部端部にほぼ等間隔で三角形の突起を4つ有するものと思われる（現存は2つ）	7.5YR7/4 にぶい橙(断面) 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
32	高坏	(22.6)	〈9.7〉	——	外面 磨耗著しく調整不明 赤彩 内面 ヘラミガキ 赤彩 ※口縁部端部に三角形の突起が1つ現存するが4ヶ所に有していたものか？	2.5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
33	高坏	21.4	〈11.0〉	——	外面 ヘラミガキ・赤彩 内面 坏部ヘラミガキ・赤彩 脚部指押さえ後、ナデ ※脚部に焼成前に穿孔された三角形の透し孔を2孔有する	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の白色粒子を少量含む
34	高坏	21.7	〈7.5〉	——	外面 磨耗著しく調整不明・赤彩 内面 磨耗著しく調整不明・赤彩	2.5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む

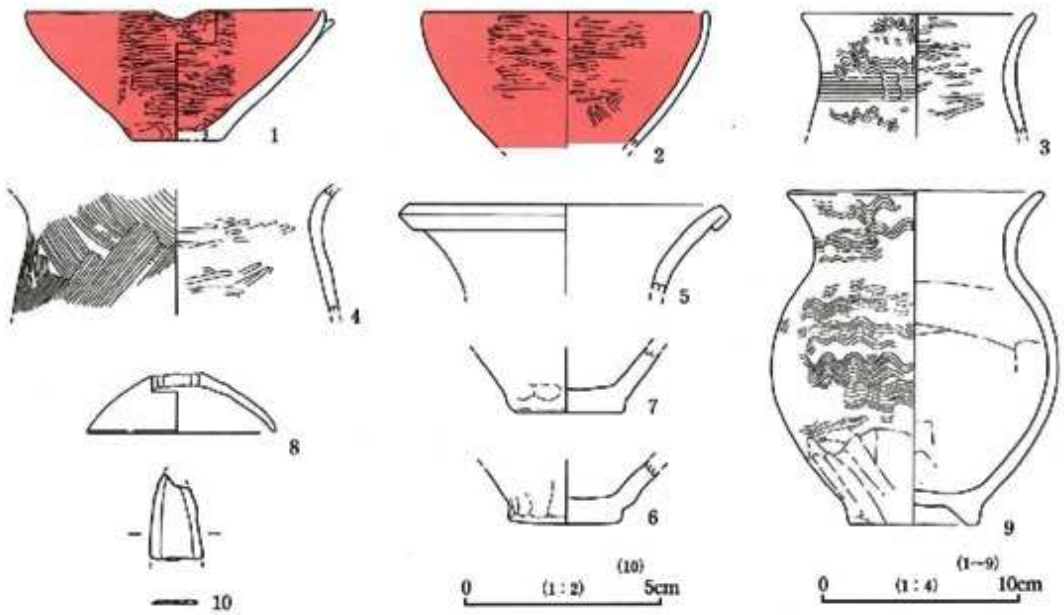
第29表 Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表②

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
35	高坏	16.7	〈5.5〉	——	外面 横位ヘラミガキ・赤彩 内面 横位ヘラミガキ・赤彩	5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
36	高坏	——	〈7.6〉	15.3	外面 ハケメ後脚部上位は縦位のヘラミガキ 脚部下位は横位のヘラミガキ・赤彩 内面 ハケメ後、脚部上半はヘラナデ	5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を少量含む
37	高坏	——	〈8.6〉	13.6	外面 縦位ヘラミガキ後、裾部は横位のヘラミガキ・赤彩 内面 ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を少量含む
38	高坏	——	〈9.4〉	12.3	外面 ハケメ後、ナデ・赤彩 内面 坏部調整不明・赤彩	5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多く含む
39	高坏	——	〈8.3〉	13.1	外面 ハケメ後、縦位のヘラミガキ及び横位のヘラミガキ・赤彩 内面 磨耗著しく調整不明	5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を多量に含む
40	高坏	——	〈5.8〉	11.2	外面 磨耗著しく調整不明・赤彩 内面 ナデ 坏部は赤彩 ※二次焼成あり	5YR6/8 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
41	高坏	10.3	〈4.9〉	——	外面 ヘラナデ？ 内面 ナデ？	5YR6/6 橙 径1～2㎜の砂粒と赤色粒子を含む
42	高坏	——	〈3.5〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ ※焼成前に穿孔された透し孔を3孔有する	5YR6/6 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含み、ざらざらした状態
43	器台	——	〈3.8〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ ※器受部中央に焼成前の穿孔1孔(径1.5cm)を有し、脚部には焼成前の穿孔3孔を有するものと思われる(現存2孔)	7.5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
44	器台	——	〈4.8〉	——	外面 ヘラミガキ・赤彩 内面 ナデ 器受部は赤彩 ※器受部中央に1孔・脚部に4孔 焼成前の穿孔を有する(全孔径1cm)	2.5YR6/8 橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む 径2～3㎜の赤色粒子を少量含む
45	高坏 or 器台？	——	〈6.6〉	10.4	外面 縦位及び横位のヘラミガキ・赤彩 内面 ヘラナデ ※焼成前の外面から穿孔された4孔を有する	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒を含む
46	小形壺	6.4	9.0	3.1	外面 口縁部から頸部ハケメ・胴部ナデ？赤彩 内面 口縁部指押さえ後、口脊部はヨコナデ 胴部ハケメ・底部指ナデ 口縁部上半は赤彩	10YR7/3 にぶい黄橙 径1～2㎜の白色粒子多量と砂粒少量を含む
47	鉢	16.2	7.0	4.0	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
48	鉢	(14.0)	〈5.2〉	——	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の砂粒を多く含み、ざらざらした状態
49	甑	11.5	6.6	4.0	外面 ナデ 内面 ナデ ※底部に焼成前の穿孔1孔を有する	10YR7/4 にぶい黄橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む
50	甑 or ふた	——	〈2.7〉	6.3	外面 指押さえ 内面 指押さえ ※焼成前に外面から穿孔された1孔を有する	10YR6/3 にぶい黄橙 径1～2㎜の白色粒子を多く含む

第30表　Ⅳ区埋没谷出土遺物観察表③

(2)遺構外出土遺物

本項では遺構外から出土した弥生時代の土器・石器について記載する。8は蓋であり、天井部に2カ所の孔が穿たれている。9は台付甕と考えられるが、台の脚端部が面取りしてあったので、図のよう実測した。10は磨製石鏃である。出土位置はI－ス－6Grである。



第61図　遺構外出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
L-ス-1 1	片口鉢	(15.3)	6.7	(4.7)	外面　横位のヘラミガキ・赤彩 内面　横位のヘラミガキ・赤彩	7.5YR3/4　暗赤 径2～3㎜の白色粒子を含む
L-ス-4 2	鉢	(14.6)	〈7.0〉	——	外面　横位のヘラミガキ・赤彩 内面　横位および斜位のヘラミガキ・赤彩	7.5YR3/4　暗赤 径1～2㎜の白色粒子を少量含む
L-ス-5 3	小型壺	(11.9)	〈6.3〉	——	外面　頸部に7本一組の櫛描波状文（2連止め・左回り）を1帯施した後、口縁部～胴部に櫛描波状文（単位不明・左回り）を施文口縁部に刻目文を施す 内面　ハケメ後、横位のヘラミガキ	5YR5/6　明赤褐 径1～2㎜の砂粒を多く含む
H-ソ-20 4	甕	——	〈6.4〉	——	外面　頸部～胴部に櫛描斜走直線文が、横位羽状（左回り）に施されている 内面　横位のヘラミガキ	7.5YR6/4　にぶい橙 径1～2㎜の黒色・白色粒子を少量含む
M-ウ-12 5	壺	(16.0)	〈4.6〉	——	外面　口縁部は粘土紐による貼付口縁　磨耗著しく調整不明 内面　磨耗著しく調整不明	10YR6/4　にぶい黄橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む
M-ア-13 6	小型甕	——	〈3.4〉	5.4	外面　胴部下位に指圧痕あり 内面　ナデ	10YR7/4　にぶい黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
M-エ-13 7	小型甕	——	〈3.3〉	5.7	外面　胴部下位に指圧痕あり 内面　ナデ	10YR7/4　にぶい黄橙(内面) 径1～2㎜の白色砂粒を多く含む
Ⅲ区一括 8	蓋	9.7	3.0	2.6	外面　調整不明 内面　調整不明　※天井部に焼成前の2孔あり内面に煤付着	2.5YR4/8　赤褐 径1～2㎜の砂粒を多く含み、ざらざらしている
H-セ-20 9	台付甕	(13.1)	17.2	(6.5)	外面　高台貼付後、胴部下位ヘラナデ　口縁部から胴部中位は櫛描波状文（単位不明）が下から上へ施されている。 内面　ナデ　※台付部分は面取りしてある	7.5YR7/6　橙 径1～2㎜の白色粒子を含む

第31表　遺構外出土遺物観察

第Ⅲ章　榛名平遺跡における古墳時代の概要

第1節　概　要

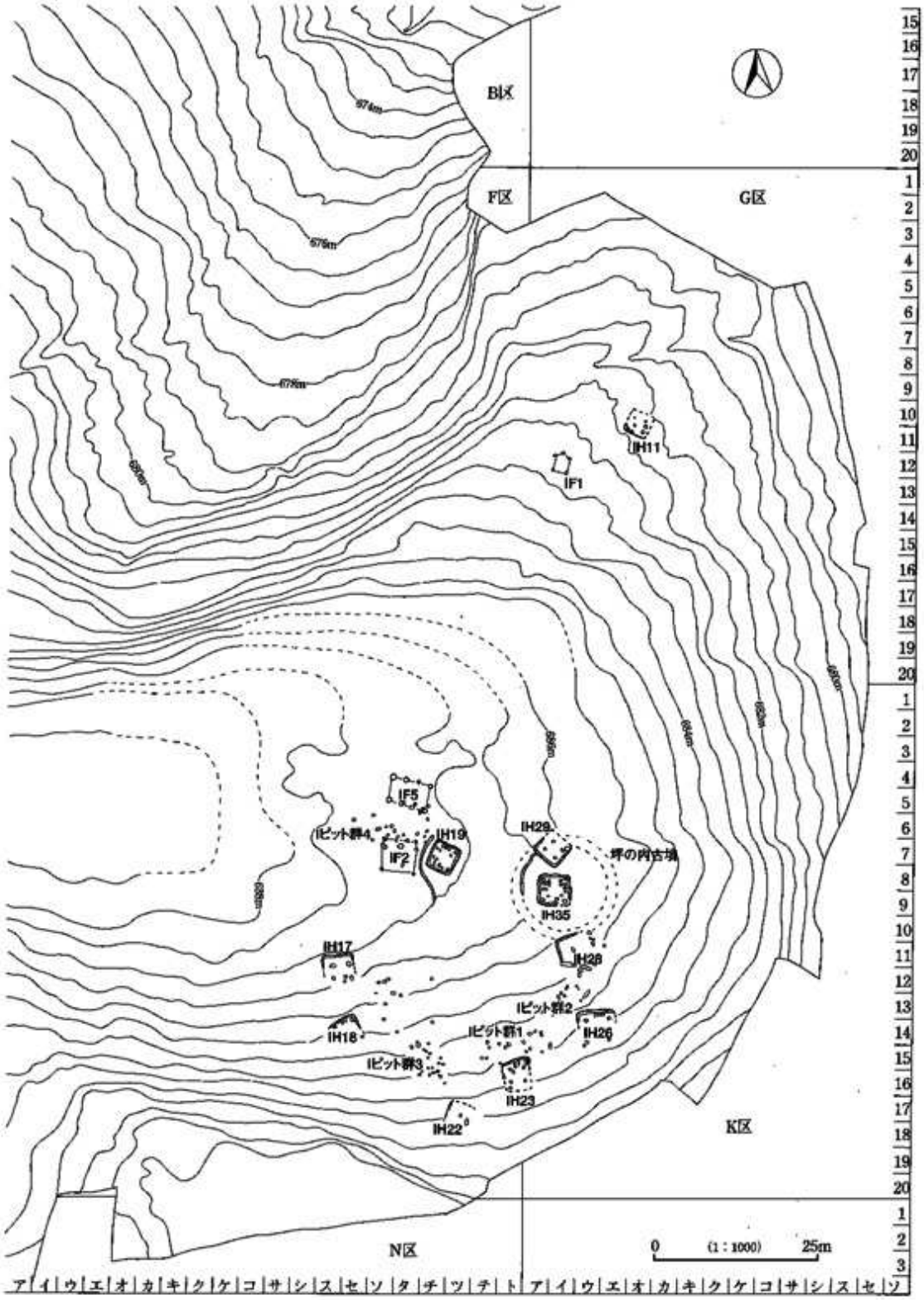
榛名平遺跡における古墳時代の遺構は、竪穴住居址10軒・掘立柱建物址３棟・溝状遺構１本・ピット群・古墳址２基が検出された。土坑に関しては明らかに古墳時代の所産であると把握できるものは無かったが、古墳時代住居址群の広がるJ・K区の南斜面には遺物の出土しなかった土坑もありこの中に当該期の土坑も含まれている可能性はある。遺構の分布は主に調査区中央の台地先端であるJ・K区に住居址群と坪の内古墳があり、調査区上段の台地南側に榛名平１号墳が検出された。この榛名平１号墳は調査当初には未周知の古墳であった。

遺構の帰属時期は各遺構より出土した遺物をもとに決定した。それによると本遺跡の古墳時代住居址はほぼ古墳中期末から後期初頭の単一時期と考えられ、密集する９軒の住居址と掘立柱建物址は同時併存の可能性が非常に高いと考えられた。今日までに佐久地方においては古墳時代の一つの集落単位が把握できる調査が御代田町根岸遺跡しかなかった。根岸遺跡では古墳時代中期中葉の５軒の住居址が検出され集落規模が確認されている。よって今回の調査で確認できた９軒の集落規模は当地域の古墳時代集落址の変遷を考えるにあたって好資料と成り得ると考える。

古墳址に関しては、坪の内古墳と榛名平１号墳が調査された。従来より坪の内古墳は西側に小古墳を従えていることから終末期群集墳の１基と理解されていた。しかし、今回この東側の小古墳が畑作による「ヤックラ」であることが判明し、坪の内古墳は丘陵先端上に立地する単独墳であり、その所産時期も出土遺物の須恵器高坏などの年代観から、当初の考えよりも古く６世紀末～７世紀初頭における築造の可能性が類推できた。主体部である横穴式石室は残念ながら奥壁と一部の床礫を残してほぼ全壊していたが、玄室内より銀張銅芯製耳環１点とガラス小玉13点が出土した。

これとは逆に、榛名平１号墳は急斜面を山側のみ開削し平坦部を作り、石室部分にのみ土を寄せたような所謂「山寄せ古墳」であった。主体部である横穴式石室は山側の半分程が残存しており、立柱石によって擬似的な玄門部をつくる小規模な両袖型横穴式石室であることが解った。遺物は副葬品の中にいっさい玉類を含まず、鉄鏃とやや大型の刀子、須恵器という構成であった。古墳築造時期は出土した須恵器坏の年代観からすると８世紀初頭～第Ⅱ四半期頃と考えられ、佐久平で終末期古墳の１基となるであろう事が考えられた。

以上、榛名平遺跡における古墳時代の遺構・遺物の概要であり、以下各遺構・遺物について竪穴住居址より述べる。



第62図　古墳時代遺構全体図

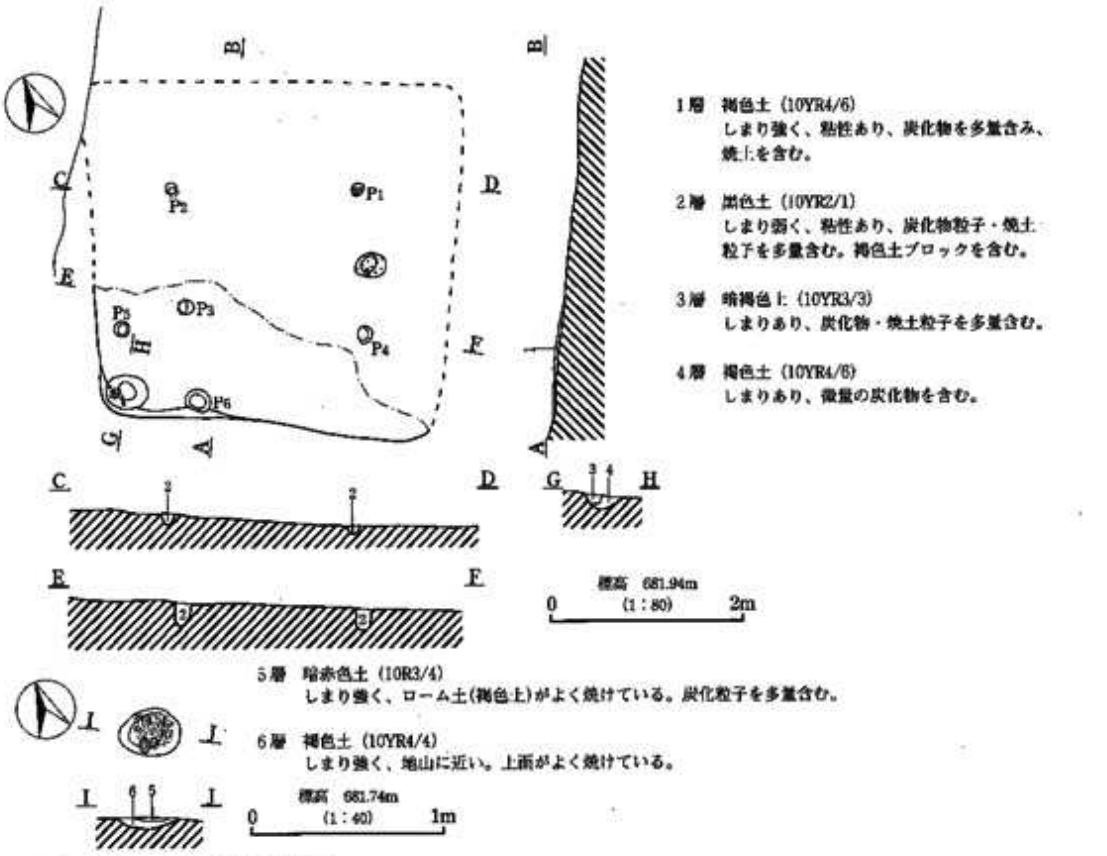
第Ⅳ章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

(1) I H11号住居址（第63図、写真図版三十五）

本住居址は、調査区東よりの台地の先端部であるG－エ－9･10、G－オ－9･10Grに位置する。残存状態は北側が自然の地形によって削平されており、住居址の南側1/3程しか検出できなかった。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.75ｍ（推定）･南壁3.25ｍ･西壁1.25ｍ（残存）3.3ｍ（推定）･東壁3.53ｍ（推定）で、壁高さは南西コーナー付近で5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－24°－Eを示す。住居址の床面積は残存部で3.1㎡、推定で12.9㎡を測る。覆土は単層であり、床はほぼ硬質である。貼り床は確認されず地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。ピットは6箇所で検出された。規模はP1が径12cm･深さ8.5cm、P2が径12cm･深さ11cm、P3が径16cm･深さ23cm、P4が径15cm･深さ23cm、P5が径15cm･深さ5.5cm、P6が径26cm･深さ21cmを測る。ピットの検出位置より本址は4本柱の主柱穴でありP1～P4がそれにあたる。また、本址は住居



第63図　I H11号住居址実測図

址南西コーナーに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。土坑の規模は長軸43cm・短軸37cm・深さ18cmを測る。土坑内からは炭化物が検出された。

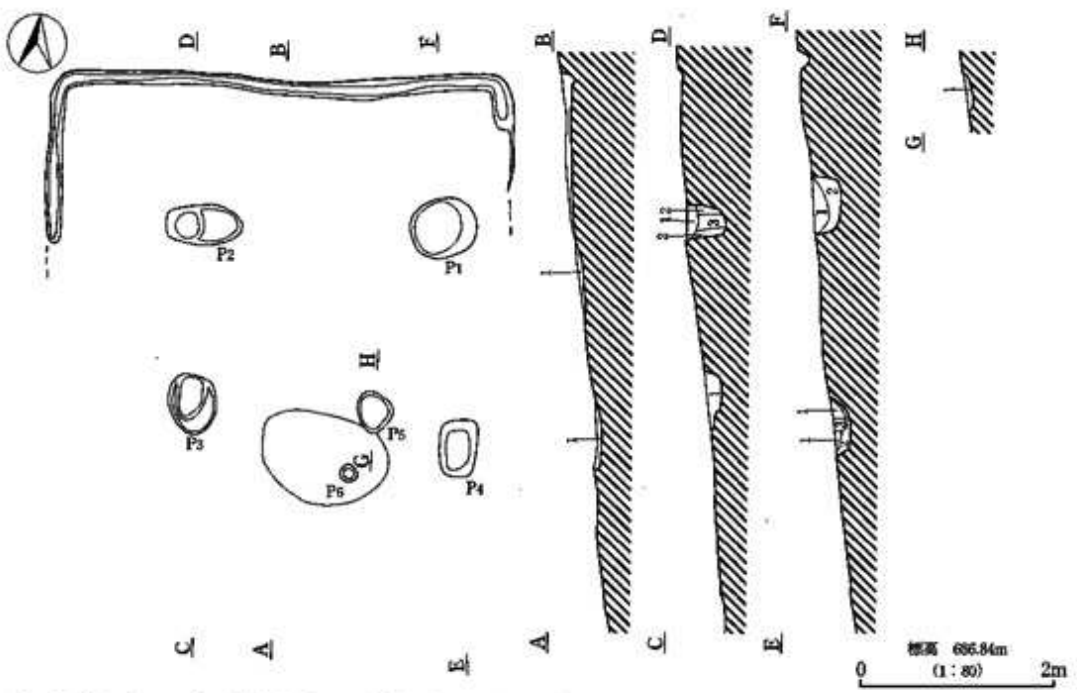
炉址はP1とP4の柱穴間に検出された。形態は円形であり、拳大の礫1点が検出された。規模は長軸32cm・短軸25cmで焼土の厚さは3cmを測る。焼土はよく焼けており硬質化していた。

本址の遺物は貯蔵穴内より土器小片が数点出土したに止まった。本址は出土遺物が少なく時期確定の根拠に薄いが、炉址をもつ事と出土した土器片が古墳時代前期の特徴をもつものであることから一応古墳前期に位置づけておきたい。

(2) I H17号住居址（第64・65図、写真図版三十六①）

本住居址は、調査区中央の台地南斜面であるJ－ス－11・12、J－セ－11・12Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形傾斜により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.54m・西壁1.72m（残存値）・東壁1.20m（残存）で、壁高さは北壁中央で10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－8°－Wを示す。住居址の床面積は検出部で10㎡・推定で22.6㎡を測る。覆土は単層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は東西壁の

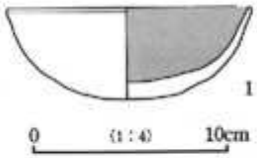


1層　褐灰色土（10YR4/1）　浅黄橙色土(10YR8/3)岩盤ブロック・粒子を含む。

2層　灰黄褐色土（10YR4/2）　黄橙色土(10YR8/6)粒子多量含む。

3層　黒褐色土（10YR3/2）　柱痕。

第64図　I H17号住居址実測図



第65図　ⅠH17号住居址出土遺物実測図

一部と北壁全体に確認された。溝幅は10～22cm、深さは4cmを測る。断面形はU字形である。柱穴は6カ所確認され、規模はP1が径69cm・深さ25cm、P2が径78cm・深さ16cm、P3が径63cm・深さ19cm、P4が径57cm・深さ25cm、P5が径41cm・深さ12cm、P6が径17cm・深さ3cmをそれぞれ測る。これらピットの内P1～P3・P5は検出位置より柱穴と考えられる。カマド等は検出されなかった。

本址よりの出土遺物は図示した土師器椀の他に土師器片が少量出土した。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	椀	12.6	4.7	――	外面　ナデ 内面　ヘラナデ・黒色処理	5YR7/4　橙 径1～2mmの赤色粒子微量と白色の砂粒を多量含む

第32表　ⅠH17号住居址出土遺物観察表

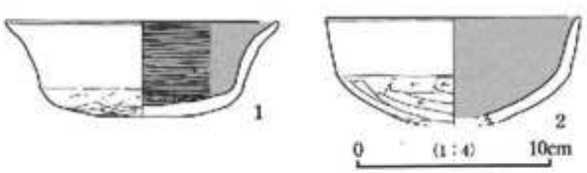
(3) ⅠH18号住居址（第66・67図、写真図版三十六②）

本住居址は、調査区中央部台地の先端部南斜面であるJ－ス－14,J－セ－13・14Grに位置する。残存状態は南側が地形傾斜のため削平され、住居址中央部は畑耕作溝によって攪乱を受けている。

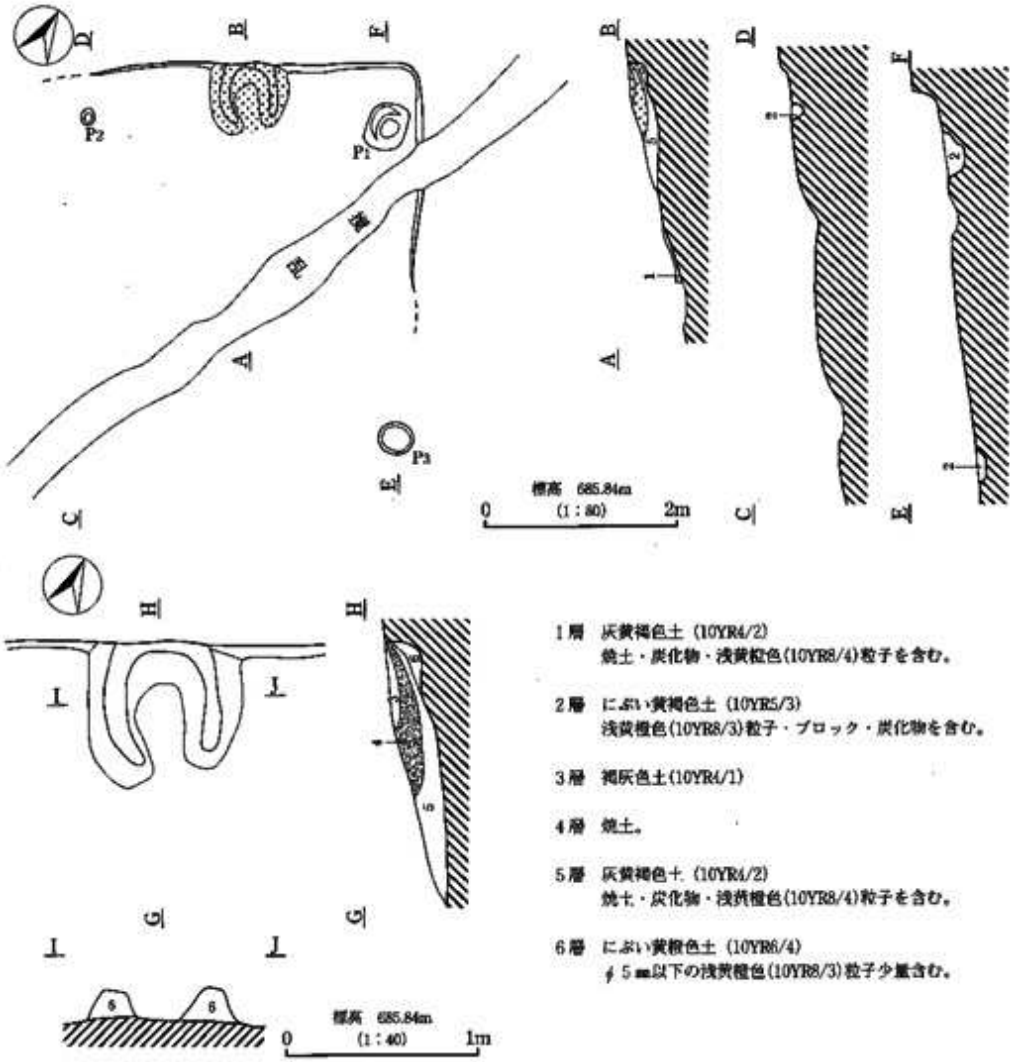
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央部に造られていた。規模は北壁3.38m(残存)・東壁2.30m(残存)で、壁高さは北壁カマド際で26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－30°－Wを示す。住居址の床面積は推定で14.8㎡を測る。床は全体に軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径54cm・深さ21cm、P2が径15cm・深さ21cm、P3が径36cm・深さ10cmを測る。これらピットは検出位置より主柱穴と考えられるが、やや住居址コーナー部によっている。

カマドは北壁ほぼ中央部に造られていた。煙道部が住居址外に飛び出ないタイプのカマドであり、両袖が良好に検出できた。規模は火床部幅が25cm、各袖長さは64～73cm・幅9～12cmを測る。火床部焼土の厚みは14cmを測り、よく焼けていた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、図示した土師器坏以外は甕片が少量出土したのみである。図示した遺物の出土位置は1がカマド東袖脇、2が覆土中である。これらの遺物より本址は古墳中期末から後期前半に位置づけられると考える。



第66図　ⅠH18号住居址出土遺物実測図



第67図　ⅠH18号住居址実測図

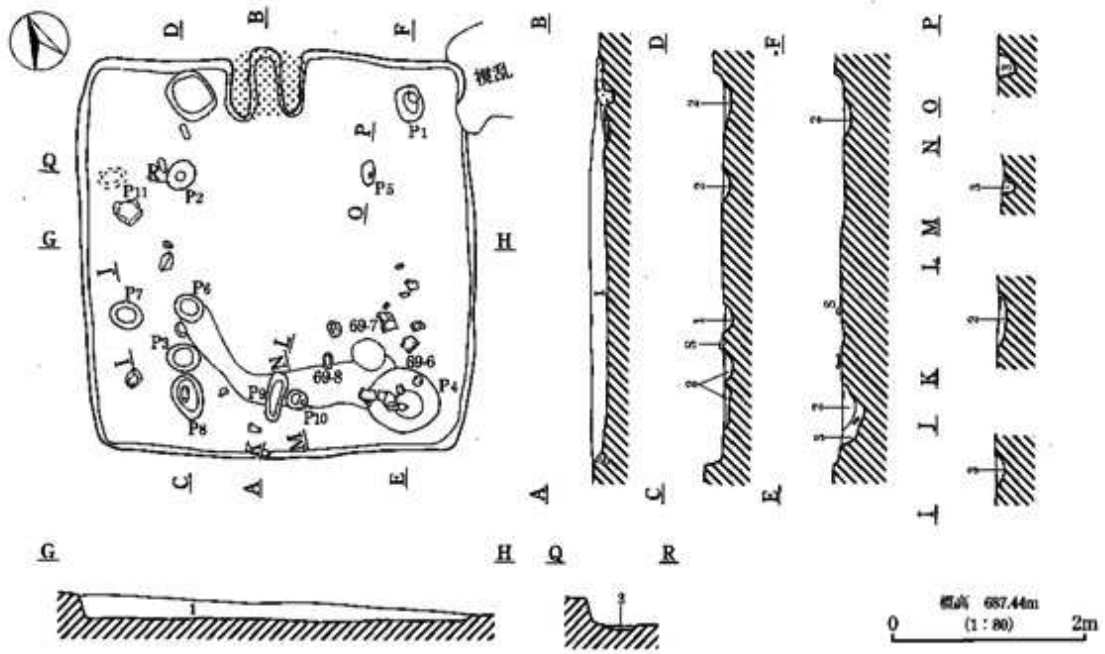
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	坏	(14.0)	4.9	(10.4)	外面　口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
2	坏	(13.2)	〈5.4〉	――	外面　底部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ 内面　磨滅著しく調整不明・黒色処理	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と白色粒子少量含む

第33表　ⅠH18号住居址出土遺物観察表

(4) I H19号住居址（第68・69図、写真図版三十七）

本住居址は、調査区中央部台地の平坦部であるJ－チー7・8.J－ツー7・8Grに位置する。残存状態は良好であり、本遺跡の中では珍しく4方向の壁が確認できた。

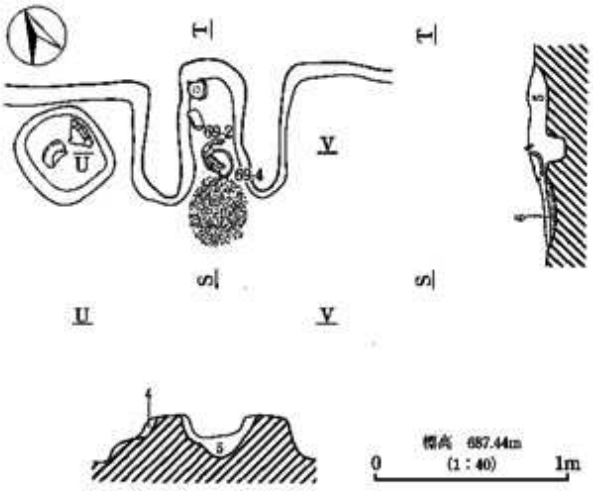
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央部に確認された。住居址規模は北壁3.8m・南壁



1層 にぶい黄褐色土（10YR5/4） 明黄褐色(10YR7/6)粘土粒子・ブロック(不定大)を多量含む。床面近くにおいて炭化物を含む。

2層 にぶい黄褐色土（10YR6/3） 明黄褐色(10YR7/6)粘土多量含む。炭化物含む。

3層 にぶい黄褐色土（10YR5/3） にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック(φ1m大)、炭化物を含む。



4層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）
明黄褐色(10YR7/6)粘土粒子・ブロック(不定大)を多量含む。床面近くにおいて、炭化物を含む。

5層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）
1層中に焼土・灰を多量含む。

6層 焼土。

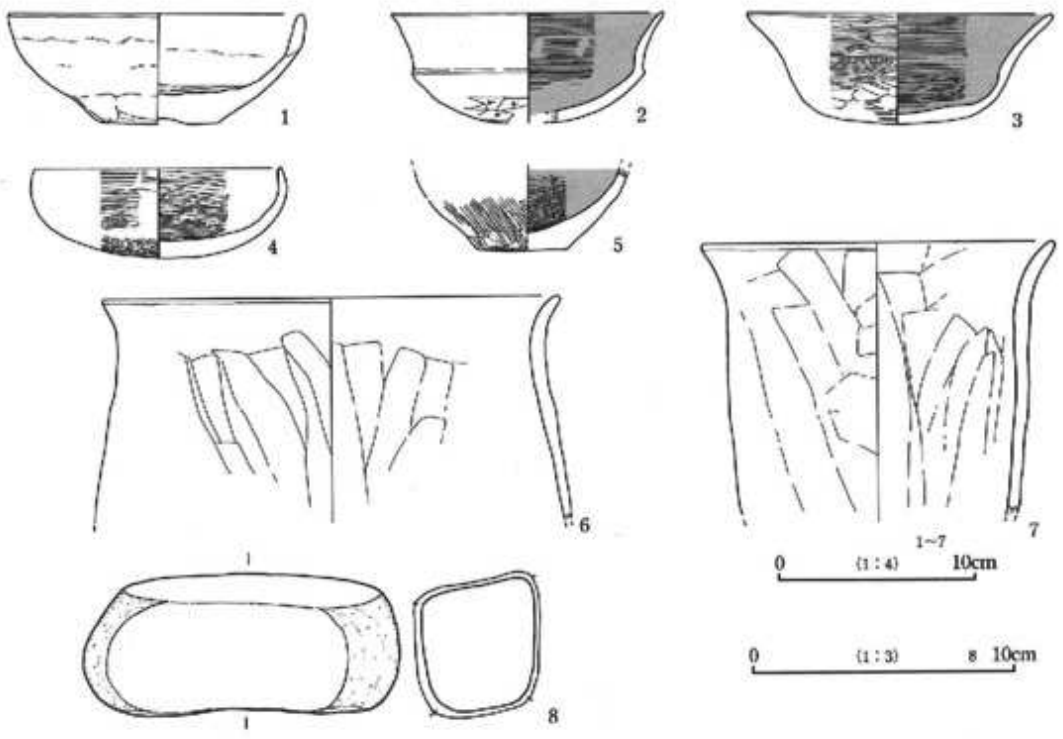
第68図 I H19号住居址実測図

1.60m・西壁3.90m・東壁3.90mで、壁高さは西壁中央部で21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN−25°−Eを示す。住居址の床面積は14.5㎡を測る。覆土は単層で、床面付近で炭化物を含んでいた。床は全体に硬質であり、地山を踏み固めたような土であった。壁溝は確認されなかった。ピットは11カ所検出(内P11は掘り方時)され、規模はP1が径39cm・深さ7cm、P2が径30cm・深さ13cm、P3が径34cm・深さ10cm、P4が径75cm・深さ27cm、P5が径23cm・深さ20cm、P6が径30cm・深さ9cm、P7が径32cm・深さ7cm、P8が径47cm・深さ9cm、P9が径50cm・深さ7cm、P10が径21cm・深さ14cm、P11が径30cm・深さ5cmを測る。掘り方はほぼ平坦であった。また、本址はカマド左脇に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。規模は長軸48cm・短軸42cm・深さ10cmを測る。

カマドは北壁中央部に造られていた。形態は煙道部が住居址壁より飛び出さないタイプのもので、袖は地山掘り残しであった。規模は火床部長さ72cm・幅23cm、袖の長さ70cm前後・幅18〜20cmを測る。火床部焼土の厚みは4cmを測り、よく焼け硬質化していた。

本址よりの出土遺物はカマド・貯蔵穴・住居址南東コーナー部などからまとまって出土した。なお小片で図示できなかったが須恵器ハソウの口縁部破片が覆土より出土している。図示した遺物の出土位置は2と3は覆土中、1・4・5がカマド内、6・7・8は住居址南東コーナー付近である。8の磨り石は重さ49gで石材は輝石安山岩である。なお、覆土中より臼玉が5点出土している(第79図1〜5)。

これらの遺物より本址は古墳中期末から後期初頭に位置づけられる。



第69図　IH19号住居址出土遺物実測図

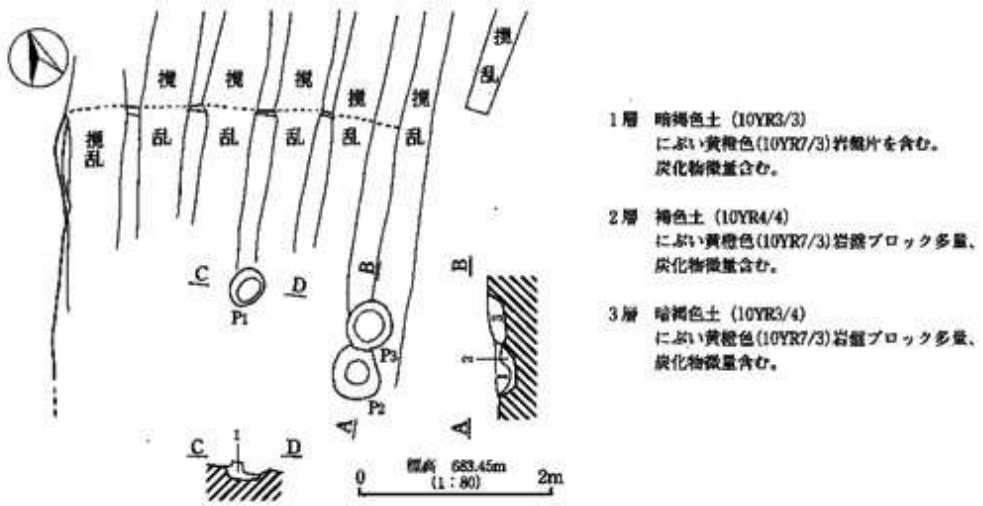
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	椀	15.2	5.7	6.4	外面 口縁部一体部ナデ・底部に粘土を貼付か? 内面 みこみ部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ ※輪積痕あり	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒少量含む
2	坏	(14.0)	〈5.7〉	――	外面 口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理 ※体部に成形時のナデが残る	5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
3	坏	(15.6)	5.7	(9.8)	外面 口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ後、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/4 にぶい橙 砂粒を多く含む
4	坏	12.6	4.6	――	外面 ヘラケズリ後、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
5	甕?	――	〈4.4〉	4.7	外面 ヘラケズリ後、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒多量含む
6	甕	(23.6)	〈11.5〉	――	外面 口縁部ヨコナデ後、胴部縦位のヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ後、胴部縦位のヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と白色砂粒多量含む
7	甕	(18.2)	〈14.1〉	――	外面 口縁部ヨコナデ後、縦位のナデ 内面 口縁部ヨコナデ後、縦位のナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒多量含む

第34表　ＩH19号住居址出土遺物観察表

(5)ＩH22号住居址（第70図、写真図版三十八①）

本住居址は、調査区中央部台地の南斜面であるJ－ツー17・18Grに位置する。残存状態は東と南側が自然の地形により削平され、住居址中央部には耕作による溝が走っており、住居址北西コーナー部分のみの検出に止まった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁2.76ｍ(残存)3.20ｍ(推定)・西壁1.05ｍ(残存)2.72ｍ(推定)で、壁高さは西壁コーナー付近で13㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基準に取るとN－19°－Eを示す。住居址の床面積は残存部で2.4㎡を測る。床はやや硬質であるが、殆ど相浜層の地山であった。壁溝は確認されなかった。



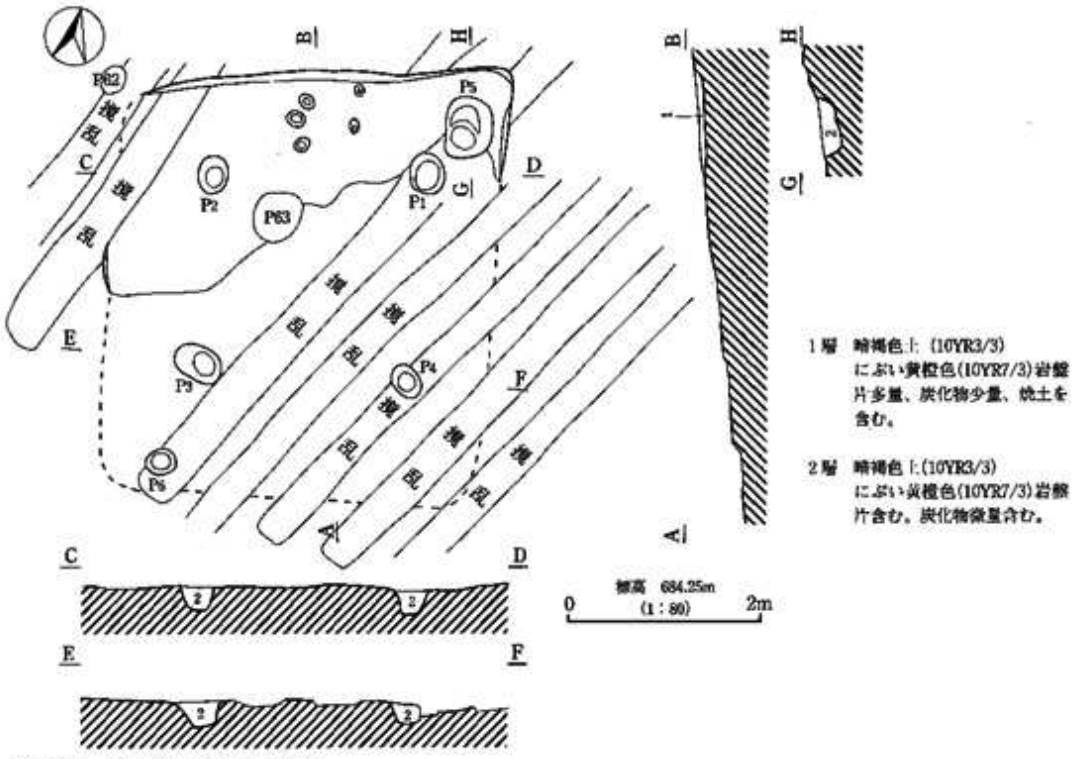
第70図　ＩH22号住居址実測図

ピットは3カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ23cm、P2が径55cm・深さ29cm、P3が径50cm・深さ20cmを測る。本址の出土遺物は覆土中から土師器片が少量出土したのみであるが、本址はこれら遺物の特徴より古墳中期末から古墳後期初頭に位置づけられると考える。

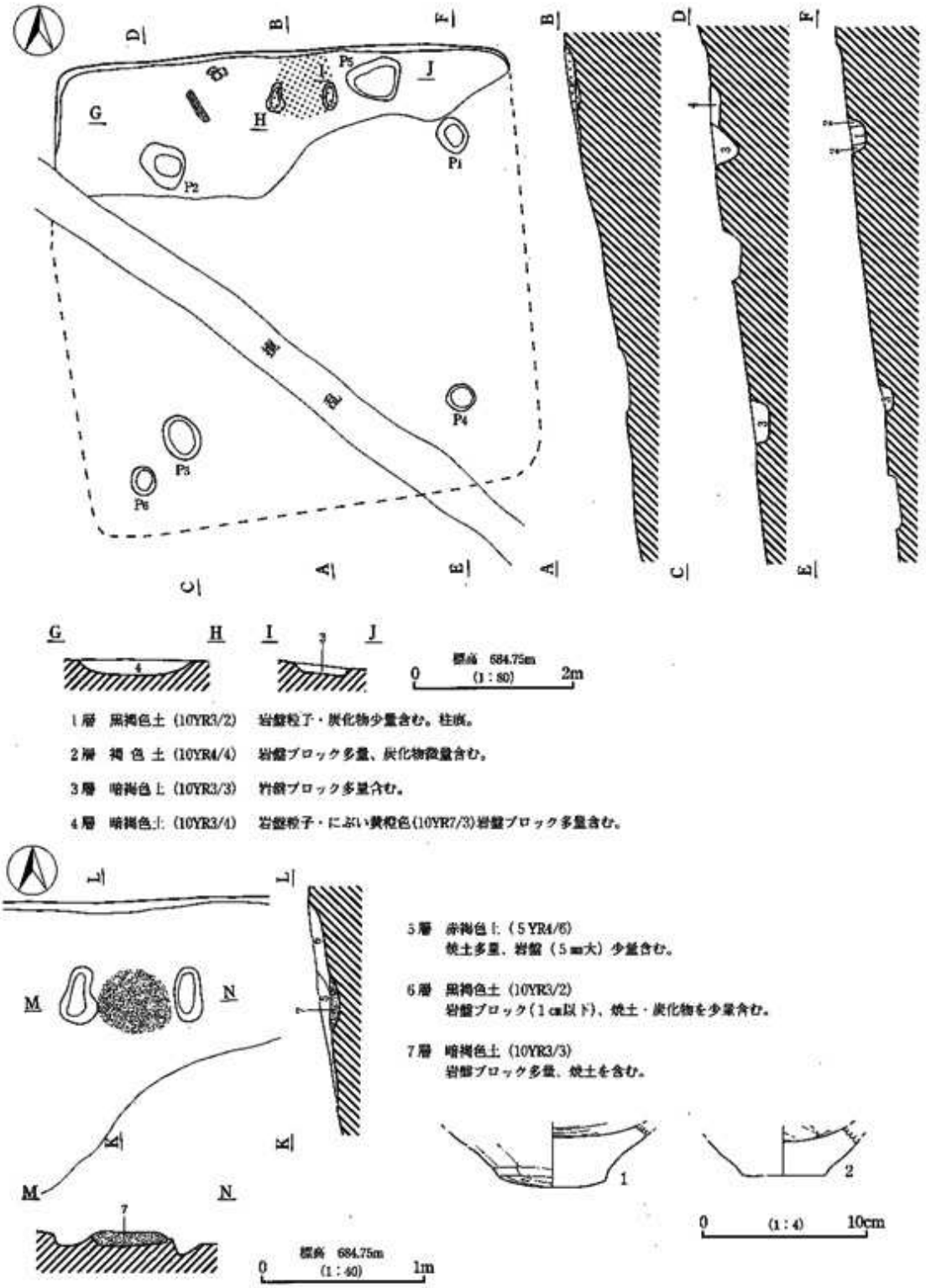
(6) I H23号住居址（第71図、写真図版三十八②）

本住居址は、調査区中央部の台地先端部南斜面であるJ-ト-15・16. K-ア-15・16Grに位置する。残存状態は南側が地形により削平されており、住居址中央部には畑地の耕作溝があり撹乱していた。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であった。規模は北壁3.80m（残存）3.90m（推定）・南壁3.64m（推定）・西壁0.50m（残存）3.90m（推定）・東壁1.13m（残存）4.40m（推定）で、壁高さは北壁中央で8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN-6°-Wを示す。住居址の床面積は推定で16.9㎡、残存で5.53㎡を測る。覆土は単層で、床は地山を踏み固めたような土でやや軟質であった。壁溝は検出されなかった。ピットは6カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ31cm、P2が径37cm・深さ28cm、P3が径50cm・深さ28cm、P4が径36cm・深さ22cm、P5が径60cm・深さ28cm、P6が径30cm・深さ10cmを測る。P1～P4が主柱穴と考えられる。カマドは不明であったが北壁中央部に小ピットと炭化物・焼土が薄く広がる部分があり或いはカマドの消滅した跡とも考えられた。出土遺物は覆土中より土師器が少量出土したが図示可能な物はなかった。



第71図　I H23号住居址実測図



第72図　ⅠH26号住居址及び出土遺物実測図

(7) I H26号住居址（第72図、写真図版三十九）

本住居址は、調査区中央台地の先端部南斜面であるK－ウ－13・14・15、K－エ－13・14Grに位置する。残存状態は南側2／3が地形により削平されており、北側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは住居址北壁中央に確認された。住居址規模は北壁5.46m・西壁1.17m（残存）・東壁0.15m（残存）で、壁高さは北西コーナーで15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は残存で6.7㎡を測る。床はやや硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは7カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ25cm、P2が径57cm・深さ36cm、P3が径56cm・深さ24cm、P4が径37cm・深さ16cm、P5が径62cm・深さ22cm、P6が径32cm・深さ13cm、P7が径64cm・深さ55cmを測る。ピットの検出位置よりP1～P4が主柱穴と考えられ、P1は柱痕も確認された。

カマドは北壁中央に検出された。ただ、両袖は既になく火床面と袖掘り込みのみ確認できた。カマド形態は煙道部が住居址壁より飛び出さないタイプと考えられる。袖掘り込みの長さは33～45cm・幅15～17cmを測る。焼土の厚さは8cmを測る。

本址からの遺物は図示した土器の他は土師器片が少量出土したのみである。図示した遺物の出土位置は共に覆土中である。本址は出土遺物も少なく不確実であるがこれらの遺物より古墳中期末から後期初頭に位置づけられると考える。

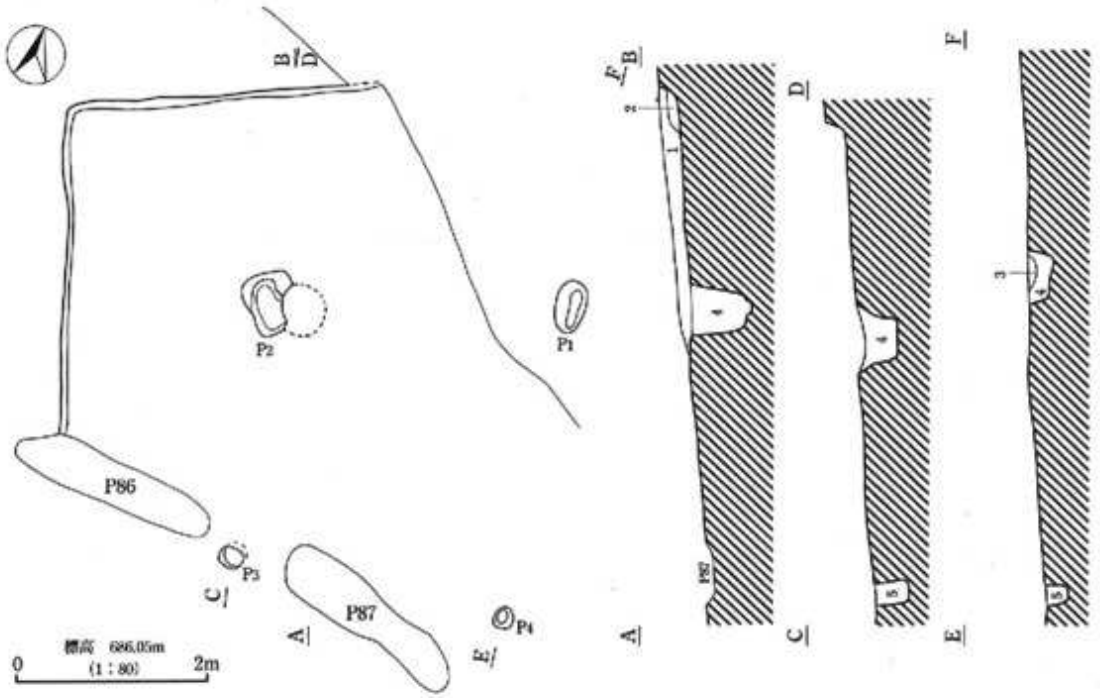
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	甕	――	〈3.9〉	(6.6)	外面　胴部ヘラケズリ後、ナデ 内面　ヘラナデ	2.5YR5/8　明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子を非常に多く含み、砂粒を多く含む
2	甕	――	〈3.0〉	(5.0)	外面　胴部ナデ・底部ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	2.5YR5/8明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子を非常に多く含む

第35表　I H26号住居址出土遺物観察表

(8) I H28号住居址（第73・74図、写真図版四十①）

本住居址は、調査区中央台地の南斜面であるK－イ－10・11、K－ウ－10・11Grに位置する。残存状態は南側が地形により削平され、東側半分が畑の耕作溝により削平されていた。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁3.0m（残存）・西壁2.34m（残存）で、壁高さは23cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN－16°－Wを示す。住居址の床面積は残存で12.2㎡を測る。覆土は2層で炭化物を少量含む。床はやや軟質であった。壁溝は確認されていない。ピットは4カ所が確認された。規模はP1が径52cm・深さ29cm、P2が径68cm・深さ43cm、P3が径26cm・深さ36cm、P4が径22cm・深さ22cmを測る。P1～P4はその検出位置より主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。



1層　灰黄褐色土（10YR5/2）　炭化物少量、にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック(φ1－3cm大）を含む。

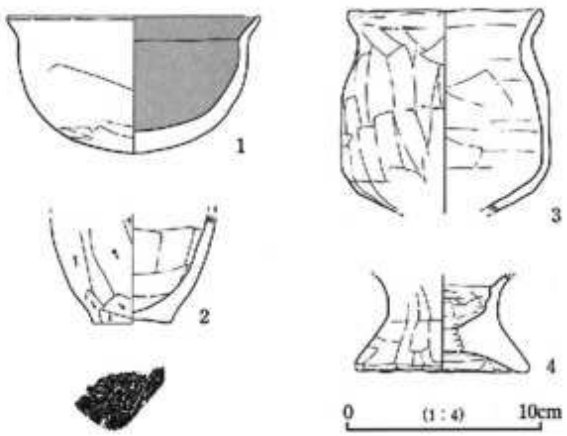
2層　にぶい黄橙土（10YR7/3）　岩盤風土化の次堆積。

3層　黄褐色土（10YR5/6）　粘土質。

4層　灰黄褐色土（10YR4/2）　炭化物・にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤粒子含む。

5層　にぶい黄橙色土（10YR5/3）　炭化物・にぶい黄橙色(10YR7/3)粒子含む。

第73図　ⅠH28号住居址実測図



第74図　ⅠH28号住居址出土遺物実測図

本址からの出土遺物は北壁際から多く出土し、図示した土器もすべて北壁際より出土した。1は土師器坏で内面黒色処理されている。2は土師器小型甕と考えられ、底部が方形を呈する。3と4は同一個体と考えられるが接合点が見いだせなかった。また4の脚接合部分は全体が剥離しているような状態であり、本来は3の底部が貼り付いていたものと思われる。これらの遺物より本址は古墳中期末から後期初頭に位置づけられると考える。

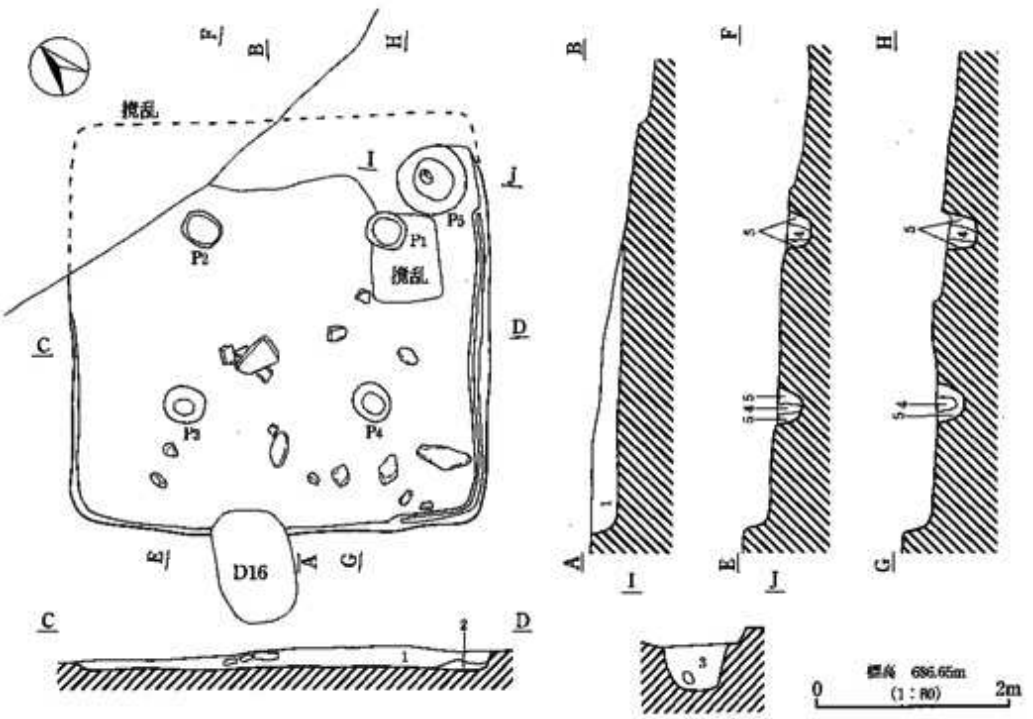
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	坏	(13.0)	7.0	——	外面 口縁部ヨコナデ後、体部ナデ 内面 黒色処理	5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む
2	甕	——	〈5.6〉	(4.0)	外面 縦位ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面 横位ヘラケズリ 底部が方形	2.5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
3	小型甕	(10.2)	〈10.3〉	——	外面 ヘラナデ 内面 横位ヘラナデ	2.5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含み、ざらざらしている
4	台付甕？	——	〈5.0〉	(9.0)	外面 ヘラナデ 内面 坏部・脚部ヘラナデ ※3と同一個体か？	2.5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量含む

第36表　IH28号住居址出土遺物観察表

(9) IH29号住居址（第75・76図、写真図版四十②）

本住居址は、調査区中央部台地の東側先端平坦地であるK－ア－7，K－イ－7・8Grに位置する。残存状態は北側が畑の耕作溝により削平されている他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明である。規模は北壁4.00m（推定）・南壁4.14m・西壁2.44



1層　暗褐色土（10YR3/3）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック(1㎝以下)含む。炭化物少量含む。
2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック多量、炭化物少量含む。
3層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック(1㎝以下)含む。炭化物少量含む。(P5)
4層　暗褐色土（10YR3/3）　岩盤粒子を含む。
5層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　岩盤ブロック多量含む。

第75図　IH29号住居址実測図

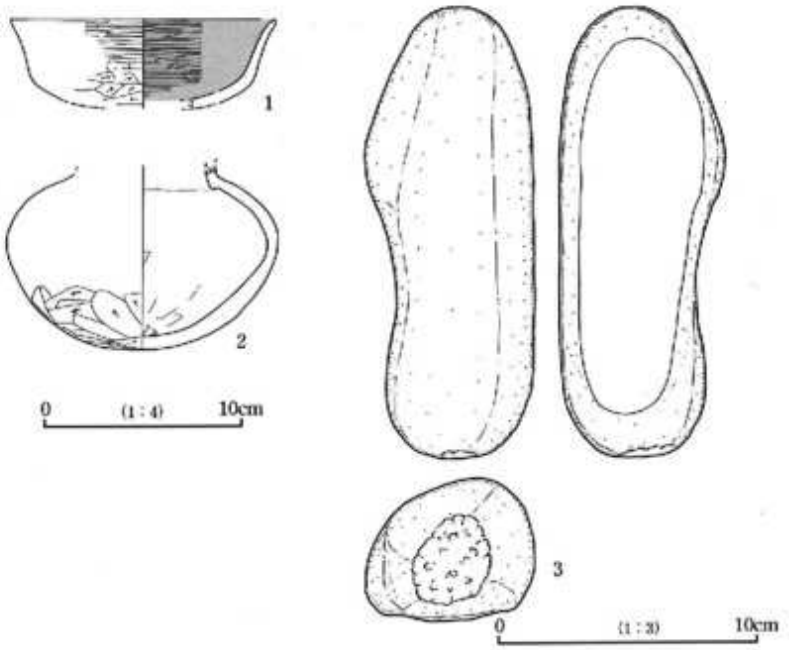
m（残存）3.92m（推定）・東壁3.80m（残存）4.12m（推定）で、壁高さは南壁中央よりで31cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基にするとN－41°－Eを示す。住居址の床面積は残存で13.1㎡、推定で16.9㎡を測る。覆土は2層で炭化物を少量含む。床はやや硬質であった。

壁溝は東壁と南壁の一部に確認された。ピットは5カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ40cm、P2が径41cm・深さ25cm、P3が径41cm・深さ27cm、P4が径40cm・深さ28cm、P5が径70cm・深さ46cmを測る。検出位置よりP1～P4が主柱穴であり、P5は貯蔵穴と考えられる。これらのことから本址のカマドは北壁に造られていたと考えられる。

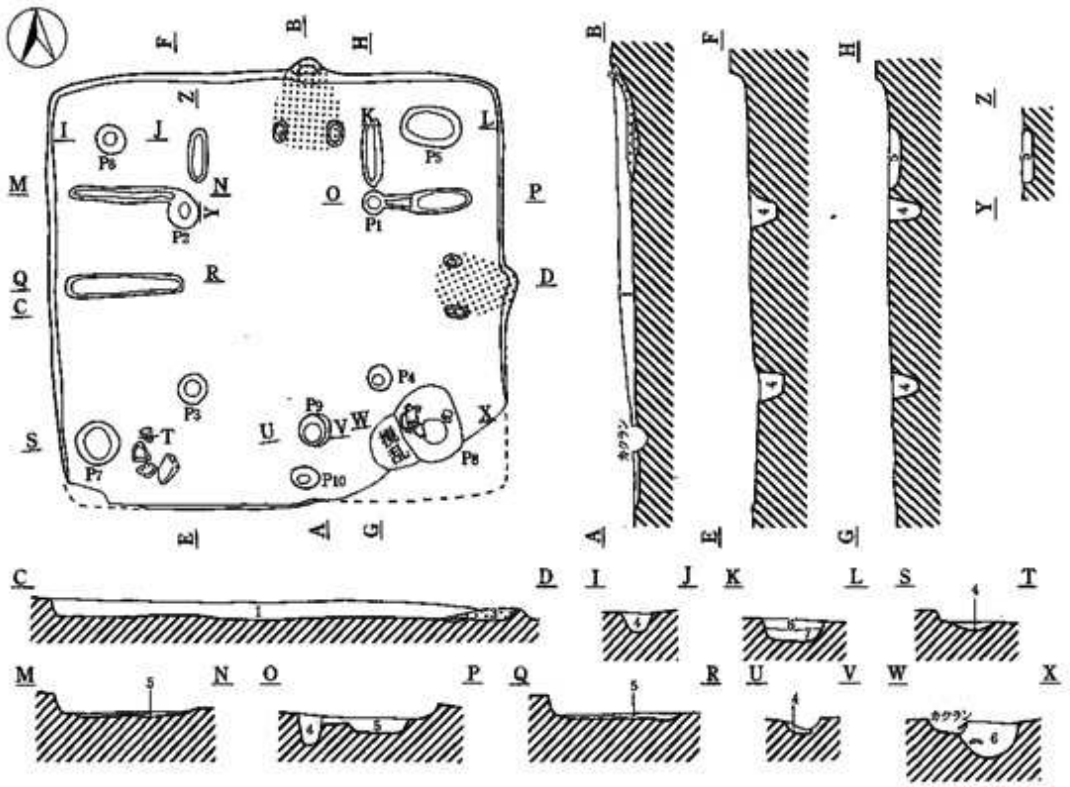
本址の出土遺物は土器片が少量であり、住居址南側を中心に人頭大の礫が多く覆土に混入していた。図示した遺物の出土位置は1が覆土中、2がP5内、3が南東コーナー付近である。3は磨り石と敲き石を兼ね備えた特徴を持ち、石材は硬質砂岩で重量は82gを測る。これらの遺物より本址は古墳中期末から後期初頭に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	坏	(13.6)	(4.6)	(11.2)	外面 口縁部ヘラミガキ・底部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色・白色粒子を少量含む
2	小型丸底壺	――	(9.5)	――	外面 胴部ナデ後、底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	2.5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子を多量と砂粒を含む

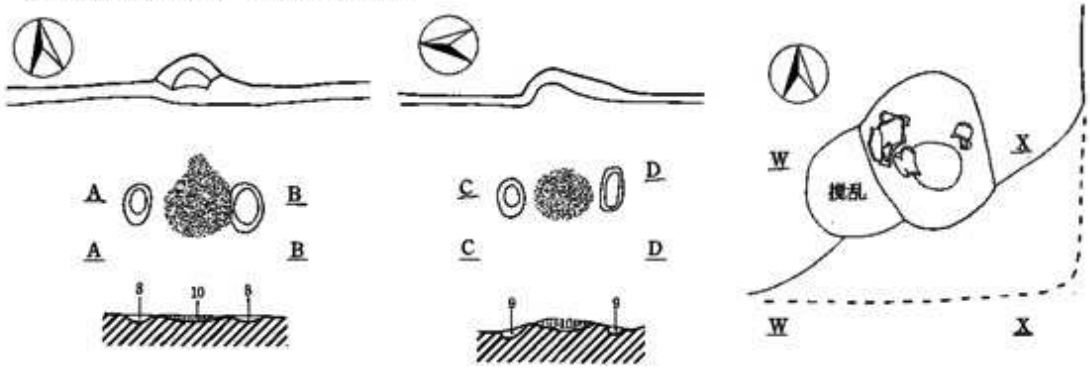
第37表　IH29号住居址出土遺物観察表



第76図　IH29号住居址出土遺物実測図



1層　暗褐色土（10YR3/3）　にぶい黄橙色(10YR7/3) 岩盤ブロック（1㎝以下）多量、炭化物少量含む。
2層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック（5㎜以下）含む。炭化物少量、焼土微量含む。
3層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック（5㎜以下）少量含む。焼土含む。(2層より多い。)
4層　暗褐色土（10YR3/3）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック（1㎝以下）含む。
5層　暗褐色土（10YR3/4）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック多量、炭化物微量含む。
6層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック（1㎝以下）含む。炭化物少量含む。
7層　暗褐色土（10YR3/4）　岩盤ブロック多量含む。



8層　黒褐色土（10YR3/2）　焼土・にぶい黄橙色(10YR7/3)岩盤ブロック（5㎜以下）含む。
9層　黒褐色土（10YR3/2）　焼土・炭化物少量含む。
10層　赤褐色土（5YR4/6）　焼土層。

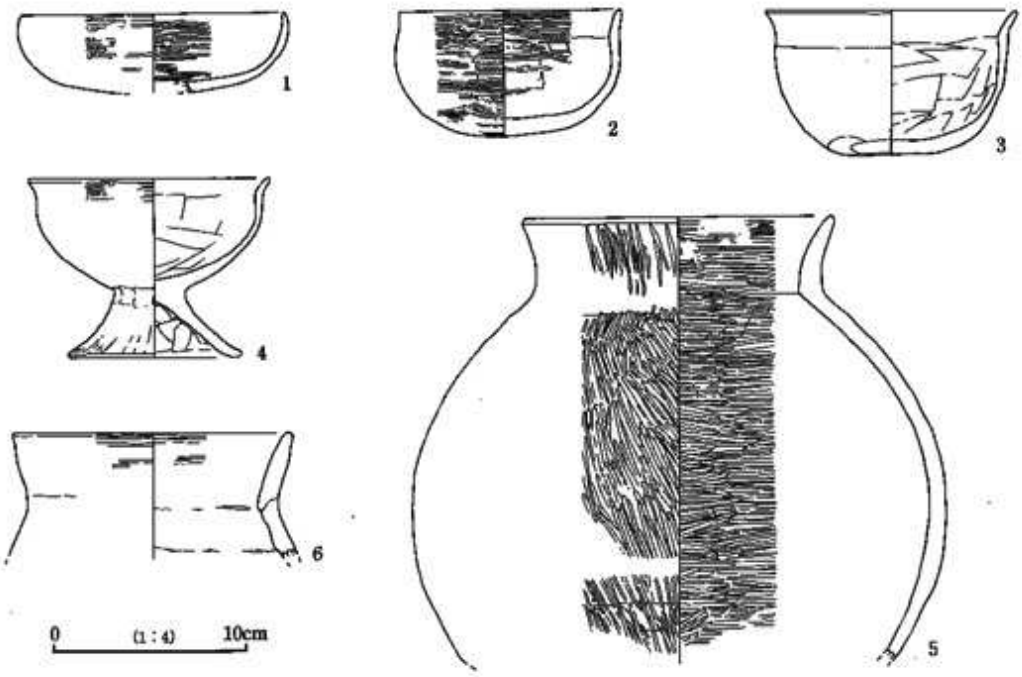
第77図　ⅠH35号住居址実測図

⑽ＩH35号住居址（第77・78図、写真図版四十一．四十二）

本住居址は、調査区中央台地の東側先端の平坦地であるK－ア－8・9．K－イ－8・9Grに位置する。残存状態は南東コーナーが一部地形により削平されている他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁と東壁の2カ所に確認された。規模は北壁4.54ｍ・南壁1.90ｍ(残存)4.45ｍ(推定)・西壁4.00ｍ(残存)4.20ｍ(推定)・東壁3.30ｍ(残存)4.20ｍ(推定)で、壁高さは北壁で20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は北カマドを基準にとるとNを示す。住居址の床面積は残存で18.8㎡、推定で19.8㎡を測る。覆土は単層で炭化物を含んでいた。床は硬質であった。壁溝は確認されていない。ピットは10カ所が確認された。規模はP1が径14cm・深さ34cm、P2が径37cm・深さ31cm、P3が径30cm・深さ32cm、P4が径27cm・深さ27cm、P5が径60cm・深さ24cm、P6が径32cm・深さ22cm、P7が径43cm・深さ10cm、P8が径78cm・深さ37cm、P9が径32cm・深さ21cm、P10が径29cm・深さ8cmを測る。P1～P4はその検出位置より主柱穴、P10は入り口施設、P5とP8は貯蔵穴と考えられる。また本址は西壁際と北東コーナー付近に間仕切り溝が確認された。溝の規模は長さ1.20～0.50ｍ・深さ6～19cmを測る。本址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

カマドは2カ所確認された。しかし、いずれも残存状況は悪く、火床面と袖掘り方が検出されたのみであった。形態はいずれも煙道部が住居址壁より飛び出さないタイプのものである。規模は北壁側カマドが火床部幅35cm・焼土の厚さ3cmで、東側カマドが火床部幅32cm・焼土の厚み5cmを測る。この二つのカマドはどちらが最終段階の使用か或いは併存かは確証が得られなかった。

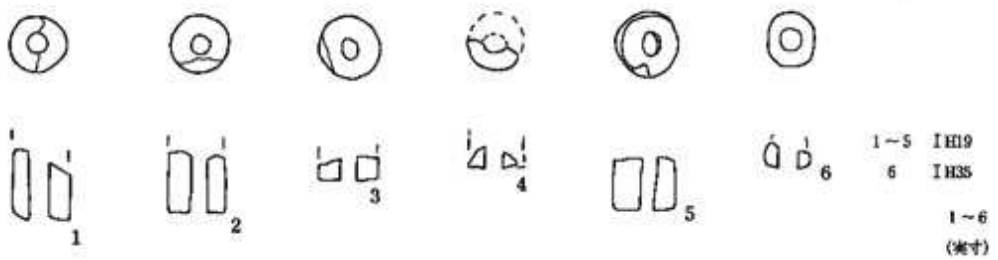


第78図　ＩH35号住居址出土遺物実測図

本址からの遺物は土器等が南東コーナー部のP8より、人頭大の礫が南西コーナーより纏まって出土した。図示した遺物の出土位置は1が南西コーナー、2・3・4・5がP8内、6が覆土中である。なお、小片の為図示できなかったが本址の覆土より波状文を持つ須恵器ハソウ頸部片と須恵器坏身片、臼玉1点が出土している。本址はこれらの遺物より古墳中期末から後期初頭に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	坏	(13.6)	〈4.0〉	——	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒を含む
2	椀	11.5	6.5	——	外面 口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ後、ヘラミガキ 内面 ヘラナデ後、ヘラミガキ	2.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を微量含む
3	椀	13.0	7.4	4.2	外面 口縁部ヨコナデ・体部ナデ後、底部外周ヘラケズリ 底部に木葉痕あり 内面 口縁部ヨコナデ後、体部ヘラナデ	2.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む
4	高坏	(12.4)	9.2	8.9	外面 坏部・体部ナデ 口縁部ヨコナデ後、ヘラミガキ 脚部ヘラナデ後、ナデ 内面 坏部・体部ヘラナデ後、坏部ヘラミガキ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を微量含み、胎土が良く精錬されている
5	甕	(16.2)	〈22.9〉	——	外面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ・ナデ後、ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ後、ヘラミガキ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
6	甕	(14.4)	〈6.5〉	——	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	2.5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と白色粒子を非常に多く含む

第38表 IH35号住居址出土遺物観察表



第79図 臼玉実測図

第２節　掘立柱建物址とピット群

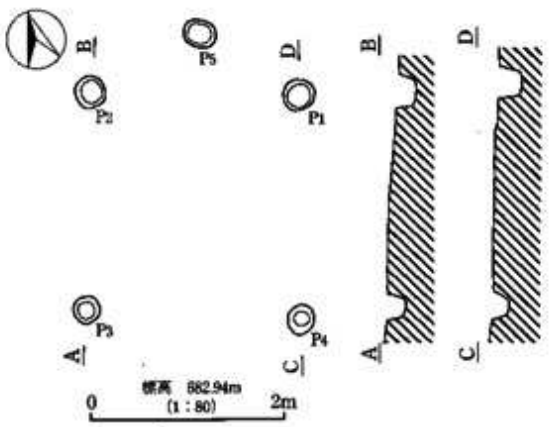
(1)ＩＦ１号掘立柱建物址（第80図、写真図版四十三①）

本址は調査区東より台地北斜面であるG－ア－12・G－イ－12Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い１間×１間の側柱式建物址である。また、北側辺に入り口施設を思わせるＰ５が検出された。長軸方位はＮ－13°－Ｅを示す。規模は桁行2.32ｍ(Ｐ１～Ｐ４)・梁間2.21ｍ(Ｐ１～Ｐ２)で、桁行柱間は2.30～2.21ｍ・梁間柱間は2.20～2.21ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は5.1㎡を測る。柱穴の形態はほぼいずれも円形である。ピットの規模はＰ１が径32cm・深さ24.5cm、Ｐ２が径32cm・深さ20cm、Ｐ３が径27cm・深さ21cm、Ｐ４が径30cm・深さ18cm、Ｐ５が径33cm・深さ７cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

これらの形態より本址は或いは住居址の主柱穴のみが残存した状態なのかもしれない。

本址よりの出土遺物は土師器片が少量出土したが、弥生・古墳の区別は難しく、近接してＩH11号住居址があることから一応古墳時代の遺構として報告する。

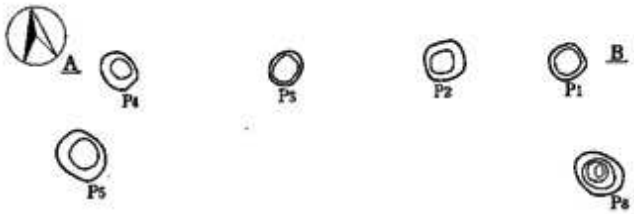


第80図　ＩＦ１号掘立柱建物址実測図

(2)ＩＦ２号掘立柱建物址（第81図、写真図版四十三②）

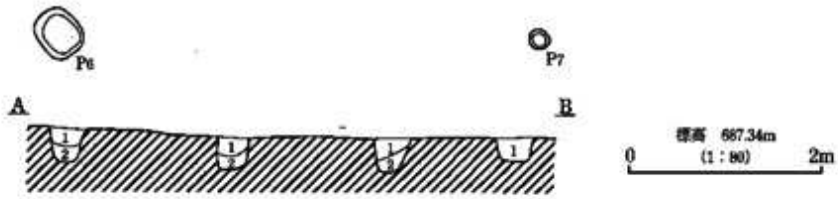
本址は、調査区中央部台地の南斜面であるJ－ソ－７・８、J－タ－７・８Grに位置する。残存状態は南側が自然の地形により傾斜しているため検出できなかったピットがある。

形態は東西方向に長い３間×２間の側柱式建物址であると思われるがピットの配列は不規則である。長軸方位はＮ－84°－Ｗを示す。規模は桁行5.11ｍ(P6～P7)・梁間4.77ｍ(P1～P7)で、桁行柱間は1.30～5.11ｍ・梁間柱間は0.94～3.88ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は24.3㎡を測る。柱穴の形態はほぼいずれも円形である。ピットの規模はP1が径36cm・深さ26cm、P2が径38cm・深さ31cm、P3が径36cm・深さ32cm、P4が径40cm・深さ31cm、P5が径51cm・深さ30cm、P6が径52cm・深さ17cm、P7が径20cm・深さ14cm、P8が径52cm・深さ34cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址からはP6より土師器甕片3点とP2より石製品が出土している。



1層　黒褐色土（10YR3/1）
φ5㎜大、にぶい黄橙色(10YR7/3)
岩盤粒子含む。

2層　黒褐色土（10YR3/1）
にぶい黄橙色(10YR7/3)混在土。

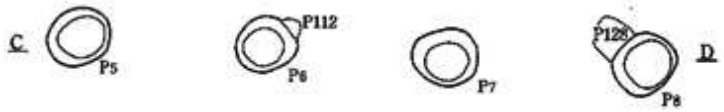


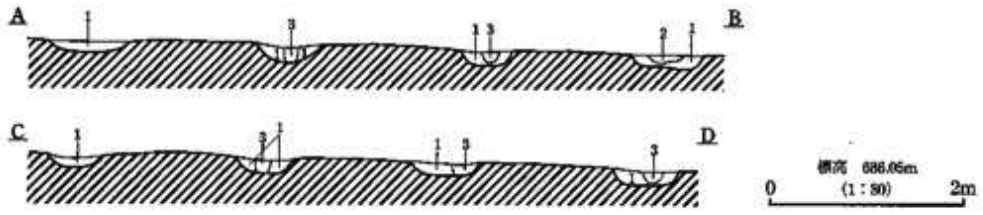
第81図　ＩＦ２号掘立柱建物址実測図

1層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
にぶい黄橙色(10YR7/3)ブロック
含む。

2層　にぶい黄橙色土（10YR7/3）
岩盤二次堆積。

3層　黒褐色土（10YR3/2）
柱痕。炭化物含む。





第82図　ＩＦ５号掘立柱建物址実測図

(3)ＩＦ５号掘立柱建物址（第82図、写真図版四十四①）

本址は、調査区中央部台地の先端平坦地であるJ－ソー４・５、J－ター４・５、J－チー５Grに位置する。残存状態は良好であった。

形態は東西方向に長い３間×１間の側柱式建物址である。長軸方位はN－75°－Wを示す。規模は桁行5.90ｍ（Ｐ１～Ｐ４）・梁間3.75ｍ（Ｐ１～Ｐ８）で、桁行柱間は1.87～2.03ｍ・梁間柱間は3.73～1.75ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は22.1㎡を測る。柱穴の形態はほぼいずれも円形である。ピットの規模はＰ１が径78cm・深さ15cm、Ｐ２が径54cm・深さ16cm、Ｐ３が径70cm・深さ19cm、Ｐ４が径88cm・深さ16cm、Ｐ５が径66cm・深さ17cm、Ｐ６が径64cm・深さ17cm、Ｐ７が径68cm・深さ15cm、Ｐ８が径64cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内では柱痕を確認できた。

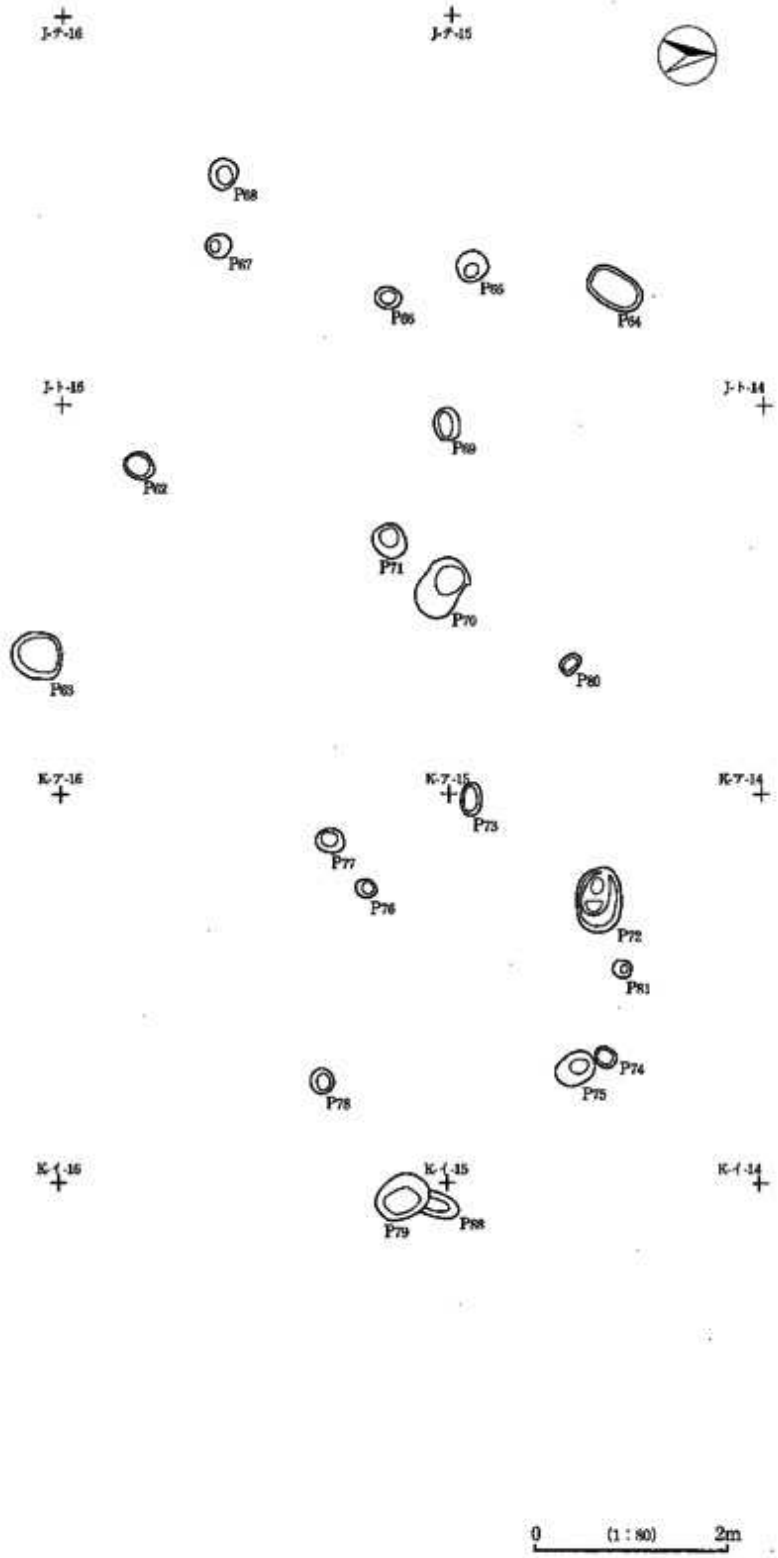
本址からはＰ４より土師器甕片１点が出土したのみであった。

(4)ピット群（第83～86図）

本項では古墳時代集落が展開するJ・K区で検出されたピットについて記載する。これらピットは南斜面全体に検出されたが大きく４カ所のエリアとして把握できた。この４地区について実測図と数値を示す。なおピット内からは古墳時代に限らない遺物を出土したものもあるが周辺の遺構の広がりから同一時期と判断して記載した。

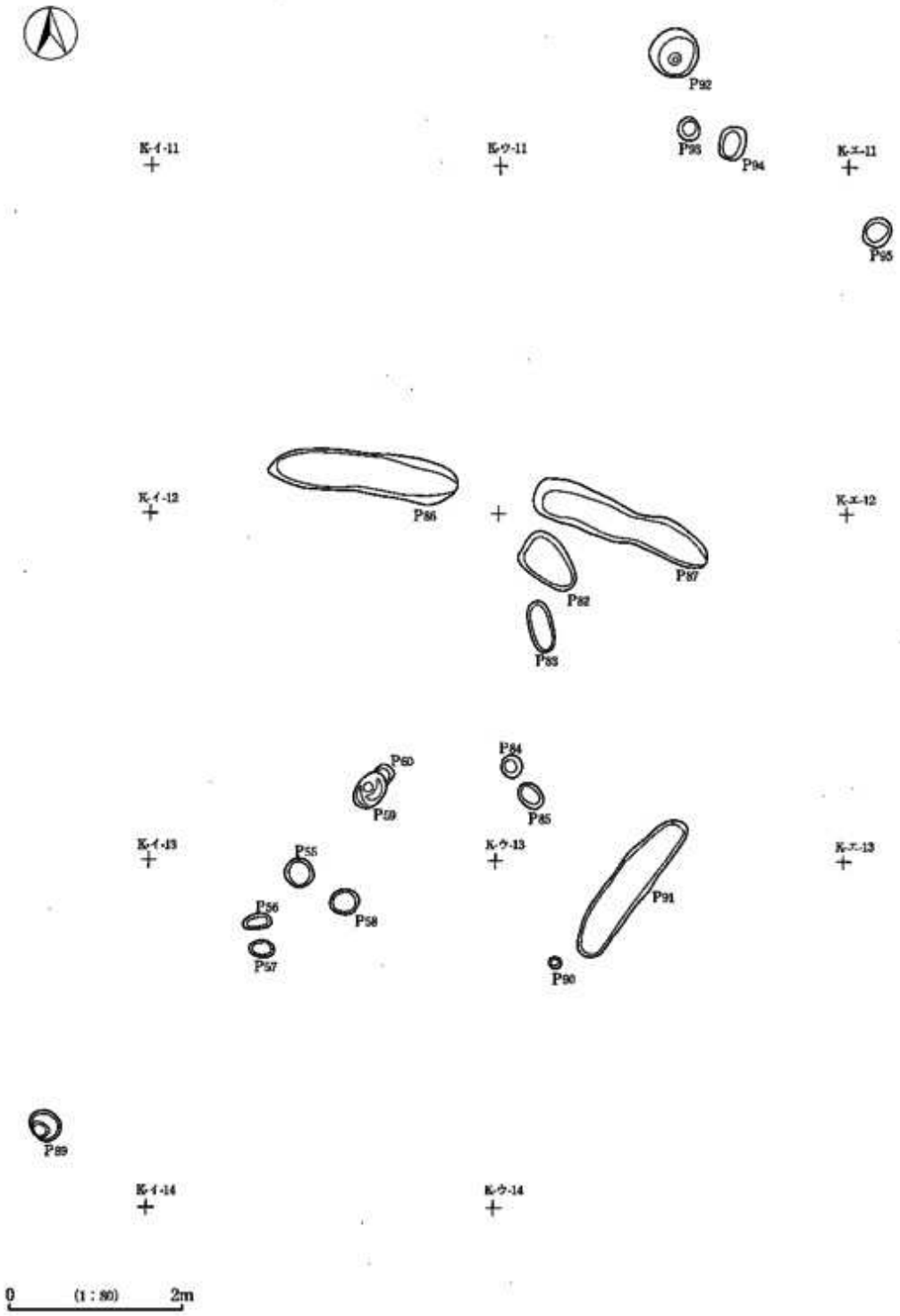
単位 cm

No.	検出位置	径	深	No.	検出位置	径	深	No.	検出位置	径	深	No.	検出位置	径	深
ピット群１				60	K－イ－12	22	24	50	J－ター13	43	20	139	J－セ－６	34	15
P64	J－テ－14	60	12	55	K－イ－13	35	24	49	J－ター13・14	92	23	129	J－セ－６	50	36
65	J－テ－14	32	48	56	K－イ－13	31	9	48	J－ター14	57	20	124	J－ソ－６	53	7
66	J－テ－15	27	14	57	K－イ－13	27	8	53	J－チ－11	38	23	141	J－ソ－６	29	18
67	J－テ－15	26	10	58	K－イ－13	32	13	27	J－チ－13	50	32	137	J－ソ－６	38	26
68	J－テ－15	33	36	92	K－ウ－10	57	40	28	J－チ－13・14	37	19	136	J－ソ－６	35	34
80	J－ト－14	23	8	93	K－ウ－10	27	14	29	J－チ－14	25	21	140	J－ソ－６	56	29
69	J－ト－14・15	34	37	94	K－ウ－10	38	20	30	J－チ－14	22	16	138	J－ソ－６	47	23
70	J－ト－14・15	64	15	87	K－ウ－11・12	213	21	31	J－チ－14	20	14	144	J－ソ－６	64	25
71	J－ト－15	37	38	82	K－ウ－12	73	10	32	J－チ－14	34	17	128	J－ソ－７	48	36
62	J－ト－15	30	22	83	K－ウ－12	60	25	33	J－チ－14	27	15	51	J－ソ－７	75	27
63	J－ト－16	50	23	84	K－ウ－12	26	12	35	J－チ－14	30	20	112	J－タ－５	25	6
2	K－ア－14	67	40	85	K－ウ－12	33	26	34	J－チ－14	25	14	113	J－タ－５	24	7
81	K－ア－14	20	25	91	K－ウ－12・13	191	12	36	J－チ－14	24	13	142	J－タ－６・７	53	37
74	K－ア－14	22	33	90	K－ウ－13	15	15	37	J－チ－14	26	9	135	J－タ－６	32	25
75	K－ア－14	40	40	95	K－エ－11	35	22	38	J－チ－15	35	12	143	J－タ－６	43	22
73	K－ア－14	32	28	ピット群３				39	J－チ－15	46	16	145	J－タ－６	19	7
76	K－ア－15	22		11	J－ソ－11	25	10	40	J－チ－15	32	7	131	J－タ－６	28	11
77	K－ア－15	28		14	J－ソ－11	60	26	41	J－チ－15	33	13	130	J－タ－７	84	32
78	K－ア－15	26		15	J－ソ－11	57	25	42	J－チ－15	23	9	20	J－タ－８	39	8
79	K－ア－15	57	19	12	J－タ－12	18	6	43	J－チ－15	45	21	114	J－チ－５	18	6
88	K－イ－15	45	14	13	J－タ－12	48	6	44	J－チ－15	18	11	123	J－チ－５	45	10
ピット群２				16	J－タ－12	70	12	45	J－チ－15	36	16	132	J－チ－６	29	6
89	K－ア－13	37	38	18	J－ソ－13	54	16	46	J－チ－15	30	16	133	J－チ－６	30	10
59	K－イ－12	47	31	26	J－タ－13	24	13	ピット群４				24	J－チ－６	27	27
												99	J－チ－７	40	25

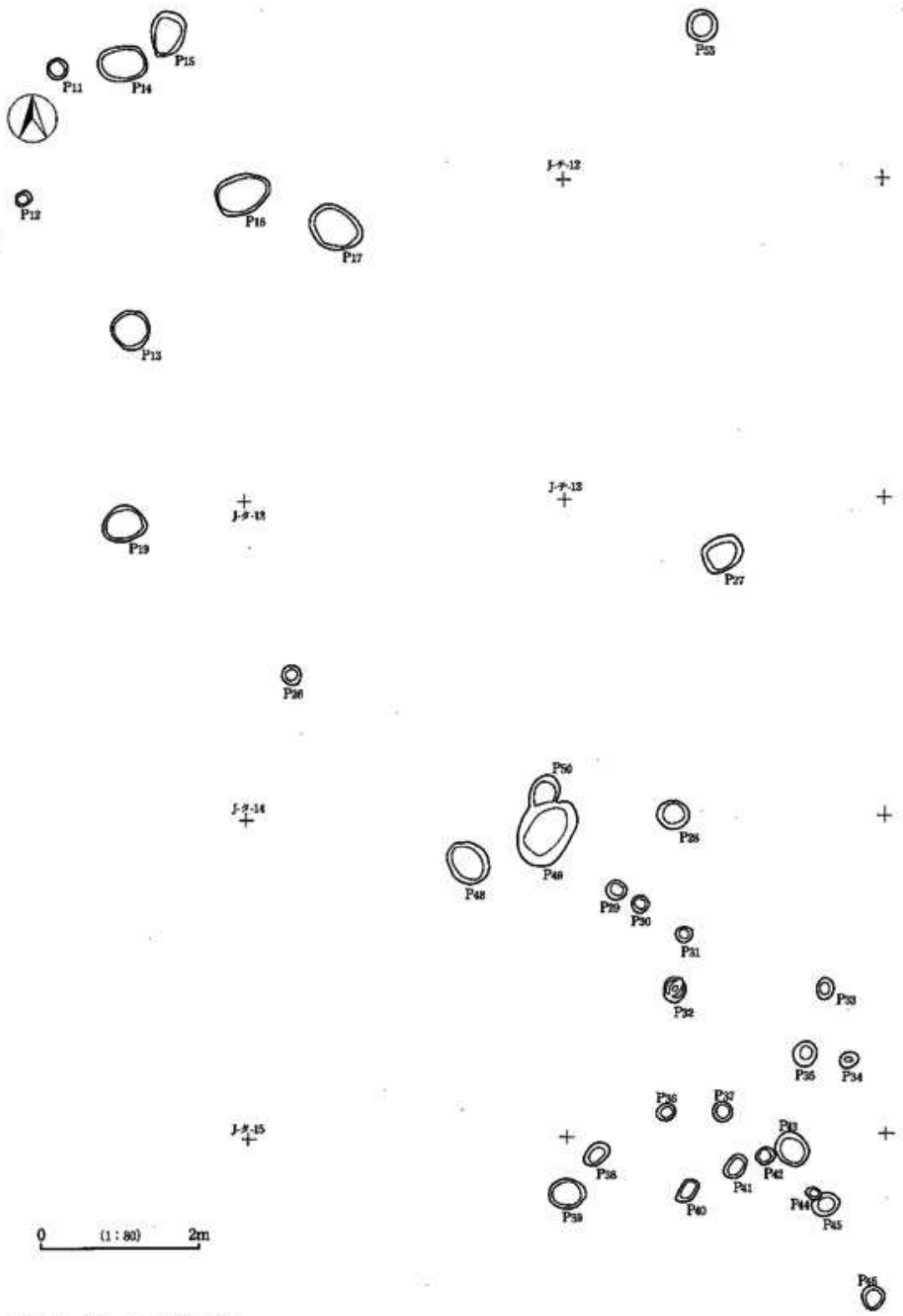


0 (1:80) 2m

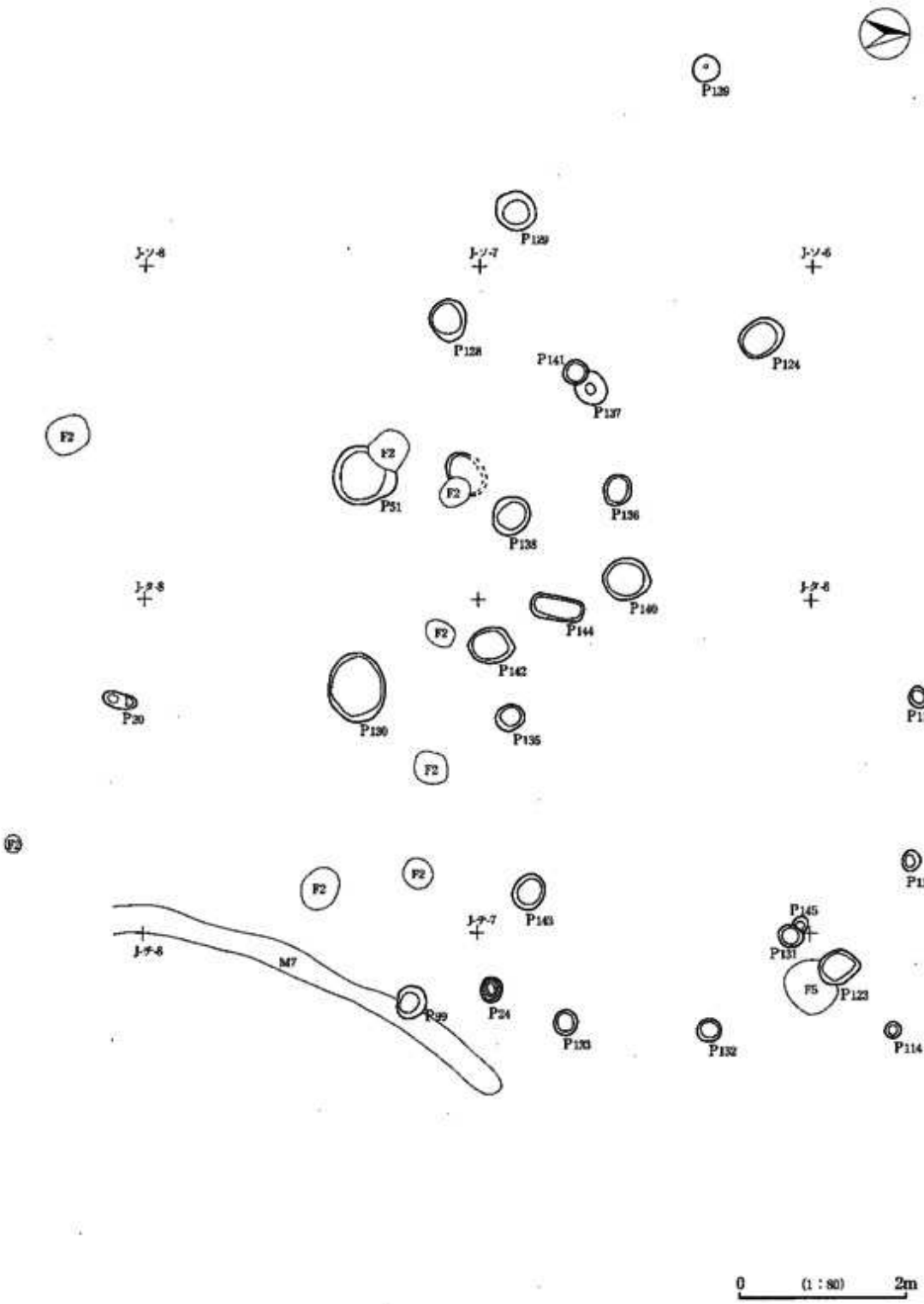
第83図　ピット群1実測図



第84図　ピット群２実測図



第85図　ピット群３実測図



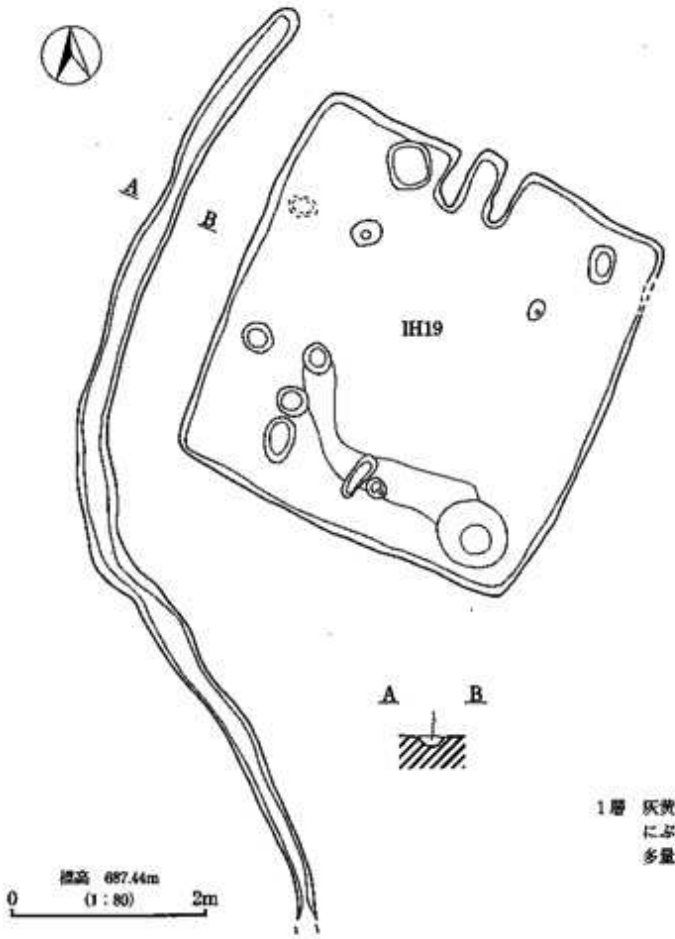
第86図　ピット群4実測図

第３節　溝状遺構

(1) ＩＭ７号溝状遺構（第87図）

本址は、調査区中央台地の南斜面であるＪ－タ－７・８、Ｊ－チ－７・８・９Ｇｒに位置する。残存状態は南側が傾斜面となるため自然に消滅している。

走向方向は南北方向であり、走向方位はＮを示す。規模は検出範囲で約10.４ｍを測る。溝の規模は北端で幅30㎝・深さ９㎝、中央で幅32㎝・深さ12㎝、南端で幅24㎝・深さ５㎝をそれぞれ測る。溝の断面形はＵ字形を呈する。底面はほぼ平坦であった。本址は中央部分が西に湾曲しており、ＩＨ19号住居址を避ける状態となっている。このことは住居址と溝状遺構が同時に存在していた可能性を示し、或いは本遺構はＩＨ19号住居址の住居排水路的機能をもったものかもしれない。本址よりの出土遺物はなかった。



1層　灰黄褐色土（10YR4/2）
にぶい黄褐色土(10YR7/3)ブロック（不定大）を多量含む。

第87図　ＩＭ７号溝状遺構実測図

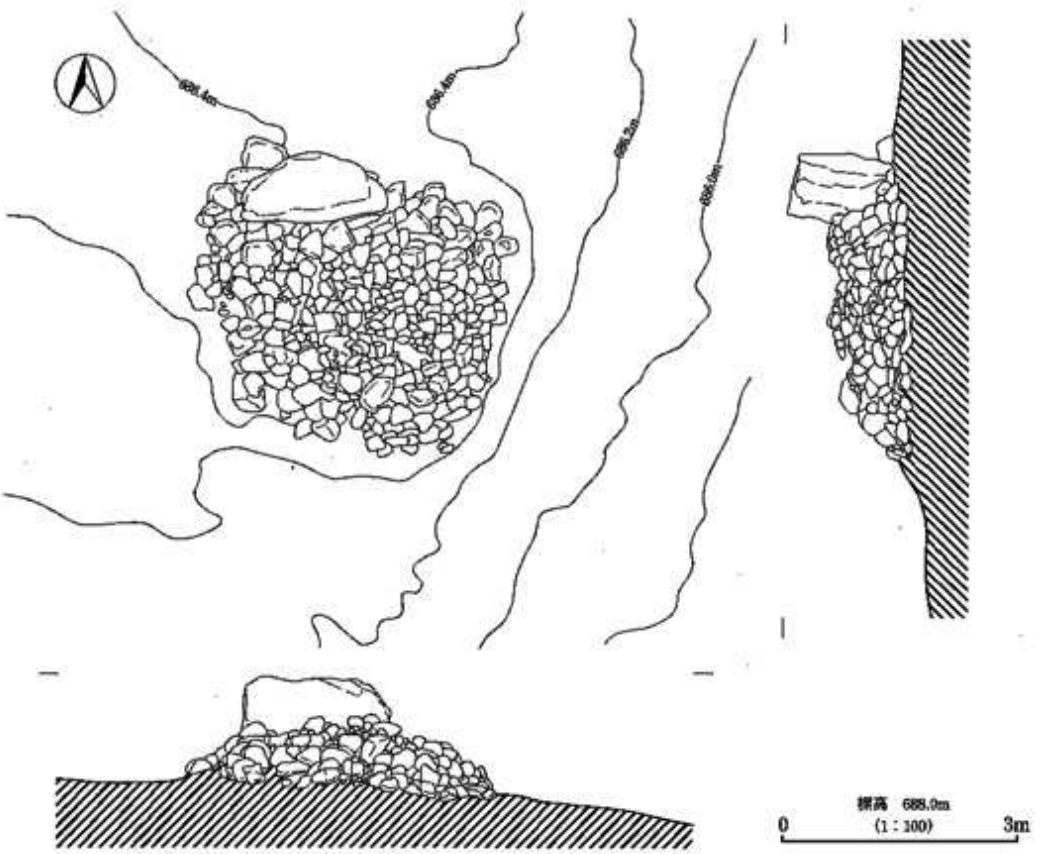
第４節　古墳址

(1)坪の内古墳（第88～91図、写真図版四十五～四十八）

本古墳は、調査区中央台地の先端部であるK－ア－7・8・9・10、K－イ－7・8・9・10、K－イ－7・8・9・10Grに位置する。本古墳は古くよりその存在が知られており、地元の方によると「昔ここから刀が出たが今は所在が不明である。」との話もあった。なお、昭和53年に岸野村史誌考古調査の一環として、榛名平及び坪の内遺跡群内の遺物表面採集が行われた。その結果、坪の内地籍には坪の内古墳とその東方30ｍに第２号墳が存在するとされていた。しかし、今回の調査においてこの第２号墳は畑地耕作による「ヤックラ」であり古墳では無いことが判明した。よって坪の内古墳は丘陵上の単独墳であった可能性が高い。

本古墳の残存状態は既に奥壁が露出しており、玄室上に人頭大の礫が高さ１ｍ・幅4.3ｍ程の範囲で積み上げられていた。よって墳丘の高さ等は不明である。

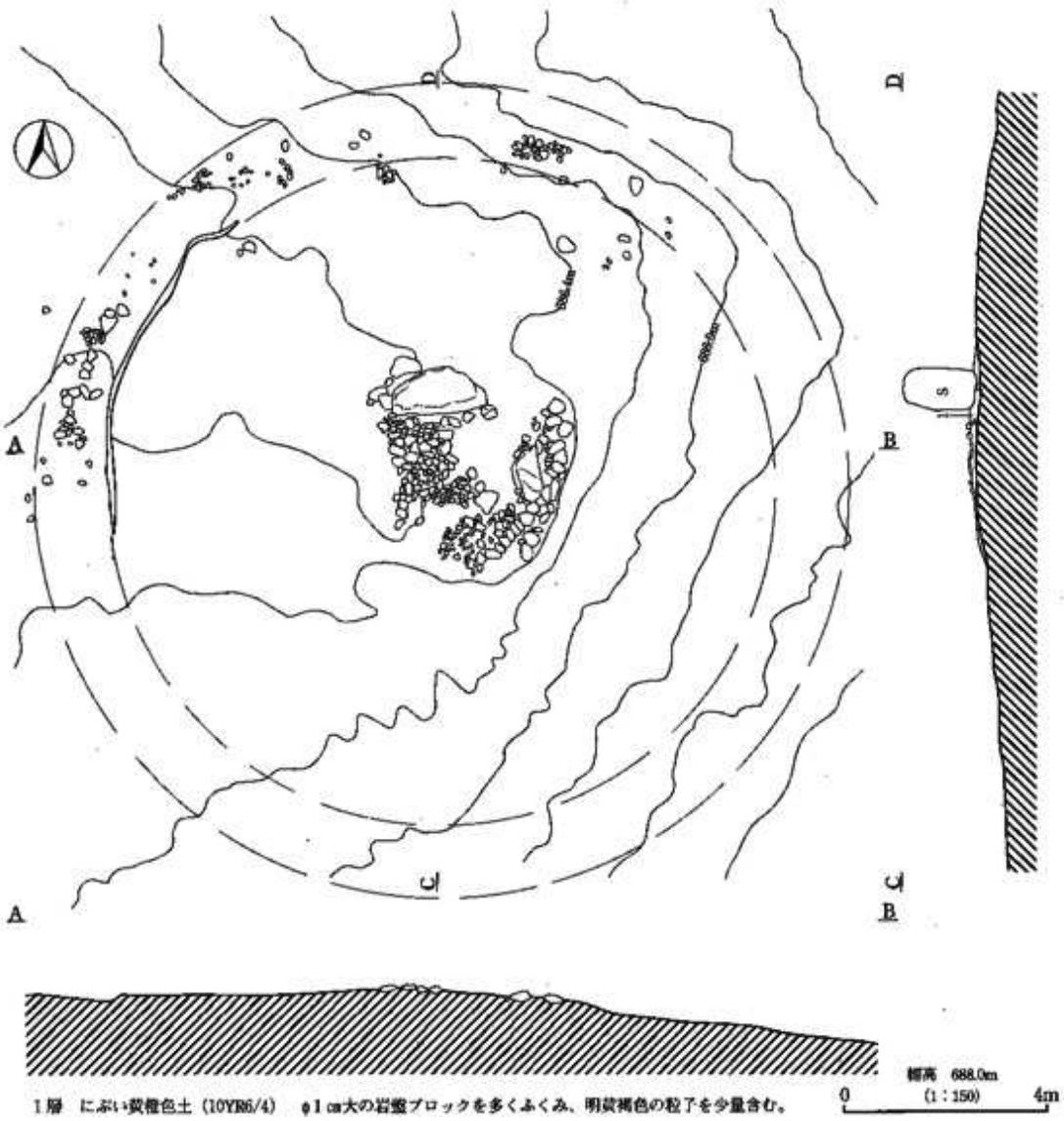
古墳規模は石室残存部より西側で約15㎝の周溝らしき落ち込みが検出された為、それを基に推定すると内径約13ｍの円墳であったと考えられる。周溝は西側部分の一部しか検出されなかった。



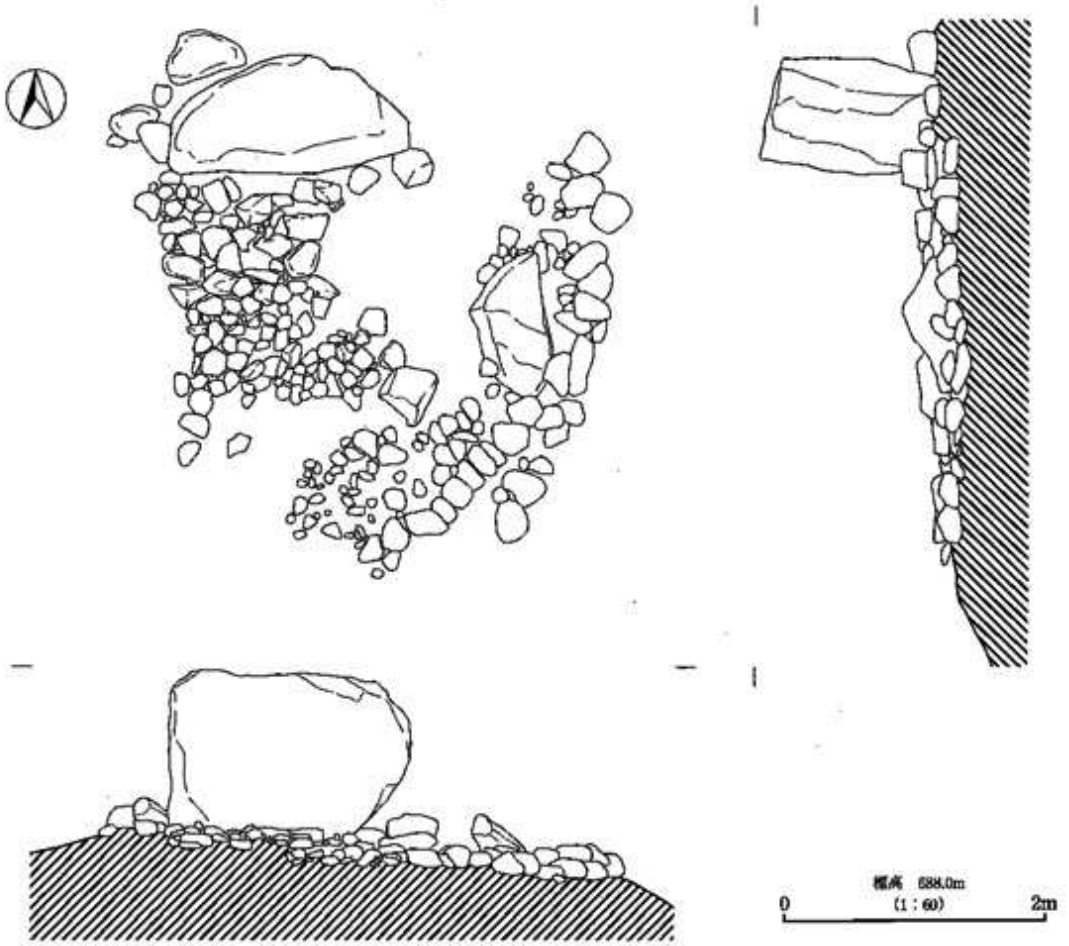
第88図　坪の内古墳検出状況図

周溝底は平坦で、底面よりやや浮いた状態で人頭大の礫が多数出土した。また、周溝の掘り込みは確認されなかったが、古墳北側には円弧状にこれらと同じ礫が検出され古墳端を示していると思われる。

古墳主体部は南側開口の横穴式石室であった。しかし残存状態は非常に不良であり奥壁と玄室礫床が一部元位置を保つのみであり、側壁・羨道などは全く残存していなかった。扨って石室が両袖なのか無袖なのかは不明であり、石室内で計測可能な箇所は奥壁が残存高さ1.3m・幅1.86m、礫床が長さ3.1mを測るのみであった。石室主軸方位はN－3°－Wを示す。礫床は人頭大から拳大の自然礫を引き詰めており、奥壁側が若干大型の礫を使用しているようであった。また、石室掘り方は存在せず、奥壁も墳丘整地面に置いてある状態であった。



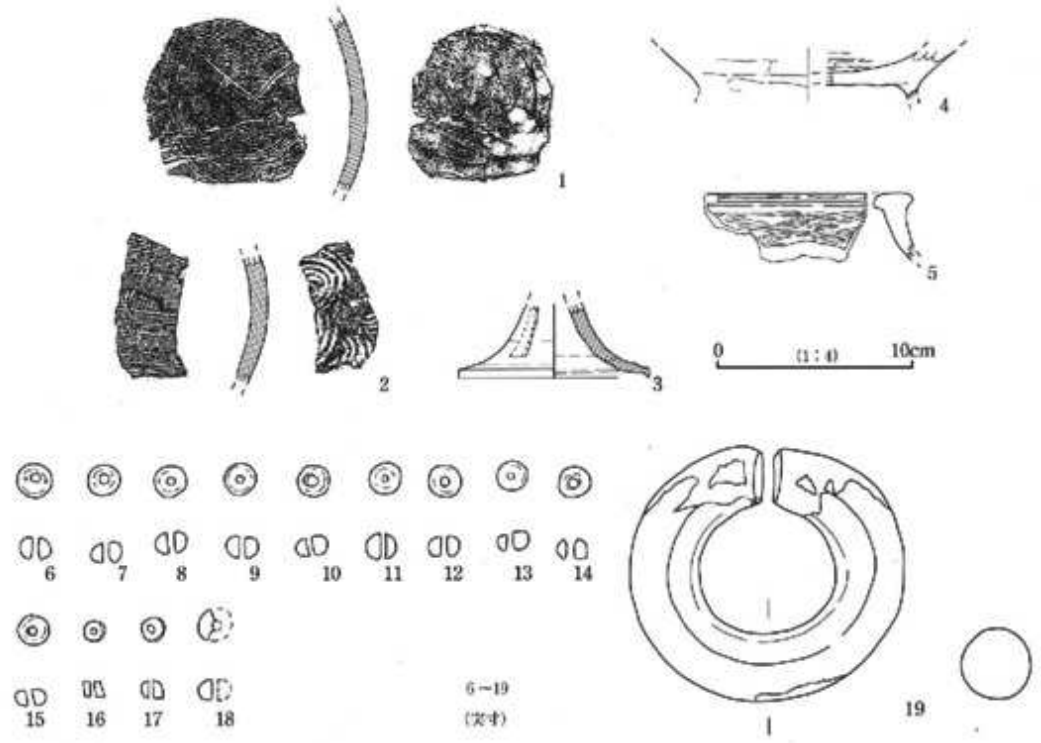
第89図　坪の内古墳実測図



第90図　坪の内古墳石室実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器 横瓶 (体部)	9.1	0.9	——	外面　カキメ成形後、ナデ 内面　ナデ	10R3/1　暗赤灰 径0.5mmの白色・黒色粒子と径1mmの茶色粒子を含む
2	須恵器 壺	6.8	0.9	——	外面　カキメ　自然釉付着 内面　同心円状の当て具によるタタキ	N3/暗灰 径0.5mmの白色粒子を含む
3	須恵器 高坏 (脚部)	——	〈3.8〉	(9.9)	外面　ロクロ成形　自然釉付着 内面　ロクロ成形　自然釉付着 ※脚部に方形のスカシ3ヶ所あり	7.5Y4/1　灰 径2mmまでの白色粒子を含む
4	長頸壺	——	〈2.8〉	——	外面　ヘラケズリ後、ナデ 内面　ヨコナデ　良く磨かれている	2.5GY8/1　灰白 径0.5mmの白色・黒色粒子を含む
5	火鉢 (口縁部)	3.5	2.1	——	外面　ロクロ成形後、ヘラミガキ 内面　ロクロ成形	5YR5/6　明赤褐 径0.5mmの白色・黒色粒子を含む

第39表　坪の内古墳出土遺物観察表

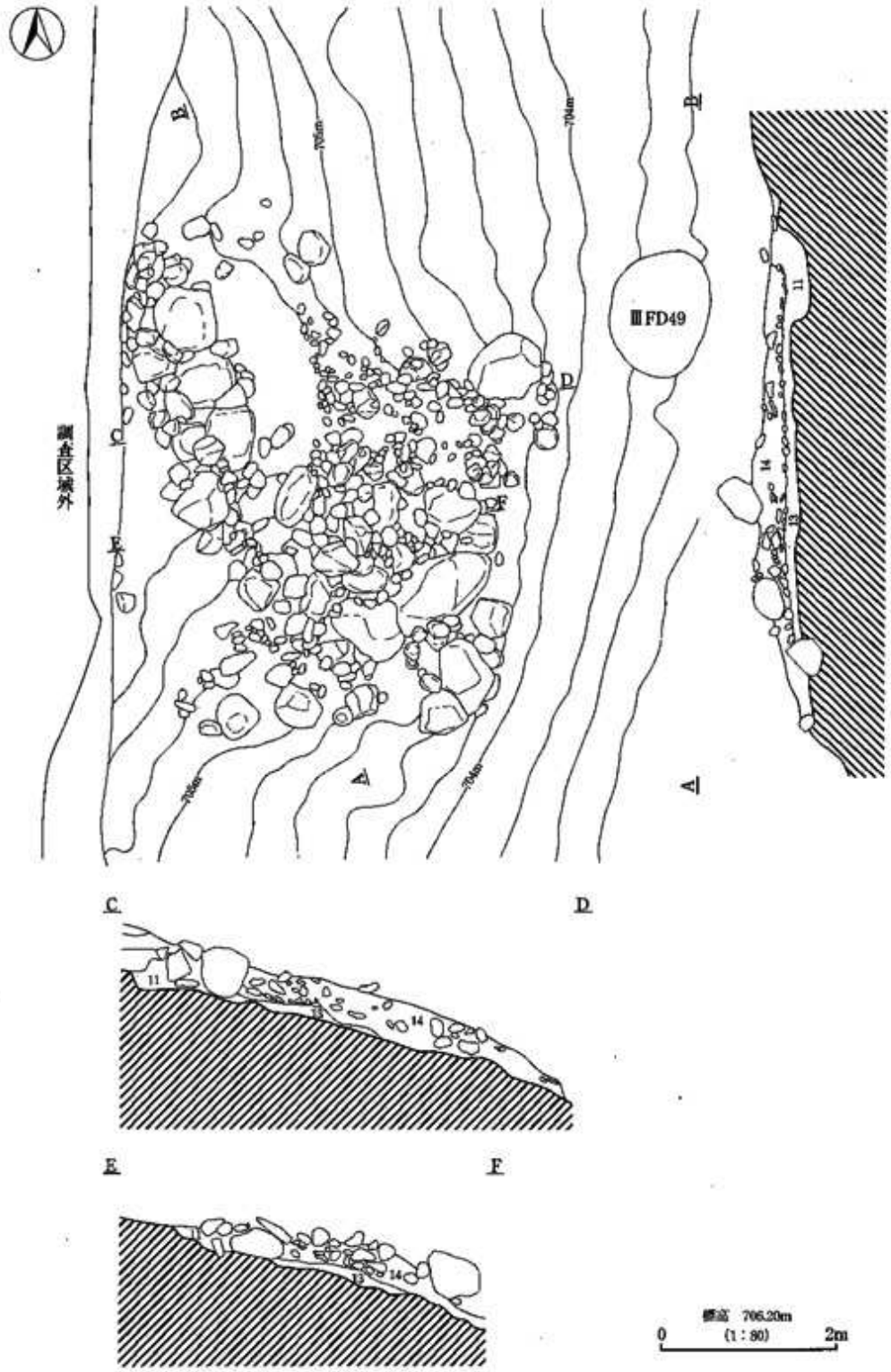


第91図　坪の内古墳出土遺物実測図

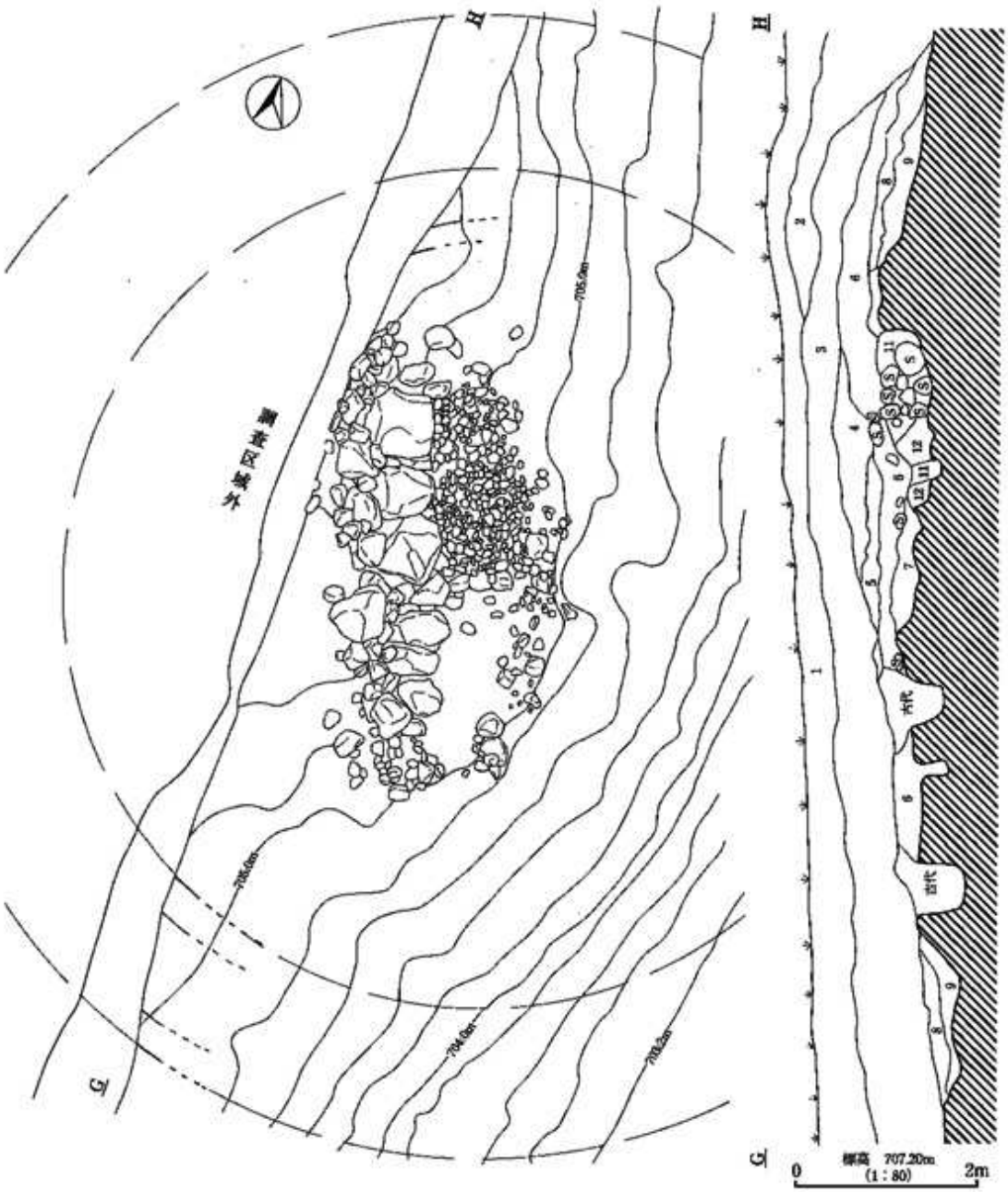
本古墳からの出土遺物は石積み内や玄室覆土より出土した。1から3の須恵器は石室上部に積まれた礫群中より出土した。1は横瓶の胴部、2が甕の胴部破片、3が高坏脚であるが、透かしは2段になるようである。4と5は近世の混入遺物である。6～18はガラス小玉でいずれも玄室部覆土をふるいにかけて検出した。色調は16･17が緑でその他はすべてブルー系であり、小口部分はいずれも丸みを持っている。19は大型の銀張銅芯製耳環である。一部銀張りが欠損している。出土位置は玄室東側部分であり、重量は36.4gを測る。

本古墳の築造時期は出土遺物などが少なく不確実であるが、古墳の立地や須恵器高坏の示す時期などから6世紀末～7世紀初頭頃を推定したい。

(2)榛名平1号墳（第92～98図、写真図版四十九～五十三）



第92図　榛名平1号墳検出状況図



1層 10YR2/1 灰白色土（耕作土） しまりやや弱くぼそぼそしている。φ2～3cmの小石を多く含む。(現耕)

2層 10YR2/1 灰白色土（耕作土） しまりやや弱くぼそぼそしている。1層に比べ粒子細かい。

3層 10YR6/1 褐灰色土（耕作土） しまり弱く、こぶし大の石を含む。

4層 10YR4/1 褐灰色土 しまりやや弱く、下層、黒色土との中間層

5層 10YR2/1 黒色土（火山灰？） しまり弱く、ぼそぼそしている。φ3～4mmの小石粒子を含む。

6層 10YR3/1 黒褐色土 しまり弱く、粘性ややあり、橙色のローム粒子を含みさらさらしている。中世確認面の土とよく似る。

7層 10YR3/1 黒褐色土 しまりやや弱く、粘性ロームブロックを含む。

8層 10YR3/2 黒褐色土
しまり弱くぼろぼろしている。ローム粒子、橙色粒子を多く含む。

9層 10YR3/3 暗褐色土
しまり粘性ややあり。ローム粒子、褐色土のブロックを含む。(盛土)

10層 10YR4/4 褐色土
しまり粘性ややあり。褐色土、ローム土の混合土。(石室裏ごめ土)

11層 10YR3/2
黒褐色土 しまり、粘性やや弱い。ローム粒子を多く含む。

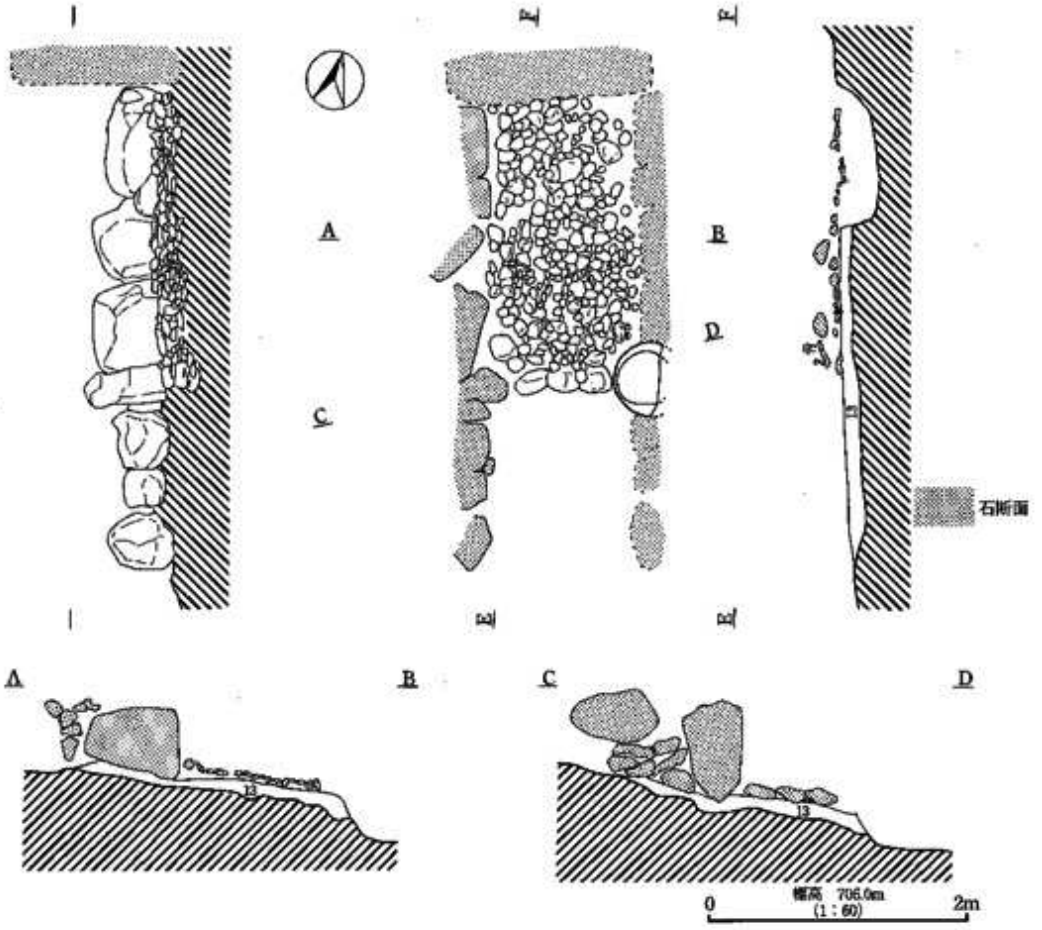
12層 10YR4/4 褐色土
しまり、粘性ややあり、ローム土、褐色土ブロックを含む。

第93図 榛名平1号墳実測図

本古墳は調査区上段の台地南側であるL－シー7・8、L－ス－7・8Grに位置する。なお、古墳名称については新発見であった為、小字名と群集墳の可能性もあることから番号を付した。

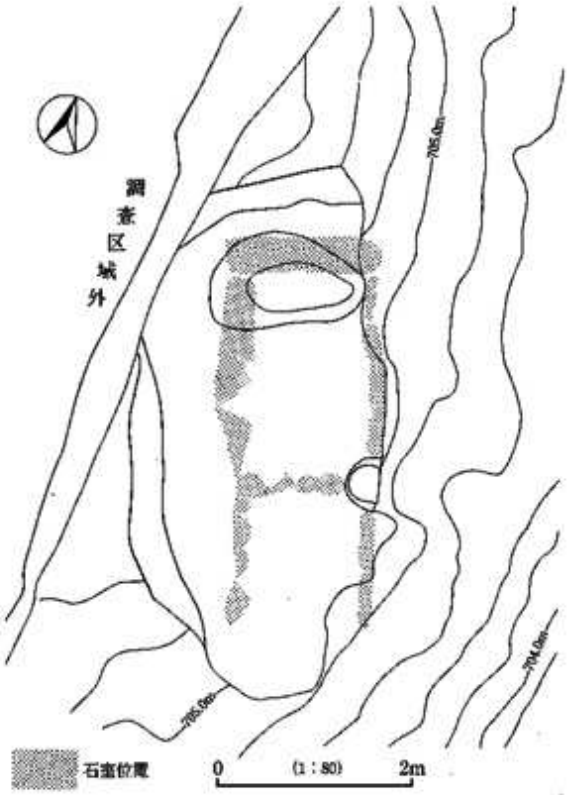
古墳の残存状況は東側が地形の傾斜でまた西側が調査区外となるために検出できなかった。石室は既に天井部が崩落している状態で1.5m近い巨石から人頭大の礫までが石山状に検出された。古墳の立地は海抜705m内外の東斜面の急傾斜地を掘り込み築造している。本古墳の形態は残存部から判断すると内径9.4m程の円墳と考えられ、主体部は南開口の横穴式石室であった。周溝は南北セクションで南側と北側に検出された。良好に観察できたのは南側であり、規模は幅2m・深さ40cmを測る。ただ立地的に東側は傾斜面であるため、周溝は全周せず西側部分のみであったと考えられる。とすると山側のみ掘り込み土を墳丘に寄せるいわゆる「山寄せ古墳」として本古墳も捉えられよう。墳丘は既に流失していたらしくセクション部でも確認できなかった。

石室は礫山の下より西半分が残存する状態で検出された。検出された部分は下一段の左側壁と仕切石及び玄室礫床であった。ただ、奥壁と右立柱石の掘り込み部分が検出できたためおおよそ



13層　10YR3/2　黒褐色土　しまり弱く粘性弱い、さらさらした土。ローム粒子・白色粒子を多く含む。

第94図　榛名平1号墳石室実測図



第95図　榛名平１号墳石室掘り方実測図

の石室規模が把握できた。規模は残存値で石室長3.56m・玄室長2.1m・石室幅1.1mを測る。側壁の高さは残存部で約50cmであった。また石室主軸方位はN－18°－Wを示す。形態は玄室と羨道部境に立柱石を立て、仕切石として人頭大の扁平な川原石を３つ並べていた。玄室礫床は拳大から５cm前後の小型の石を敷き詰めていた。羨道部分に関しては検出時より殆ど礫は無く、左側壁際に少量礫が検出されたが崩落のものと考えられた。これらの事から本古墳の石室は両袖形の横穴式石室であるが、羨道と玄室幅が同じで、張り出した立柱石により玄門部を造り出すいわゆる「疑似的両袖形」の範疇に捉えられる石室である。側壁の構築方法は、礫の安定しやすい最大平坦面を上下に使う小口積みの形態であり、当地方によく見られる腰石的な積み方はしていない。側壁控え積みは、側壁使用の石よりも一回り小型の礫を用い、隙間には小型の礫と土を充填していた。天井部の形態に付いては不明である。

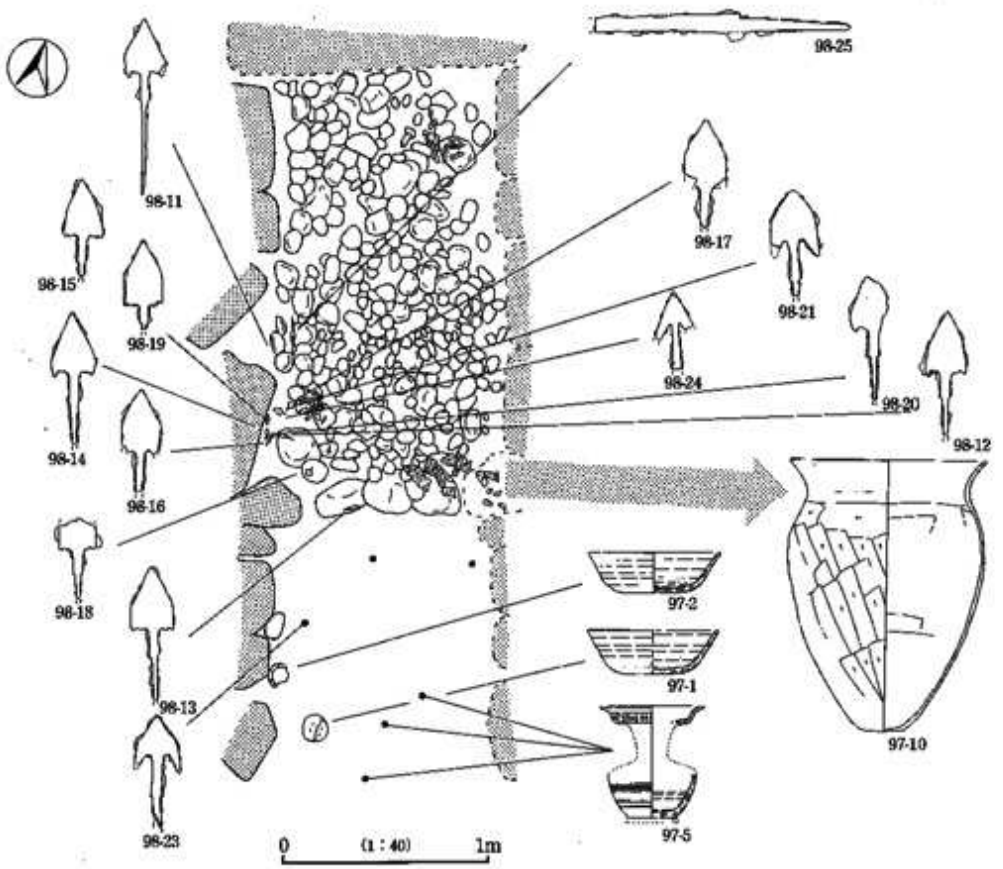
石室掘り方は、石室の形に添うように南北方向に長く検出された。東傾斜面を一部削平し平坦面を作り出していた。平坦面は検出長で北壁1.4m・西壁３m・深さは西壁中央で22cmを測る。また北側には奥壁を立てたと考えられる楕円形の掘り込みが確認され、規模は長軸1.6m・短軸１m・平坦面よりの深さ30cmを測る。

以上、本古墳について今一度整理すると、墳形は円墳で規模は径9.4m前後、西側山側のみ周溝を持つ「山寄せ古墳」である。石室は擬似的両袖形横穴式石室であり、掘り込み面を持つ半地下式の形態を持つ。

本古墳からの出土遺物は石室内を中心に土師器・須恵器・鉄製品が出土した。図示した遺物出土位置は第96図に示した以外のものは石室上の覆土より出土した。特に６～９までの土師器皿は羨道部仕切石脇から出土しておりこれら土器の所産時期までは本古墳の石室天井は残存していた事となる。土器及び須恵器の出土状態で元位置を保っているものは１と２の須恵器坏及び10の土師器甕があると考えられる。土師器甕はその場で破砕した状態で、復元作業を経るとほぼ完形となった。これらの事から本古墳は土師器・須恵器の副葬が羨道部のみであり、玄室内へは行わな

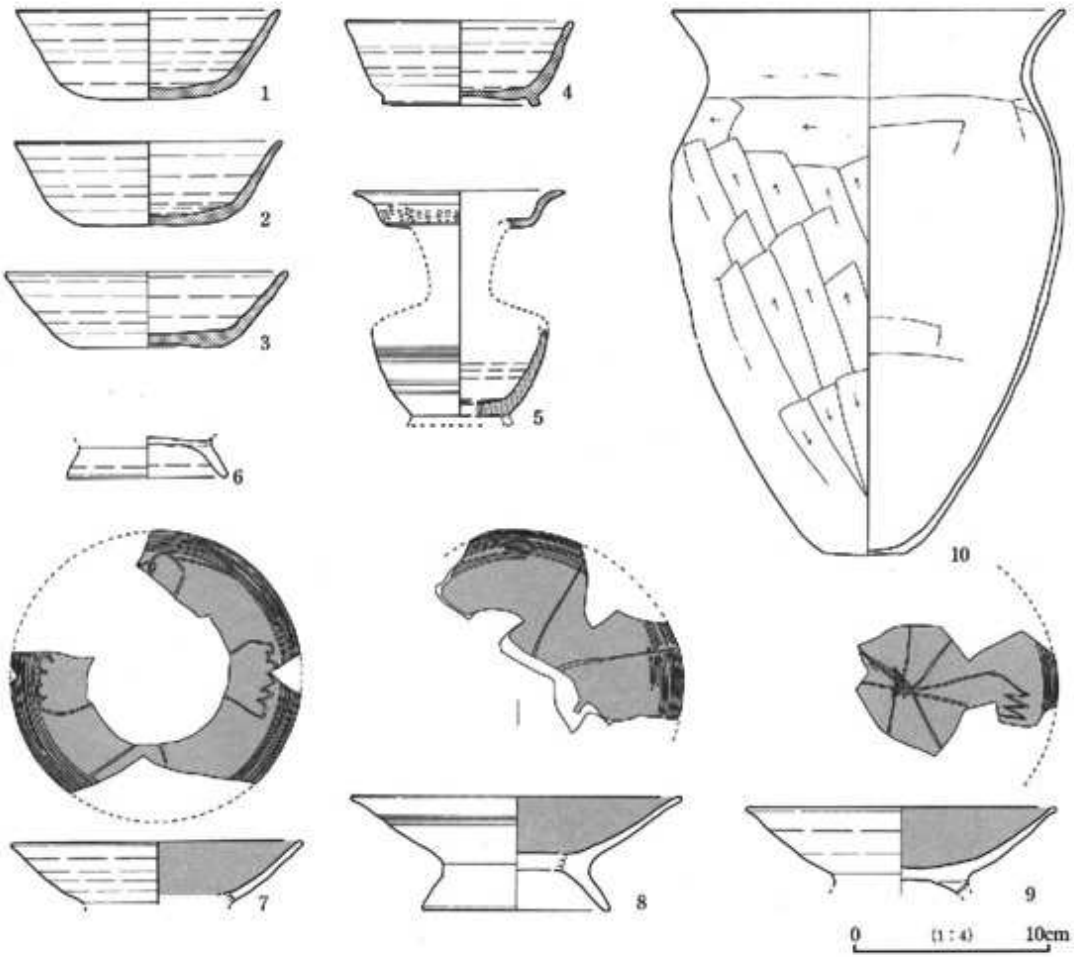
かったと推定できる。玄室内からは鉄製品と人骨が検出された。鉄製品は主に玄室左玄門部付近から集中して出土した。また、その脇からは人骨が検出されている。鉄製品は鉄鏃が13点、刀子が1点と不明鉄製品が1点あった。出土した鉄鏃は11のみが全容を把握できるが、その他の物については茎部が欠損している。ただいずれも形態は短茎鏃に分類されると考える。鏃身部は3形態があり11～20の逆刺が小さく尚かつ重抉である物、21～23のふくら部が湾曲し逆刺が大きい物、24の逆刺が直線的に開く物である。名称を付けるとすると11～20が短頸重抉逆刺直角関両丸造長三角系、21～23が短頸腸抉逆刺直角関両丸造長三角系となろうか。

人骨は先にも述べたが玄門部左側と奥壁より西側からまとまって出土した。鑑定によると老年期男性1個体分とされている（詳細は第Ⅳ分冊付編「榛名平出土人骨について」を参照）。よって入り口側と奥壁側の人骨が別個体であるかどうかは解らなかったが、石室規模からすると二つにわかれている人骨も1.7mぐらいの範囲に収まるため、一体の人骨として差し支えないと考える。これらの事から、本古墳は追葬の痕跡があまり感じられず規模からしても単次の埋葬によっ



第96図　榛名平1号墳遺物出土位置図

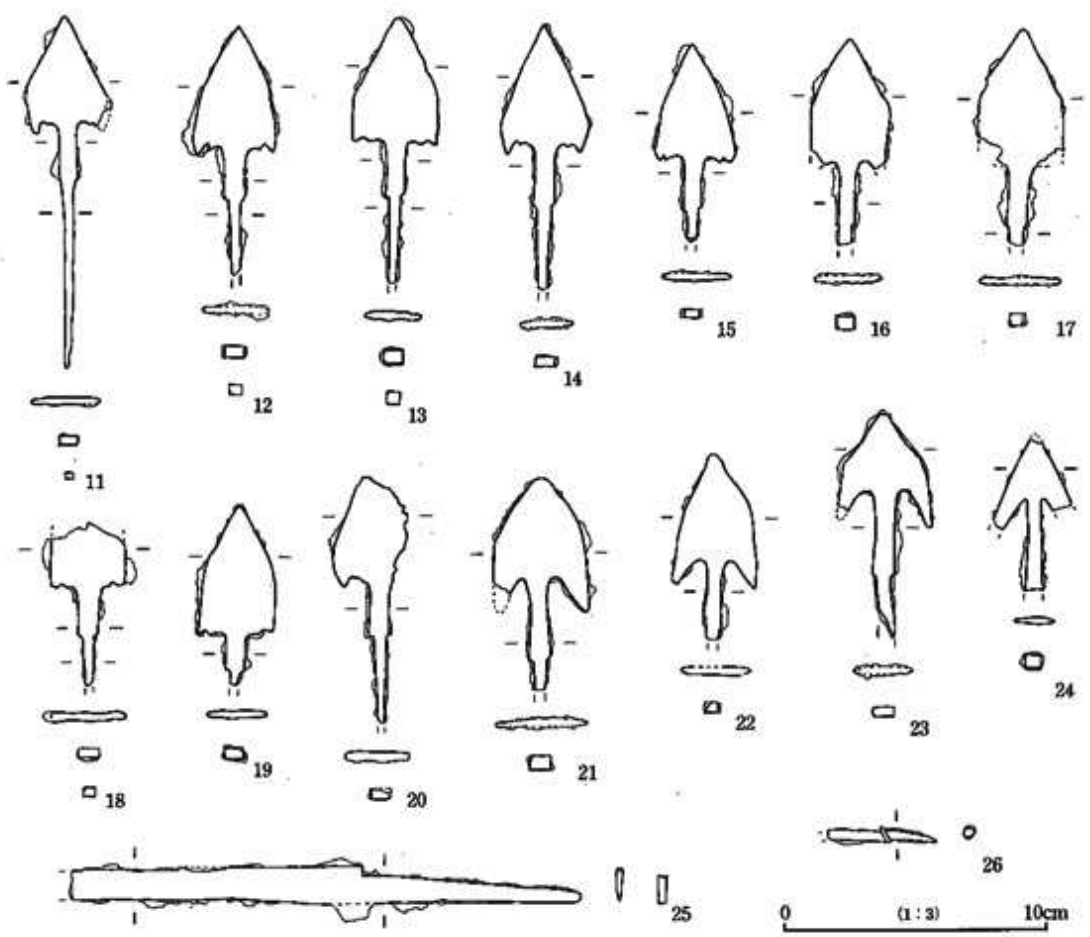
て終わる終末期の横穴式石室のようである。なお、玄室内の覆土はふるいにかけたが玉類の出土は皆無であった。本古墳の築造時期はこれら石室の形態や出土遺物の須恵器より８世紀初頭～第２四半期頃に位置づけられると考える。



第97図　榛名平１号墳出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	13.4	4.6	6.2	外面　ロクロ成形　底部手持ちヘラケズリ後、ナデ 内面　ロクロ成形　(内外面　焼成やや軟)	2.5GY 7/1　明オリーブ灰 径２㎜以下の白色粒子（粘土質）多く含む
2	須恵器坏	13.8	4.3	7.9	外面　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り後、ナデ? 内面　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り後、ナデ? (内外面　焼成やや軟一部赤変)	N 3/暗灰 径５㎜以下の白色粒子を含む
3	須恵器坏	(14.4)	3.9	(8.0)	外面　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り後、ナデ 内面　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り後、ナデ (内外面　焼成やや軟赤変)	N 5/灰 径0.5㎜以下の白色粒子少量と径３㎜以下の粘土質の白色粒子を多量含む
4	須恵器高台坏	11.7	4.3	8.1	外面　ロクロ成形　底部回転糸切り→高台貼付 内面　ロクロ成形 ※火だすき痕あり	N 6/灰 黒色粒子の溶出あり

第40表　榛名平１号墳出土遺物観察表①



第98図　榛名平1号墳出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
5	須恵器 ハソウ	(11.0)	——	——	外面　ロクロ成形　L1縁部列点文（3個一組）胴部5条の沈線文 内面　ロクロ成形　口縁帯と底部に自然釉付着	N3/灰 径0.5mm以下の白色粒子を少量含む
6	土師器 坏	——	〈2.1〉	8.2	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	7.5YR6/6　橙 径0.5mm以下の白色・赤色粒子を少量含む
7	土師器 高台皿	(15.0)	〈3.2〉	——	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形　暗文風ヘラミガキ後、黒色処理	7.5YR7/3　にぶい橙 径1mm以下の赤色粒子と径0.5mm以下の白色粒子を少量含む
8	土師器 高台皿	(17.2)	5.8	(9.6)	外面　ロクロ成形後、底部切り離し後、高台貼付 内面　暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6　橙 径1mm以下の赤色粒子を少量含む
9	土師器 高台皿	(16.0)	〈4.5〉	——	外面　ロクロ成形後、底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ロクロ成形　暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4　にぶい橙 径1mm以下の赤色粒子と径0.5mm以下の白色粒子を少量含む
10	土師器 甕	20.1	28.0	(4.2)	外面　口縁部ヨコナデ後、胴部・底部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ後、胴部・底部横位ヘラナデ ※口縁、底部完形	5YR7/6　橙 径1mm以下の白色・黒色・赤色粒子を含む

第41表　榛名平1号墳出土遺物観察表②

第5節　遺構外出土遺物

本節では、古墳時代に属する遺構外の出土遺物を取り上げた。なお、ピット群中より出土した遺物についても本節で掲載する。

遺構外からの出土で古墳時代に属する遺物は他の時期に比べると非常に少なく、出土位置もJ・K区の古墳時代集落址の周辺とその前面に落ち込むJ区埋没谷よりの出土がおもであった。土師器・須恵器については10点を図示した。

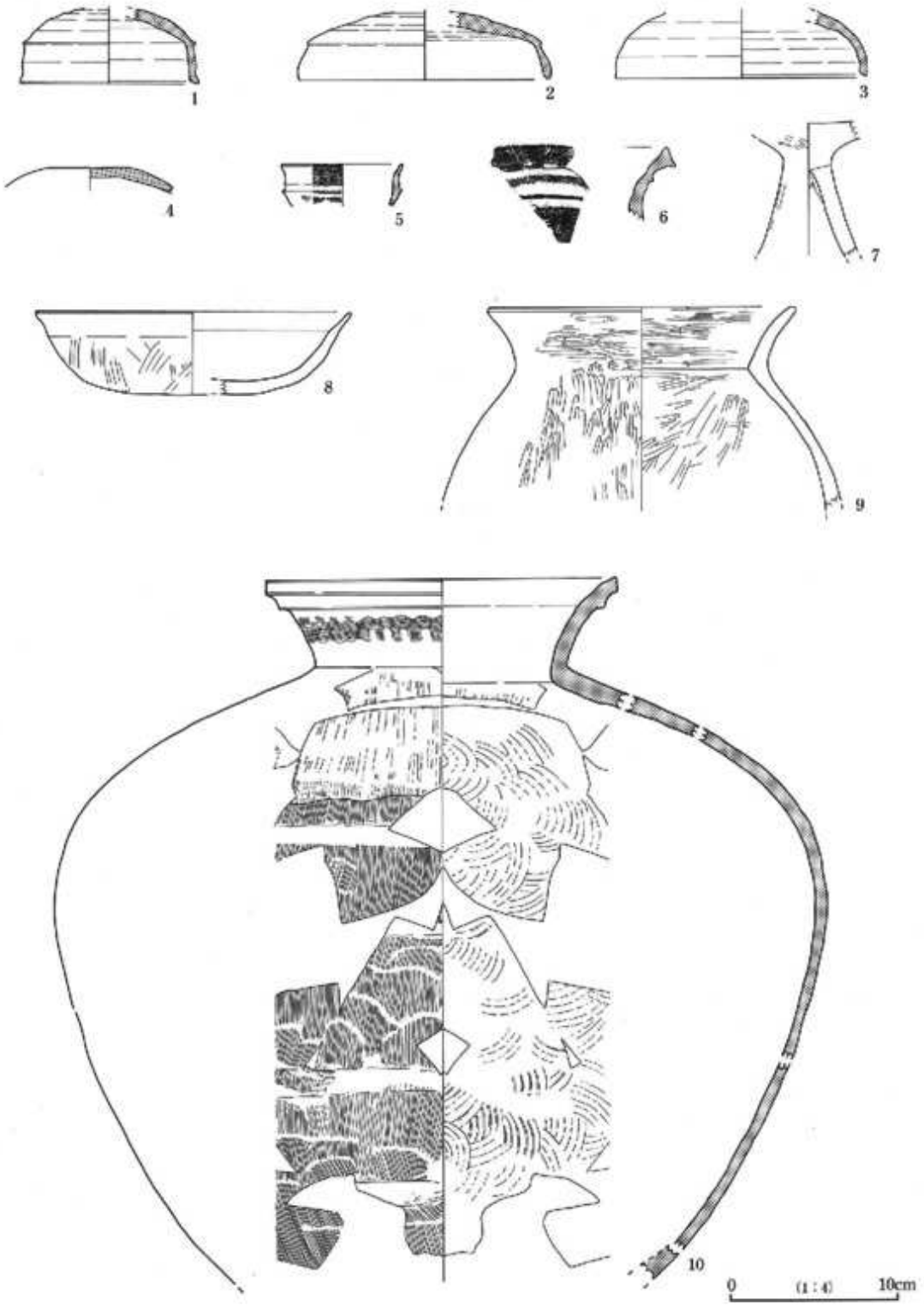
1～4は須恵器坏蓋であるがいずれも型式的には異なる。5は小壺か或いは樽形ハソウの口縁部と考えられ、口縁部に櫛描波状文が巡っている。6は須恵器甕の口縁部である。7は土師器高坏の脚部であり外面丁寧なミガキを施す。8は大型の土師器椀であり体部にはハケメの調整が残る。9は土師器甕であり胴部下半を欠損している。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。10は須恵器甕であり、集落址前面の埋没谷から出土した。殆どが破砕した状態であり、故意的な打ち欠き部分も観察できた。胴部上半には顕著な自然釉が付着している。胴部外面は平行タタキ目を水平に磨り消し、内面も円形のタタキ目を磨り消している。

土製品及び石製品は14点図示した。1は土製の鏡模造品であり、I区P143より出土した。中央部に紐を模したと考えられる粘土ひもがある。2は滑石製の紡錘車であり埋没谷より出土した。

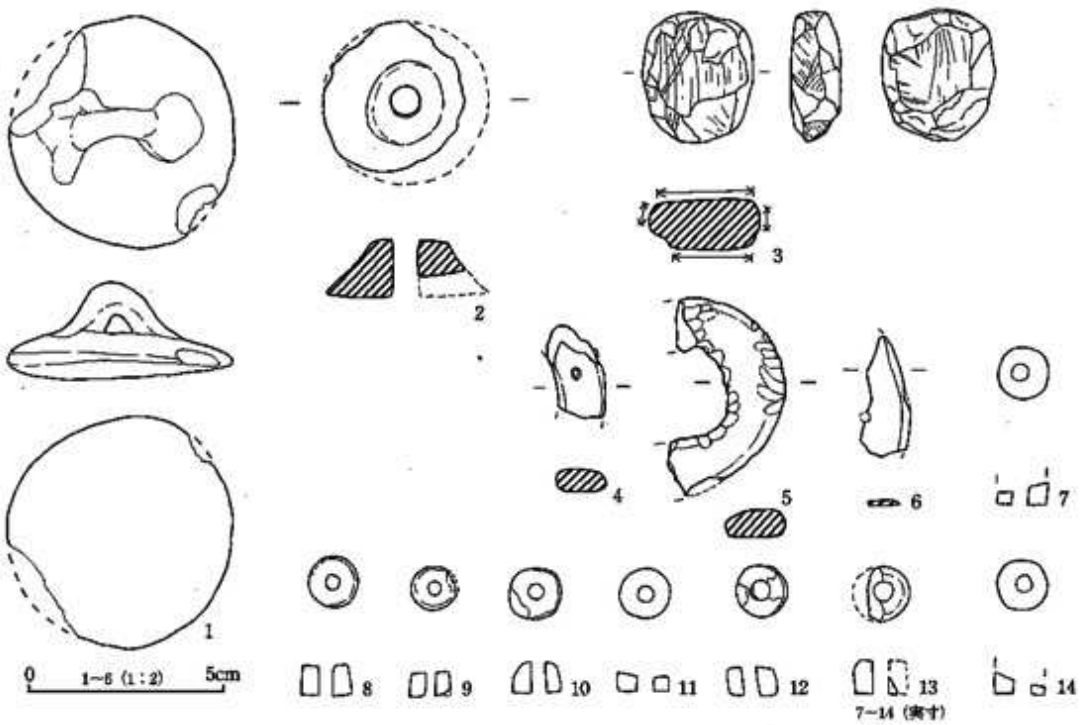
3は何かの未製品と考えられるが不明であり、石材はチャートでよく研磨されている。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
N-ク-2 1	須恵器 蓋	(10.7)	〈4.6〉	——	外面　ロクロ成形　天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロ成形	2.5GY6/1　オリーブ灰 黒色の噴出物少量あり
J-キ-20 2	須恵器 蓋	(15.2)	〈4.1〉	——	外面　ロクロ成形　天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロ成形	N6/灰 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
J-キ-20 3	須恵器 蓋	(15.0)	〈3.9〉	——	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	N4/灰 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
J-キ-18 4	須恵器 蓋	——	〈1.2〉	——	外面　回転ヘラケズリ 内面　ロクロ成形	N7/灰白 径1～2㎜の砂粒を少量含む
N-ク-2 5	須恵器 蓋？	(7.3)	〈2.5〉	——	外面　ロクロ成形　口縁部直下に波状文 内面　ロクロ成形後ナデ？ ※内外面自然釉付着	N4/灰 径1～2㎜の白色の砂粒を含む
J-ツ-10 6	須恵器 壺	——	〈4.5〉	——	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形　※外面内自然釉付着	N3/暗灰 径1～2㎜の白色の砂粒を少量含む
E-ケ-13 7	土師器 高坏	——	〈7.7〉	——	外面　ヘラミガキ 内面　坏部調整不明・脚部ヘラナデ	7.5YR6/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
J-カ-17 8	土師器 椀	(19.0)	〈5.0〉	——	外面　口縁部ヨコナデ・坏部ハケメ後ナデ 内面　ナデ	2.5YR6/8　橙 径2～3㎜の砂粒を多く含む
J-カ-18 9	土師器 甕	(18.5)	〈12.2〉	——	外面　口縁部から頸部は横位のヘラミガキ・胴部は縦位のヘラミガキ 内面　口縁部から頸部は横位のヘラミガキ・胴部は斜位のヘラミガキ	10YR7/4　にぶい黄橙 径1～2㎜の砂粒を少量含む
N-ク-2 10	須恵器 甕	(21.0)	〈42.0〉	——	外面　口縁部15本1単位の波状文　胴部平行タタキ 内面　同心円文を磨り消している	5B4/1　暗青灰 径1～2㎜の砂粒を含む

第42表　遺構外出土遺物観察表



第99図　遺構外出土遺物実測図①



第100図　遺構外出土遺物実測図②

4と5は粘板岩を用いた石製品で、4はIF2号掘立柱建物址P2内より出土し、5はF－サ－12より出土した。4は片面からの穿孔がある。5は未製品と考えられ研磨部分が全面に施されている。形態よりこれら2点は勾玉と考えられる。6は緑泥片岩をつかった剣形石製模造品である。中央部に穿孔がある。7～14は滑石製の臼玉で坪の内古墳の石室覆土から出土した8～12と、P87より出土した13、埋没谷より出土した7と14がある。

第101図　ピット出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整 外面・内面	色調 胎土
P18 1	土師器 高坏？	(16.8)	〈3.8〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の白色の砂粒を多く含む
P18 2	土師器 甕	(16.8)	〈6.0〉	——	外面 ナデ 内面 ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
P63 3	土師器 小形甕	(10.6)	〈5.5〉	——	外面 ナデ 内面 口縁部ヨコナデ・胴部ナデ	7.5YR6/8 橙 径1～2㎜の砂粒を多く含む

第43表　ピット出土遺物観察表

第Ⅴ章　考　察

第１節　１号方形周溝墓出土の土器について

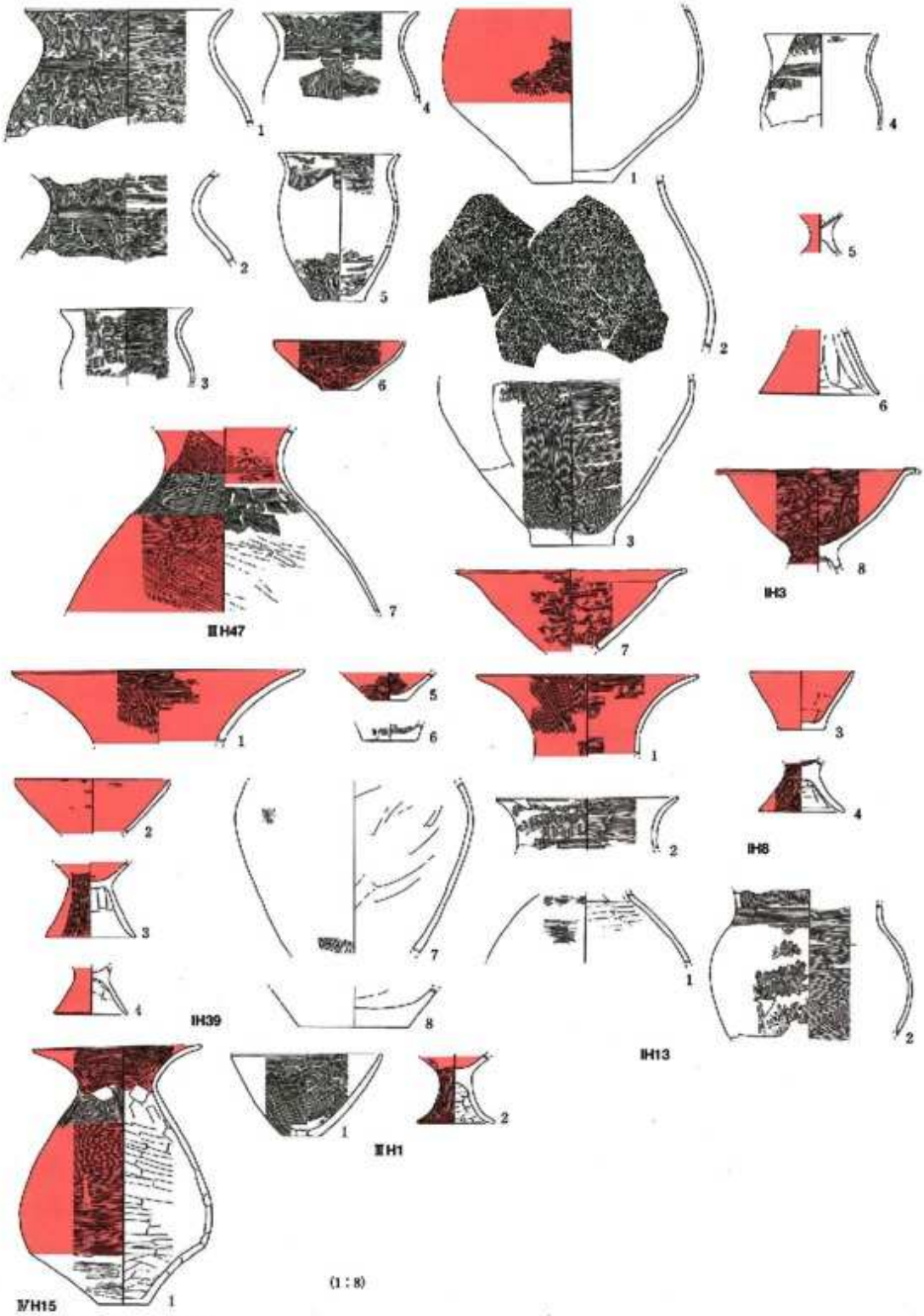
榛名平遺跡における弥生時代の遺構は、竪穴住居址29軒・掘立柱建物址１棟・土坑15基・方形周溝墓１基・埋没谷１カ所が検出された。

これら遺構より出土した土器には当地方において弥生時代後期末から古墳時代初頭頃の位置づけとなる土器群が含まれている。しかし、佐久市を含め佐久地方においてはこれらの資料の検出例が非常に少なく土器様相も含め不明瞭な状態である。よって本節では榛名平遺跡と他遺跡の出土土器比較も行いながら、当遺跡の住居址や１号方形周溝墓出土土器の検討を試みたい。

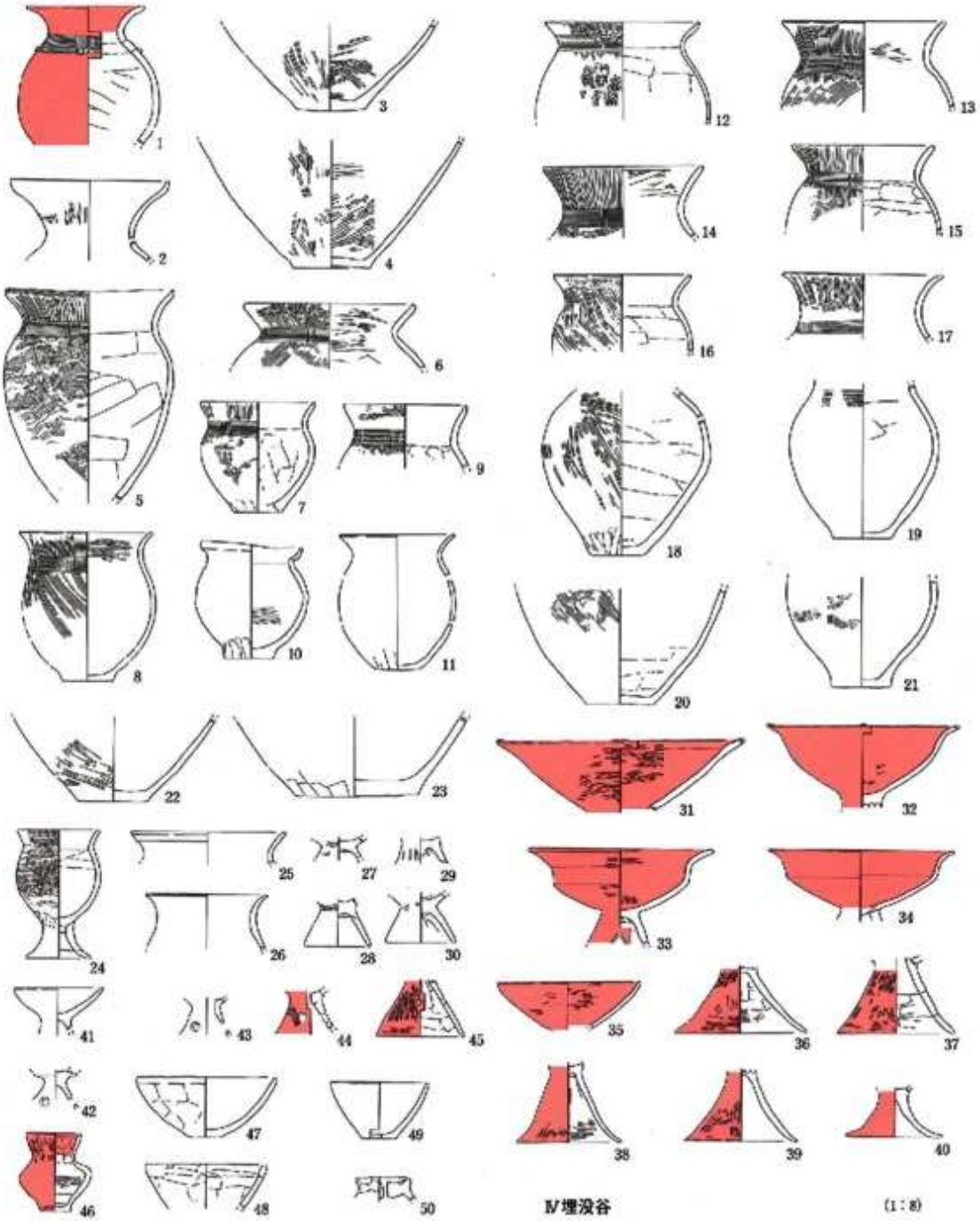
まず住居址出土の土器であるが、ある程度器種組成のわかるものは８軒のみであった。この内明らかに土器形態が異なるものとしてⅣH８号住居址を認識する。残りのⅠH３号・ⅠH８号・ⅠH13号・ⅠH39号・ⅢH１号・ⅢH47号・ⅣH15号住居址はほぼ同一時期と考えられる。そしてもう一つⅣ区埋没谷の土器群はその出土状態より一括性が高いと考えられるので比較の資料とする。ではこれら二つに区分した土器群の内容を見てみたい。

まず、住居址群の土器には、在来の箱清水期の系譜と考えられる赤彩された壺が伴う。頸部には櫛描横線文や縦方向の垂下文が見られる。甕は胴部と口縁部に横方向の波状文を主体とする物が多いが、口縁部のみ縦方向の櫛描文を施す物もある。高坏は好資料に恵まれないが脚部があまり広がらず「ハ」の字状に終わる物が殆どである。坏部は鍔がつくものと附かない物があるが、いずれも赤彩している。このほかの器種としては単孔の甑や浅めの鉢がある。これらも赤彩を施している。

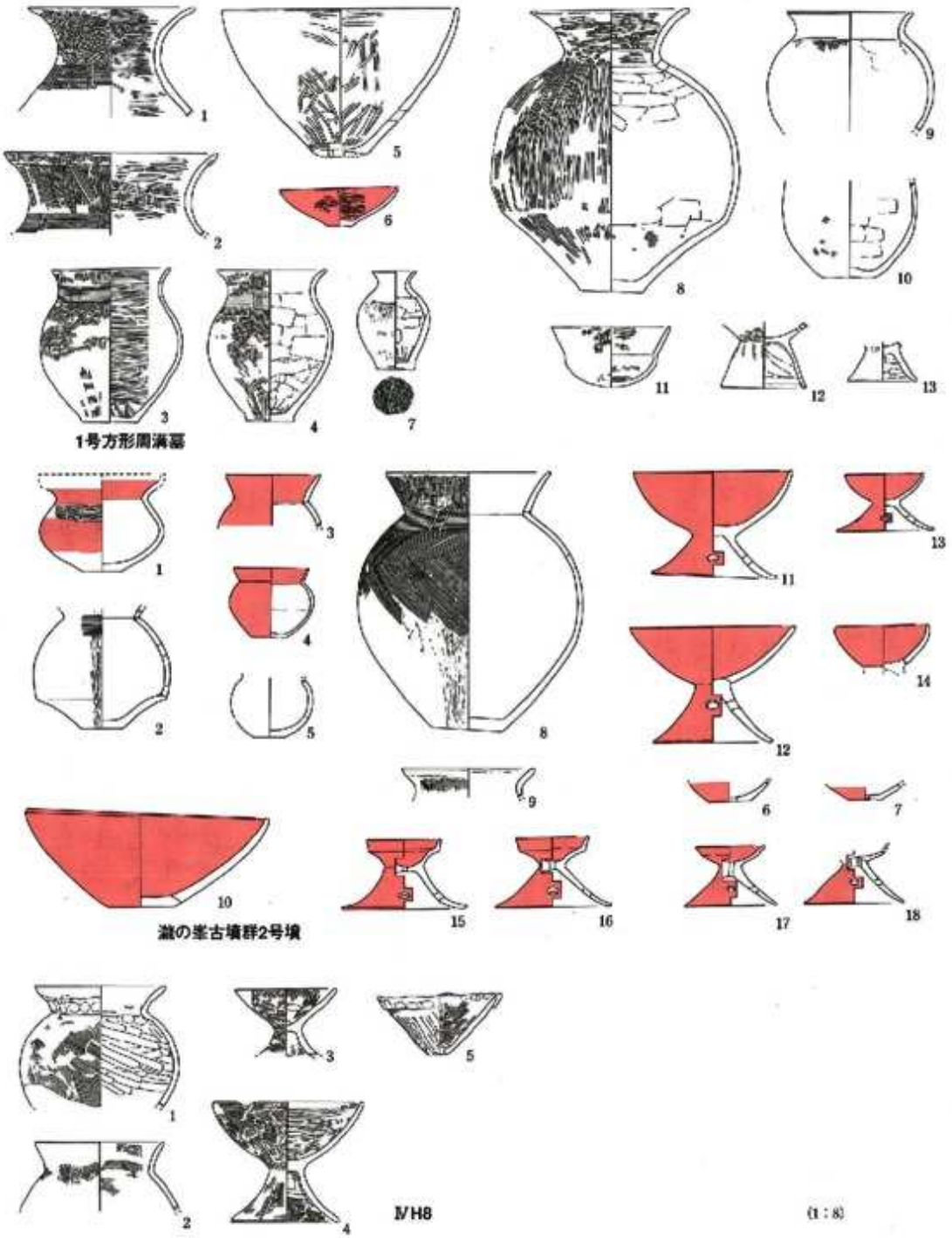
次に埋没谷の土器群を見てみたい。まず壺については資料が少なく２点のみである。１は赤彩された壺であり頸部に櫛描文と円形貼文が付いている。胴部は球形である。２は赤彩が無い。頸部の残存状況がきわどいが文様帯は持たないようである。甕については箱清水期以来の櫛描文を施すものが多いが無文の甕も存在する。胴部の波状文はだいぶ簡略化された物が多く、口縁部文様帯は縦方向の横線文が多くを占める。また屈口部に刻みや刺突或いは櫛描波状文を施す物、26の様に稜を持つ物などが顕著となる。また28～31のような台付甕が甕の要素に加わり、頸部が「く」の字に屈曲するものがある。当グループの甕は住居址の土器と比べて小型である。高坏は坏部の中段に稜を持つ物が含まれる。鍔は存在するが小さくなっている。脚は「八」の字状に脚端部が外側に開き加減となり、三角形透窓がつくものがある。また、42や41の様な小型の高坏が存在する。なおこの２点は赤彩されていない。次に46～48の様ないわゆる小型器台と呼ばれる器種が加わる。赤彩されたものと無彩のものがある。鉢や単孔の甑は形態的にはさほど変わらない



第102図　住居址土器群



第103図　埋没谷土器群



第104図　ⅣH８号住居址出土土器

が赤彩されたものが無い。

そしてⅣH８号住居址の土器であるが、まず器種組成の中で赤彩されたものは無い。高坏も無彩である。１と２は壺と言うよりは甕の範疇に入るような器形であり、櫛描の模様は無くハケメのみの整形である。頸部は「く」の字に曲がる。３と４の高坏の坏部は稜が無く、脚は「八」の字状に開く。５は単孔の甑であるが口縁部が折り返しとなり、体部の部分には指頭圧痕が顕著に残っている。埋没谷の44と胎土的によく似る。

以上、三つに分けた土器群はそれぞれの器種において形態変化が認められ、尚かつ土器組成の違いにより時間差のあることが仮定できる。この仮定に立って１号方形周溝墓の土器群がいずれのグループに属するか考えてみたい。なお参考として瀧の峯古墳群２号墳の土器も掲載し、比較位置づけを行ってみたい。

まず、１号方形周溝墓出土土器群のそれぞれの特徴を整理してみると、１は頸部に文様帯を持つが赤彩が無い。２～４は甕で３と４は小型品である。模様は櫛描文が見られるがだいぶ乱れている。また、口縁部の縦方向の櫛描文がある。５は大型の甑で無彩である。胴部に故意に打ち欠いたと考えられる孔がある。６は赤彩のやや浅い鉢である。７はミニチュア土器のような壺である。８は無文の壺でミガキが顕著である。９と10はハケメの甕であり、12と13は台付甕の脚部で、特に12はいわゆるＳ字甕と考えられる。11は小型丸底壺でありミガキが施されている。これらの内１～４と６は箱清水期からの在来器種として把握でき、形態や特徴から埋没谷の土器群と共通項が多い。次に５と７～13については９と10はⅣH８号住居址の甕に似る。８の壺は遺跡内において共通の土器は見いだされないが、佐久市下小平遺跡２号方形周溝墓からの出土壺によく似ている。なお、下小平遺跡２号方形周溝墓にも赤彩された壺は含まれない。11については佐久地方内では類例に乏しく地域内では位置づけに苦慮する。これらの事から１号方形周溝墓の土器群は埋没谷の土器群の要素とⅣH８号住居址の土器群の要素の両方を持つこととなる。このことは本文中でも述べたとおり１号方形周溝墓の土器出土状況と密接な関わりがあるものと思われる。すなわち周溝底より出土したものと黒色土中から出土した土器の差である。この差がまさしくふたつの土器群との対応となり時間差を想定できるのではないだろうか。よって１号方形周溝墓の構築時期は埋没谷土器群の示す時期であり、その後墓前祭祀的な行為の結果、ⅣH８号住居址の時期に土器が周溝脇に置かれ埋没していったと考えられる。

では当遺跡の東側山麓上に立地する瀧の峯古墳群２号墳出土の土器はどうであろうか。赤彩された小型の壺、櫛描文の残るやや大型の甕とハケメの小型甕、赤彩された大小の高坏、赤彩された鉢と器台である。これらの特徴から住居址土器と埋没谷土器群の中間的な要素が見いだせる。しかし、11と12の高坏はⅣH８号住居址の高坏と形態的にほぼ等しい。ただ赤彩と円形の穿孔という要素が加わる。10の鉢に付いても非常に大型である。また壺に関しては２が無彩であり胴部

下半のくびれなどプロポーションとしては1号方形周溝墓の8の壺に似る。これらの事を考えあわせると、瀧の峯古墳群2号墳の築造時期はⅣH8号住居址の土器と同じ時期と考えられるのではないだろうか。赤彩・櫛描文といった箱清水期系譜の要素については墳墓への供献土器の為前段階の要素が意図的に加えられたと解釈する。

もし、この仮定が正しいとすると他地域との並行関係が押さえられている瀧の峯古墳群2号墳を介在して、榛名平遺跡の「土器群」の位置づけが可能となる。瀧の峯2号墳の土器についてはまず、報告書が恒川編年Ⅶ～Ⅷ期、東海編年では元屋敷中～新段階にあたるとされている。また青木氏の北平編年では4期に当てられている。これは東海地方の廻間編年でⅡ期後半となろうか。一方では加納氏によると塔の越期にあたるとされ廻間編年のⅢ期前半にあたる。いずれも近似した時期であるが、土器組成の面から見ると大きなちがいが存在するように解釈する。それは青木氏の編年観で4期はまだ「小型丸底壺」を伴わない時期であり、報告者と加納氏の時期は「小型丸底壺」が伴う時期と捉えられている。では今回の榛名平遺跡においての検証結果はどうであろうか。間接的な証明であるがⅣH8号住居址の時期は1号方形周溝墓より小型丸底壺が出土しており伴う時期と仮定している。よって後者の立場に立つこととなる。ではこれらを含め当遺跡の三つの土器群の時期を考えると、北平編年の3期が「住居址土器群」、4期が「埋没谷土器群」、5期が「ⅣH8号住居址土器群」となろうか。千曲川下流の善光寺平と上流の佐久平を単純には比較できないが、土器変遷観からすると以上の様な結果が得られると考える。

ただ、ここで疑問が一つある。1号方形周溝墓の小型丸底壺について、当資料はその形態より飛鳥地方の坂田寺下層の小型丸底壺の形態によく似る。この資料は畿内においては纒向4式に位置づけられる資料と考える。これを東海の廻間編年に対比するとⅢ期後半となり、先に示した瀧の峯報告書や加納氏の時代観よりも時期がやや新しい傾向となる。また、この事は先に仮定した1号方形周溝墓の築造からその後の墓前祭祀的行為による土器の供献までの時間幅の広がりを示すことにもなり、「仮定」自体の問題点も露呈している。このように今回示した三つの「土器群」の時間的変遷もまだまだ不明瞭な部分が拭いきれない。ただ、それぞれ示されている各期の期間の長さや、中部・東海・近畿といった遠隔の地同士の比較ゆえにそれこそ単純な横並びは現に慎まなければならないことは記すまでもないが今後の課題としたい。

以上述べたとおり当遺跡で検出された土器資料は佐久平における弥生末から古墳時代への過渡的な様相を示す稀少な土器群である。しかし、榛名平遺跡調査の後、佐久市においては新海坂遺跡・松の木遺跡・下姥塚遺跡・深堀遺跡・宮添遺跡といった当該期の集落址や関連遺構が次々と調査され資料の充実度は目を見張るものがある。これら資料が報告となればより鮮明に土器群の把握が可能となり佐久地域全体での土器様相の把握と編年の確立が行えるであろう。今後の各報告に期待して雑ぱくなまとめであるが考察としたい。

なお、本考察作成にあたり使用した各氏の編年の平行関係を掲載した。ただ、今回の編年関係表は筆者なりの理解の下での作表であるため、各氏本来の編年観に対して誤認や解釈の違いが存在する可能性があることを付記しておく。

編年関係表

○ 本表は日本考古学協会新潟大会資料と青山氏1998を参考に作成

引用・参考文献

青木一男　1996『大星山古墳群・北平1号墳』－長野市内その5－上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7

青木一男　1998『松原遺跡』弥生総論6　弥生後期・古墳前期　－長野市内その3－
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5

宇賀神誠司・青木一男　1993「4世紀を中心とした土器編年表」『信濃における古墳出現期の現状と課題』
県考古学会誌69・70　長野県考古学会

宇賀神誠司　1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」長野県埋蔵文化財センター紀要2

加納　俊介　1993「科濃における古墳出現期研究の現状と課題」長野県考古学会誌69・70

（質疑応答の中でのコメント）

赤塚　次郎　1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第10集

日本考古学協会新潟大会　1994『東日本の古墳の出現』　日本考古学協会・山川出版社

山下　誠一　1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会

岩崎卓也・林幸彦・三石宗一　1986『濃の峯古墳群』佐久市教育委員会

林幸彦・工藤かよ子　1981『下小平遺跡』佐久市教育委員会

石野博信・関川尚功　1976『纒向』奈良県立橿原考古学研究所

西川　修一　1999「古墳前・中期の境界の土器様相をめぐる諸問題」『東国土器研究』5号　東国土器研究会

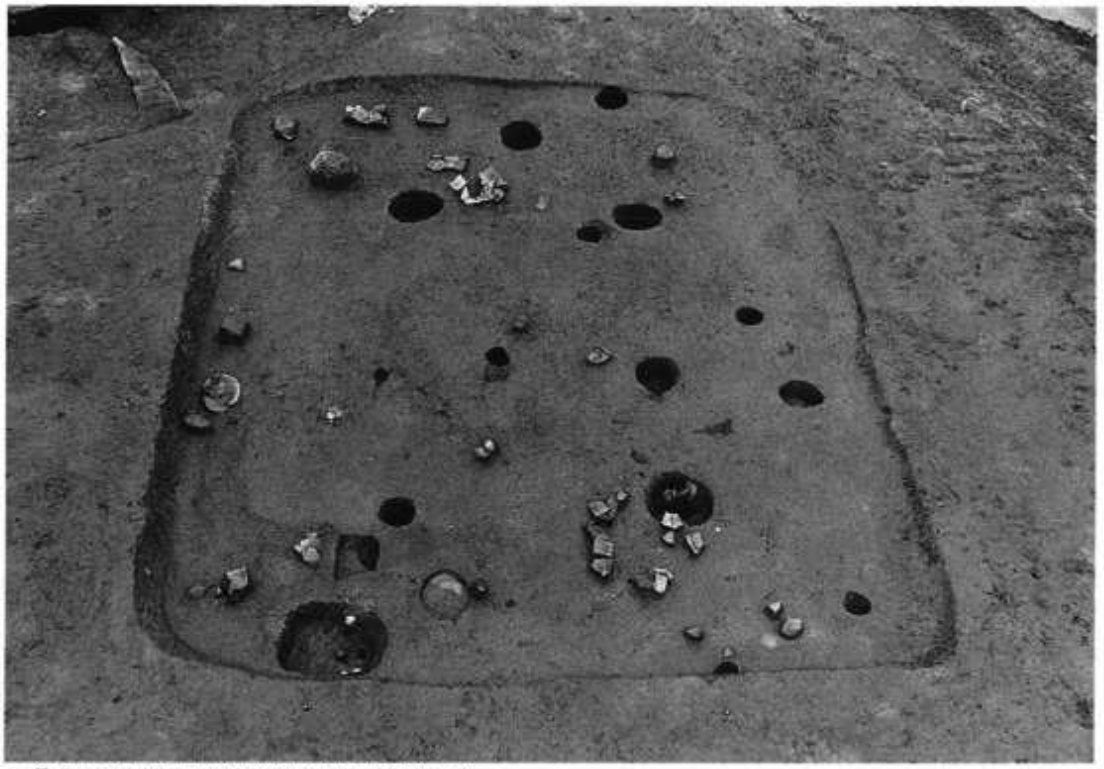
千野　浩　1993『本村東沖遺跡』長野市教育委員会

古墳時代研究会1997　『土器が語る　ー関東古墳時代の黎名』第一法規

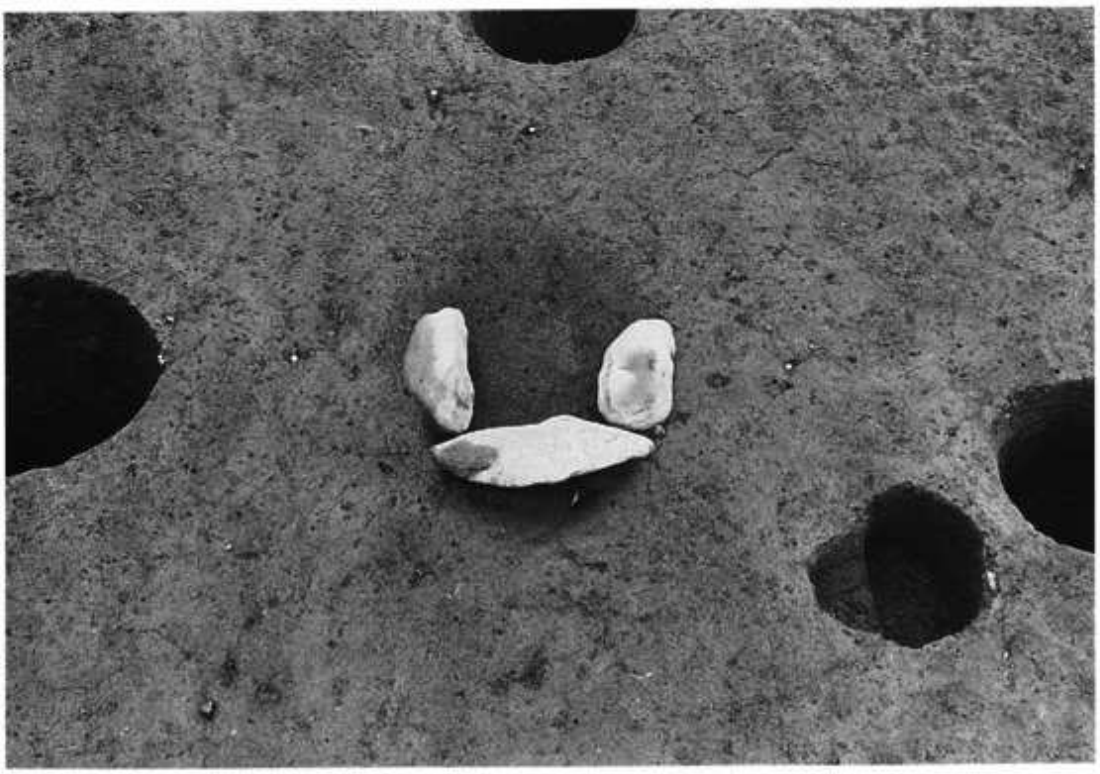
青山　博樹　1998　「土器①東北南部」『前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会

図　　版

①ＩＨ３号住居址全景(南より)



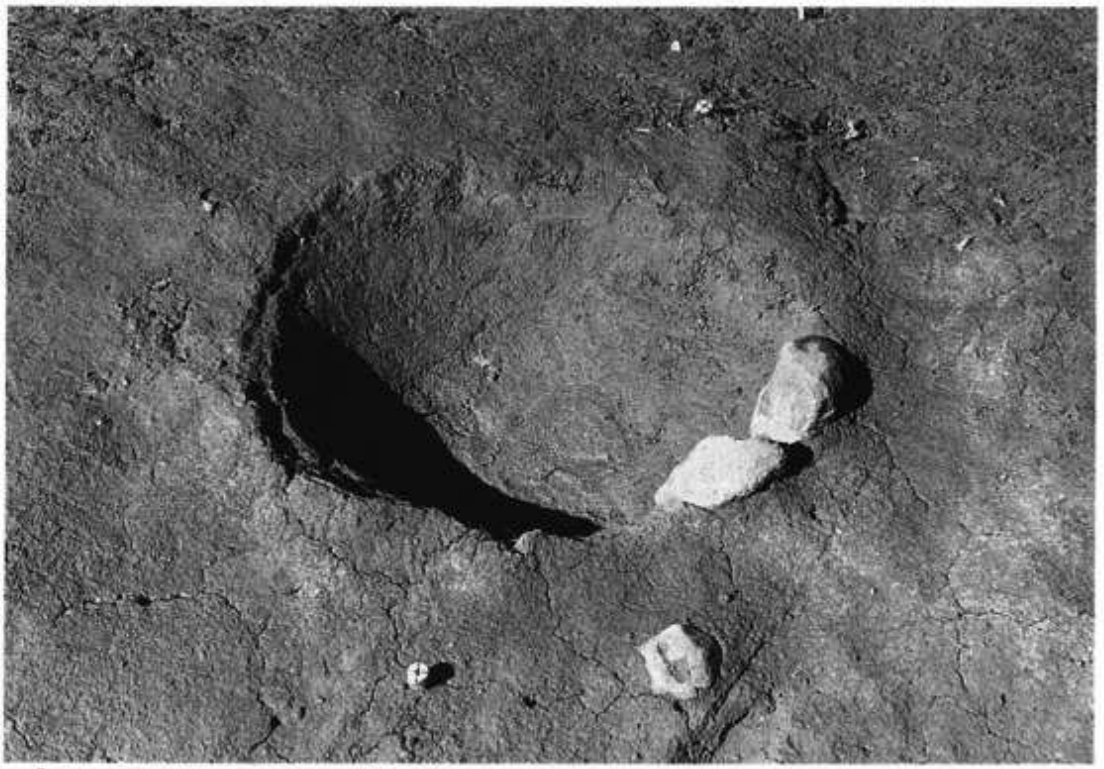
②ＩＨ３号住居址遺物出土状況(南より)



①ＩＨ３号住居址炉全景(南より)

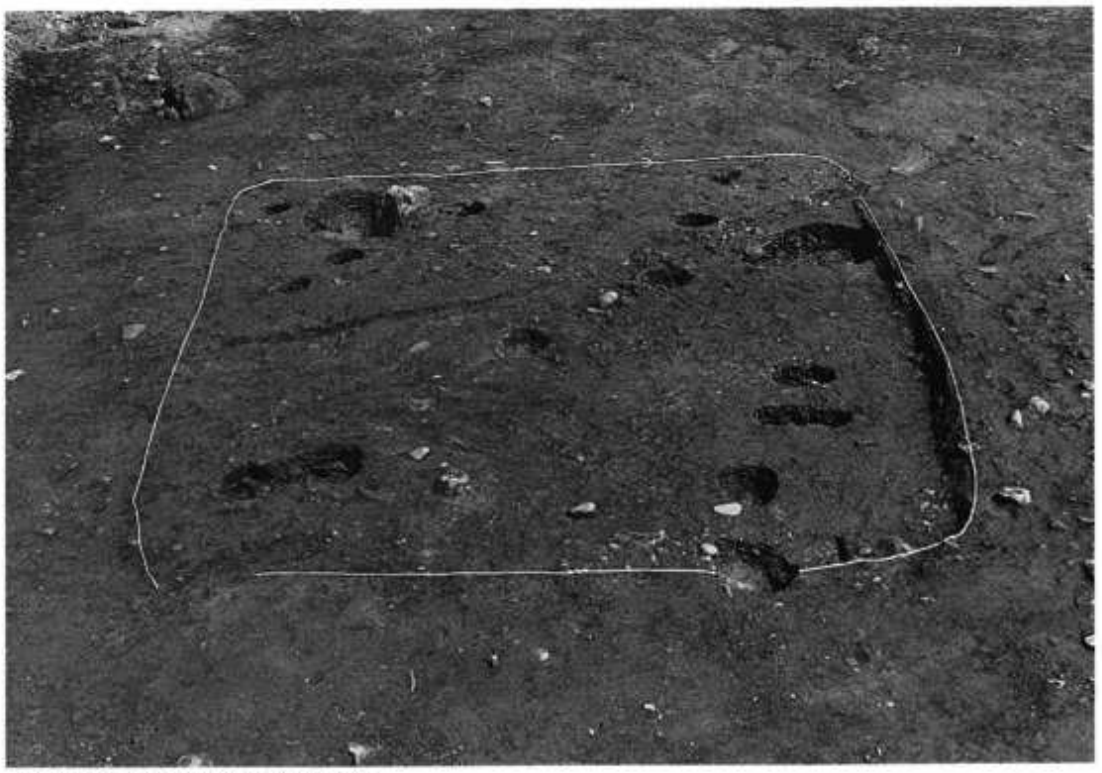
②ＩＨ３号住居址遺物出土状況(北より)

①ＩＨ５号住居址全景(南より)

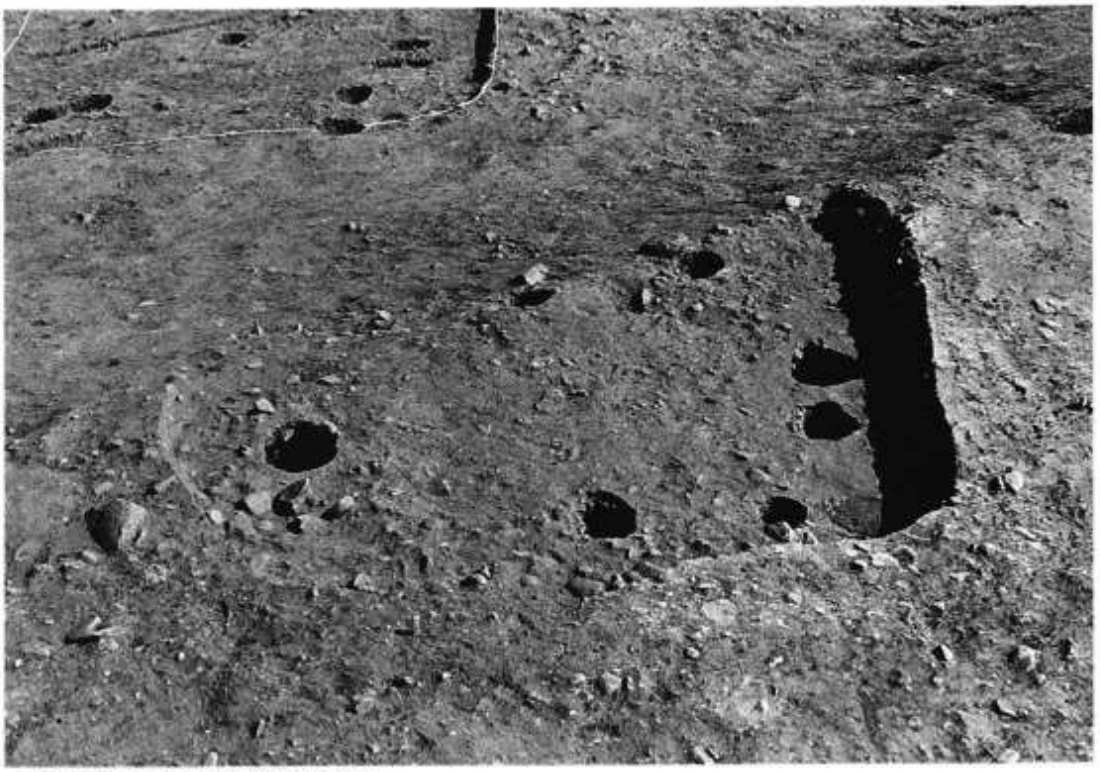


②ＩＨ５号住居址№２炉全景(南より)

図版四



①ＩＨ７号住居址全景(南より)



②ＩＨ８号住居址全景(南より)